

山梨県北巨摩郡武川村

宮間田遺跡

県営圃場整備事業に伴う平安時代集落遺跡の

緊急発掘調査報告書

1988

武川村教育委員会
峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡武川村

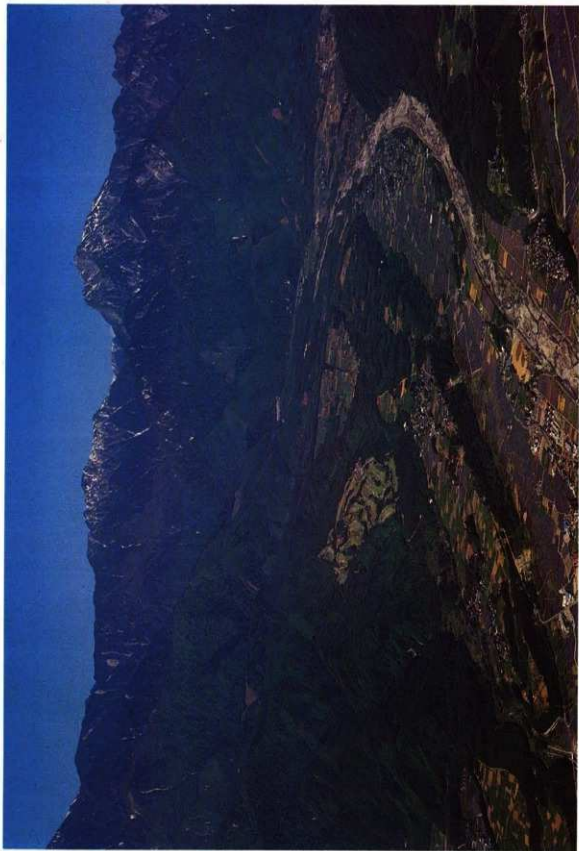
宮間田遺跡

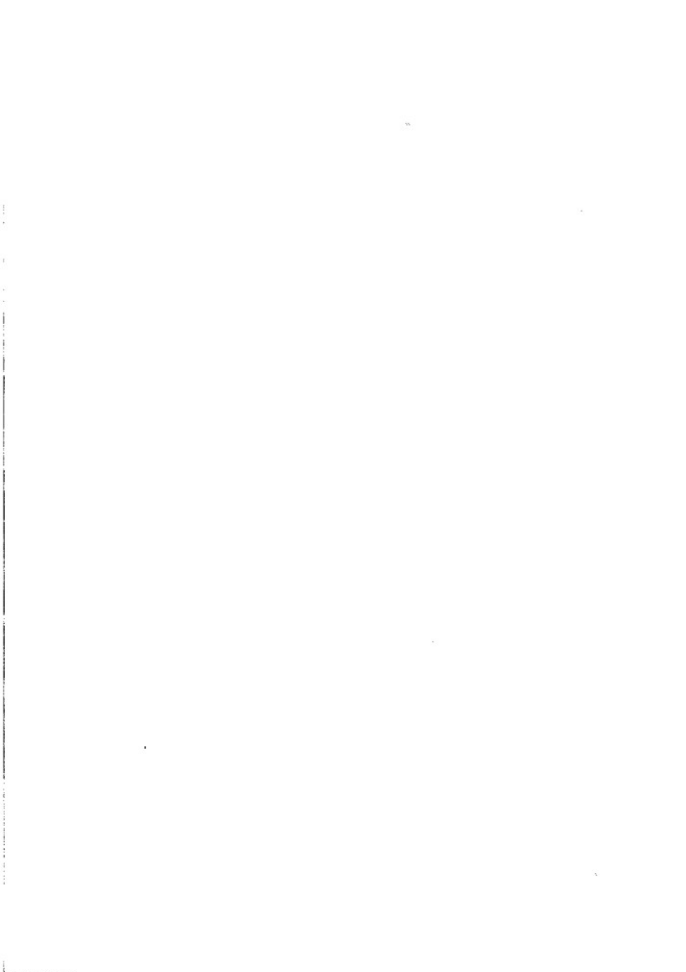
県営圃場整備事業に伴う平安時代集落遺跡の

緊急発掘調査報告書

1988

武川村教育委員会
峡北土地改良事務所





序 文

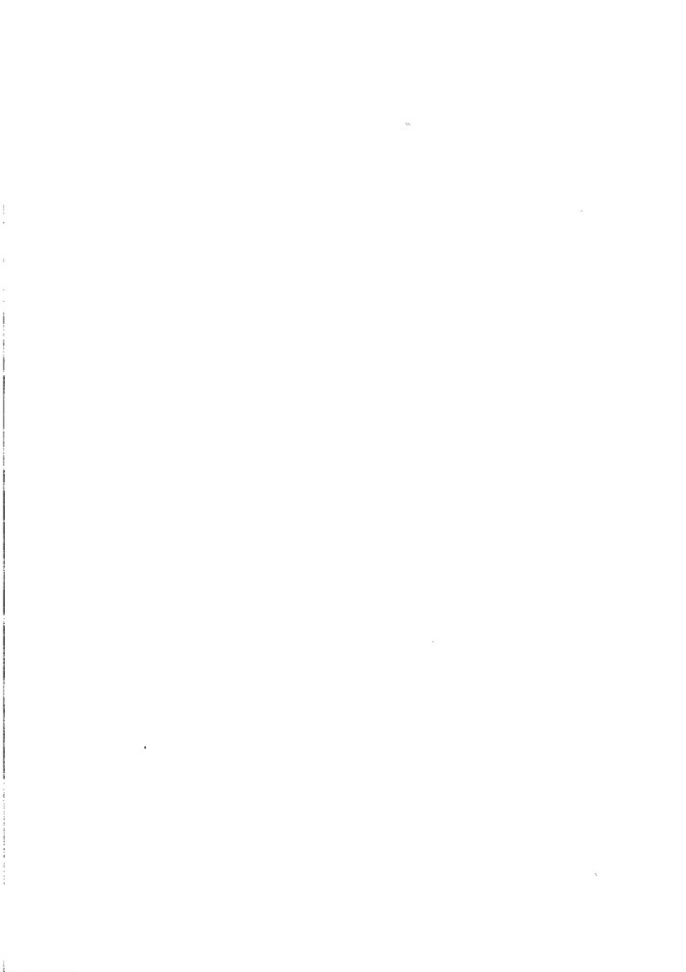
武川村は山梨県の西北部に位置し、昔、武河の庄といわれた中心であり、大武川の扇状地に開けた村であります。昔、崇神天皇の御代、武停川別命がこの地方を治められ、このため武川の名が生まれたといわれております。又、早くから官牧が置かれ7世紀頃より甲斐の駿馬の供給地として真衣郷の名で開けた所とも伝えられます。

当村では農業の近代化をはかるため昭和54年度より県宮園場整備事業を行っており、昭和60年度・61年度事業予定地である二吹宮間田地区に平安時代の土器片などの遺物が表層に散見していたため、昭和60年7月末から昭和61年にわたり記録保存を目的とした緊急発掘調査が実施されました。宮間田遺跡は釜無川右岸河岸段丘上にあり、発掘調査の結果、縄文時代及び平安時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺物が数多く発掘され、中でも漁撈具用土錘・鍛冶が遺構・墨書土器〔牧〕等の出土品は学術的にも重要な意義をもち、我々先人の足跡を解明するためにも貴重な資料を得たこととなります。又、児童生徒の見学会や発掘体験は得がたい事であったと思います。この発掘調査で得られた資料は、今後歴史資料として広く活用していく所存であります。なお発掘調査にあたり、ご協力頂いた関係機関各位並びに直接調査に当られた方々に厚く御礼を申し上げます。

昭和63年3月31日

武川村教育委員会

教育長 小澤芳武



例 言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡武川村三吹字宮間田1,337 他、字御崎所在の宮間田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、事業主体である峡北土地改良事務所との負担協定を結び、文化庁及び山梨県より補助金を得て、武川村教育委員会が実施した。なお、発掘調査及び遺物整理に際しては白州町教育委員会及び財団法人山梨文化財研究所の協力を得て実施した。
3. 発掘調査は、昭和60年7月22日から同年11月29日（第1年次調査）、及び昭和61年6月6日から同年10月25日（第2年次調査）にかけて実施し、出土品の整理及び報告書の作成・編集は、昭和62年8月3日から昭和63年3月24日にかけて実施した。

4. 発掘調査組織 調査主体 武川村教育委員会（教育長 小澤芳武）

調査担当 平野 藤（前白州町教育委員会、現財団法人山梨文化財研究所）

調査補助員 清水能行（村教委社会教育主事）

調査事務局 昭和60年度 中山朝雄（昭和60年12月31日退職）・興石圭俊・田中あぐり・中山美代子・中山嘉明・水石佐江子

昭和61年度 興石圭俊・田中あぐり・中山美代子・神宮司浩・小沢隆二・戸島保仁・中山嘉明・小野隆男・水石佐江子

昭和62年度 興石圭俊・田中あぐり・中山美代子・興石みや子・小池隆・神宮司浩・戸島保仁・中山嘉明・小野隆男・長坂和枝

5. 本書の編集は平野が担当し、執筆は第Ⅰ・Ⅲ章を清水が、第Ⅱ章の一部とその残りを平野が担当した。本書の作成作業については、遺物の実測・トレース・写真撮影などを平野・清水・津金・宮沢・中山・広瀬が担当し、図版作成は平野・中山が担当した。

なお、第2年次調査における遺構測量の一部をシン航空写真株式会社にて委託して実施した。

6. 発掘調査、出土品整理及び報告書作成にあたり、次の諸氏・諸機関に多大なる御教示・御協力を賜った。記して感謝する次第である。（順不同、所屬、敬称略）

職員正義、田代孝、末木健、坂本美夫、新津健、米田明訓、八巻与志夫、長沢宏昌、保坂康夫、中山誠二、椎名慎人郎、十菱駿武、谷口一夫、波木井市郎、萩原三雄、山路恭之助、清水博、佐野勝広、山下孝司、雨宮正樹、河西学、宮沢公雄、榊原功一、桜井貞貴、鈴木治彦、新津重子、数野雅彦、武藤雄六、小林公明、樋口誠司、樋口尚武、井上喜久男、浅田員由、浜田晋介、寺内隆夫、宮鹿文二、中山千恵、広瀬千江美、峡北土地改良事務所、泉文化課、山梨県埋蔵文化財センター、（財）山梨文化財研究所、白州町教育委員会、井戸尻考古館、

武川村土地改良区、武川村文化財審議会、宮間田地区地権者、山梨県考古学協会、山梨郷土研究会、シン航空写真(株)、秩北印刷(株)。

7. 本書の遺構・遺物挿図の指しは次のとおりである。

- (1) 遺構・遺物の縮尺は、各挿図中に示している。
- (2) 遺構実測図に示している水系高は海拔高を示している。
- (3) 住居址実測図中の破線及び細かい網目のスクリーントーンは、焼土範囲を示し、一点鎖線は床面の堅固な箇所を示している。
- (4) 遺物実測中の土器断面において黒く塗りつぶしてあるものは須恵器を、斜めのスクリーントーンは灰釉陶器を示し、内面における粗い網目のスクリーントーンは内面黒色土器を示している。
- (5) 挿図第1図には、国土地理院発行の25,000分の「若神子」・「長坂上条」・「小淵沢」・「谷戸」を使用している。

8. 本遺跡の出土品及び諸記録は、武川村教育委員会が保管している。

9. 発掘調査及び出土品整理参加者(順不同、敬称略)

武藤きみこ、中山ヨシ子、中山広子、中山志げ乃、平田玲子、藤山君江、武藤美枝子、中山かめ代、奥石高美子、中山玉枝、藤井ちとせ、鈴木佳子、中山すみ可、武藤栄子、津谷有紀子、清水佳代子、水石宮美子、大沢房子、齊木優美子、奥石泰雄、溝口正輔、舟橋登里、小池すぎ子、牛田幸子、中込操子、伊藤安秀、小池好敏、長坂栄子、跡部たつ子、長坂まさ代、葛木ユキコ、三枝輝代、小沢一枝、小沢宇免、小尾稔子、伊藤友一、小沢五十子、内藤あさ子、牛田葉子、小沢川出子、鈴木美代子、中山好子、伊藤さだ子、渡辺百合子、倉田勝子、中沢洋子、保坂文子、小沢いつ枝、小野治子、(一般)中込彰、乙黒晃、大久保秀之、(大学生等3名)東城良信、菊島郁也、(高校生2名)、津金伸二、八代史子、武川村中学校生徒

本文目次

序 例 目	文 言 次	
第 I 章	調査に至る経緯	13
第 II 章	遺跡概観	15
	(1) 遺跡の地理的環境	15
	(2) 遺跡の歴史的環境	15
第 III 章	発掘経過	18
第 IV 章	遺構と遺物	23
	(1) 竪穴住居址と出土遺物	23
	(2) 掘立柱建物址	164
	(3) 土 塚	185
	(4) 掘立柱建物址及び土塚出土遺物	190
	(5) 溝状遺物	192
	(6) その他の遺物	194
第 V 章	成果と課題	198
	(1) 山土土委と編年の位置づけ	198
	(2) 金属製品について	207
	(3) 住居址について	208
	(4) 宮間用遺跡をめぐる諸問題	209
お わ り	に	217

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	16	第 27 図	第19号住居址出土遺物	41
第 2 図	遺跡周辺地形図	19	第 28 図	第21号住居址	43
第 3 図	宮間用遺跡流域配流図	21~22	第 29 図	第22号住居址	44
第 4 図	第 1・31号住居址	23	第 30 図	第23号住居址	44
第 5 図	第 1・31号住居址出土遺物	24	第 31 図	第23号住居址出土遺物	45
第 6 図	第 2号住居址	25	第 32 図	第24・25号住居址	45
第 7 図	第 3号住居址	26	第 33 図	第24・25号住居址出土遺物	46
第 8 図	第 3号住居址出土遺物	26	第 34 図	第26号住居址	47
第 9 図	第 4号住居址	27	第 35 図	第26号住居址出土遺物	47
第 10 図	第 4号住居址出土遺物	27	第 36 図	第27号住居址	48
第 11 図	第 5号住居址	28	第 37 図	第27号住居址出土遺物	48
第 12 図	第 6号住居址	28	第 38 図	第28号住居址	49
第 13 図	第 7号住居址	29	第 39 図	第28号住居址出土遺物	49
第 14 図	第 7号住居址出土遺物	29	第 40 図	第29・30・34号住居址	50
第 15 図	第 8号住居址	30	第 41 図	第29・30・34号住居址出土遺物	51
第 16 図	第11号住居址	31	第 42 図	第35号住居址	54
第 17 図	第12号住居址	32	第 43 図	第35号住居址出土遺物	55
第 18 図	第12号住居址出土遺物	32	第 44 図	第36・37号住居址	57
第 19 図	第13号住居址	33	第 45 図	第36・37号住居址出土遺物	58
第 20 図	第15号住居址	34	第 46 図	第38号住居址	59
第 21 図	第15号住居址炭化材出土状態	35	第 47 図	第38号住居址出土遺物	59
第 22 図	第15号住居址出土遺物	36	第 48 図	第39号住居址	61
第 23 図	第16・17号住居址	37	第 49 図	第39号住居址出土遺物	61
第 24 図	第16号住居址出土遺物	38	第 50 図	第40号住居址	62
第 25 図	第17号住居址出土遺物	38	第 51 図	第40号住居址出土遺物	63
第 26 図	第19号住居址	39	第 52 図	第41号住居址	64

第 53 页	第42号住居址	65	第 107 页	第71号住居址	121
第 54 页	第42号住居址出土遗物	66	第 108 页	第71号住居址出土遗物	122
第 55 页	第43号住居址	69	第 109 页	第71号住居址出土遗物	122
第 56 页	第43号住居址出土遗物	70	第 110 页	第72号住居址	123
第 57 页	第43号住居址出土遗物	71	第 111 页	第72号住居址出土遗物	124
第 58 页	第44号住居址	72	第 112 页	第73·92号住居址	127
第 59 页	第44号住居址出土遗物	73	第 113 页	第73·92号住居址出土遗物	128
第 60 页	第45·46号住居址	74	第 114 页	第74号住居址	129
第 61 页	第45号住居址出土遗物	75	第 115 页	第74号住居址出土遗物	130
第 62 页	第46号住居址出土遗物	75	第 116 页	第75·76号住居址	131
第 63 页	第47号住居址	76	第 117 页	第75·76号住居址出土遗物	132
第 64 页	第47号住居址出土遗物	76	第 118 页	第77号住居址	132
第 65 页	第47号住居址出土遗物	77	第 119 页	第77号住居址出土遗物	133
第 66 页	第48号住居址	78	第 120 页	第78号住居址	134
第 67 页	第48号住居址出土遗物	78	第 121 页	第78号住居址出土遗物	135
第 68 页	第49号住居址	79	第 122 页	第79号住居址	137
第 69 页	第49号住居址出土遗物	80	第 123 页	第80号住居址	138
第 70 页	第50号住居址①	80	第 124 页	第79·80号住居址出土遗物	139
第 71 页	第50号住居址②	81	第 125 页	第80号住居址出土遗物	139
第 72 页	第50号住居址出土遗物	82	第 126 页	第81号住居址	140
第 73 页	第51号住居址	83	第 127 页	第82号住居址	141
第 74 页	第52号住居址	84	第 128 页	第82号住居址出土遗物	141
第 75 页	第52号住居址出土遗物	85	第 129 页	第82号住居址出土遗物	142
第 76 页	第53·54号住居址	86	第 130 页	第83·84号住居址	143
第 77 页	第53·54号住居址出土遗物	87	第 131 页	第83·84号住居址出土遗物	144
第 78 页	第55号住居址	88	第 132 页	第84号住居址出土遗物	144
第 79 页	第55号住居址出土遗物	89	第 133 页	第85号住居址	146
第 80 页	第56号住居址	90	第 134 页	第85号住居址出土遗物	147
第 81 页	第56号住居址出土遗物	91	第 135 页	第85号住居址出土遗物	148
第 82 页	第57号住居址	91	第 136 页	第86号住居址	149
第 83 页	第58号住居址	92	第 137 页	第87号住居址	151
第 84 页	第58号住居址出土遗物	93	第 138 页	第86·87号住居址出土遗物	153
第 85 页	第59·60号住居址	95	第 139 页	第88·89号住居址	154
第 86 页	第61号住居址	96	第 140 页	第88号住居址出土遗物	157
第 87 页	第61号住居址出土遗物①	98	第 141 页	第89号住居址出土遗物	158
第 88 页	第61号住居址出土遗物②	99	第 142 页	第90号住居址	159
第 89 页	第62号住居址	101	第 143 页	第90号住居址出土遗物	159
第 90 页	第62号住居址出土遗物①	102	第 144 页	第91号住居址	160
第 91 页	第62号住居址出土遗物②	103	第 145 页	第91号住居址出土遗物	161
第 92 页	第63号住居址	105	第 146 页	第93号住居址	163
第 93 页	第63号住居址出土遗物	106	第 147 页	第93号住居址出土遗物	163
第 94 页	第64·65号住居址	107	第 148 页	第94号住居址	164
第 95 页	第64号住居址出土遗物	108	第 149 页	第 1·2·3·4号掘立柱建物址	165
第 96 页	第66号住居址	110			
第 97 页	第66号住居址出土遗物	112	第 150 页	第 5·6·7·8号掘立柱建物址	167
第 98 页	第66号住居址出土遗物	113			
第 99 页	第66号住居址出土遗物	113	第 151 页	第 9·10·11·12号掘立柱建物址	169
第 100 页	第67号住居址	114			
第 101 页	第67号住居址出土遗物	115	第 152 页	第14·15·16·17·18号 掘立柱建物址	171
第 102 页	第68号住居址	116			
第 103 页	第68号住居址出土遗物	117	第 153 页	第19·20·21·22号掘立柱建物址	173
第 104 页	第69号住居址	118			
第 105 页	第70号住居址	119	第 154 页	第23·24·25号掘立柱建物址	175
第 106 页	第70号住居址出土遗物	120	第 155 页	第26·27·28·29号掘立柱建物址	

第 156 図	第 30・31・32・33 号獨立柱建物址	177
	……………	179
第 157 図	第 34・35・36 号獨立柱建物址	181
第 158 図	第 37・38・39・40 号獨立柱建物址	183
	……………	186
第 159 図	第 41・42・43・44 号獨立柱建物址	187
第 160 図	第 45 号獨立柱建物址	187
第 161 図	上 述	189
第 162 図	獨立柱建物址及び上層出土遺物	191

第 163 図	溝状遺構	193
第 164 図	遺構外出土遺物	195
第 165 図	宮間田遺跡山十古銭	195
第 166 図	遺構内及び遺構外出土 縄文時代石器	196
第 167 図	宮間田遺跡土器編年図(1)	199~200
第 168 図	宮間田遺跡土器編年図(2)	201~202
第 169 図	宮間田遺跡土器編年図(3)	203~204
第 170 図	宮間田遺跡住居址変遷図(1)	210
第 171 図	宮間田遺跡住居址変遷図(2)	211
第 172 図	宮間田遺跡住居址変遷図(3)	212

表 目 次

第 1 表 第 19 号住居址山十古銭一覽表……………42

第 2 表 遺構内及び遺構外出土

縄文時代石器一覽表……………197

図 版 目 次

巻頭図版 宮間田遺跡周辺航空写真

図版 1	1. A区遺跡調査前
	2. A区遺跡東側遺構群
	3. A区遺跡西側遺構群
図版 2	1. B区遺跡調査前
	2. B区遺跡全景
	3. B区遺跡東側遺構群
図版 3	1. B区遺跡南側遺構群
	2. B区遺構確認状況
	3. B区調査風景
図版 4	1. 第 1・31 号住居址
	2. 第 31 号住居址カマド
	3. 第 2 号住居址
図版 5	1. 第 3 号住居址
	2. 第 4 号住居址
	3. 第 5 号住居址
図版 6	1. 第 6 号住居址
	2. 第 7 号住居址
	3. 第 8 号住居址
図版 7	1. 第 11 号住居址
	2. 第 12 号住居址
	3. 第 15 号住居址
図版 8	1. 第 15 号住居址炭化材出土状況
	2. 第 16 号住居址
	3. 第 17 号住居址
図版 9	1. 第 19 号住居址
	2. 第 21 号住居址
	3. 第 22 号住居址
図版 10	1. 第 23 号住居址
	2. 第 24・25 号住居址
	3. 第 26 号住居址
図版 11	1. 第 27 号住居址
	2. 第 28 号住居址

3. 第 29・30・34 号住居址	
図版 12	1. 第 29 号住居址遺物出土状況
	2. 第 30 号住居址カマド
	3. 第 35 号住居址
図版 13	1. 第 35 号住居址カマド
	2. 第 36・37 号住居址
	3. 第 38 号住居址
図版 14	1. 第 39 号住居址
	2. 第 40 号住居址
	3. 第 41 号住居址
図版 15	1. 第 42 号住居址
	2. 第 42 号住居址カマド
	3. 第 42 号住居址遺物出土状況
図版 16	1. 第 43 号住居址
	2. 第 43 号住居址遺物出土状況
	3. 第 44 号住居址
図版 17	1. 第 45 号住居址
	2. 第 45 号住居址カマド
	3. 第 45 号住居址土器出土状況
図版 18	1. 第 46 号住居址
	2. 第 46 号住居址カマド
	3. 第 47 号住居址
図版 19	1. 第 47 号住居址鉄製品出土状況
	2. 第 47 号住居址羽口山出土状況
	3. 第 48 号住居址
図版 20	1. 第 49 号住居址
	2. 第 49 号住居址雜出土状況
	3. 第 50 号住居址
図版 21	1. 第 51 号住居址
	2. 第 52 号住居址
	3. 第 52 号住居址カマド
図版 22	1. 第 52 号住居址土器出土状況

2. 第53・54号住居址
3. 第54号住居址遺物出土状況
- 図版23…1. 第55号住居址
2. 第56号住居址
3. 第56号住居址遺物出土状況
- 図版24…1. 第57号住居址
2. 第58号住居址
3. 第59号住居址
- 図版25…1. 第59号住居址カマド
2. 第60号住居址
3. 第61号住居址
- 図版26…1. 第61号住居址土器出土状況
2. 同上
3. 第61号住居址鉄製品出土状況
- 図版27…1. 第62号住居址
2. 第62号住居址煎治炉
3. 第63号住居址
- 図版28…1. 第64・65号住居址
2. 第66号住居址
3. 第66号住居址カマド
- 図版29…1. 第68号住居址土器出土状況
2. 同上
3. 第67号住居址
- 図版30…1. 第68号住居址
2. 第68号住居址土器出土状況
3. 第69号住居址
- 図版31…1. 第70号住居址
2. 第70号住居址カマド
3. 第71号住居址
- 図版32…1. 第71号住居址磁石出土状況
2. 第72号住居址
3. 第73・92号住居址
- 図版33…1. 第92号住居址カマド
2. 第74号住居址
3. 第75・76号住居址
4. 第75号住居址カマド
- 図版34…1. 第77号住居址
2. 第77号住居址土器出土状況
3. 第78号住居址
- 図版35…1. 第79号住居址
2. 第80号住居址
3. 第81号住居址
- 図版36…1. 第82号住居址
2. 第82号住居址埴帯出土状況
3. 第83号住居址
4. 第83号住居址カマド
- 図版37…1. 第84号住居址
2. 第84号住居址カマド
3. 第85号住居址
- 図版38…1. 第85号住居址カマド
2. 第85号住居址遺物出土状況
3. 同上
- 図版39…1. 第86号住居址
2. 第87号住居址
3. 第87号住居址炭化材出土状況
- 図版40…1. 第87号住居址カマド
2. 第88・89号住居址
3. 第88号住居址遺物出土状況
4. 第90号住居址
- 図版41…1. 第91号住居址
2. 第91号住居址カマド
3. 第93号住居址
- 図版42…1. 第94号住居址
2. 第4号獨立柱建物址
3. 第6号獨立柱建物址
4. 第7号獨立柱建物址
- 図版43…1. 第8号獨立柱建物址
2. 第9号獨立柱建物址
3. 第10号獨立柱建物址
- 図版44…1. 第11号獨立柱建物址
2. 第20号獨立柱建物址
3. 第21号獨立柱建物址
- 図版45…1. 第22・23号獨立柱建物址
2. 第24号獨立柱建物址
3. 第27号獨立柱建物址
- 図版46…1. 第28号獨立柱建物址
2. 第31・32・33号獨立柱建物址
3. 第34号獨立柱建物址
4. 第39号獨立柱建物址
- 図版47…1. 第42号獨立柱建物址
2. 第45号獨立柱建物址
3. 第45号獨立柱建物址柱穴
- 図版48…1. 第67号上蔵
2. 第67号土庫遺物出土状況
3. 第131号土庫
- 図版49…1. 第142号土庫
2. 第150・151号土庫
3. 第203号土庫
- 図版50…1. 第203号土庫土器出土状況
2. 第56号住居址周辺土溝群
3. 第1号溝状遺構
- 図版51…1. 第17号住居址遺物
2. 第19号住居址遺物
- 図版52…1. 第35号住居址遺物
2. 第40号住居址遺物
3. 第42号住居址遺物
- 図版53…1. 第43号住居址遺物
2. 第45号住居址遺物
- 図版54…1. 第46号住居址遺物
2. 第48号住居址遺物
3. 第50号住居址遺物
4. 第52号住居址遺物
- 図版55…1. 第54号住居址遺物
2. 第56号住居址遺物
3. 第58号住居址遺物
4. 第61号住居址遺物
- 図版56…1. 第61号住居址遺物
図版57…1. 第62号住居址遺物

- 図版58…1. 第64号住居址遺物
2. 第66号住居址遺物
- 図版59…1. 第68号住居址遺物
2. 第70号住居址遺物
3. 第71号住居址遺物
- 図版60…1. 第72号住居址遺物
2. 第75号住居址遺物
3. 第77号住居址遺物
- 図版61…1. 第78号住居址遺物
- 図版62…1. 第79号住居址遺物
2. 第80号住居址遺物
3. 第82号住居址遺物
- 図版63…1. 第84号住居址遺物
2. 第85号住居址遺物
- 図版64…1. 第85号住居址遺物
2. 第87号住居址遺物
3. 第88号住居址遺物
- 図版65…1. 第89号住居址遺物
2. 第91号住居址遺物
3. 第203・245号土甕及び遺構外出土遺物
- 図版66…1. 住居址出土羽口
2. 住居址出土鉄製品
- 図版67…1. 住居址出土鉄製品
- 図版68…1. 住居址出土鉄製品及び銅製品
2. 住居址出土磁石
- 図版69…1. 竊物用石鐮及び石製紡錘車
2. 遺構内及び遺構外出土
縄文時代石器

第 I 章 調査に至る経緯

武川村では、昭和54年度より無償圃場整備事業を実施している。「圃場整備事業」とは、区画整理を中心に、これに伴うかんがい、排水、農道、暗渠排水などを総合的に整備する事業で、農業労働時間の短縮、富農機械・収穫物等の運搬の簡便化、作業能率及び生産性の向上等を目的としている。

武川村においては、村内の農地約171 ha を対象として行っており、初年度の牧原地区 7.8 ha を皮切りに、昭和59年度までに約 119.5 ha、全体の約70%が完了し、従来の狭い圃場が近代的な農地に生まれ変わっている。昭和60年度には、新たに柳沢地区約10 ha、新奥地区約5 ha、下三吹地区約5 haの計約20 haが事業対象となっていたが、下三吹地区内の事業予定区域の桑畑に、平安時代を主体とする土器片が散布していることが、山梨県教育委員会文化課、武川村教育委員会による現地踏査によって明らかになったため、県文化課、村教育委員会、事業主体者である東北土地改良事務所の三者で協議を行った結果、土器片の散布がみられる箇所及びその周辺に関して、早急に遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施する必要があるとの結論に達した。

試掘調査は、昭和60年5月13日から17日にかけて、山梨県埋蔵文化財センター・八巻与志夫文化財主事が実施した。遺跡の存在する可能性がある東西約 160 m、南北約 100 mの範囲に試掘坑を任意に設定して遺構の確認を行ったところ、平安時代を中心とする土器片等の遺物多数と、竪穴住居址と思われる黒色土の落ち込みを4箇所確認した。この試掘調査の結果に基づき、再度前述の三者で協議を行ったが、遺構が存在すると思われる約4000㎡について、圃場整備事業に先立ち、発掘調査を実施し、記録をもって保存にかえることで合意に達した。遺跡名は調査対象地区の小字名より「宮間田遺跡」とし、昭和60年6月14日、武川村と東北土地改良事務所との間で、「埋蔵文化財発掘調査費に関する協定書」を取り交わした（なお、60年度調査分について、本報告書では“宮間田遺跡A区”と呼称する。）。

しかし、諸事情により発掘調査の開始が当初の計画より大幅に遅れてしまう事態となったため、村教育委員会では県文化課に調整を依頼し、その結果、隣町である白州町教育委員会に埋蔵文化財担当の派遣を依頼することになった。7月16日、同町教育委員会・平野 修埋蔵文化財担当の承諾を得ることができ、ようやく調査が開始できるはこびとなった。

また、宮間田遺跡A区に隣接する昭和61年度圃場整備事業予定地区内約5.2 haについても遺構が存在することは、宮間田遺跡A区調査中から予想されていたが、その概要、規模等については確認されていなかった。そこで村教育委員会は県埋蔵文化財センターに試掘調査を依頼、昭和61年3月26・27日の2日間、田代孝・中山誠二両文化財主事によって試掘調査が行われた。遺構が存在する可能性のある河岸段丘上の工事予定区域約2.4 ha に8本のトレンチを設定し、遺構等の確認調査を行ったところ、①平安時代の住居址3軒のほか、竪穴状遺構・土坑・ピット等が確認され、宮間田遺跡A地区と同一の集落をなすと考えられる。②遺構の広がりや段丘先端部

で濃密で、山側に向かって薄くなる傾向が認められる。③段丘上についてはほぼ全面的に遺構が分布するものと考えられる、などの報告を得た。

この結果をもとに昭和60年度の調査に引き続き、遺構の存在する可能性のある約 8,050㎡について、圃場整備事業に先立ち、発掘調査を実施することになり、昭和61年6月2日、武川村と軾北土地改良事務所との間で「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を取り交わした（61年度調査分については、“宮開田遺跡B区”と呼称する。）。

また発掘調査担当者については、県文化課の調整により、白州町教育委員会の協力を得、昭和60年度に引き続き、平野 修理蔵文化財担当が行うこととなった。

第Ⅱ章 遺跡概観

(1) 遺跡の地理的環境

宮間田遺跡は、山梨県北巨摩郡武川村三吹字宮間田1337番地ほかに所在している。武川村は県の北西部に位置し、西端は鳳凰山を境界に芦安村、北端は中山、尾白川、大武川を境界に白州町と、東端は釜無川を境界に長坂町および須玉町と、南端は小武川をもって垂崎市というようにそれぞれの市町村と接している。

甲斐駒ヶ岳北方の鰐山を源とする釜無川は、南アルプスとよばれる赤石山脈の前衛である巨摩山地の東麓とほぼ平行して南北に流下している。八ヶ岳火山の爆発によって噴出した火山堆積物を侵食し続けた結果、「七里岩」とよばれる高さ50～100mにもおよぶ急崖を形成し、この急崖は白州町の国界橋から垂崎市まで距離にして約30kmも続いている。またこの地域は、フォッサ・マグナ（大凹地帯）の西縁にあたり、糸魚川—静岡地質構造線が釜無川・富士川とほぼ平行して南北に縦走り、この大断層とそれに直交するいくつかの小断層が、この地域の急峻な地形をつくりだしている。

村内の北端を流下する大武川は駒ヶ岳を源とし、武川村牧原付近で釜無川と合流する。その標高差は約2500mで全国でも有数な急勾配の河川で、そのほか石空川、黒沢川、小武川など釜無川の支流となる河川も、概して急勾配の河川である。その中でも大武川は、急勾配のため侵蝕・運搬作用が著しく、昭和34年の第7号台風などでは牧原地区を中心に大規模な土石流に襲われている。これら大小河川がいくたびかの氾濫を繰り返し、形成されてきた河岸段丘や沖積扇状地は、現在では良質の米などをつくりだす耕地として広く利用されている。

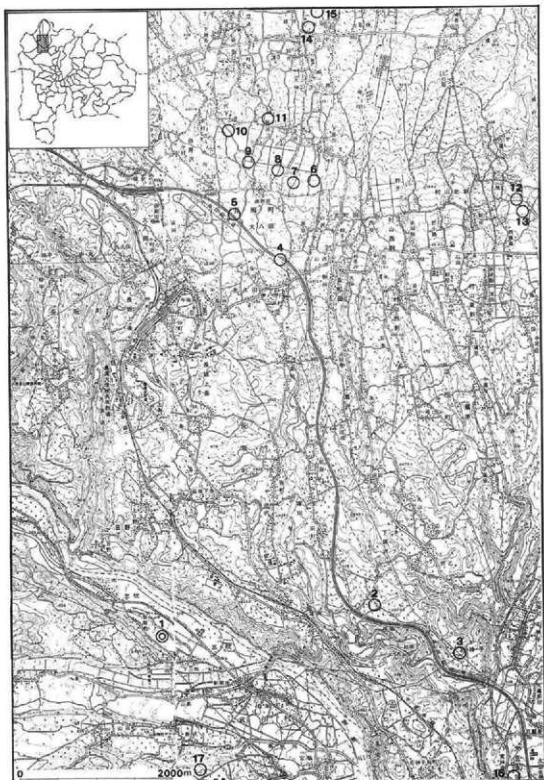
宮間田遺跡は釜無川右岸の河岸段丘上に立地し、この河岸段丘は低位段丘に属している。標高は遺跡内にて約513m前後を測り、現河床の氾濫原との比高差は約5～8mを測る。本遺跡をのせる現段丘面は、釜無川の氾濫に伴う侵蝕などによって、かなりその規模を縮小しており、さらに湧水から流れこむ小河川により、いくつかの谷部を形成している。

(2) 遺跡の歴史的環境

武川村には縄文時代から歴史時代にいたる遺跡が、昭和58年度現在17箇所確認されており、釜無川、大武川、黒沢川、小武川などの河岸段丘上に確認されている。発掘調査が実施された遺跡は少なく、村誌編纂事業に伴って柳沢地内宇真原所在の真原遺跡、黒沢地内宇向原所在の向原遺跡(17)などが挙げられるのみで、いずれも小規模な調査のため全容はつかめないが、縄文時代および平安時代の竪穴住居址が検出されている。

武川村および白州町、垂崎市の一部の一带は、『和名類聚抄』にみえる巨摩郡の真原郷に比定されており、ほかに巨摩郡には等力・速見・栗原・青沼・大井・市川・川合・余戸の郷がみえる。

宮間田遺跡(1)周辺のおもな平安時代遺跡に目を転じれば、須玉町所在の大小久保遺跡



第1図 遺跡位置図

(3)・大豆生田遺跡(16)、高根町所在の湯沢遺跡(2)・東久保遺跡(12)・青木北遺跡(13)、長坂町所在の柳坪遺跡(4)・小和田館跡(5)、大泉村所在の木の下・大坪遺跡(6)・原山遺跡(7)・寺所遺跡(8)・金生遺跡(9)・(7)牛田第3遺跡(10)・城下遺跡(11)・東姥神B遺跡(14)・泉原遺跡(15)などが挙げられる。(16)を除くこれらの遺跡は、八ヶ岳南麓の広大な樹野の、大小河川によって形成された尾根上に立地している。この地域は『和名類聚抄』にみえる巨麻郡の遠見郷に比定される地域で、多くの平安時代集落遺跡が点在している。

ところで、『甲斐国志』の記載にもあるように巨麻郡は馬の産地としても有名で、『延喜式』にも甲斐国内に真衣野・柏前・榎坂の三つの御牧を置いたという記載がみられる。その中の真衣野の御牧が、真衣郷に置かれていたと想定されているが、牧場に関する遺構などは確認されておらず、現在、村役場の所在地である牧原が真衣野の御牧の遺跡ではないかと想定されている。残り二つの御牧についても、八ヶ岳南麓地域および茅ヶ岳西南麓地域に比定されており、その広大な土地を背景に牧経営を行い得たことは、十分に想定できよう。

以上、宮間田遺跡を成り巻く歴史的環境を平安時代の遺跡を中心に簡単にふれてみた。考古学的には八ヶ岳南麓に展開する縄文時代の遺跡が注目されてきた地域ではあるが、近年の圃場整備事業などに伴う大規模開発で平安時代の遺跡も発見が相次いで、注目をあびつつある。宮間田遺跡も真衣野の御牧を取り巻く真衣郷の一集落遺跡としてその注目をあびつつあるが、本遺跡の考古学的成果から本地域における郷と御牧との関係、郷と集落遺跡との関係、さらにはそれらの性格などの解明が急がれるところである。

第三章 発掘経過

昭和60年度の調査は、武川村教育委員会が主体となり、昭和60年7月22日より開始、同日重機を導入して表土の除去作業を行った。さらに同年7月29日より作業員を入れ、遺構確認面のジョレンによる精査とともに、調査区内に任意に設けた基準杭をもとに、10mメッシュを基本とするグリッドを設定、調査区域全体をカバーし、東から1～8、南からA～Hと命名した。

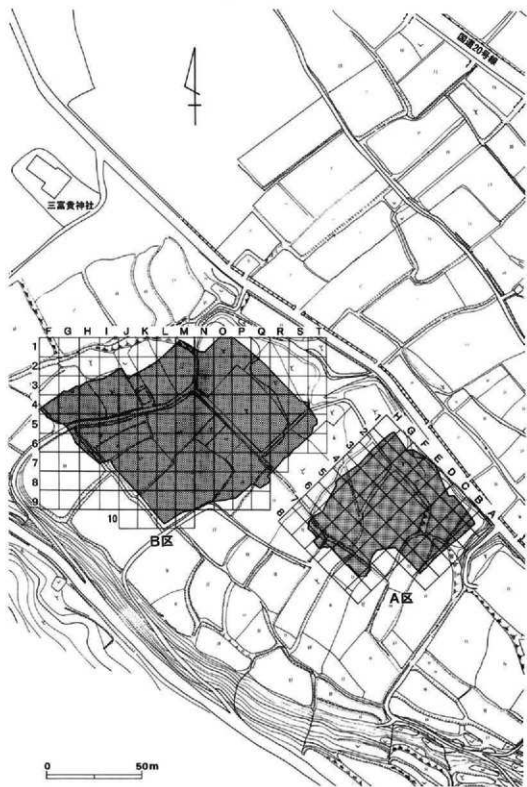
8月1日より住居址等、確認された遺構の調査に入り、炎天下、作業は進められていったが、調査の進展につれ、当初の予想をはるかに上回る数の遺構が確認され、天候等の条件も相まって多少の遅延を余儀なくされた。また9月中旬には、調査区域に隣接する工事箇所において重機による表土除去作業中、竪穴住居址と掘立柱建物址が露出する事態となり、村及び村教育委員会は文化財保護の立場から、この部分に関しても調査を行う必要性があると判断し、調査期間及び調査面積の変更を岐阜県北土地改良事務所に申請、9月24日、「協定変更理由書」、「協定変更内容書」を提出して引き続き調査を行った。

その後山梨県考古学協会、山梨郷土研究会などの学術研究団体から、遺跡の全容解明に向け、完全調査を望む声が上がるなかで、県埋蔵文化財センター文化財主事等の協力を得て調査は継続され、最終的に11月29日に終了した。また引き続いて室内において、整理作業、報告書作成のための準備等が3月末まで行われた。なお、宮間田遺跡A区については、『宮間田遺跡発掘調査概報』のなかで、その成果の一部が報告されている。

昭和61年度の発掘調査は、諸々の事務手続き終了後の昭和61年6月6日より開始、同日重機を導入して表土の除去作業を行った。続いて同月10日より作業員を入れ、遺構確認面のジョレン精査、11日には遊北に合わせて一部グリッドを設定した。なお、グリッドについては、10mメッシュを基本とし、重機による表土はきが終わった区域から逐次設定していく方法を取り、西から東へABC……、北から南へ123……というように設定した。

調査予定区域内の農作物の収穫の影響等で、重機による表土除去作業は7月初旬まで行ったが、その時点で確認された遺構は調査対象面積約8,050㎡内に、平安時代の竪穴住居址約60軒、掘立柱建物址10棟以上、土壌、柱穴等多数にのぼり、これらの遺構に伴って土器等の遺物も多数出土しており、以上のことから、遺跡の規模が宮間田遺跡A区及び当初の予想をはるかに上回るものであることが判明した。炎天下、調査は連日続けられたが、屋外作業のため天候その他の条件にも左右されがちで、8月になって作業にも多少の遅れをきたしはじめた。そのためこの事態をうけて8月下旬、県文化課、村教育委員会、岐阜県北土地改良事務所の三者により協議が行われ、まず現地調査の終了を先決とすることで意見が一致し、期間の延長等の事項についても合意に達した。

その後調査は可能な限り効率的な方法で継続され、途中作業の能率をはかるうえで、遺構の写真測量等を取り入れながら、最終的に記録作業を含めた現地調査は10月25日まで継続、その後引き続き室内において遺物等の整理作業、報告書作成に向けての準備等が翌62年3月まで行



第2図 道跡周辺地形図

われた。しかし写真測量図化の一部、報告書の印刷等については、やむを得ず62年度事業となった。

昭和62年度は、61年度に引き続き、室内整理作業、写真測量図化の一部、報告書作成までの作業が63年3月まで行われた。

なお、宮間田遺跡の住居址等の遺構番号については、調査途中の遺跡見学会、発表会等の折に何度か公にしてきたが、整理作業の結果、当時とは若干の変動が生じており、本報告書中の遺構番号が最終的なものとなる。

遺跡の堆積土層は、釜無川の低位河岸段丘上に遺跡が立地しているため安定していない。表土層および水田床上下に黒褐色土が堆積する所と堆積しない所があり、黒褐色土は主に段丘北東側から東側縁辺部周辺において堆積がみとめられる。

第Ⅰ層は表土層である。場所により層厚は多少異なるが、10～15 cm程度である。第Ⅱ層は水田床土層で、概ね10～15 cm程度の厚さである。第Ⅲ層は黒褐色土で、本層から縄文時代～中世にわたる遺物が出土している。層厚は20～30 cmを測る。第Ⅳ層は暗黄褐色土で、若干茶色味がかかる。木層からも平安時代を中心とした遺物が出土している。層厚は概ね5～10 cm程度である。第Ⅴ層は黄褐色土で、B区では第Ⅱ層の下に本層があらわれる。第Ⅵ層は釜無川旧河道に伴う砂層である。

遺構の確認面は、主に第Ⅴ層であるが、A区においては第Ⅳ層内で確認できた遺構もあり、中世の遺構においては第Ⅲ層内から切込んでいる可能性が十分に考えられる。遺構の大半はその上部を削平されており、さらに桑の根により著しく攪乱を受けているものが多くみうけられる。



第3圖 空間用途除遺構配置圖(1/600)

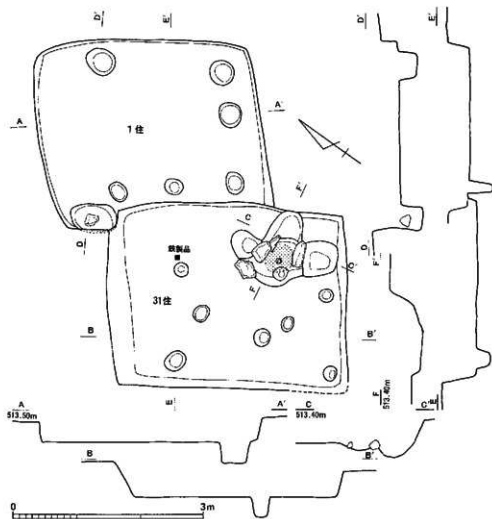
第IV章 遺構と遺物

(1) 竪穴住居址と出土遺物

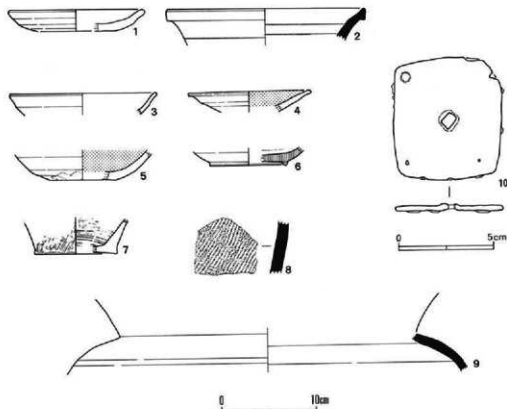
竪穴住居址はA区・B区あわせて総数94軒発見された。若千数中世に属するものがあると思われるが、それ以外の竪穴住居址は平安時代に属するものである。94軒の竪穴住居址のなかには3軒の小鍛冶遺構がふくまれている。

出土遺物は、土器としては土師器、須恵器、陶器類の各器種がみられ、金属器類としては鎌、刀子などの鉄製農具、銅製鈴帯などがみられ、磁石などの石器類もみられる。

なお、以下番号順に竪穴住居址の報告を行っていくが、第9・10・14・18・20・32・33号住居址については、昭和61年3月刊行の『宮間田遺跡発掘調査概報』において報告しており、その後の整理作業においても記載事項などに変更がなかったため、今回の報告から除外した。



第4図 第1・31号住居址 (1/60)



第5図 1・31号住居址出土遺物（1～9は1/4、10は1/2）

第1号住居址（第4・5図）

本住居址はA区E・F-4グリッドに位置している。第31号住居址と南西壁部分において重複しており、本住居址が第31号住居址を一部切り込んで構築している。主軸方位は不明である。

遺構の規模は長軸3.4m、短軸2.8mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は東壁において最大32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認されなかった。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットは7個確認されたが柱穴になりうるかは疑問である。カマドなどの施設は確認されなかった。

出土遺物は土師器、須恵器の細片資料が多く、復元実測に耐え得る資料はわずかであった。第5図1は覆土出土の皿形土器である。口径約14.2cm、器高約2.3cm、底径約7.8cmを測る。内外面ともロクロナデ調整で、色調は赤褐色、胎土は石英を含む。2は覆土出土の須恵器壺形土器の口縁部破片である。推定口径約20.6cmを測る。

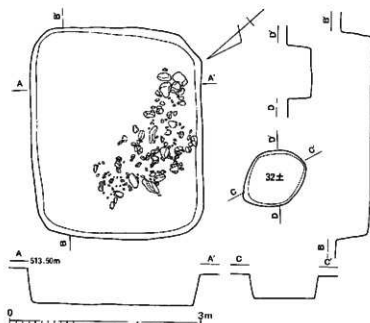
第31号住居址（第4・5図）

本住居址はA区E・F-4グリッドに位置している。東壁を第1号住居址により一部切り込まれているが、遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN-60°-Eである。遺構の規模は長軸3.82m、短軸2.84mを測り、平面形は長方形を呈する。壁高は北壁において最大60cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝は確認されなかった。床面は黄褐色土を床面としており、

カマド周辺部のみが堅固で、あとは概して軟弱である。ピットは7個確認されたが、柱穴かどうかは不明である。

カマドは東駅のやや南東コーナー寄りに位置している。規模は東西1.24m、南北1.7mを割り、主軸方位はN-74° -Eである。煙道の掘り込みは浅く、東駅の一部を浅く掘り込んで構築している。燃焼部は床面を12~15cmほど掘り込んでおり、天井石や袖石に使われていたと思われる石が数個落ち込んでいる。袖石は両袖あわせて3個遺存しており、いずれも花崗岩の河原石を使用し、粘質の灰褐色土を補強材として使用している。燃焼部の底面は非常によく焼けており、焼土が5cmほど堆積している。カマドを構成する土層としては、基本的には2層で第1層が砂質の暗褐色土で、第2層が砂質の黄褐色土でいずれもカーボンと焼土粒を多量に含んでいる。

出土遺物は土師器杯・皿、須恵器甕、灰釉陶器などがあり、住居址覆土およびカマド内などから出土している。また鉄製品も1点出土している。第5図3はカマド内出土の土師器皿形土器口縁部破片である。推定口径15.4cmを測り、色調は明褐色を呈し、胎土は白色粒・雲母を含む。焼成は良好である。4・5は内面黒色土器である。4はおそらく高台付皿であるが高台部は欠損している。推定口径は13.0cmを測り、色調は明褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母を含む。焼成は良好である。5は環形土器の底部破片である。推定底径は7.0cm、外面はロクロヨコナデのち斜めヘラケズリの調整、色調、胎土などは4に同じ。6はカマド内出土の灰釉陶器甕である。推定高台径は8.2cm。調整は内外面ともロクロ水挽き成形。胎土は緻密である。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。輪調は淡緑色を呈する。8・9は須恵器甕形土器の胴部及び肩部破片である。8は外面は平行条線が残るタタキを施し、9は内外面と

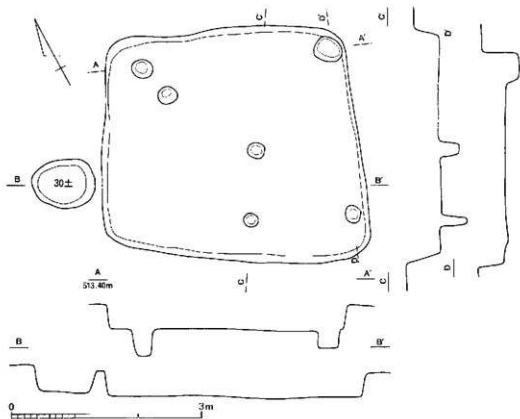


第6図 第2号住居址 (1/60)

もにロクロヨコナデ調整で、いずれも胎土は小石・白色粒を含み、焼成は良好。

鉄製品 10は覆土下層出土板状鉄器である。ほぼ完存している。縦幅6.4cm、横幅5.6cm、厚さ0.3cmを測り、方形を呈する。中央には0.7×0.5cmの方形の孔を穿ち、隅にも径0.1~0.3cmの孔が3箇所穿たれている。紡錘車の紡輪だろうか。

第2号住居址 (第6図)



第7図 第3号住居址 (1/60)

本住居址はA区F-1・2グリッドに位置しており、他の遺構との重複関係はない。遺構の遺存状態は確認地点が采畑であったため、桑の根により一部攪乱をうけているが、全体としては良好である。土軸方位は不明である。

規模は長軸3.34m、短軸2.7mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は東壁において最大55cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。また、その西側半分においては、雑居の一部が露出している。壁溝などの内部施設はなく、出土遺物も少なく土器細片のみで、図示できるものはない。

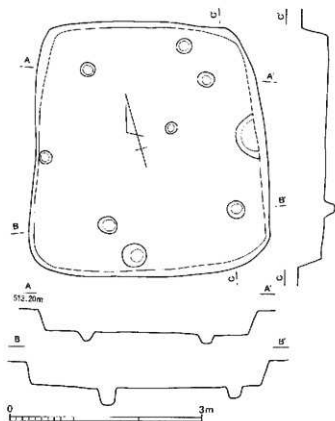
第3号住居址 (第7・8図)

本住居址はA区D・E-2グリッドに位置しており、北側に第17号住居址、西側に第30号土塚と第3号掘立柱建物址が近接しているが、他の遺構との重複関係はない。遺構の遺存状態は、桑の根により一部攪乱をうけているものの良好であった。土軸方位は不明である。

規模は長軸4.16m、短軸3.72mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南壁において最大50cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットは6個確認されたが穴状になり得るかどうかわからない。カマドなどの内部施設は確認されず、焼土などの痕跡もなかった。



第8図 第3号住居址
出土遺物 (1/4)



第9図 第4号住居址 (1/60)

出土遺物は土師器、須恵器などの細片資料が多く、その出土量も少ない。第8図1は土師器形土器の底部破片である。推定底径6.4cmで、淡褐色を呈し、胎土は雲母・黒色粒を含み、焼成



第10図 第4号住居址出土遺物 (1/4)

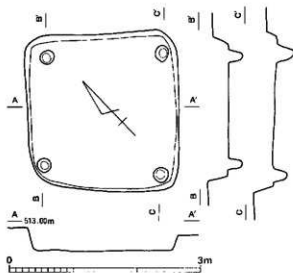
は良好。底部は回転糸切りで、内外面はロクロコナテ調整である。

第4号住居址 (第9・10図)

本住居址はA区B 4グリッドに位置しており、北側に第6号住居址、北西側に第1号掘立柱建物址が近接しているが、他の遺構との重複関係はない。遺構の遺存状態も比較的良好であった。主軸方位は不明である。

規模は長軸4.04m、短軸3.76mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁において最大42cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、とくに堅固な範囲などは確認されなかった。ピットは9個確認されたが柱穴になり得るかどうか不明である。尿溝は確認されなかった。またカマドなどの内部施設も確認されず、焼土の痕跡も確認されなかった。

出土遺物は土師器、須恵器などの細片資料が多く、すべて住居址覆土中からの出土である。

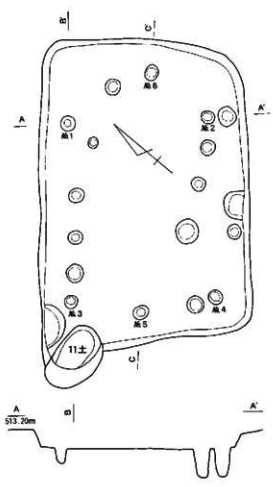


第11図 第5号住居址 (1/60)

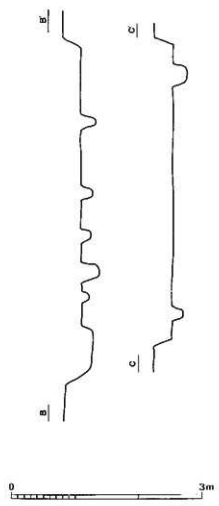
第10図1は土師器甕形土器の底部破片である。内外面とも剥落が著しいがヘラケズリを施し、底部もヘラケズリである。推定底径4.2cm、現高3.6cm、色調は褐色を呈し、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は普通である。2は須恵器長頸瓶の底部破片である。推定底径8.4cm、現高6.8cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好である。

第5号住居址 (第11図)

本住居址はA区B-2・3グリッド



第12図 第6号住居址 (1/60)



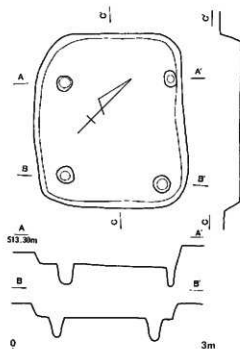
に位置しており、本住居址西側に第8号住居址が近接している。遺構の遺存状態も比較的良好であった。主軸方位は不明である。

規模は長軸2.5m、短軸2.4mの小規模なもので、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は西壁において最大38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認されていない。床面は黄褐色土を床面としており、全体に概して軟弱である。深さ20cm程度のピットが4個確認されているが、いずれも各コーナーに配されおり柱穴と思われる。カマドなどの内部施設はみられない。

出土遺物はわずかで、土師器片、須恵器片を少量出土したのみである。

第6号住居址 (第12図)

本住居址はA区B-3・4グリッドに位置しており、本住居址の東西南方向には第8号住居址と第1号掘立柱建物址が、南側に第4号住居址が近接している。また第11号土塼が本住居址の西コーナー付近を切り込んで存在している。遺構の遺存状態は比較的良好である。主軸方位は不明である。



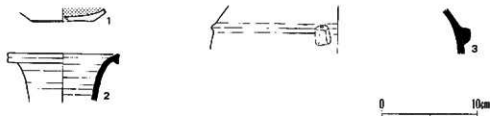
第13図 第7号住居址 (1/60)

規模は長軸4.94m、短軸3.3mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北東壁において最大30cmを測り、緩やかに立ち上がる。壁溝は確認されていない。床面は黄褐色土を床面としており、あまり堅固ではないが、床面として捉えられる。ピットは19個確認されている。そのうち柱穴として捉えられるのは、第12図にも示したように4~6個であろう。カマドなどの内部施設は確認されていない。

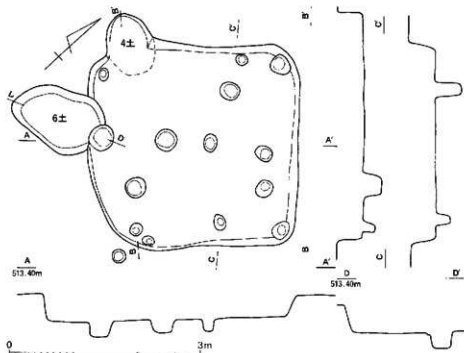
遺物の出土量は少なく、土師器および須恵器の細片を出土しているのみである。

第7号住居址 (第13・14図)

本住居址はA区D-2・3グリッドに位置しており、本住居址南西側に第10号住居址が近接している。遺構の遺存状態は耕作などにより遺構上部が削平されているものの、残りの部分に関しては良好な状態といえる。主軸方位は不明である。



第14図 第7号住居址出土遺物 (1/4)



第15図 第8号住居址 (1/60)

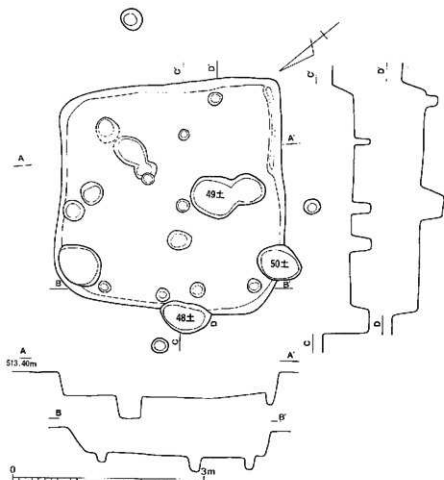
規模は長軸2.8m、短軸2.32mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北東壁において32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、堅固な部分はなく軟弱である。ピットは4個確認され各コーナー付近に配されていることから、柱穴だと思われる。カマドなどの内部施設は確認されていない。

本住居址の出土遺物も土師器、須恵器の細片資料が中心で、すべて覆土からの出土である。第14図1は土師器坏形土器の底部破片で外面はロクロナデ、内面はヘラミガキで黒色処理を施している。底部は回転糸切りである。推定底径6.6cm、色調は褐色、胎土は金雲母・白色粒を含み、焼成は良好である。2は須恵器長頸瓶の口縁部破片で内外面ともロクロナデ調整である。推定口径11.4cm、色調は灰褐色、胎土は小石・白色粒を含み、焼成は良好。3は須恵器四耳甕の肩部破片である。外面はタタキを施し凸帯と耳部を貼りつけている。色調などは2に同じ。

第8号住居址 (第15図)

本住居址はA区B 3グリッドに位置し、本住居址東西両方向には第5号住居址と第6号住居址が近接している。重複関係は北西・南西壁において第4号土壌と第6号土壌と重複しており、土壌2基が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、主軸方位は不明である。

規模は長軸3.3m、短軸3.24mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁において最大42cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、とくに堅固な面は確認されていない。ピットは14個確認されているが、各コーナー付近に配されているピットは柱穴だと思われる。カマドなどの内部施設は確認されていない。



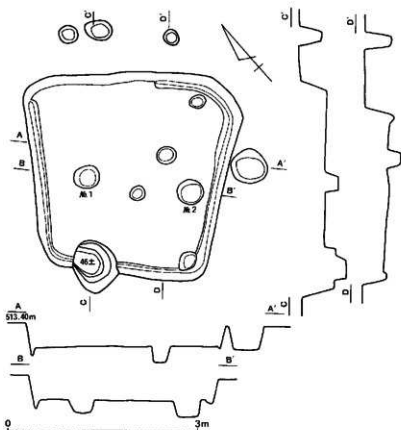
第16図 第11号住居址 (1/60)

遺物の出土量は少なく、すべて住居址覆土からの出土である。土師器、須恵器の細片のみで図示できるものはない。

第11号住居址 (第16図)

本住居址はA区D・E-3・4グリッドに位置しており、本住居址南北両方向に第12号住居址と第4号掘立柱建物址が近接している。重複関係は第48号土塼と第50号土塼に北西壁と西壁を切られており、本住居址中央やや西よりで第49号土塼に切られている。本住居址の確認面が暗褐色土中であつたため確認作業に手間どつたが、床面をてがかりとして確認した。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、主軸方位は不明である。

規模は長軸3.72m、短軸3.6mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南東壁において最大38cmを測り、やや緩やかに立ち上がるが、ほかの壁に関してはほぼ垂直に立ち上がる。南コーナーから南西壁にかけて長さ1.4m、幅16cm、深さ18cmの壁溝が巡っている。断面はU字形を呈する。ほかに壁溝が存在するのではないかと床面精査をおこなつたが、確認することはできなかった。床面は黄褐色土を床面としており、とくに堅固な面は確認されず、全体に軟弱



第17図 第12号住居址 (1/60)

である。ピットは計15個確認されており、径20~40 cm、深さ20~30 cmのものが実際にみられ、おそらく支柱穴的なものと思われる。カマドなどの内部施設は確認されず、灰土の散布も確認されていない。

出土遺物の量は少なく、すべて住居址覆土中からの出土である。土師器、須恵器の細片が出土しているのみで、図示できるものはない。



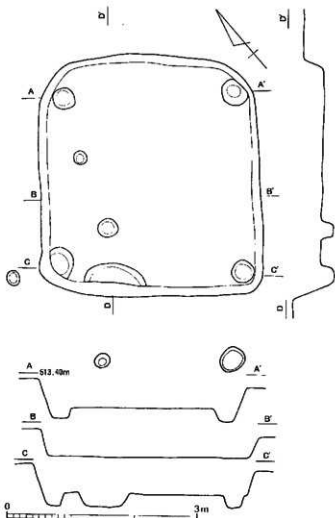
第18図 第12号住居址

出土遺物 (1/4)

第12号住居址 (第17・18図)

本住居址はA区E 3グリッドに位置しており、本住居址両側に第11号住居址が近接し、第15号住居址と第46号土壇と重複関係にある。本住居址が第15号住居址を一部切り込んで構築しており、貼床を施している。また第46号土壇により西壁の一部を切り込まれている。本住居址も第11号住居址同様、確認面が暗褐色土中であつたためその確認作業に手間どってしまった。遺構の遺存状態は普通で、主軸方位は不明である。

規模は長軸3.5m、短軸3.3mを測り、平面形は隅丸方形を呈するが、むしろ台形に近い。壁高は北東壁で42cmを測り、ほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。北東壁の一部を除いた壁下に



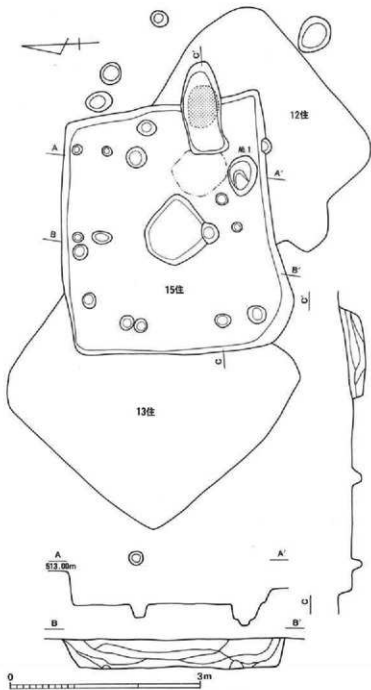
第19図 第13号住居址 (1/60)

戦溝が巡っている。幅10～15 cm、深さ8～12 cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としているが、第15号住居址にかかる部分においては暗褐色土により貼床を施している。黄褐色土上の床面と暗褐色土の床面とは数cmのレベル差がある。ビットは計6個確認されている。径22～40 cm、深さ20～30 cmのビットであるが第図に示したようにNo 1・No 2ビットが柱穴として捉えられると思われる。カマドなどの内部施設は確認されていない。

本住居址においても出土遺物は少なく、土師器、須恵器の細片が大半をしめている。遺物は住居址覆土内から出土しているのみである。第18図1は土師器壺形土器の底部破片である。推定底径9.4 cmを測り、外面はハケ調整、内面はヘラケズリ。底部に木葉痕を残す。色調は暗茶褐色、胎土は金雲母を多量に含み、焼成は普通である。

第13号住居址 (第19図)

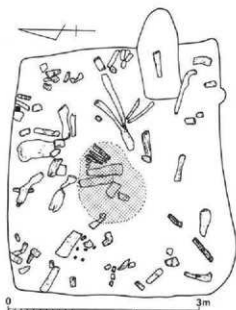
本住居址はA区E-3・4グリッドに位置しており、本住居址西側には第1号住居址が近接し、第15号住居址と重複関係にある。その新旧関係は第12号住居址と同様に、第15号住居址を



第20図 第15号住居址(1/60)

一部切り込んで本住居址を構築しており、貼床を施している。第12号住居址ともかなり近接した位置にある。遺構の遺存状態は桑の根により攪乱をうけており、必ずしも良好とはいえない。主軸方位も不明である。

規模は長軸3.82m、短軸3.5mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北西壁において



第21図 第15号住居址炭化材出土状態

(1/60)

れ東壁と西壁において重複関係にある。その新旧関係は前述のとおり両住居址により東西両壁の一部を切り込まれ、暗褐色土を床面として貼られ構築されている。遺構の遺存状態は両住居址により一部破壊されているものの、良好な状態を保っているといえる。主軸方位はN-85°-Eである。

本住居址は火災住居で、確認当初より覆土である暗褐色土中におびただしい量の焼土が混在していた。第21図にも示したように床面全体に炭化材が散乱しており、丸太材と板材が各壁から住居中央にむかって倒れ込むような状態で出土している。焼土も床面直上において厚く堆積、もしくは散布しており、とくに住居中央には厚く堆積している。また被熱により赤化した箇所も所々にみられる。出土した炭化材で、丸太材は本住居址の上屋に用いた垂木材だと思われ、板材は壁体の一部だと思われる。

本住居址の規模は長軸3.9m、短軸3.5mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁において最大54cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認されていない。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部のみ堅固である以外は概して軟弱である。ピットは大小あわせて16個確認されており、径15~64cm、深さ20~40cmを測る。そのうちのNo1はカマドの南西脇にあり、土師器甕形土器の胴部下半から底部にかけての破片などが比較的多量に出土しており、その位置関係などから貯蔵穴だと思われる。そのほかのピットに関しては主に壁際に存在していることから、支柱穴的なものと思われる。

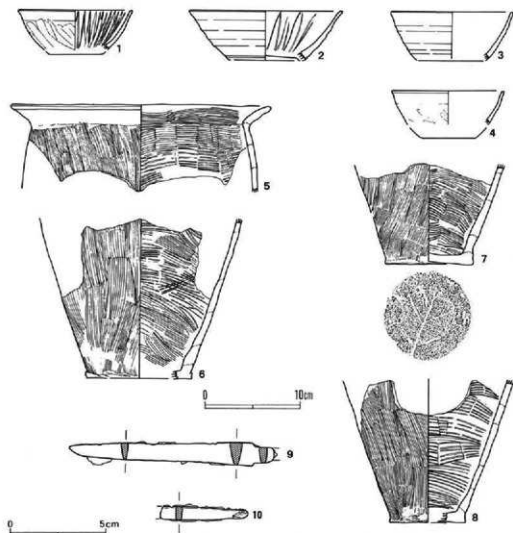
カマドは東壁やや南よりに位置している。規模は長軸148cm、短軸60cmを測り、主軸方位はN-86°-Eである。天井部は第12号住居址により破壊され、袖部は抽石を使用せず粘質の灰褐色土と砂質暗褐色土の混合土を用いて構築している。燃焼部は床面を20~30cm掘り込んで構築しており、焼土も底面上約10cm堆積している。煙道部は半楕円形に掘り込み、約50°の角度をもって立ち上がる。

最大46cmを測り、ほぼ垂直に近い状態で立ち上がっていく。床面は黄褐色土を床面としているが、堅固な面は確認できず、また壁溝の存在を確認するため床面の精査をおこなったが、壁溝は確認されなかった。ピットは計7個確認され、径20~90cm、深さ20~25cmを測る。このうち各コーナーに配されている4個のピットに関しては柱穴だと思われる。カマドなどの内部施設は確認されず、また焼土などの残跡もみられない。

遺物は住居址覆土中から若干数出土しているのみで、土師器および須恵器の細片が主であるため図示できるものはない。

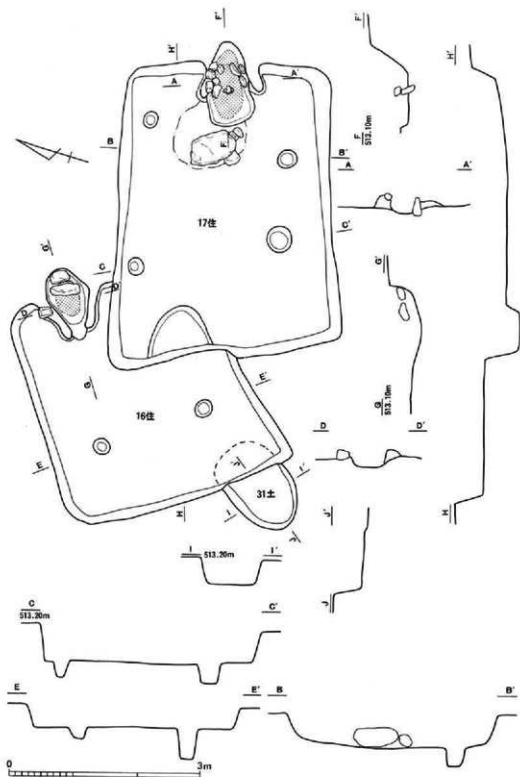
第15号住居址(第20・21図)

本住居址はA区E-3グリッドに位置しており、第12号住居址および第13号住居址とそれぞれ



第22図 第15号住居址出土遺物（1～8は1/4、9・10は1/2）

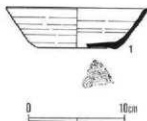
出土遺物は土師器・須恵器の破片資料が中心で、床面直上遺物は1点もなくすべて住居址覆土・カマド崩落土・貯蔵穴からの出土である。第22図1はカマド内出土の土師器坏である。底部は欠損している。推定口径11.8 cm、現高6.4 cm、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施している。色調は赤褐色を呈し、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。2は住居址覆土内出土のケズリ出し高台付きの坏である。底部は欠損している。推定口径16 cm、推定底径7.2 cm、現高5.2 cm、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後暗文を施しており、一部褐色面を残し黒色化している。外面は褐色を呈する。胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。3・4も土師器坏の口縁部～体部にかけての破片である。両者とも内外面はロクロナデ、4についてはヘラケズリがみられ、色調は3が赤褐色、4が褐色を呈する。両者とも胎土は黒色粒・白色粒を含み、焼成は良好である。5はカマド崩落土内出土の甕形土器の口縁部破片である。推定口径26.6 cm、内外面ともにヘケ調整で、色調は茶褐色を呈し、胎土は金



第23图 第16·17号住居址 (1/60)

雲母・小石をふくみ、焼成は普通である。6は貯蔵穴、7は住居址覆土出土の甕形土器の底部破片である。6は推定底径8.0cm、7は推定底径11cm、ともに内外面ハケ調整、底部に木炭痕を残す。胎土などは5に同じ。

鉄製品 9は北壁際床面上約10cmのところから出土した刀子で、茎部の一部を欠損している。現長10.7cm、身部長9.6cm、身部幅1.2cm、棟厚0.3cm、茎部幅0.8cm、茎部厚さ0.5cmを測る。10は9とはほぼ同じ位置で出土した刀子で、茎部のみを残す。現長4.6cm、茎部幅0.7cm、茎部厚さ0.3cmを測り、木質の遺着がみられる。



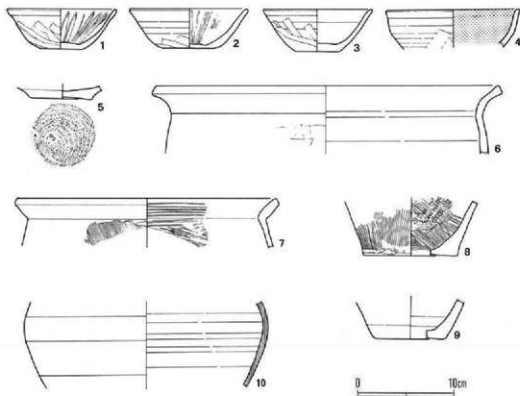
第24図 第16号住居址出土遺物

(1/4)

第16号住居址 (第23・24図)

本住居址はA区E-2グリッドに位置し、第17号住居址と第31号土壌と重複関係にある。第17号住居址と第31号土壌との新旧関係は、本住居址が第17号住居址と第31号土壌に切られていゝる。遺存状態は桑の根によりかなりの攪乱をうけており、良好とはいえない。主軸方位はN-54°-Eである。

規模は長軸3.6m、短軸3.5mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は西壁において最大42cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、とくに堅固な箇所はなく、全体に概して軟弱である。ピットは2個確認されており、おそらく



第25図 第17号住居址出土遺物 (1/4)

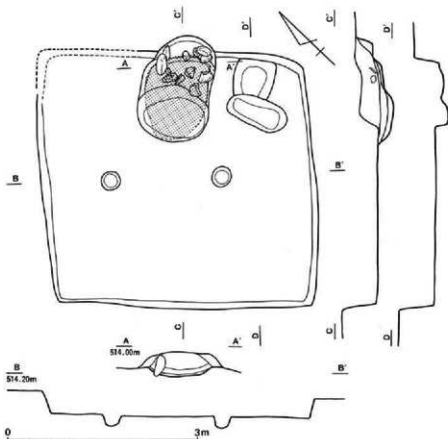
柱穴だと思われる。

カマドは東壁ほぼ中央に位置している。規模は長軸1.16m、短軸1.0mを測り、主軸方位はN-56°-Eである。燃焼部には天井石に用いたと思われる河原石が2個落ち込んでいる。袖部は両袖を遺存し、粘質の灰褐色土を主に用いて構築していたと思われる。また燃焼部は床面を約14cm掘り込んでおり、焼土がわずかにみられる。煙道部は半円形に掘り込み、約80°の角度をもって立ち上がる。

出土遺物は少ない。わずかに住居址覆土中から土師器片・須恵器片を出土したのみで、図示できたのは第16図1のみである。1は須恵器の坏で推定口径14.6cm、推定底径8.2cm、現高4.2cmを測る。内外面ともロクロナデ調整で、底部は回転糸切りである。色調は灰褐色を呈し、胎土は白色粒を含み、焼成は普通である。

第17号住居址（第23・25図）

本住居址はA区B-1・2グリッドに位置する。前述のとおり本住居址は第16号住居址と重複関係にあり、本住居址が第16号住居址を切って構築している。遺構の遺存状態は、住居址上部がやはり桑の根により攪乱をうけており、良好とはいえない。主軸方位はN-70°-Eである。



第26図 第19号住居址（1/60）

本住居址の規模は長軸4.76m、短軸3.7mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁において最大62cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認されていない。床面は基本的に黄褐色土を床面としているが、カマド周辺の堅固な部分のみ暗褐色土の貼床がみられた。あとは概して軟弱である。ピットは計4個確認され、径30~40cm、深さ30cmを測り、柱穴だと思われる。

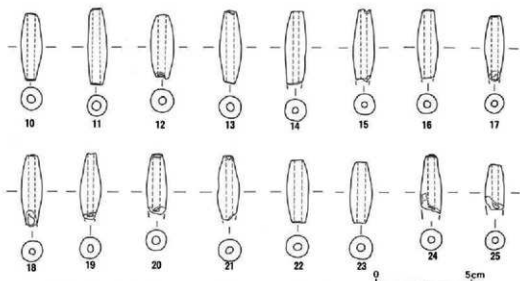
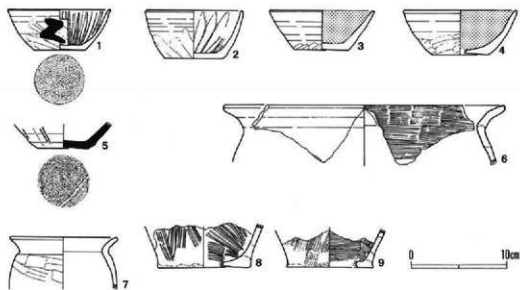
カマドは東壁ほぼ中央に位置している。規模は長軸1.32m、短軸1.1mを測り、主軸方位は、N-70° Eである。天井部はすでに崩落しており、両袖は粘質の灰褐色土と9個の袖石から構成されている。煙道部の掘り込みは浅いが、半円形掘り込み、約50°の角度をもって立ち上がる。焚き口部から燃焼部にかけては、床面を約10cm掘り込んでおり、築土も良好な状態で遺存し、また燃焼部奥部には石製支脚を据えている。

遺物の出土量はあまり多くはないが、カマド周辺部の床面付近からの出土が主である。第25図1はほぼ床面直上から出土した土師器の坏である。口径11.4cm、底径4.4cm、器高4.2cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施す。底部はヘラケズリ。色調は褐色、胎土は赤色粒を含み、焼成は良好。2はカマド崩落土内出土土師器の坏である。口径12.4cm、底径5.6cm、器高4.0cmを測り、調整などは1に同じである。3はほぼ床面直上出土の土師器坏。口径11.4cm、底径4.4cm、器高4.4cmを測り、内外面ともロクロナデだが外面は後にヘラケズリ。底部は回転糸切りの後周面をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土などは1・2に同じ。4は底部を欠損する内面黒色土器で、ほぼ床面直上から出土している。推定口径13.8cmを測り、色調は赤褐色を呈し、胎土などは1などと同じ。5は土師器坏の底部破片で、底径6.4cmをはかる。内面にタールの付着がみられる。底部は回転糸切り。6は覆土下層より出土の甕形土器の口縁部破片である。推定口径35.6cmを測り、外面はヘラナデ、内面はロクロナデ。色調は暗褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。7・8はカマド崩落土内出土甕形土器の口縁部と底部の破片である。7は推定口径26.8cmを測り、8は推定底径9.8cmを測る。内外面ともハケ調整で、8には木葉痕が残る。ともに暗褐色を呈し、白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。9は覆土下層出土の甕形土器底部破片である。推定底径7.6cmを測り、内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切りである。褐色を呈し、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好である。10はカマド崩落土内出土の灰釉陶器短頸壺胴部破片である。ロクロ水挽き成形で外面に淡緑色の釉がかかる。胎土は砂粒を含み緻密で灰白色を呈し、焼成は良好。

第19号住居址（第26・27図）

本住居址はA区G・II-5グリッドに位置している。本住居址北東側に第18号住居址、南側に10号獨立柱建物址が近接している。遺構の遺存状態は、桑の根と耕作による擾乱で北コーナー部分を失っているが、あとは比較的良好な状態を保っている。主軸方位はN-46°-Eである。

遺構の規模は長軸4.1m、短軸4.02mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南西壁において最大54cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はみられない。床面は暗褐色土を用いた貼床で堅固な面は確認されず、概して軟弱である。貼床を除去すると砂層が露出する。ピットは2個確認されており、径30cm、深さ20cmを測る。おそらく柱穴であろう。またカマドの南壁



第27図 第19号住居址出土遺物（1～9は1/4、10～25は1/2）

に深さ15～20cmの浅いピットがあるが、この内部および付近から遺物が集中的に出土していることから、このピットは貯蔵穴だと思われる。

カマドは北東壁ほぼ中央に位置する。主軸方位はN-50°-E。規模は長軸1.55m、短軸1.02mを測り、両袖部は6個の袖石を残すのみである。燃烧部は楕円形を呈し、煙道部は半円形に掘り込み、中位に段をもち、ほぼ垂直に立ち上がる。焼土は燃烧部から煙道部にかけておよそ5～8cmの厚さで堆積している。

遺物は住居址覆土、床面直上、貯蔵穴、カマド内から出土しており、完形資料には乏しいが、量的には豊富といえる。覆土上層から中層にかけて、かなりまとまった量の土鍾が出土してい

る。第27図1はほぼ断面直上より出土したほぼ完形の土師器環である。口径11.8 cm、底径5.2 cm、器高4.2 cmを測る。外面はロクロナデの後ヘラケズリ、底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。体部に「乙？」という墨書あり。2は覆土下層より出土土師器環である。口径10.2 cm、底径6.0 cm、器高5.0 cmを測る。内外面の成形などは1に同じ。底部は全面ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は精選され緻密、焼成は良好。3・4は内面黒色土器である。覆土下層より出土。3は口径11.2 cm、底径5.4 cm、器高4.1 cmを測る。外面はロクロナデの後ヘラケズリ。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は小石・白色粒を含み、全体に粗い。焼成は普通。4も成形以下3に同じ。5は覆土中層出土の須恵器環の底部破片である。底径5.4 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は良好。体部および底部外面に刻書がみられる。6はカマド内出土の甕形土器口縁部破片である。推定口径29.2 cmを測り、外面はヘラナデ、内面はハケ調整。色調は茶褐色、胎土は小石・白色粒を多量に含み、焼成は普通。7もカマド内出土の甕形土器口縁部から胴部上半部破片である。推定口径11.2 cmを測り、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの後ミガキをおこなっている。色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色、胎土は白色粒・雲母を多量に含み、焼成は良好。9・10は甕形土器の底部破片である。9は覆土中層より出土。推定底径9.6 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は褐色、胎土は白色粒・雲母を多量に含み、焼成は軟質。10は推定底径9.0 cmを測り、底部に木葉痕。色調、胎土、焼成は9に同じ。10から25は覆土上層から中層にかけて出土した土師である。以下、規模など表にして示す。

第1表 第19号住居址出土土師一覽表

図版 no.	現長 (mm)	幅 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	胎土	焼成	備考
no. 10	35	11	4.0	4.7	褐色	緻密	良好	完形
no. 11	40	11	4.5	4.9	黄褐色	緻密	良好	完形
no. 12	34	12	4.0	4.1	黄褐色	緻密	良好	一端欠損
no. 13	38	12	4.0	4.3	褐色	緻密	良好	ほぼ完形
no. 14	38	11	3.0	4.2	暗褐色	緻密	良好	一端欠損
no. 15	36	11	3.0	3.8	褐色	白色粒	良好	両端欠損
no. 16	36	10.5	3.5	3.5	褐色	緻密	良好	一端欠損
no. 17	34	10	3.5	3.5	褐色	緻密	良好	両端欠損
no. 18	37	11	3.0	4.3	黄褐色	緻密	良好	一端欠損
no. 19	35	11	3.0	3.4	黄褐色	白色粒	良好	一端欠損
no. 20	32	11	4.0	3.2	褐色	緻密	良好	一端欠損
no. 21	34	12	4.0	4.4	暗褐色	緻密	良好	一端欠損
no. 22	33	11.5	4.0	4.3	黄褐色	緻密	良好	完形
no. 23	32	12	4.0	3.5	黄褐色	白色粒	良好	完形
no. 24	31	11	3.5	3.1	褐色	白色粒	良好	3/4 残存
no. 25	24	10	3.5	2.4	褐色	緻密	良好	2/3 残存

第21号住居址（第28図）

本住居址はA区F・G-3グリッドに位置する。本住居址北東側に第4号掘立柱建物址が、南西側に第14号住居址が近接している。重複関係はない。遺構の遺存状態は桑の根により遺構上部が攪乱をうけており、良好な状態とはいえない。主軸方位は不明である。

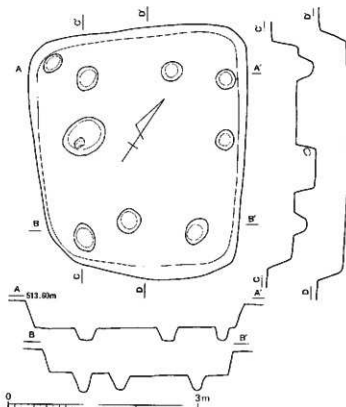
遺構の規模は長軸4.0m、短軸3.34mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は西壁において最大40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱な状態である。ピットは計9個確認され、径30~70cm、深さ20~30cmを測る。この内の4~6個は柱穴になると思われる。

遺物は極めて少ない。土師器・須臾器の細片がわずかに出土したのみで、図示できるような遺物はない。

第22号住居址（第29図）

本住居址はA区H-2グリッドに位置している。本住居址東側に第5号掘立柱建物址、南側に第20号住居址が近接している。重複関係はない。遺構の遺存状態は桑の根と耕作などにより攪乱をうけており、良好ではない。主軸方位は不明である。

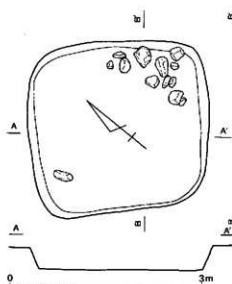
遺構の規模は長軸2.84m、短軸2.66mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北西壁において最大36cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、全体



第28図 第21号住居址（1/60）

に軟弱で、砂層が一部露出している箇所もみられる。

遺物はまったくなく、東コーナー付近において人頭大の礫が床面上数cmのレベルから出土しているのみである。

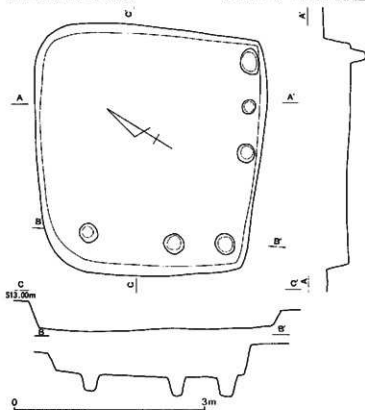


第29図 第22号住居址 (1/60)

第23号住居址 (第30・31図)

本住居址はA区E・F-2グリッドに位置している。本住居址東側には第16号住居址、南側には第3号掘立柱建物址が近接している。重複関係はない。遺構の遺存状態は桑の根と耕作などの擾乱を受け、良好ではない。主軸方位は不明である。

遺構の規模は長軸3.9m、短軸3.5mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁において最大42cmを測り、垂直に近い状態で立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、全体に軟弱である。ピットは計6個南壁と西壁に沿っ



第30図 第23号住居址 (1/60)



第31図 第23号住居址出土遺物(1/4)



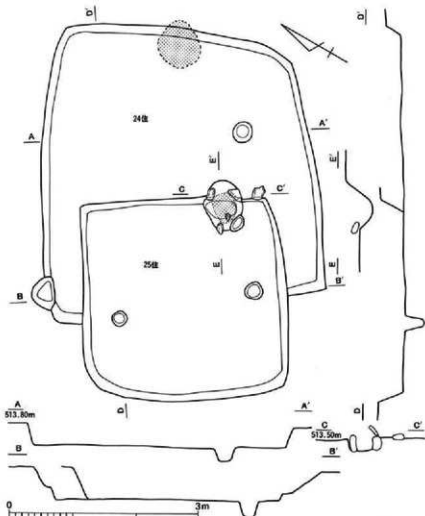
で確認されている。柱穴であるかどうかは不明である。

遺物は少なく、土師器、須恵器片がわずかに出土しているのみである。第31図1は覆

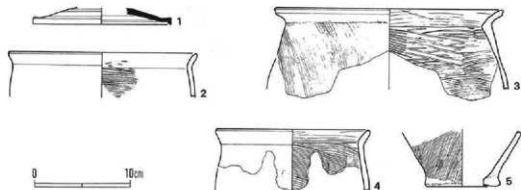
土中層より出土の土師器甕形土器底部破片である。推定底径8.8cmを測り、内外面ともハケ調整で、底部には木葉痕。色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。2は須恵器甕の底部破片である。覆土上層より出土。推定底径15.6cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は良好。

第24号住居址(第32・33図)

本住居址はA区G-1グリッドに位置している。本住居址は第25号住居址と第5号掘立柱建物址と重複関係にある。その新旧関係は、第25号住居址によって本住居址が切り込まれており、



第32図 第24・25号住居址(1/60)



第33図 第24・25号住居址出土遺物(1/4)

第5号掘立柱建物址を本住居址が切り込んでいる。遺構の遺存状態は、桑の根による攪乱がひどく、また耕作などによって砂層の一部が露出しているなど、極めて悪い状態である。主軸方位はN-55°-Eである。

遺構の規模は長軸4.7m、短軸4.34mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁で最大34cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、全体に軟弱で、砂層も一部露出しており確認しづらい。ピットは1個確認されており、径30cm、深さ20cmを測る。おそらく柱穴だろう。

焼土の散布が東壁の中央付近にみられる。本住居址の中でもこの周辺部の攪乱がもっともひどく、本来はカマドも設置されていたと思われる。焼土の範囲は径80cm×60cmで、楕円形状を呈する。

遺物は極めて少なく、住居址覆土から土師器、須恵器の破片をわずかに出土したのみである。第33図1は須恵器蓋で推定口径14.4cm、推定天井径6.6cm、現高1.7cmを測る。内外面ともクロロナデ、天井部は回転ヘラケズリ。生焼けの状態で色調は茶褐色、胎土は白色粒を含むが緻密。2は土師器甕形土器の口縁部破片である。推定口径19.6cmを測り、外面は2次焼成をうけ剥落が激しい。内面はハケ調整。色調は暗褐色、胎土は黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

第25号住居址(第32・33図)

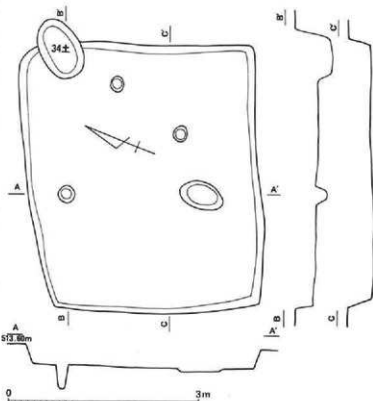
本住居址はA区G-1・2グリッドに位置している。本住居址北西側に第5号掘立柱建物址が、南側に第35～38号土壌の土壌群が近接する。前述のとおり第24号住居址と重複関係にあり、本住居址が第24号住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、第24号住居址同様、桑の根による攪乱と耕作による削平がひどく、悪い状態である。主軸方位はN-55°-Eである。

遺構の規模は長軸3.2m、短軸3.0mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁で最大52cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。床面のレベルは第24号住居址の床面とほぼ同一レベルである。ピットは2個確認されており、径25～30cm、深さ25～30cmを測り、その位置関係などから柱穴だと思われる。

カマドは東壁の東コーナー寄りに位置している。規模は長軸0.8m、短軸0.62mを測り、主

軸方位はN-55°-Eである。天井部は崩落しており、袖部は芯である袖石を遺存し、袖石を崩れたと思われる掘り方も確認されている。燃烧部は楕円形に床面を掘り込んでおり、深さ18cmを測る。煙道部は半円形に掘り込んでおり、約45°の角度で立ち上がる。

遺物はカマドを中心に出土しているがその量は少ない。第33図3は住居址覆土下層より出土の甕形土器である。推定口径23.6cmを測り、内外面ともハケ調整。



第34図 第26号住居址 (1/60)

色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。4はカマド内出土の甕形土器口縁部破片である。推定口径16.0cmを測り、外面は2次焼成をうけ剥落が激しい。内面はハケ調整。色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。5もカマド内出土の甕形土器底部破片である。推定底径7.6cmを測り、外面はハケ調整、内面は剥落が激しいがヘラケズリと思われる。色調以下は4に同じ。

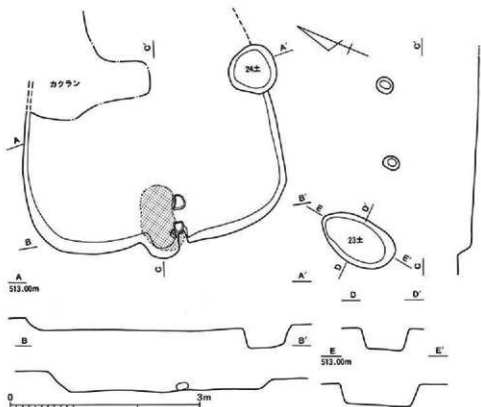


第35図 第26号住居址出土遺物 (1/4)

第26号住居址 (第34・35図)

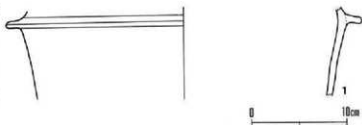
本住居址はA区F・G-2グリッドに位置している。本住居址東側に第2号住居址が、西側に第4号掘立柱建物址が近接している。本住居址は第34号土塼と重複関係にあり、第34号土塼が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、覆土上層が桑の根による攪乱をひどくうけており、良好とはいえない。主軸方位は不明である。

遺構の規模は長軸4.14m、短軸3.6mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は西壁高で最大36cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットは計4個確認されており、径25~70cm、深さ5~20cmを測る。柱穴かどうかは不明である。またカマドなどの内部施設は確認されなかった。



第36図 第27号住居址 (1/60)

遺物は極めて少なく、土師器片が少量出土したのみである。第35図1は覆土上層より出土の羽釜の破片である。推定口径26.2cmを測り、内外面ともハケ調整。



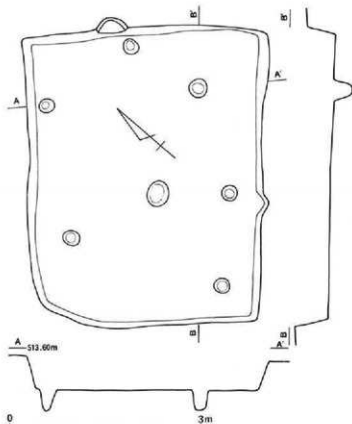
第37図 第27号住居址出土遺物 (1/4)

銕およびその周辺はヘラナデ。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黑色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

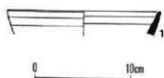
第27号住居址 (第36・37図)

本住居址はA区C-1グリッドに位置している。本住居址は試掘調査時に確認されていたもので、木の根の抜根や耕作などにより住居址東側の約3分の1は、攪乱や削平をうけ失っており遺存状態は良好ではない。また本住居址南側には第23号土壌が近接し、南壁において第24号土壌と重複関係にあり、本住居址が土壌に切り込まれている。主軸方位はN-123°-Wである。

遺構の規模は現存で長軸4.12m、短軸2.5mを測り、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。壁高は北壁で最大18cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は砂層上に黄褐色土粒混じりの黒褐



第38図 第28号住居址 (1/60)



第39図 第28号住居址出土遺物

(1/4)

本住居址はA区F-4グリッドに位置している。本住居址東側に第43・44号土構が、南東側に第1・31号住居址が近接している。遺構の遺存状態は覆土上層が桑の根の攪乱をうけているが、比較的良好な状態を保っている。主軸方位は不明である。

遺構の規模は長軸4.62m、短軸3.84mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は南西壁で最大52cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に概して軟弱である。ピットは計7個確認されており、径25~40cm、深さ25~36cmを測る。柱穴になるかどうかは不明である。カマドなどの内部施設は確認されていない。

遺物は少ない。住居址覆土中よりわずかに土師器片、須恵器片を出土したのみである。第39図1は須恵器環の口縁部破片である。推定口径16.0cmを測り、内外面ともロクロナデ、色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

第29号住居址 (第40・41図)

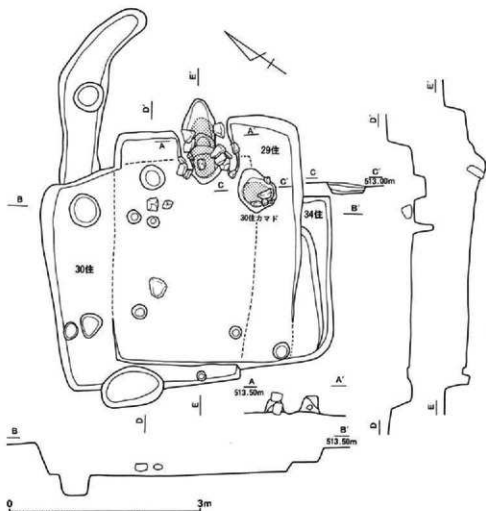
色土で貼床を施しているが、特に堅固な面は認められない。壁溝およびピットなどは確認されていない。

カマドは西壁のほぼ中央に位置している。規模は推定長軸1.2m、短軸0.8mを測り、主軸方位はN-120°-Wである。遺存状態は極めて悪く、左軸の抽石3個と粘土をわずかに残すのみ。焼土は散布しているのみで、燃焼部の屈り方はみられない。煙道部は半円形に掘り込まれ、緩やかに立ち上がる。

遺物は少なく、わずかにカマド内より出土したのみである。第37図1はカマド内出土の羽釜の胴部破片である。

推定径径37.0cmを測り、胴部内外面及び鏝はヘラナデを施す。色調は茶褐色、胎土は小石・白色粒・金雲母を多量に含み粗い。焼成は普通。

第28号住居址 (第38・39図)

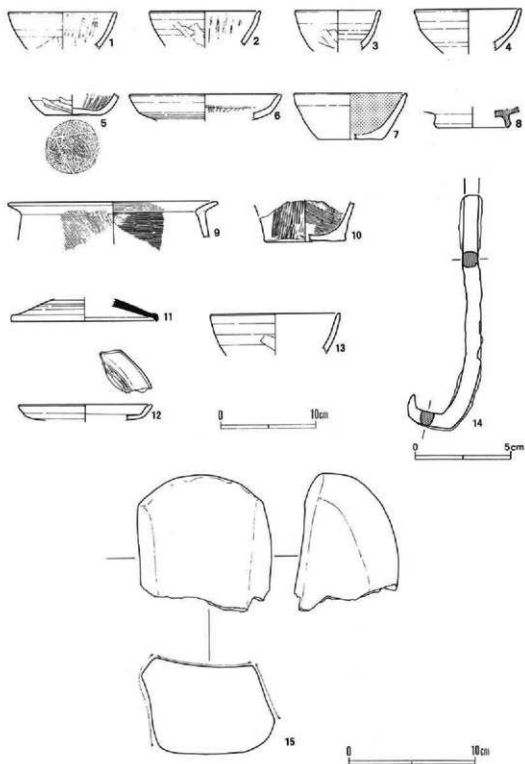


第40図 第29・30～34住居址 (1/60)

本住居址はA区E-5グリッドに位置している。本住居址北側に第8号掘立柱建物址が近接し、第30・34住居址と重複関係にある。その新旧関係は本住居址が第30・34号両住居址を切り込んで構築しており、新しい順に第29号住居址→第30号住居址→第34号住居址である。遺構の遺存状態は比較的良好で、一部桑の根の攪乱をうけているのみである。主軸方位はN-54°-Eである。

遺構の規模は長軸3.98m、短軸2.9mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は東壁で最大40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺の一部が堅固なのを除き、あとは概して軟弱である。ピットは計6個確認されており、径20～40cm、深さ20～30cmを測る。柱穴かどうかは不明である。

カマドは東壁はほぼ中央に位置している。規模は長軸1.34m、短軸0.96mを測り、主軸方位はN-52°-E。天井部はすでに崩落しており、袖部は粘質の灰褐色土と袖石から構成されている。燃焼部は楕円形を呈し、床面を15cmほど掘り込んでおり、石製支脚を据えている。煙道部



第41图 第29・30・34住居址出土遺物（1～13は1/4、14は1/2、15は1/3）

はU字形に掘り込まれ、中位に段部をもち、ほぼ垂直に立ち上がる。壁土は燃焼部から煙道部にかけて厚さ2～5cmでみられる。

遺物は住居址覆土およびカマド内より出土している。とくにカマド南西側の覆土下層からの出土が目立つ。第41図1は覆土中層出土の土師器杯である。推定口径11.4cmを測り、外面はロクロナデ後ヘラケズリ、内面はロクロナデ後暗文を施す。色調は明褐色、胎土は赤色粒・白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。2はほぼ床面直上出土の土師器杯。推定口径11.6cm、調整は1に同じで、色調は褐色を呈する。3は覆土下層出土の土師器杯。推定口径9.0cmを測り、外面はロクロナデ後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。色調は褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。4はほぼ床面直上出土の土師器杯。推定口径11.4cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。5はカマド内出土の土師器杯の底部破片である。底径5.7cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は回転糸切り後、周囲をヘラケズリ。色調は褐色、胎土は赤色粒を含み、焼成は良好。6はカマド内出土の土師器皿である。推定口径15.8cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデ後暗文を施す。色調は赤褐色、白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。7は覆土中層出土の内面黒色土器の杯である。推定口径11.8cm、推定底径6.6cm、現高4.8cmを測る。外面はロクロナデ後ヘラケズリ、内面は黒色処理を施しミガキをおこなっている。色調は褐色、胎土は小石・白色粒を含み少々粗い。焼成は良好。8は覆土中層出土の灰釉陶器碗の高台部破片である。推定高台径7.2cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形で底部は不明。色調は灰白色、胎土は砂粒を含み緻密で、焼成は良好。9はカマド内出土の土師器甕である。推定口径21.6cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は暗茶褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。10はほぼ床面直上出土の土師器甕の底部破片である。推定底径8.4cmを測り、内外面ともハケ調整。底部は木葉痕を残す。色調は暗茶褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。15は覆土下層出土砥石である。現長10.0cm、幅9.6cm、厚さ7.5cmを測る。背面を除く三面を使用し、磨耗し彎曲している。石材は玄武岩製である。

鉄製品 14は覆土下層出土の用途不明鉄器である。頭部は欠損しており、現長12.1cm、0.8×0.8cm角の隅丸の方形断面をもつ。先端は釣針状を呈しており、錆のため全体に膨張している。

第30号住居址（第40・41図）

本住居址はA区R-5グリッドに位置している。前述のとおり本住居址は第29・34号両住居址と重複関係にあり、第29号住居址に切り込まれ、第34号住居址を切り込んでいる。遺構の規模は長軸3.3m、短軸2.7mを測り、平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。壁高は北壁において最大50cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットは計4個確認されており、径15～50cm、深さ12～30cmを測るが、柱穴なのかは不明である。遺構の主軸方位はN-143°-Eである。

カマドは南壁の南東コーナー寄りに位置すると思われる、かろうじて燃焼部の掘り方のみを遺存している。第29号住居址の床面調査時に焼土の散布が認められ、径70cm×60cm、深さ15cmを

測り、楕円形を呈する。主軸方位はN-145°-Eである。

遺物はすべて住居址覆土から出土している。第41図11は須恵器蓋である。推定口径15.2 cm、推定大径7.2 cmを測り、内外面ともクロコナデ、大井部は回転ヘラケズリ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は良好。12は土師器皿である。推定口径14.0 cmを測り、外面はクロコナデの後、底部周辺を回転ヘラケズリ、内面はクロコナデの後、暗文を施している。色調は褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。

第34号住居址（第40・41図）

本住居址はA区E-5グリッドに位置している。第29・30号両住居址と重複関係にあるが、その新旧関係についてはすでに述べたとおりである。遺構の遺存状態は、南壁から東西両壁の一部が遺存するのみで、遺構の全容は不明。南壁の長さは2.6 mを測り、壁高は22 cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、軟弱である。また、カマドの痕跡とみられるような焼土は確認されていない。主軸方位は不明である。

遺物は住居址覆土中より1点のみ出土しているが、第29号住居址南壁と本住居址東壁の接点付近の出土で、もしかしたら第29号住居址に伴うものかもしれない。第41図13がそれである。土師器杯で、推定口径13.4 cmを測り、外面はクロコナデの後ヘラケズリ、内面はクロコナデの後ミガキを施している。色調は褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好である。

第35号住居址（第42・43図）

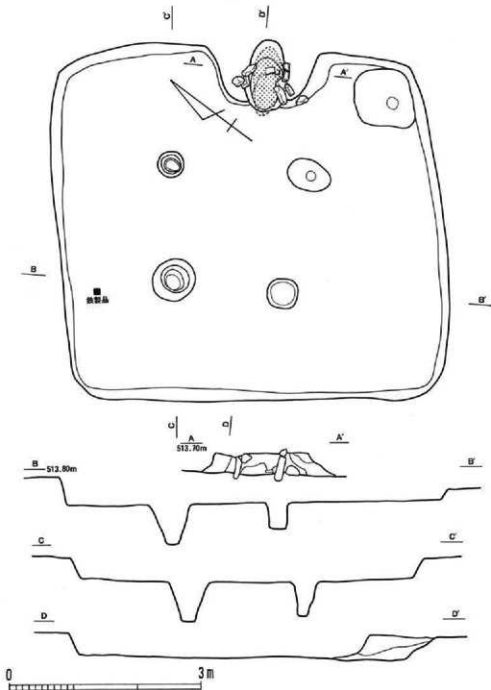
本住居址はA区調査区南西端のD-7グリッドに位置している。本住居址西側には第17号掘立柱建物址が近接しているが、重複関係はない。遺構の遺存状態は、遺構の上部が後世の耕作により削平をかなりうけ壁を相当失っているが、まずまずの状態を保っているといえる。主軸方位はN 55°-Eである。

遺構の規模は長軸6.10 m、短軸5.68 mを測り、本遺跡の住居址の中でも人形の部屋に入る。平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北西壁において最大44 cmを測り、全体的にやや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、壁際の一部を除き全体に堅固である。ピットは計4個確認されており、径40~70 cm、深さ42~62 cmを測る。おそらく主柱穴であろう。また東コーナー壁下に径90×90 cm、深さ20 cm程度の浅い落ち込みがあるが、これはおそらく貯蔵穴だと思われる。

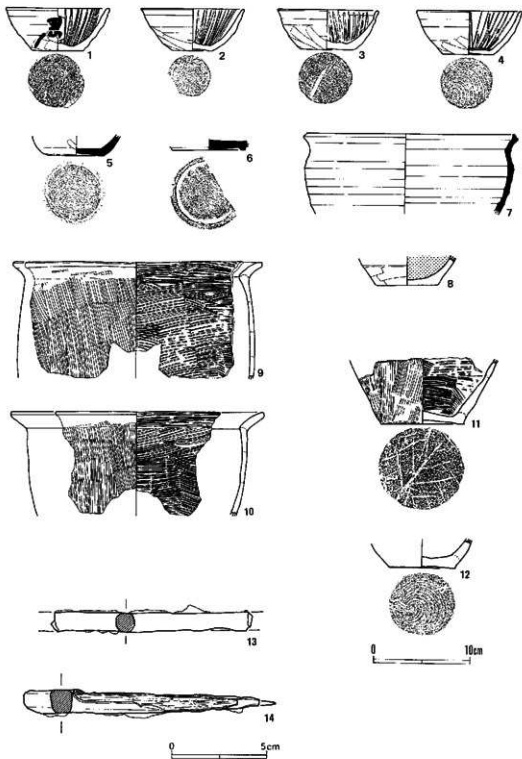
カマドは東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸1.50 m、短軸1.12 mを測り、主軸方位はN 58° Eである。天井部はすでに崩落しており、袖部は袖石と暗褐色土・黄褐色土・粘質の灰褐色土を混ぜた補強材から構成されている。燃焼部は床面をわずかに掘り込んでおり、焼土が顕著である。煙道部は半円形に掘り込んでおり、約30°の角度で立ち上がっている。

遺物の出土量は比較的多い。土師器、須恵器が主体だが、鉄製品2点と鉄滓も数点出土している。土師器は杯・甕、須恵器も杯・甕などがみられ、住居址覆土や床面直上、カマド内より出土している。第43図11は覆土下層出土の土師器杯である。推定口径10.8 cm、底径5.6 cm、器高4.4 cmを測り、外面はクロコナデの後ヘラケズリ、内面はクロコナデの後暗文を施している。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。体部に墨書がみられる。「忍」か。色調は赤褐色、

胎土は赤色粒・白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。2は床面直上出土の土師器杯の完形。口径10.4cm、底径4.1cm、器高4.3cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施している。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。3も床面直上より出土の土師器杯である。ほぼ



第42図 第35号住居址 (1/60)



第43図 第35号住居址出土遺物（1～12は1/4、13・14は1/2）

完形。口径10.4 cm、底径5.5 cm、器高4.1 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施している。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。4も床面直上出土の土師器坏で、3分の1残存。推定口径11.0 cm、底径5.2 cm、器高4.5 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施している。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は明赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。5は覆土下層出土の須恵器坏の底部破片である。底径5.8 cmを測り、内外面ともロクロナデであるが、外面に一部ヘラケズリがみられる。底部は回転糸切り。色調は灰白色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成はやや軟質。6も覆土下層出土の須恵器坏の高台部破片である。底径7.5 cmを測り、底部は回転糸切りの後回転ヘラケズリ。高台は貼付。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。7は覆土下層出土の須恵器坏の口縁部破片である。推定口径22.2 cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は良好。8は覆土下層出土の内面黒色土器坏底部破片である。底径6.0 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面は黒色処理の後ミガキ。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は小石・白色粒を含み少々粗い。焼成は良好。9はカマド内出土の土師器甕口縁部から胴部上半部の破片である。推定口径25.6 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が褐色、内面が赤褐色を呈し、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。10もカマド内出土の土師器甕口縁部から胴部上半部の破片である。内外面ともハケ調整。色調は内外面とも赤褐色、胎土は小石・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。11は床面直上出土の土師器甕の底部破片である。底径8.5 cmを測り、内外面ともハケ調整で、外面は2次焼成をうけてもろい。底部には木葉痕。色調は外面が茶褐色、内面が赤褐色を呈し、焼成は普通。12はほぼ床面直上出土の土師器甕底部破片である。底径6.5 cmを測り、器面は剥落が激しいが、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切りの後縁辺部のみヘラケズリ。色調は2次焼成をうけ赤褐色、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は良好。

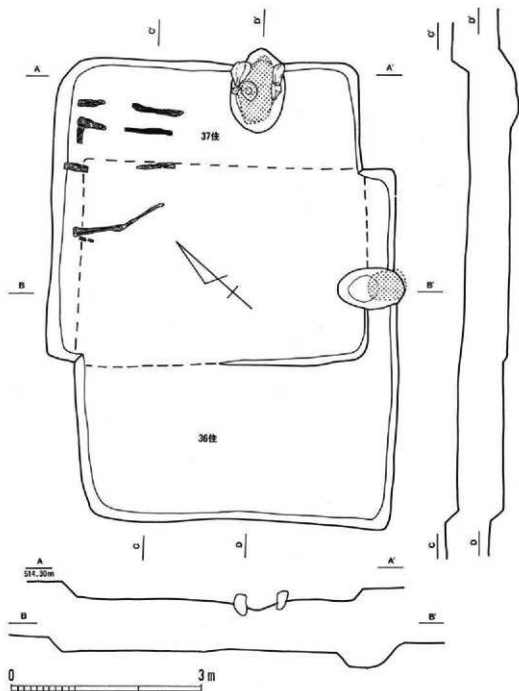
鉄製品 13は床面直上出土の用途不明棒状鉄製品で両端を欠いている。現長10.3 cm、中央部にて1.0×1.0 cmの厚さを測り、断面は楕円形を呈する。14は覆土下層出土の用途不明棒状鉄製品である。両端を欠いており、現長12.3 cmを測り、先端部において1.2×1.1 cmの方形断面をもつ。尾端にいくにしたがって細くなっており、木質の遺着がみられる。刀子の基部であろうか。

第36号住居址（第44・45図）

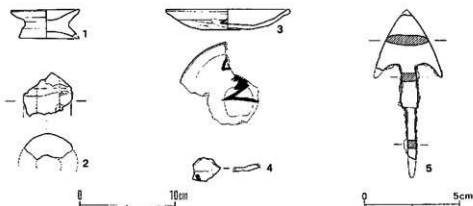
本住居址はB区S-5・6グリッドに位置している。本住居址北西側に第40号住居址が、南西側に第39号住居址が近接し、第37号住居址と重複関係にある。その新旧関係は、本住居址が第37号住居址を貼って構築している。遺構の遺存状態は、床面まで一部系の根の復乱をうけており、良好ではない。主軸方位はN-138°-Eである。

遺構の規模は長軸5.68 m、短軸5.12 mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南西壁で最大20 cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、状態は悪く、桑の根が床面までおよんでいる。全体に軟弱で掘えにくい。壁溝、柱穴などはみられない。

カマドは南東壁の東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.05m、短軸0.64mを測り、主軸方位はN-137°-Eである。天井部・袖部は遺存していない。燃焼部は床面を約20cm掘り込んでおり、楕円形を呈する。煙道部は半円形を呈し、約45°の角度で立ち上がっている。焼土は燃焼部から煙道部にかけて顕著である。



第44図 第36・37住居址 (1/60)



第45図 第36・37号住居址出土遺物（1～4は1/4、5は1/2）

遺物は少なく、住居址覆土中と床面直上から数点出土しているのみである。第45図1は床面直上出土の高台付き環である。高台の一部は欠損している。口径7.8cm、現高2.6cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は暗褐色を呈し、胎土は金雲母を多量に含み、焼成は良好。2も床面直上出土羽口の先端部破片である。破片であるので規模などは不明であるが、溶解鉄が付着し、2次焼成をうけ灰褐色化している。胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は普通。

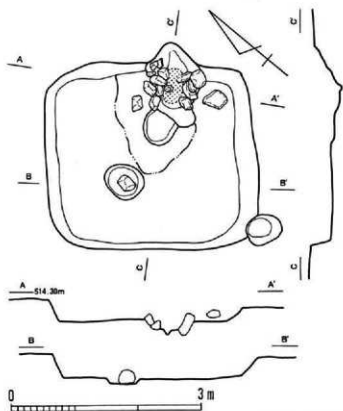
第37号住居址（第44・45図）

本住居址はB区S・T-5・6グリッドに位置している。本住居址西側に第40号住居址が近接しており、前述のとおり第36号住居址と重複関係にある。新旧関係は本住居址が第36号住居址に切られている。遺構の遺存状態は第36号住居址と同じく、桑の根の擾乱が激しく、良好な状態とはいえない。主軸方位はN 50° -Eである。

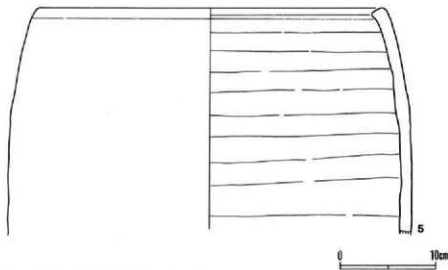
遺構の規模は長軸4.86m、短軸4.76mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北東壁で最大24cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、全体に軟弱である。ピットおよび壁溝は確認されていない。

カマドは北東壁の中央からやや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.34m、短軸0.86mを測り、主軸方位はN-50° -Eである。天井部はすでに崩落し、袖部は芯である袖石のみ遺存する。また袖石を据えたと思われる小ピットが燃焼部内にみられる。燃焼部は床面を約10cm掘り込んでおり楕円形を呈する。煙道部は半円形に掘り込み、約35°の角度で立ち上がる。焼土は、燃焼部から煙道部にかけて顕著である。

本住居址の出土遺物は少ない。住居址覆土下層より細片を主とする土師器片と鉄鏃1点を出土したのみである。また、北西壁下より炭化した丸太材が床面上わずかに浮いた状態で出土しており、ほかに焼土などの痕跡はないが、本住居址は火災をうけている可能性がある。第45図3は土師器皿で、推定口径13.0cm、底径3.6cm、器高2.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部はヘラケズリ。体部から底部にかけて「シ」という墨書がみられる。この墨書は後述する第42号住居址などから多量に出土している。意味はよく理解できない。色調は明褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。4も墨書土器の破片



第46图 第38号住居址 (1/60)



第47图 第38号住居址出土遺物 (1/4)

であるが判読不可能。5は短期隆被脇挟両丸造正三角形式鎌ではぼ保存する。現長8.5cm、根部長3.3cm、同幅3.6cm、同厚さ0.5cmを測り、脇挟をもつ。穂披の長さは2.3cmを測り、厚さ0.8×0.4cmの方形断面をもち、茎部の長さは現長で2.7cmを測り、厚さ0.4×0.4cmの方形断面をもつ。脇挟は比較的発達している。

第38号住居址（第46・47図）

本住居址はB区Q-8グリッドに位置している。本住居址北西側には第31号獨立柱建物址が近接している。遺構の遺存状態は本住居址南東壁側が、耕作などにより一部削平され浅くなっているが、全体としてはまずまずの遺存状態を保っている。主軸方位はN-50°-Eである。

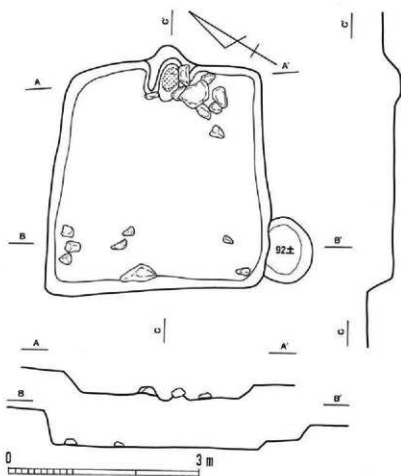
遺構の規模は長軸3.36m、短軸3.28mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。畝高は北西壁で最大40cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部のみ堅固で、あとは概して軟弱である。ピットは1個確認されている。径60cmを測り、楕円形を呈するが、柱穴だとは思われない。壁溝はみられない。

カマドは北東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸1.34m、短軸0.96mを測り、主軸方位はN-45°-Eである。天井部はすでに崩落している。袖部には芯として用いられた袖石がみられ、一部補強材として用いられた粘質の灰褐色土も遺存している。燃焼部は床面を約10cm掘り込んでおり、同部奥部に支脚を据えたと思われる径10cmほどの小ピットがみられ、焼土も顕著である。煙道部は半円形に掘り込み、約34°の角度をもって立ち上がる。燃焼部前の深さ5cmほどの浅い掘り込みは焚き口だと思われる。

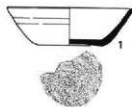
遺物は少なく、ほとんどが破片資料である。住居址覆土およびカマド内より出土している。第47図1は覆土中層出土の上脚器環口縁部破片である。推定口径11.5cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施している。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。2はほぼ床面直上出土の土師器皿である。約3分の1残存。推定口径15.0cm、推定底径8.0cm、器高2.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。色調は明褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。3は覆土中層出土の須恵器環の底部破片。推定底径5.2cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。4はカマド内出土の土師器甕底部破片である。推定底径9.0cmを測り、外面は2次焼成をうけ剥落が著しいがハケ調整で、内面も同じ。底部には木炭痕。色調は暗茶褐色、胎土は黒色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は普通。5は置きカマド側面部の破片と思われる。推定上端部径35.7cm、現高23cmを測り、内外面ともヘラナデ。内面は一部黒色化している。色調は明褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

第39号住居址（第48・49図）

本住居址はB区R・S-6グリッドに位置している。本住居址北側には第40号住居址が、北東側には第36号住居址が近接し、第92号土壇と重複関係にある。その新旧関係は本住居址が第92号土壇を切って構築している。遺構の遺存状態は、遺構北東側を耕作などにより削平されている。主軸方位はN-60°-Eである。



第48図 第39号住居址 (1/60)



第49図 第39号住居址
出土遺物 (1/4)

1

0 10cm

遺構の規模は長軸3.85m、短軸3.28mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北西壁で最大52cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部のみ堅固で、あとは概して軟弱である。壁溝・ピットなどは確認されていない。

カマドは北東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸0.88m、短軸0.70mを測り、主軸方位はN-65°-Eである。天井部はすでに崩落しているが、その天井石に用いたと思われる平石が右袖部先端にみられる。袖部は芯である袖土と補強材である粘質の灰褐色土から構成されている。燃焼部は床面を約10cm掘り込んでおり、楕円形を呈する。煙道部は半円形に掘り込み、約45°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部から煙道部にかけて顕著である。

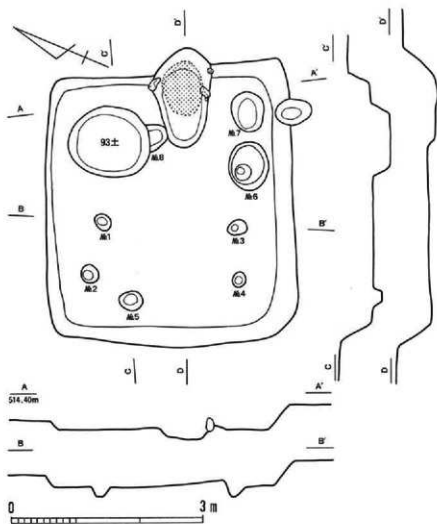
遺物は極めて少ない。住居址覆土中より土師器、須恵器の細片をわずかと、南西壁下の床面直上より須恵器環が1点出土しているのみである。第49図1がそれである。約2分の1程度残存

している。口径12.8 cm、底径6.8 cm、器高3.9 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は基本的には灰褐色であるが、外面上半が灰茶褐色化している。胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

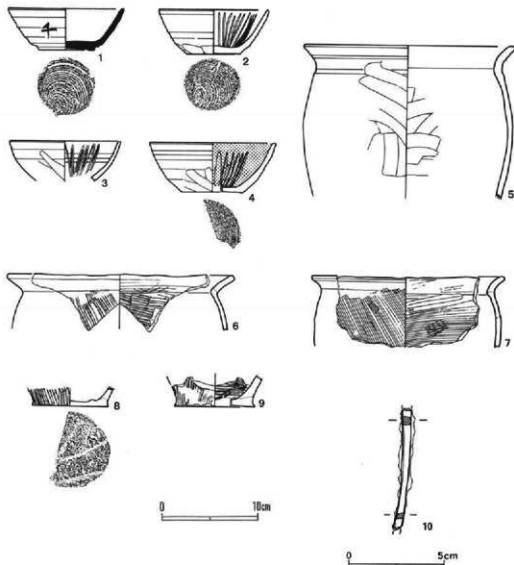
第40号住居址 (第50・51図)

本住居址はB区R・S-5グリッドに位置している。本住居址北側に第42号住居址が、東側に第36・37号住居址が近接しており、第93号土壇と重複関係にある。その新旧関係は第93号土壇に本住居址が切り込まれている。遺構の遺存状態は住居址北西部分が、耕作などで遺構上部を削平され、所々桑の根が覆土中に入り込んではいるが、まづまづの状態を保っている。主軸方位はN-61°-Eである。

遺構の規模は長軸4.71 m、短軸3.82 mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は西壁で最大50 cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は所々に黒褐色土の貼床がみられるが、全体に軟弱



第50図 第40号住居址 (1/60)



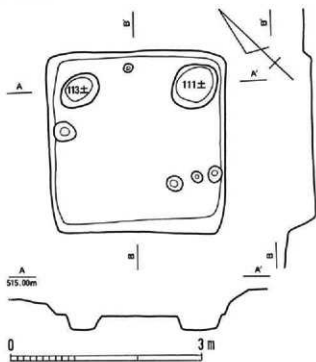
第51図 第40号住居址出土遺物（1～9は1/4、10は1/2）

で、貼床下は砂層である。ピットは計8個確認されている。径20～70cm、深さ15～30cmを測り、No 1～No 4は柱穴になると思われる。No 6ピットからは破片ではあるが遺物の出土が多く、貯蔵穴だと思われる。

カマドは東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸1.07m、短軸0.97mを測り、主軸方位はN-67°-Eである。天井部はすでに崩落しており、袖部も芯である袖石をわずかに残すのみである。燃焼部は楕円形を呈し、床面を約10cm掘り込んでいる。煙道部は半円形に掘り込み約45°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部から煙道部にかけて顕著である。

遺物は住居址覆土、床面直上、貯蔵穴、カマド内より出土しており、主にカマド周辺の床面数cm上からの出土が多い。土師器、須恵器を中心として、鉄製品も1点出土している。第51図1は南壁の中央部壁下のほぼ床面直上より出土の須恵器坏である。ほぼ完形。口径12.1cm、底径

5.7 cm、器高4.3 cmを測り、内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切りである。外面体部に「千」という墨書がみられる。色調は灰褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は普通。2はカマド右袖脇のほぼ床面直上出土の土師器坏である。ほぼ完形。口径11.3 cm、底径5.3 cm、器高4.6 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施している。底部は回転糸切りで、わずかに周辺をヘラケズリをしている。3は覆土下層出土の土師器坏である。推定口径11.6 cmを測り、内外面の調整は2に同じ。色調は暗褐色、胎土は黒色粒を含み、焼成は良好。4は貯蔵穴出土の内面黒色土器である。推定口径13.0 cm、推定底径6.3 cm、器高5.2 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面は黒色処理を施し、ミガキと暗文を施している。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。5はカマド内出土の土師器甕である。推定口径21.8 cmを測り、内外面ともロクロナデの後ヘラケズリを施す。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は普通。6は覆土下層出土の土師器甕の口縁部破片である。推定口径23.4 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は暗褐色、胎土は白色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。7はカマド内出土の土師器甕口縁部破片である。推定口径20.0 cm測り、内外面ともハケ調整。色調は暗褐色、胎土は金雲母を含み、焼成は良好。8は貯蔵穴出土の土師器甕底部破片である。推定底径8.0 cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。9は覆土下層出土の土師器甕底部破片である。推定底径8.4 cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。



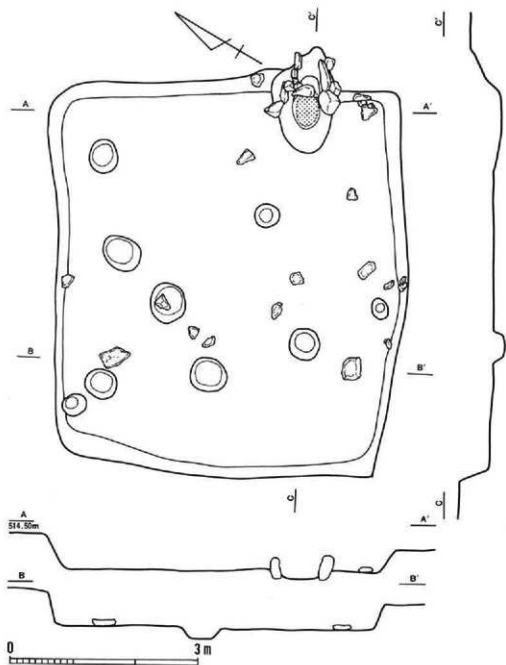
第52図 第41号住居址 (1/60)

鉄製品 10は覆土下層より出土の棒状鉄器である。現長6.3 cm、 0.4×0.4 cm角の方形断面をもつ。おそらく鐵か釘の茎部であろう。

第41号住居址 (第52図)

本住居址はB区Q-5・6グリッドに位置している。本住居址は第111・113号土壌と重複関係にあり、その新旧関係は本住居址が第111・113号両土壌を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、桑の根の攪乱が一部床面近くまでおよんでいるが、良い状態を保っている。主軸方位は不明。

遺構の規模は長軸2.88 m、短軸2.80 mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南西壁で最大42

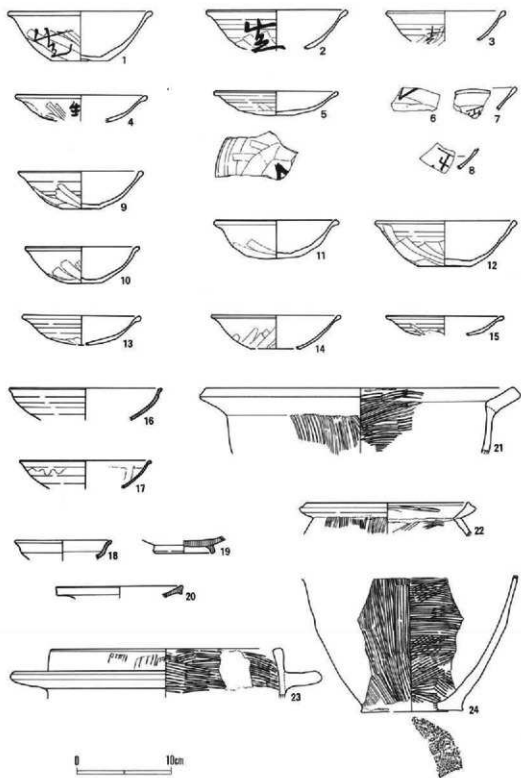


第53図 第42号住居址 (1/60)

cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットは計5個確認されており、径10~30 cm、深さ20~30 cmを測る。柱穴であるかどうかは不明である。カマドなどの内部施設はみられない。

遺物はほとんどなく、土師器、須恵器の細片をわずかに出土しているのみ。

第42号住居址 (第53・54図)






第54图 第42号住居址出土遗物(1/4)

本住居址はB区R・S-4・5グリッドに位置している。本住居址南側には第40号住居址が、北東側には第73号住居址が近接している。住居址全体にわたり桑の根の攪乱をうけており、床面、壁ともに確認が困難で、遺構の遺存状態はあまり良好ではない。主軸方位はN-60°-Eである。

遺構の規模は長軸6.84m、短軸5.60mを測り、本遺跡では大形の住居址である。平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁で最大60cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黒褐色土の貼床であるが、桑の根が床面までおよんでおり、堅固かつ明確ではない。ピットは計9個確認されており、径30~50cm、深さ15~25cmを測る。確認されているピットの配置などからすべてが柱穴だとは考えにくい。歌溝は確認されていない。

カマドは東壁中央よりやや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.70m、短軸1.10mを測り、主軸方位はN-60°-Eである。天井部はすでに崩落し、燃焼部に犬井石と思われる石が落ち込んでいる。袖部は总である袖石のみ残存している。燃焼部は床面を約10cm掘り込み、楕円形を呈する。煙道部は半円形に掘り込み、側壁に石を配している。中位に段差をもち約35°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物は住居址覆土中、床面直上、カマド内など住居址全体にわたって出土しているが、特にカマドの右袖脇と前面に集中しており、量的にも豊富である。土師器を中心に、灰釉陶器もみられる。金属器類は出土していない。第54図1は覆土下層出土土師器環である。ほぼ完形。口径14.9cm、底径5.9cm、器高5.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。体部外面に「」という墨書あり。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は白色粒・雲母粒を含み、焼成は良好。2はカマド脇床面直上出土の土師器環。4分の1残存。推定口径14.6cmを測り、内外面の調整は1に同じ。体部外面に「」という墨書あり。色調は褐色、胎土は白色粒・雲母粒を含み、焼成は良好。3は覆土下層出土土師器環。4分の1残存。推定口径12.2cmを測り、内外面の調整は1に同じ。体部外面に「」という墨書あり。色調は赤褐色、胎土は白色粒・雲母粒を含み、焼成は良好。4は覆土下層出土土師器皿。5分の1残存。推定口径13.4cmを測り、内外面の調整は1に同じ。体部外面に「生」という墨書あり。色調は褐色、胎土は雲母粒を多量に含み、焼成は良好。5は覆土下層出土土師器皿。6分の1残存。推定口径12.8cm、推定底径3.8cm、器高2.5cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部はヘラケズリ。底部外面に墨書の一部がみられるが、おそらく1などの墨書と同じだと思われる。色調は赤褐色、胎土は石英を含み、焼成は良好。6~8は墨書土器の破片である。6は1などと同じ墨書だと思われ、坏体部破片。7・8は坏口縁部および体部破片で、墨書の意味は不明。9は覆土下層は床面直上出土の土師器環。ほぼ完形。口径12.8cm、底径3.8cm、器高3.9cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。色調は明褐色、胎土は赤色粒・雲母粒を含み、焼成は良好。10も覆土下層は床面直上出土の土師器環。完形。口径11.8cm、底径4.2cm、器高3.8cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は全面ヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は赤色粒・雲母粒を含み、焼成は良好。11はカマド内出土の土師器環。4分の3残存。口径13.0cm、底径4.5cm、器高4.0cmを測り、内外面および底部の調整は10に同じ。色調は褐色、胎土は雲

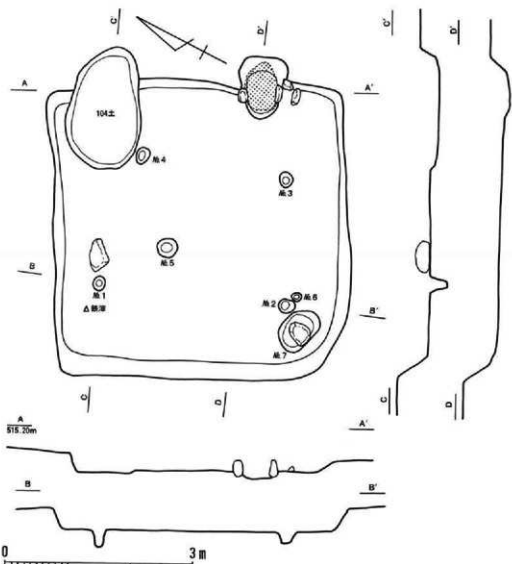
母を多量に含み、焼成は良好。12もカマド内出土の上師器杯。約2分の1残存。内外面および底部の調整は10に同じ。色調は褐色、胎土は赤色粒・雲母を含み、焼成は良好。13は覆土下層出土土師器杯。約4分の1残存。推定口径12.2cm、器高3.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。底部も全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は雲母を含み、焼成は良好。14は覆土中層出土土師器杯。約5分の1残存。推定口径13.2cm、推定底径5.1cm、器高3.5cmを測り、内外面および底部の調整は13に同じ。色調は暗褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。15は覆土下層出土土師器皿。5分の1残存。推定口径12.2cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。色調は明褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。16～20は灰軸陶器である。16は覆土上層土上の椀である。推定口径16.0cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。口縁部内外面および体部内面に灰軸をひと筆でハケがけし、軸調は淡緑色、色調は灰白色、胎土は緻密で、焼成は良好。17は覆土下層出土小碗である。推定口径13.8cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。灰軸は口縁部内外面にツケがけされており、軸調は淡緑色、色調は灰白色、胎土は緻密で、焼成は良好。18は覆土下層出土折縁皿である。推定口径10.1cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。灰軸はツケがけて、軸調は淡緑色、色調は灰白色、胎土は緻密で、焼成は良好。19は覆土下層出土の高台部破片である。高台径6.6cmを測り、底部は回転ヘラケズリ。高台の外面は穢がやや不明瞭で、内面はやや内彎している。灰軸はツケがけて、胎土などは18に同じ。20は覆土中層出土長頸瓶口縁部破片である。推定口径13.3cmを測り、ロクロ水挽き成形。軸調、胎土などは18に同じ。21はカマド竈床面直上出土の上師器甕口縁部破片である。推定口径32.0cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は内外面とも暗褐色、胎土は白色粒・小心・金雲母を含み、焼成は良好。22はカマド内出土土師器甕口縁部破片である。推定口径16.8cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。23はカマド内出土羽釜口縁部破片である。推定口径24.0cm、推定口径32.4cmを測り、外面はハケ調整の後ヘラナデ。内面はハケ調整。鏝はヘラナデ。色調は褐色、胎土は黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。24もカマド内出土で底部破片。推定底径10.8cmを測り、内外面ともハケ調整。底部は木葉痕。色調は褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

第43号住居址（第55・56図）

本住居址はB区Q-3グリッドに位置している。本住居址に近接する遺構はとくにないが、第104号土壌と重複関係にある。その新旧関係は、第104号土壌が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、床面の一部まで桑の根がおよんでおり、良好な状態とはいえない。主軸方位はN 62° Eである。


遺構の規模は長軸5.20m、短軸4.60mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は西壁で最大50cmを測り、全体に緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、桑の根がおよんでいる箇所もあり、全体に軟弱で、捉えにくい。ピットは計7個確認されており、径15～70cm、深さ20～30cmを測り、No 1～No 3ピットは柱穴だと思われる。

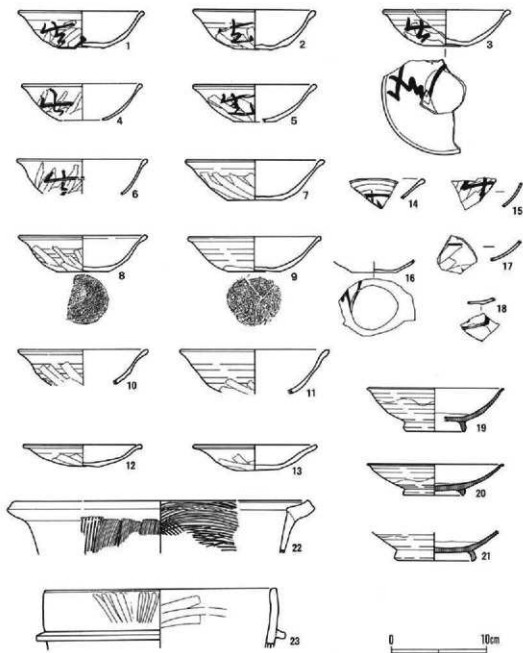
カマドは東壁の中央からやや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.00m、短軸0.78



第55図 第43号住居址 (1/60)

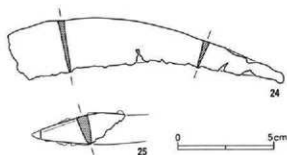
mを測り、主軸はN-68°-Eである。天井部はすでに崩落し、袖部は芯である袖石3個を残しているのみである。燃焼部は床面を約8cm掘り込んでおり、長楕円形を呈する。煙道部は半楕円形に掘り込み、約50°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部から煙道部にかけて顕著である。

遺物は土師器を中心に、灰釉陶器、楕形鉄滓、鉄製品などの出土がみられ、出土量も比較的豊富である。また本住居址は墨書土器が豊富に出土しており、記されている文字はすべて一文字で同一の内容である。第56図IIは東コーナー壁下のはば床面直上出土の土師器。ほぼ完全。口径13.1cm、底径4.8cm、器高3.8cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。体部から底部外面にかけて「」という墨書あり。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケ



第56図 第43号住居址出土遺物(1/4)

ズリ。色調は明褐色、胎土は黒色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。2はカマド前面のほば床面直上出土の土師器坏。ほぼ完形。口径12.2cm、底径3.6cm、器高4.1cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。体部外面に1と同様「志」という墨書あり。色調は明褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。3はカマド内出土土師器坏。3分の1残存。推定口径13.2cm、底径4.4cm、器高3.7cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。体部から底部外面にかけて1と同様「志」という墨書あり。色調は明褐色、胎土は黒色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。

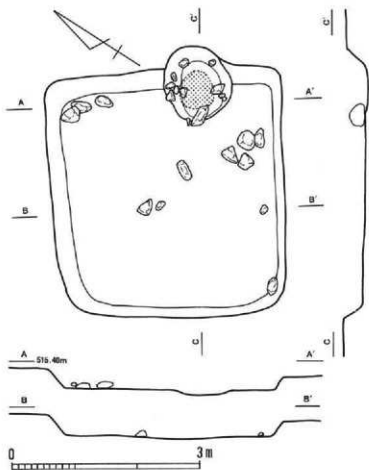


第57図 第43号住居址出土遺物(1/2)

4は東コーナー壁下のほぼ床面直上出土土師器環。約3分の1残存。推定口径12.8cm、推定底径4.7cm、器高3.9cmを測り、内外面の調整は1に同じ。体部外面に「ㄥ」という墨書がみられる。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒・雲母を含み、焼成は良好。5は覆土下層出土土師器環。約4分の1残存。推定口径12.8cm、推定底径4.4cm、器高3.9cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。体部に「ㄥ」という墨書あり。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒・雲母を含み、焼成は良好。6は覆土下層出土土師器環。推定口径13.6cmを測り、内外面の調整は1に同じ。体部外面に「ㄥ」という墨書あり。色調は明褐色、胎土は黒色粒・赤色粒・雲母を含み、焼成は良好。14~18も黒書土器である。14は覆土下層出土土師器口縁部破片。色調は赤褐色。15~17は覆土下層出土土師器体部破片と底部破片。色調はすべて明褐色。18はカマド前面のほぼ床面直上出土の土師器環。底径4.7cmを測り、色調は明褐色。14~18すべて「ㄥ」という墨書が記されている。7は南東壁下のほぼ床面直上出土の土師器環。ほぼ完形。口径14.2cm、底径5.7cm、器高4.2cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部は全面ヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は黒色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。8はカマド前面のほぼ床面直上出土の土師器環。約3分の1残存。推定口径13.4cm、推定底径5.3cm、器高3.8cmを測り、内外面の調整は7に同じ。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。9は南東壁下のほぼ床面直上出土土師器環。約3分の2残存。推定口径13.4cm、底径5.4cm、器高3.7cmを測り。内外面および底部の調整は8に同じ。色調は暗褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。10・11はカマド内出土の土師器環。10は推定口径13.5cmを測り、内外面の調整は7に同じ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。11は推定口径15.4cmを測り、内外面の調整は7に同じ。色調は暗褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。12は覆土下層出土土師器皿。約3分の2残存。推定口径12.4cm、底径3.0cm、器高2.2cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は黒色粒・雲母粒を含み、焼成は良好。13は南東壁下のほぼ床面直上出土土師器皿。完形。口径13.0cm、底径4.5cm、器高4.1cmを測り、内外面の調整は12に同じ。底部は全面ヘラケズリ。内面にススの付着がみられ、灯明皿であろう。色調は暗褐色、胎土は黒色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。19から21は灰軸陶器である。19は東コーナー壁際出土碗。約2分の1残存。推定口径14.8cm、高台径6.1cm、器高4.5cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形だが、体部下半外面はヘラケズリ。底部は回転ヘラケズリ。高台の断面形は三日月形。灰軸はツケかけ。軸調は淡緑色を呈し、色調は灰白色、胎土は緻密である。焼成は良好。20は南東壁際覆土下層出土皿。ほぼ完形。口径14.2cm、高台径6.2cm、器高3.2cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。底部は回転ヘラケズリ。器形は

若干イレギュラーしている。高台は外面を弧状にさせ、内面を外傾させている。灰軸はツケがけ。軸調、色調、胎土などは19に同じ。21はカマド前面のはば床面直上出土の椀高台部破片。高台径7.6 cm、現高3.0 cmを測り、外面はロクロ水挽きの後ヘラケズリ。内面はロクロ水挽き成形。底部は回転ヘラケズリの後ナデ。高台は稜が不明瞭で内面が外傾している。灰軸はツケがけ。軸調、色調、胎土などは19に同じ。22はカマド内出土の土師器甕口縁部破片である。推定口径30.6 cmを測り、内外面ともハケ調整。暗褐色を呈し、胎土は黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。23は覆土下層出土羽釜口縁部破片。推定口径24.0 cm、推定跨径26.0 cmを測り、内外面ともヘラケズリの後ナデ調整。色調は暗褐色、胎土は小石・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

鉄製品 鉄製品は2点出土しており、椀形鉄滓も床面直上より1点出土している。第57図24は覆土下層出土鉄である。先端部と基端部を欠損しており、現長14.4 cm、中位幅2.8 cm、厚さ0.1～0.3 cmを測る。刃部は内彎し、磨耗が著しい。25は覆土下層出土刀子の一部で、身部と思われる。現長4.3 cm、幅1.5 cm、棟厚0.6 cmを測る。



第58図 第44号住居址 (1/60)

第44号住居址 (第58・59図)

本住居址はB区P-3・4グリッドに位置している。遺構の遺存状態は、桑の根や耕作により床面まで攪乱をうけており、あまり良い状態ではない。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位はN-55° - Eである。



第59図 第44号住居址

遺構の規模は長軸4.34m、短軸3.76mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北西壁で最大36cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットや壁溝は確認されていない。

出土遺物 (1/4)

カマドは北東壁中央より、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.20m、短軸1.08mを測り、主軸方位はN-57° - Eである。天井部および両袖部はすでに遺存せず、燃焼部と煙道部の掘り方を遺存するのみである。燃焼部は床面を数m掘り込んで構築しており、楕円形を呈する。煙道部は半円形に掘り込み、約50°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物は少なく、土師器片をわずかに出土したにすぎない。第59図1は覆土下層出土内面黒色土器碗の高台部破片である。内外面ともロクロナデのち黒色処理を施し、ミガキを加えている。底部は回転ヘラケズリの後ナデ。高台は付高台で外面は外傾し、内面は内傾している。色調は黒褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

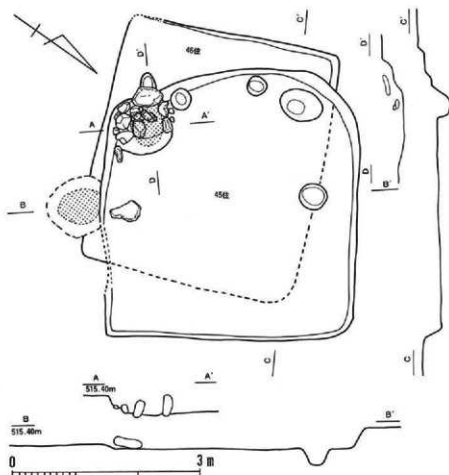
第45号住居址 (第60・61図)

本住居址はB区O-3グリッドに位置している。本住居址は第46号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は本住居址が、第46号住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、遺構上部が耕作により著しく削平をうけており、あまり良好な状態とはいえない。主軸方位はN-126° Wである。

遺構の規模は長軸4.36m、短軸4.12mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北西壁で最大30cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は基本的には黒褐色土の貼床であるが、その大部分は攪乱のため遺存しておらず、部分的に捉えられるのみである。ピットは計4個確認されており、径30~70cm、深さ20~30cmを測るが、柱穴かどうかは不明である。

カマドは南コーナーに位置しており、規模は長軸1.80m、短軸0.90mを測る。主軸方位はN-127° Wである。天井部には天井石に用いられた平石が据えられており、燃焼部にも天井石と思われる石がいくつか落ち込んでいる。袖部には芯である袖石が両袖に遺存している。燃焼部は床面を5~6cm掘り込んで構築しており、楕円形を呈する。煙道部は半円形に掘り込み、約30°の角度をもって立ち上がり、約11°の角度をもって立ち上がる煙出し部へ続いている。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物はカマド周辺部から集中して出土している。しかしその出土量は少ない。遺物は土師質土器・灰軸陶器に限られている。第61図2は覆土下層出土土師質土器皿である。約3分の2残存。口径9.4cm、底径4.8cm、器高2.4cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は淡褐色、胎土は黒色粒を含み、焼成は良好。2はカマド内出土の灰軸陶器の碗である。約

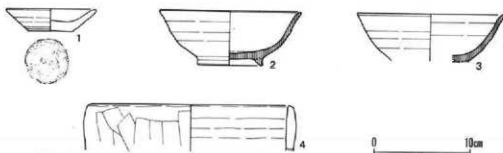


第60図 第45・46号住居址 (1/60)

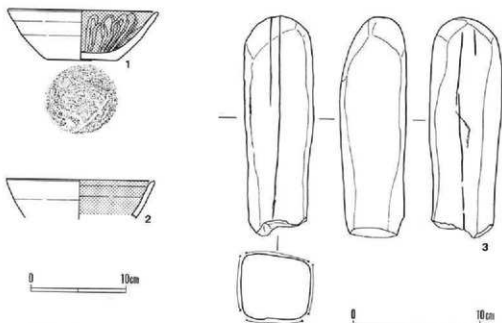
4分の1残存。推定口径15.0cm、高台径6.5cm、器高5.8cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。底部は回転ヘラケズリ。内外面の一部にスの付着がみられる。高台は付高台で、外面は若干外傾し、内面も外傾する。断面は三角形を呈する。無釉である。色調は灰白色、胎土は緻密で、焼成は良好。3は床面に近い覆土下層より出土の灰軸陶器の碗である。約4分の1残存。推定口径15.2cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。底部は回転ヘラケズリ。高台は付高台であるが、剥がれてしまっている。灰軸は口唇部にわずかにみられる。色調・胎土などは2に同じ。4は覆土下層出土の土師器鉢口縁部破片である。推定口径20.6cmを測り、外面はヘラケズリの後ナデ、内面はナデのみ。色調は黒褐色を呈し、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。

第46号住居址 (第60・62図)

本住居址はB区O-3グリッドに位置している。前述のとおり、本住居址は第45号住居址と重複関係にあり、第70号住居址とも重複関係にある。その大半は第45号住居址により破壊されており、第70号住居址にも南壁部を破壊されている。さらに後世の耕作などによっても削平さ



第61図 第45号住居址出土遺物（1/4）



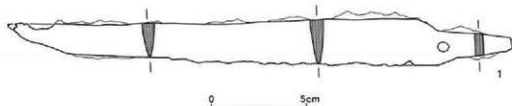
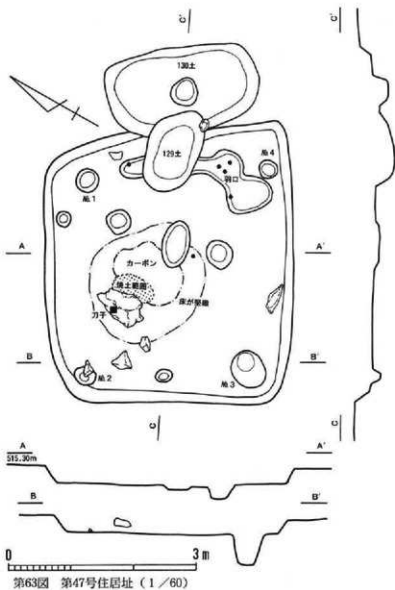
第62図 第46号住居址出土遺物（1・2は1/4、3は1/3）

れており、遺構の遺存状態は極めて悪い状態にある。主軸方位はN-141°-Eである。

遺構の規模は推定4.10m×3.48mを測り、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。壁はわずかしか残っていないが、壁高は西壁にて最大10cmを測り、緩やかに立ち上がっている。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部のみ堅固で、あとは軟弱である。

カマドは焼土の痕跡しかなく全容は不明だが、焼土の下部は非常に堅固で、床面のような状態である。焼土は70×60cmの範囲で、楕円形を呈する。

遺物はカマドの痕跡である焼土中より、内面黒色土器片と砥石が1点出土している。第62図1は内面黒色土器片である。約3分の1残存。推定口径15.4cm、底径7.2cm、器高5.2cmを測り、外面はロクロナデ。内面はロクロナデの後黒色処理を施し、ミガキと暗文も施している。底部は回転糸切り。色調は淡褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。2も内面黒色土器片の口縁部破片である。推定口径15.4cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理を施している。暗文はない。色調は淡褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。3は砥石である。



下端部は欠損している。現長16.4cm、幅5.3cm、厚さ4.9cmを測り、4面が砥面として使用されている。石材は安山岩製である。

第47号住居址 (第63・64・65図)

本住居址はB区O-5・6グリッドに位置している小鍛冶遺構である。本住居址は第129・130号土壌と重複関係にあり、その新旧関係は両土壌が本住居址を切り込んで構築している。確認時から住居址覆土上面より鉄滓を多く出土しており、小鍛冶遺構の可能性が強かった。耕作などにより遺構上部が削平されていることもあり、遺構の遺存状態は良いとはいえない。主軸方位はN-61°-Eである。

遺構の規模は長軸4.50m、短軸3.96mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北東壁で最大30cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、第63図にも示したとおり、焼土範囲、カーボン範囲を取り囲むような範囲で床面が堅固である。あとは概して軟弱である。ピットは計9個確認されており、径20~70cm、深さ10~50cmを測る。No.1~No.4ピットは各コーナー寄りに配置されており、柱穴だと思われる。残りのピットは支柱穴的なものかもしれない。カマドはみられない。

本址には明確な炉は存在しないが、焼土およびカーボンの範囲が確認されている。

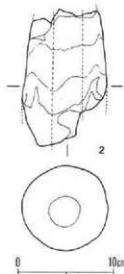
前述のとおりその周辺の床面が非常に堅固であり、ここで作業を行っていたことを想定できるが、羽口・鉄滓などの遺物は北東壁下の浅い掘り方に集中している。

遺物は鉄滓が中心で覆土全体から出土している。鉄製品は1点のみで非常に少なく、土器類の出土はまったくみられない。また羽口は北東壁下の浅い掘り方から多く出土しているが破片のみで、完形品はみられない。第64図1は覆土上層出土のかなり大形の刀子で、ほぼ完存している。全長26.1cm、身部長21.3cm、身部幅1.5~2.4cm、茎幅0.6~1.3cm、棟厚0.6~0.7cmを測る。棟間は0.5cmで緩やかに立ち上がり、刃間は緩やかに彎曲して立ち上がる。茎部に径0.5cmの孔が穿たれている。刃部は多少磨耗している。第65図2は羽口である。破片の接合により3個体みられたが、図示できたのはこれのみである。現長14.0cm、幅9.8cm、孔径3.3cmを測り、成形はヘラケズリの後ナデ。上端部は被熱のため灰褐色化している。色調は赤褐色、胎土は小石・白色粒を多量に含み、焼成は普通。

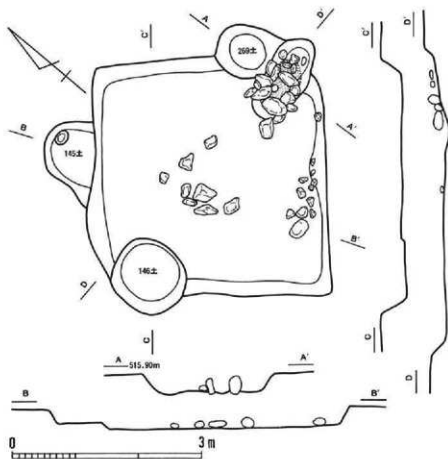
第48号住居址 (第66・67図)

本住居址はB区M-2グリッドに位置している。本住居址の西側に第21号獨立柱建物址が近接し、第145・146・269号土壌と重複関係にある。その新旧関係は、第145・146号土壌が本住居址を切り込んで構築しており、第269号土壌を切り込んで本住居址を構築している。遺構の遺存状態は、桑の根の攪乱が一部床面までおよんでおり、良い状態ではない。主軸方位はN-50°-Eである。

遺構の規模は長軸4.10m、短軸3.82mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は南東壁で最大30cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土と黒褐色土を混ぜた粘床で、あまり堅固ではなく、部分的にしか遺存していない。壁溝およびピットなどは確認されていない。

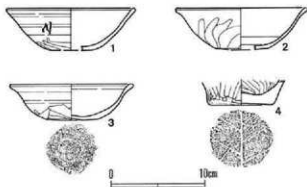


第65図 第47号住居址
出土遺物 (1/4)



第66図 第48号住居址 (1/60)

カマドは北東壁のほぼ東コーナーに位置している。規模は長軸1.46m、短軸0.70mを測り、主軸方位は $N-83^{\circ}-E$ である。天井部は天井石を1個のみ残し、あとは燃焼部に落ち込んでいる。両袖部は芯である袖石を8~9個残している。燃焼部は床面を約5cm掘り込み構築しており、長楕円形を呈する。煙道部は半円形に掘り込み、段をもつ。約 40° の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部から煙道部の一部にかけて顕著である。



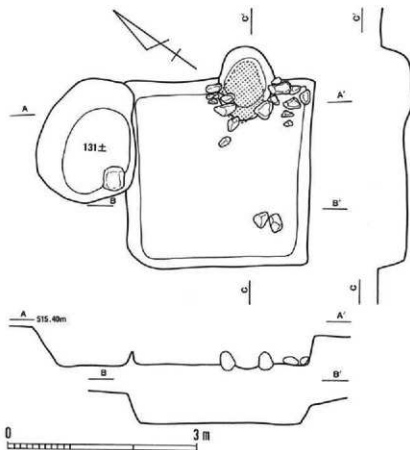
第67図 第48号住居址出土遺物 (1/4)

遺物は土師器が中心で、金属器など他の遺物はない。第67図1は床面直上出土土師器環。約5分の1残存。推定口径13.4cm、推定底径4.4cm、現高4.4cmを測る。外面はロクロナデの後へ

ラケズリ、内面はロクロナデ。底部は完存ではないが、ヘラケズリがみられる。体部外面に墨書がみられるが、意味不明。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。2は床面直上出土土師器杯。約4分の1残存。推定口径13.4 cm、推定底径5.2 cm、現高4.4 cmを測る。内外面の調整は1に同じ。底部は完存ではないが、ヘラケズリがみられる。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。3は床面直上出土土師器杯。約2分の1残存。推定口径12.8 cm、底径5.2 cm、器高3.8 cmを測る。内外面の調整は1に同じ。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は暗褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。4は床面直上出土土師器甕底部破片。底径6.0 cmを測り、内外面ともヘラケズリ。底部は木葉痕が残る。色調は黒褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

第49号住居址 (第68・69図)

本住居址はB区O-5グリッドに位置している。本住居址の北東側には第50号住居址が近接し、北壁において第131号土塼と重複関係にある。その新旧関係は、第131号土塼が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は比較的良好な状態を保っている。主軸方位はN-55°-Eである。



第68図 第49号住居址 (1/60)



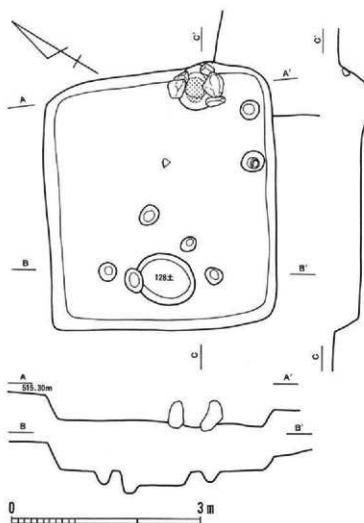
第69図 第49号住居址出土遺物 (1/4)

遺構の規模は長軸3.50m、短軸2.92mを測る小規模なもので、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁において最大46cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、全体に軟弱である。壁溝およびピットは確認されていない。

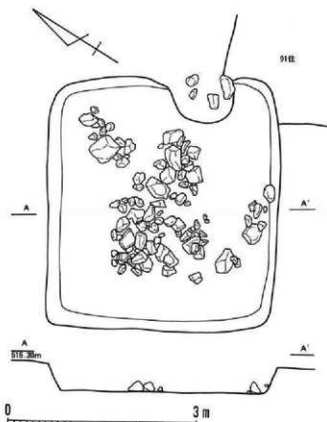
カマドは北東壁のやや中央寄りに位置している。規模は長軸1.18m、短軸0.90mを測り、主軸方位はN-55°-Eである。天井部はすでに崩落している。両袖部には芯である袖石が遺存している。燃焼部は床面を約10cm掘り込んで構築しており、楕円形を呈する。煙道部は半円形

に掘り込み、約55°の角度をもって立ち上がる。カマドの周囲には袖部に用いられたと思われる石が散乱しており、焼土は燃焼部から煙道部の一部にかけて顕著である。

遺物は極めて少ない。完形資料は1点もなく、すべて土師器の破片資料である。第69図1は覆土下層出土内面黒色土器底部破片である。推定底径5.8cmを測り、外面はロクロナデ。内面はロクロナデの後黒色処理を施している。底部はヘラケズリ。色調は褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。2はほぼ床面直上出土内面黒色土器坏高台部破片である。高台径8.4cmを測り、外面はロクロナデ、内面は黒色処理を施し、よく磨か



第70図 第50号住居址(1) (1/60)



第71図 第50号住居址②(1/60)

の南西側に第49号住居址が近接している。本住居址は第91号住居址と第128号土塙の両遺構と重複関係にあり、その新旧関係は、本住居址が第91号住居址と第128号土塙の両遺構を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、まずまずの状態を保っており、主軸方位はN-57°-Eである。

遺構の規模は長軸4.28m、短軸3.68mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北西壁で最大42cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、全体に軟弱である。ピットは計7個確認されており、径30~40cm、深さ15~40cmを測る。柱穴かどうかは不明である。覆土中層から床面直上にかけて多量の礫が混入している。礫の大きさは拳大から人頭大にわたっており、住居址の中央部に集中している。このような状況を示す住居址は本住居址のほかにも数軒とめられており、その出土状態などからみて自然流入とは思われない。

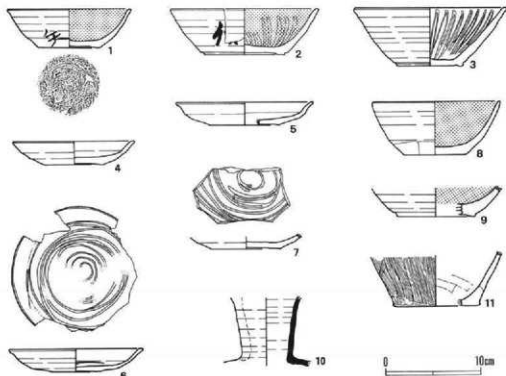
カマドは北東壁中央より、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸0.90m、短軸0.60mを測り、主軸方位はN-60°-Eである。天井部はすでに崩落している。両袖部には芯である袖石が5個遺存している。燃焼部は床面を約5cm掘り込んで構築しており、焼土が顕著である。煙道部は半円形に掘り込み、約54°の角度をもって立ち上がる。

遺物は覆土下層・カマド内などから出土しているが、量的には多くない。第72図④はピット内

れている。底部は回転ヘラケズリで、高台はケズリ出し高台である。色調は明褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。3はカマド内出土の土師器甕底部破片である。推定底径6.2cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。4はほぼ床面直上出土土師器甕底部破片である。推定底径11.2cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は器面が荒れており不明瞭だが、回転糸切りである。色調は外面が褐色、内面は暗褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は普通。

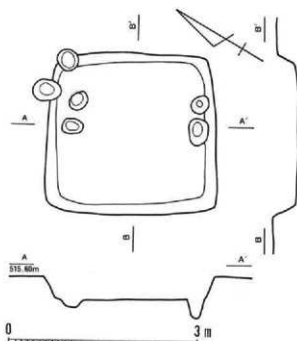
第50号住居址(第70・71・72図)

本住居址はB区O・P-4・5グリッドに位置し、本住居址



第72図 第50号住居址出土遺物(1/4)

出土の内面黒色土器杯。ほぼ完形。口径13.0cm、底径6.4cm、器高4.0cmを測り、外面はロクロナデ、内面は黒色処理を施しミガキを加えている。底部は回転糸切り。体部外面下端に「矢」という墨書がみられる。色調は褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。2は覆土下層出土の内面黒色土器杯。約2分の1残存。推定口径15.2cm、高台径8.2cm、器高4.8cmを測り、外面はロクロナデ、内面は黒色処理を施しミガキと暗文を施している。底部は回転ヘラケズリで、高台はケズリ出し高台である。体部外面に墨書がみられる。欠けているため断定はできないが、残りの部分から判断すると「佛」だと思われる。色調は明褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は普通。3は覆土下層およびカマド内より出土している土師器杯。ほぼ完形。口径16.4cm、高台径6.9cm、器高6.1cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転ヘラケズリで、高台はケズリ出し高台である。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。4・5は覆土下層出土の土師器皿。4はほぼ完形で、口径12.8cm、底径6.3cm、器高2.4cmを測る。内外面ともロクロナデだか、体部下端から底部の外面は回転ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。5は5分の1残存。推定口径14.2cm、推定底径7.1cm、器高2.4cmを測り、内外面および底部の調整は4に同じ。色調は明褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。6はほぼ床面直上出土土師器皿。約4分の3残存。口径14.2cm、底径5.1cm、器高2.4cmを測り、内外面および底部の調整は4に同じだが、内面に暗文を施す。色調は赤褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。7はカマド内出土の土師器皿底部破片。底径7.0cmを測り、内外面および底部の調整は6に同じ。色調は褐色、



第73図 第51号住居址 (1/60)

直上出土土器器底破片。推定底径8.0cmを測る。外面はハケ調整でススの付着がみられ、内面は荒れており不明瞭だがヘラケズリを施している。底部には木炭痕。色調は暗褐色、胎土は小石・雲母を含み、焼成は普通。

第51号住居址 (第73図)

本住居址はB区N-4グリッドに位置している。本住居址の北西側および西側には第135・136・137号土壌が近接している。また性格不明ピットと重複関係にあり、ピットに切り込まれている。遺構の遺存状態は普通で、主軸方位は不明。

遺構の規模は長軸2.60m、短軸2.60mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南西壁で最大36cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットは計4個確認されており、径30~40cm、深さ10~30cmを測り、柱穴かどうかは不明である。カマドはみられない。

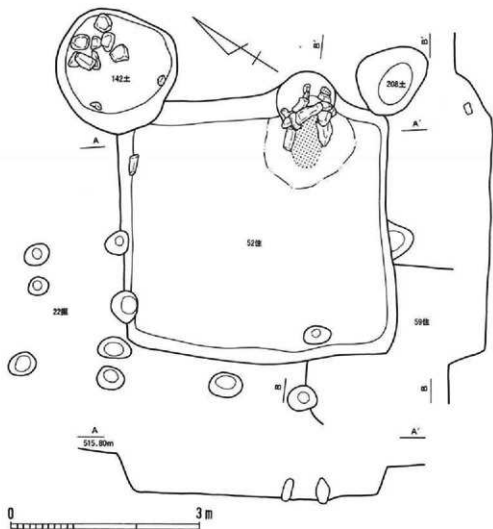
遺物はすべて土師器の細片で少なく、図示できるものはない。

第52号住居址 (第74・75図)

本住居址はB区M-4グリッドに位置しており、第59・60号住居址、第22号掘立柱建物址、第142・208号土壌と重複関係にある。その新旧関係は、本住居址が第59・60号住居址、第22号掘立柱建物址を切り込んで構築し、第142・208号土壌が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は良好で、主軸方位はN-57°-Bである。

遺構の規模は長軸4.60m、短軸4.30mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北西壁で

胎土は白色粒を含み、焼成は良好。8はカマド内出土内面黒色土器。約2分の1残存。推定口径13.2cm、底径6.4cm、器高5.6cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面は1に同じ。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は緻密で、焼成は良好。9は覆土下層出土内面黒色土器。推定高台径8.2cmを測り、内外面および底部の調整は2に同じ。高台はケズリ出し高台。色調は明褐色、胎土は雲母を含み、焼成は良好。10はほぼ床面直上出土土須恵器長頸瓶の頸部破片。内外面ともロクロナデ。器面に淡緑色を呈する自然釉がかかっている。色調は生焼け状態のためか、茶褐色を呈し、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は普通。11はほぼ床面

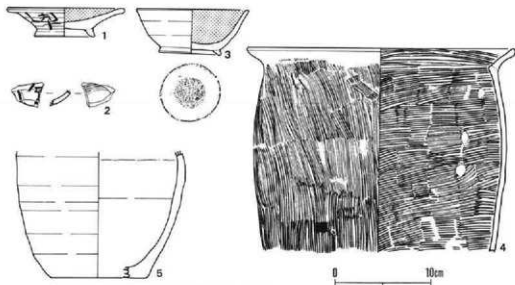


第74図 第52号住居址 (1/60)

最大62 cmを測り、垂直に近い状態で立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部は非常に堅固であるが、あとは概して軟弱である。ピットは1個のみ確認されているが、柱穴だとは思われない。

カマドは北東壁の中央から、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.52m、短軸0.94mを測り、主軸方位はN-63°-Eである。天井部は天井石が1個遺存し、両袖部にも芯である袖石が遺存し、煙道部まで石を配している。袖部の補強材である粘質の灰褐色土も一部遺存している。燃焼部の底面は住居址床面と同一レベルで、焼土が顕著である。煙道部は半円形に掘り込み、約40°の角度をもって立ち上がる。

遺物は土師器片が中心であるが、ほぼ床面直上出土の完形資料もある。第75図1は南東壁下端に接するように出土した内面黒色土器皿である。完形。口径12.4 cm、高台径6.3 cm、器3.0 cm



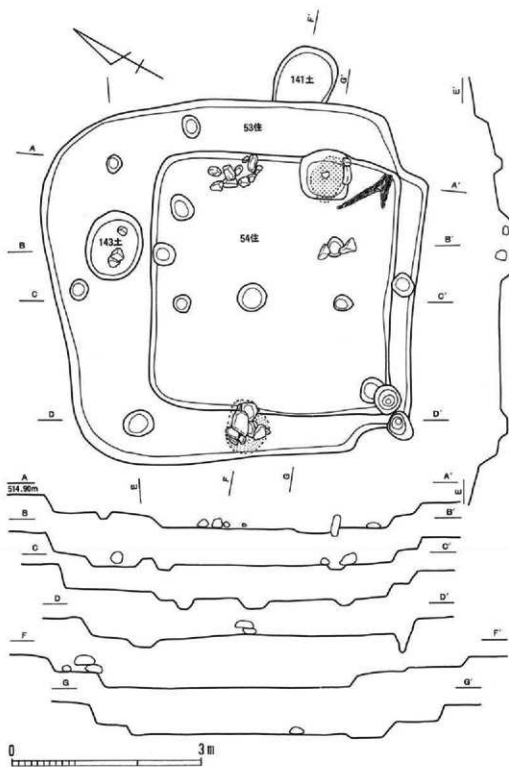
第75図 第52号住居址出土遺物(1/4)

を測り、外面はロクロナデ、内面は黒色処理を施し、ミガキを加えている。底部はわずかに回転糸切り痕を残しているが、回転ヘラケズリ。高台は付け高台。体部外面に「南」という墨書あり。色調は褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。2はカマド内出土の墨書土器である。墨書は判読不可能。土師器の細片で、赤褐色を呈し、胎土は赤色粒を含み、焼成は良好。3は覆土下層出土内面黒色土器片。3分の2残存。口径11.6 cm、高台径6.4 cm、器高5.7 cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は外面も一部黒褐色化しているが、褐色を呈し、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。4はカマド内出土の土師器甕。口径28.1 cm、現高21.5 cmを測り、内外面ともハケ調整。口縁部外面はナデ。胴部にススの付着がみとめられる。色調は内外面とも褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は良好。5もカマド内出土の土師器甕底部破片。推定底径10.0 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部の調整は不明。色調は明褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は普通。

第53号住居址(第76・77図)

本住居址はB区M-3グリッドに位置しており、本住居址の北西側に第20号掘立柱建物址が、南西側に第22号掘立柱建物址が近接している。また本住居址は、第54号住居址、第141・143号土壌と重複関係にある。その新旧関係は、本住居址が第54号住居址の上部を破壊して床面を構築しており、第141・143号土壌が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、遺構の上部が耕作などで削平をうけており、あまり良くない。主軸方位はN-120°-Wである。

遺構の規模は長軸6.10 m、短軸5.78 mを測る。平面形は隅丸方形を呈するが、南壁の一部が張り出しており、別の住居址との重複かと考え精査を行ったが、そのような痕跡はみとめられなかった。壁高は北西壁で最大40 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は基本的に黄褐色土を床面としているが、第54号住居址にかかる部分では貼床で、全体に軟弱である。ピットは



第76图 第53・54号住居址 (1/60)

計6個確認されており、径30~50 cm、深さ15~30 cmを測る。柱穴かどうかは不明。

カマドははっきりしないが、西壁際に焼土とともに石組が崩れたような状態で襷が出土しており、これがカマドだと思われる。焼土の範囲は0.8×0.7mを測るが、掘り込みはみとめられない。

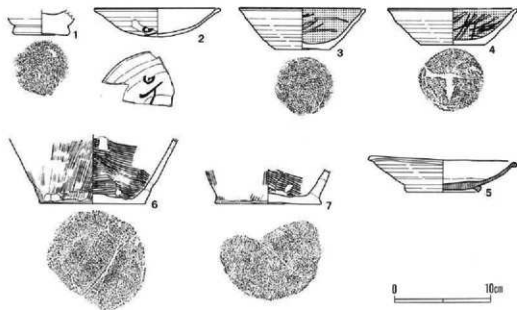
遺物は極めて少ない。住居址覆土中より土師器片をわずかと、床面直上より高台付皿の高台部を1点出土している。第77図がそれである。高台径5.6 cm、現高2.5 cmを測り、ロクロナデ成形。底部は回転糸切り。色調は暗赤褐色、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は普通。

第54号住居址（第76・77図）

本住居址はB区M-3グリッドに位置している。本住居址は前述のとおり、第53号住居址と重複関係にあり、第53号住居址が本住居址上部を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、第53号住居址によって破壊されているにもかかわらず、比較的良好な状態を保っている。主軸方位はN-60°-Eである。

遺構の規模は長軸4.25m、短軸3.84mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南壁で最大20 cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は暗褐色土の貼床で、黄褐色土粒が混じっている。とくに堅固な部分はなく、全体に軟弱である。ピットは計7個確認されており、径30~50 cm、深さ15~20 cmを測る。柱穴かどうかは不明である。カマド脇において炭化材が出土しているが、ほかに炭化材・焼土などの出土はみられず、火災にともなうものかどうかは不明である。

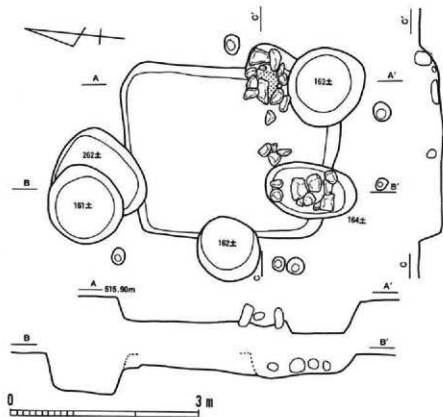
カマドは東壁の中央から、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸0.82m、短軸0.80mを測り、主軸方位はN-60°-Eである。天井部はすでに破壊されており、袖部も右袖に芯である袖石がかろうじて遺存している。燃焼部は床面を約10 cm掘り込み構築しており、石製の支脚が据えられている。煙道部はわずかに壁を掘り込み、約55°の角度をもって立ち上が



第77図 第53・54号住居址出土遺物（1/4）

る。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物は少なく、土師器杯・皿・甕および灰軸陶器皿が出土している。そのほとんどが床面直上およびわずかに浮いた状態で出土し、住居址全体に分布している。その中で比較的カマド脇に遺物の集中がみられる。第77図2はカマド脇床面直上出土土師器皿である。約4分の1残存。推定口径13.1cm、推定底径3.0cm、器高2.9cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部もヘラケズリ。体部から底部にかけて墨書がみられるが、判読不可能。色調は明褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。3もカマド脇床面直上出土土師器杯。約3分の2残存。推定口径13.2cm、底径5.5cm、器高4.3cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後ミガキと暗文を施す。底部は回転糸切り。色調は外面が褐色、内面が赤褐色を呈し、内外面の一部が黒褐色化している。胎土は白色粒・赤色粒・雲母を含み、焼成は普通。灯明皿か。4は覆土下層出土土師器杯。約3分の2残存。推定口径13.4cm、底径6.6cm、器高3.7cmを測り、内外面および底部の調整、色調・胎土などは3と同じ。これも灯明皿の可能性あり。5はカマド脇ほぼ床面直上出土灰軸陶器。口縁部の一部を欠損。口径15.4cm、高台径7.4cm、器高3.4cmを測り、内外面ともロクロ成形で、外面はこの後ヘラケズリ、内面はナデ。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台で、外面が弧状を呈し、内面は内彎している。器形は若干イレギュラーしている。灰軸はツケがけで、軸調は淡緑色、色調は灰褐色、胎土は砂



第78図 第55号住居址 (1/60)

粒を含み緻密で、焼成は良好。6・7は土師器甕底部破片である。6は覆土下層出土。推定底径11.0 cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は暗赤褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。7はカマド脇はば床面直上出土。推定底径11.0 cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は暗褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

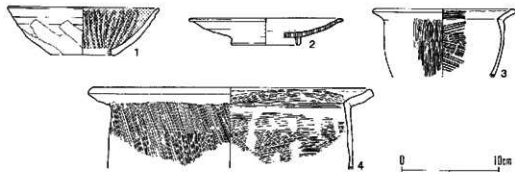
第55号住居址（第78・79図）

本住居址はB区L-2グリッドに位置しており、本住居址の東側には第20号掘立柱建物址が、南西側には第21号掘立柱建物址が近接している。また第161・162・163・164・262号土壌の5基の土壌と重複関係にあり、その新旧関係は、本住居址がすべての土壌に切り込まれている。遺構の遺存状態は、桑の根の攪乱と耕作による削平をうけ、あまり良くない。主軸方位はN-90°-Eである。

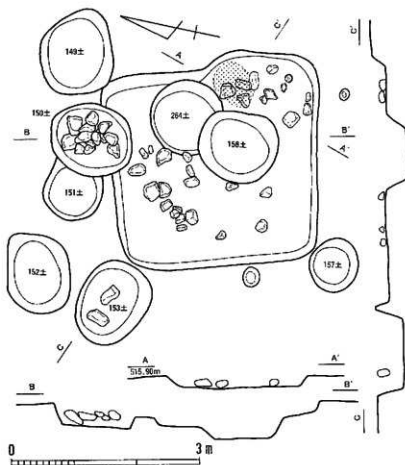
遺構の規模は長軸3.44m、短軸2.74mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁で最大37 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。

カマドは東壁中央から、やや南東コーナー寄りに位置している。規模は長軸0.90m、短軸0.90mを測り、主軸方位はN-95°-Eである。第163号土壌により一部破壊されている。天井部はすでに崩落し、袖部は芯である袖石が7個遺存している。煙焼部は床面をわずかに掘り込んで構築しており、焼土もわずかにみられるのみ。煙道部は半円形に掘り込み、約40°の角度をもって立ち上がる。

遺物は床面直上およびカマド内より出土しており、その量は少ない。第79図1は覆土下層出土内面黒色土器環である。約4分の1残存。推定口径16.0 cm、推定底径6.7 cm、器高5.0 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面は黒色処理を施し、ミガキと暗文を施す。底部は不明。色調は暗褐色を呈し、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。2はカマド内出土の灰釉陶器である。約4分の1残存。推定口径16.0 cm、推定高台径6.9 cm、器高2.8 cmを測り、内外面ともロクろ水挽き成形。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台で、外面は直立するように立ち上がり、内面は外傾する。灰釉は内面のみみられ、灰釉はツケかけ。釉調は乳白色呈する。色調は灰白色、胎土は砂粒を含み、焼成は良好。3はカマド内出土の土師器甕口縁部破片である。推定口径16.8 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が茶褐色、内面が暗褐色を



第79図 第55号住居址出土遺物（1/4）



第80図 第56号住居址 (1/60)

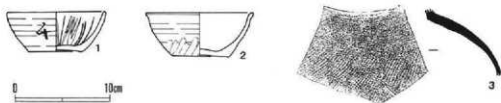
呈し、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。4はほほ床面直上出土の上師器甕口縁部破片である。推定口径30.0cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が暗茶褐色、内面が暗褐色を呈し、胎土は小石・白色粒・金雲母粒を含み、焼成は良好。

第56号住居址 (第80・81図)

本住居址はB区L-1・2グリッドに位置しており、本住居址の北東側から北西側にかけて第149・151・152・153号土壌が、南西側には第157号土壌が近接している。また本住居址は第150・158・264号土壌と重複関係にあり、その新旧関係は、いずれの土壌にも切り込まれている。遺構の遺存状態は、耕作などによる攪乱がひどく、極めて悪い状態である。下軸方位はN-78°-Eである。

遺構の規模は長軸3.46m、短軸3.44mを測る小形のもので、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南壁で最大20cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黒褐色土の貼床であるが、そのほとんどは遺存しておらず、下層の砂層が露出してしまっている。壁溝・ピットなどは確認されていない。

カマドは東壁のほぼ中央に位置しているが、ほとんど原形をとどめていない。焼土と袖石に

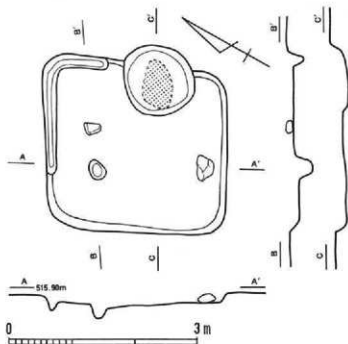


第81図 第56号住居址出土遺物（1/4）

用いられた磚がわずかに散在するのみで、主軸方位は不明である。焼土の範囲は径80×58 cmで、掘り込みはほとんどもない。煙道部の掘り込みは、半円形を呈し、約55°の角度をもって立ち上がる。

遺物は少ないが、カマド脇の床面直上より土師器環のほぼ完形資料が2点出土しており、また須恵器片も数片出土している。第81図1は床面直上出土土師器環である。ほぼ完形。口径10.3 cm、底径5.6 cm、器高4.1 cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は全面ヘラケズリ。体部外面に「千」という墨書あり。色調は明褐色、胎土は黒色粒・石英を含み、焼成は良好。2も床面直上出土土師器環である。ほぼ完形。口径11.2 cm、底径5.8 cm、器高4.5 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部は回転糸切りの後周囲をヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は黒色粒・石英を含み、焼成は良好。3は覆土下層出土須恵器甕肩部破片である。外面はロクロナデの後、平行条線のタタキを施し、内面はロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は小石・白色粒を含み、焼成は良好。

第57号住居址（第82図）



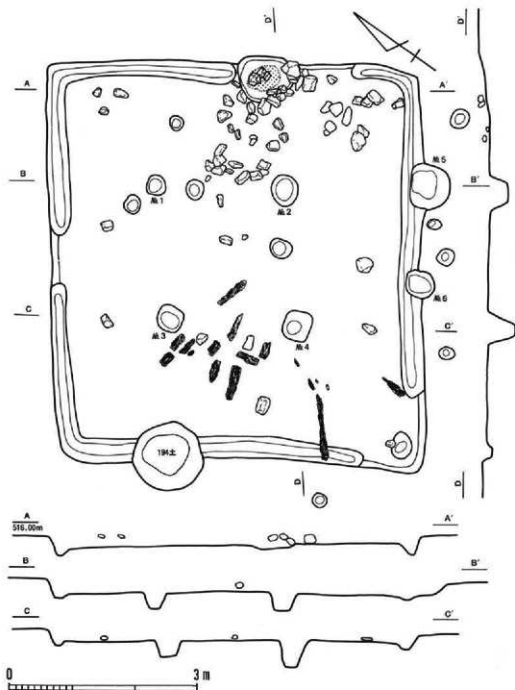
第82図 第57号住居址（1/60）

本住居址はB区K-2・3グリッドに位置している。本住居址の西側に第185号土壌が近接しているが、ほかの遺構との重複関係はない。遺構の遺存状態は極めて悪い。耕作などによる削平が著しく、遺構上面はほとんど失われている。主軸方位はN-62°-Eである。

遺構の規模は長軸3.02m、短軸2.90mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は西壁で最大15 cmを測り、緩やかに立ち上がる。北壁から東壁の一部にかけて壁溝が巡って

いる。幅15~25 cm、深さ15 cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面として
 いるが、全体に軟弱である。ピットは1個のみ確認されている。径30 cm、深さ20 cmを測るが、
 柱穴かどうかは不明。

カマドは掘り方のみ遺存し、規模は長軸1.12m、短軸1.12mを測り、主軸方位はN-62° -



第83図 第58号住居址 (1/60)

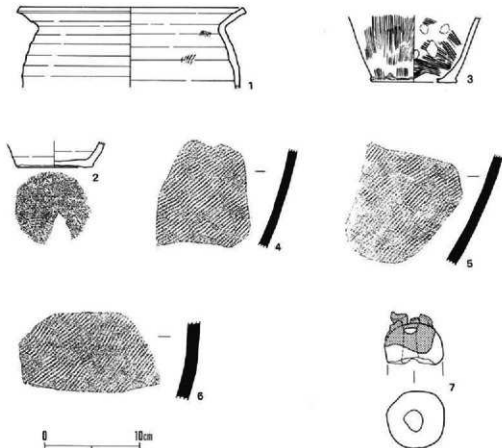
Eである。燃焼部は床面を約10 cm掘り込んで構築しており、煙道部は半円形に掘り込み、約65°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部においてわずかにみられる。

遺物はほとんどなく、土師器細片がわずかに出土したのみ。

第58号住居址（第83・84図）

本住居址はB区J・K-3・4グリッドに位置しており、本住居址の北側には第188号土壇が近接し、西壁では第194号土壇と重複関係にある。その新旧関係は、第194号土壇が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は悪く、耕作などのため遺構上部の削平が著しく、住居址の掘り込みもわずかしこ遺存していない。主軸方位はN-55°-Eである。

遺構の規模は長軸6.40m、短軸5.88mを測り本遺跡では比較的大形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。壁は前述のとおり削平をうけ、遺存状態は悪いが、壁高は北西壁で最大22 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝は南コーナー、北壁の一部を除いて巡っており、幅25~35 cm、深さ10~20 cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は暗黄褐色土の貼床であるが、全体に軟弱で捉えにくく、一部では下層である砂層が露出している。ピットは計11個確認されており、その内のNo 1からNo 4ピットは径30~50 cm、深さ25~40 cmを測り、支柱穴だと思われる。またNo 5とNo 6ピットは本住居址に伴うもので、径50~70 cm、深さ15 cmを測る。これらは



第84図 第58号住居址出土遺物（1/4）

入り口状施設に伴うピットと思われる。本住居址中央から西側にかけて炭化材の出土がみとめられる。炭化材は床面上わずかに浮いた状態で出土しており、この部分に限られているが、住居址覆土にカーボン・焼土粒の混入がみとめられることなどから、火災をうけた可能性が高い。

カマドは東壁のほぼ中央に位置しており、その原形はほとんどとどめておらず、掘り方と袖石と思われる礎が散在している。掘り方の規模は長軸0.84m、短軸0.76mを測り、主軸方位はN-57°-Eである。燃焼部は床面をわずかに掘り込んで構築しており、煙道部はわずかに壁面を掘り込んでおり、なだらかに立ち上がる。焼土は燃焼部においてわずかにみられる。

遺物は少なく、破片資料のみである。土師器甕、須恵器片、羽口片が出土している。第84図1はカマド内出土土師器甕口縁部破片である。推定口径23.4cmを測り、内外面ともロクロナデ。内面の一部にハケメがみられる。色調は褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。2もカマド内出土の土師器甕底部破片である。底径8.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。4は覆土下層出土土師器甕底部破片である。推定底径9.0cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は外面が暗赤褐色、内面が褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。4～6はカマド脇の覆土下層出土の須恵器甕胴部破片である。いずれの外面にも平行条線が残るタタキを施し、色調は灰茶褐色を呈し、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。7は覆土下層出土の羽口の先端部破片である。現長4.4cm、幅6.0cm、孔径2.2cmを測り、溶解鉄の付着が著しい。また成熟のため灰褐色化している。成形は不明で、胎土は白色粒・小石を含み、焼成は普通。

第59号住居址（第85図）

本住居址はB区M-4グリッドに位置しており、本住居址の南東側には第61号住居址が近接し、また北壁では第52号住居址および第22号獨立住建物址と、南壁では第60号住居址と重複関係にある。その新旧関係は、第52号住居址および第22号獨立住建物址が本住居址を切り込んで構築しており、第60号住居址を切り込んで本住居址が構築している。遺構上部が耕作によりかなり削平されており、遺構の遺存状態は悪い。主軸方位はN-155°-Eである。

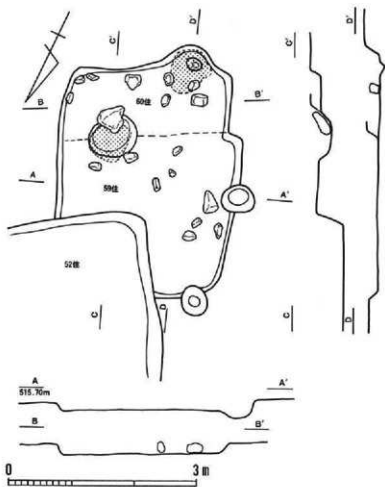
遺構の規模は長軸2.93m、短軸2.60mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。壁の遺存状態は悪く、壁高は北壁で最大14cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、全体に軟弱である。壁溝・ピットなどは確認されていない。

カマドは南壁の南東コーナー寄りに位置している。遺存状態は悪く掘り方を遺存するのみである。掘り方の規模は長軸0.78m、短軸0.70mを測り、主軸方位はN-153°-Eである。燃焼部は床面を約10cm掘り込み構築しており、煙道部は半円形に掘り込み、約50°の角度をもって立ち上がる。煙道部内には人頭人の平石が落ち込んでいる。焼土は燃焼部においてわずかに遺存する。

遺物はまったく出土していない。

第60号住居址（第85図）

本住居址はB区M-4・5グリッドに位置しており、本住居址の南東側には第61号住居址が近接し、北壁では前述のとおり第59号住居址と重複関係にある。その新旧関係は、第59号住居



第85図 第59・60号住居址 (1/60)

址が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態も第59号住居址と同様に悪く、遺構上部は削平をうけほとんど遺存しない。主軸方位はN-155°-Eである。

遺構の規模は現存で東西軸2.66m、南北軸0.9mを測り、平面形はおそらく隅丸方形を呈するものと思われる。壁高は南壁で最大18cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。床面のレベルは、第59号住居址とほぼ同じである。壁溝およびピットなどは確認されていない。

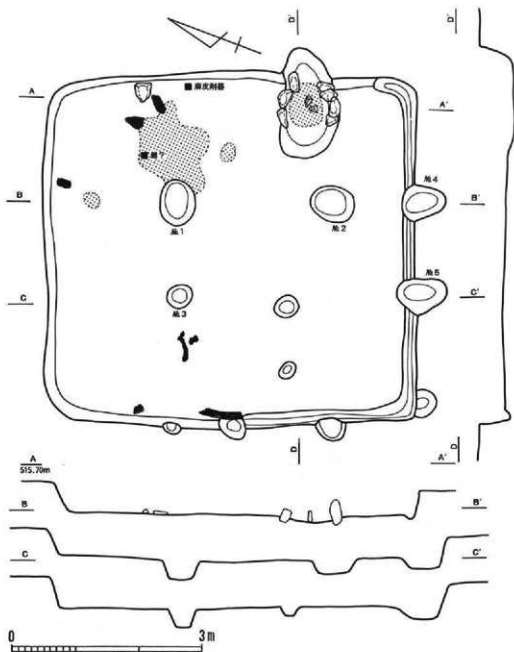
カマドは南壁の南西コーナー寄りに位置しており、遺存状態は良くない。規模は長軸0.73m、短軸0.70mを測り、主軸方位はN-168°-Eである。天井部はすでになく、袖部は芯である袖石が2個遺存している。燃烧部の掘り込みはほとんどなく、奥部のピットは支脚を据えるためのものと思われる。煙道部は半円形に掘り込み、約60°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃烧部から煙道部にかけてわずかに遺存している。

遺物は第59号住居址と同様、1点も出土していない。

第61号住居址 (第86・87・88図)

本住居址はB区M・N-5グリッドに位置しており、本住居址の南東側に第62号住居址が、南西側に第28号掘立柱建物址が、北西側には第60号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。遺構の遺存状態は普通で、遺構上部を耕作などで削平されているが、まずまずの状態である。主軸方位は $N-70^{\circ}-E$ である。

遺構の規模は長軸5.91m、短軸5.72mを測り本遺跡では大形の住居址で、平面形は隅丸方形

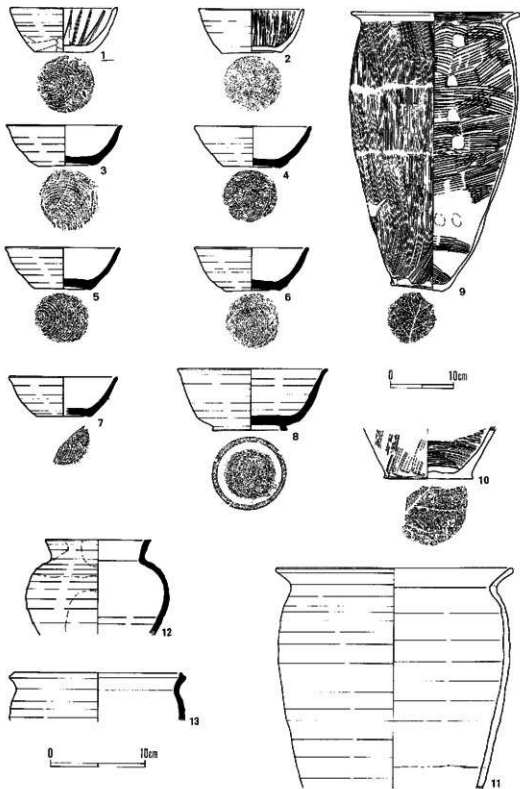


を呈する。壁高は北壁で最大52 cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝が南東コーナーから南壁・西壁中央の壁下に巡っており、幅20～30 cm、深さ6～10 cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部は堅固で、あとは概して軟弱である。ピットは計7個確認されている。この中で住穴だと思われるものはNo.1～3ピットで、径40～70 cm、深さ20～30 cmを測る。またNo.4・No.5ピットは本住居址に伴うもので、入り口状施設に伴うものと思われる。径70～80 cm、深さ50～55 cmを測る。

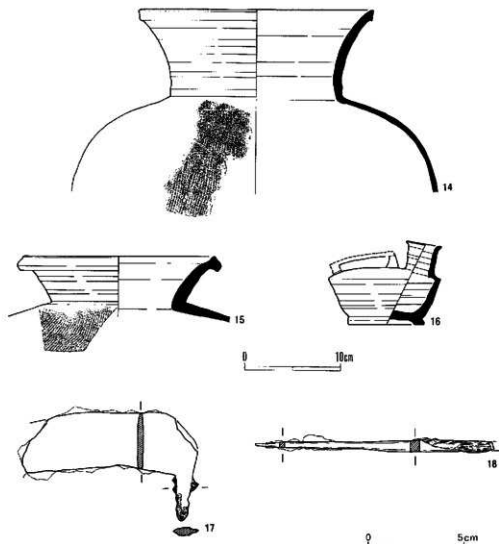
本住居址の覆土には多量のカーボン・焼土粒が混入しており、さらに覆上下層からはほぼ床面直上にかけて炭化材が出土している。また東壁下の床面を中心に焼土が散布しており、火災をうけた可能性が非常に強い。

カマドは東壁中央からやや南東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.74 m、短軸1.00 mを測り、主軸方位はN-65°-Eである。天井部はすでに崩落しており、袖部は芯である袖石が7個遺存しているが、補強材などは遺存していない。燃焼部は床面を約8 cm掘り込んで構築しており、奥部には石製の支脚が据えてある。煙道部は半円形に掘り込み、約60°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物の量は豊富である。住居址中央周辺およびカマド右袖部の床面直上より集中的に出土している。須恵器環を中心に壺・平瓶、土師器環・甕、鉄製品も2点出土している。第87図1は床面直上出土土師器環。ほぼ完形。口径11.2 cm、底径6.0 cm、器高4.6 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・石英を含み、焼成は良好。2は床面直上出土土師器環。4分の3残存。口径10.8 cm、底径6.1 cm、器高4.6 cmを測り、外面はロクロナデ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。3は床面直上出土須恵器環。完形。口径12.0 cm、底径5.5 cm、器高4.2 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。4は床面直上出土須恵器環。完形。口径12.0 cm、底径5.8 cm、器高4.2 cmを測り、内外面および底部の調整は3に同じ。色調は灰褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。5は床面直上出土須恵器環。完形。口径11.9 cm、底径5.7 cm、器高4.3 cmを測り、内外面および底部の調整は3に同じ。内外面にススの付着がみられる。色調は乳白色、胎土は白色粒・黒色粒・石英を含み、焼成はやや軟質。6は床面直上出土須恵器環。ほぼ完形。口径11.9 cm、底径5.9 cm、器高4.5 cmを測り、内外面の調整は3に同じ。底部は回転糸切りの後周辺をわずかがヘラケズリ。色調は褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は普通。7はカマド内出土須恵器環。3分の1残存。推定口径11.7 cm、推定底径5.5 cm、器高4.1 cmを測り、内外面および底部の調整は3に同じ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。8は床面直上出土須恵器環。完形。口径15.4 cm、高台径7.7 cm、器高6.4 cmを測り、内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。高台は付け高台。外面は被熱のため黒色化している。色調は灰褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は普通。9はカマド脇床面直上出土土師器甕。約3分の2残存。口径24.3 cm、底径7.5 cm、器高40.7 cmを測



第87图 第61号住居址出土遺物(1) (1~8・10~11は1/4、9は1/6)



第88図 第61号住居址出土遺物(2) (14~16は1/4、17・18は1/2)

り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は暗茶褐色を呈し、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。10も床面直上出土土師器甕底部破片。推定底径9.2cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は外面が暗赤褐色、内面が褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は普通。11はカマド内出土土師器甕口縁部から胴部下半破片である。推定口径24.5cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は褐色、胎土は赤色粒・白色粒・小石を含み、焼成は良好。12は床面直上出土須恵器小型甕。約4分の1残存。推定口径11.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。外面に自然釉がかかる。色調は暗灰褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。13は床面直上出土須恵器小型甕口縁部破片。推定口径17.2cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。第88図14は床面直上出土須恵器甕。口縁部は完存し一部胴部上半が残存。口径24.4cmを測り、口縁部内外面はロクロナデ。胴部外面はロクロナデの後平行条線のタタキを施し、内面は剥落が激しく不明。色調は暗灰褐色、胎土は白色

粒を含み、焼成は良好。15はカマド脇床面直上出土須恵器甕口縁部破片。口径20.0 cmを測り、口縁部の内外面はロクロナデ。肩部外面は平行条線のタケを施し、内面はロクロナデ。外面に淡緑色の自然釉がかかる。色調は灰白色、胎土は砂粒を含み緻密で、焼成は良好。16は床面直上出土須恵器平瓶である。把手を一部欠いている。口径3.7 cm、胴径11.7 cm、高台径8.0 cm、器高8.7 cmを測り、内外面ともロクロナデ。肩部上面はていねいにヘラナデを施す。底部はヘラナデ。高台は付け高台でナデ調整。色調は灰褐色、胎土は小石・白色粒を含みやや粗く、焼成は良好。

鉄製品 17は東壁覆土下層出土麻皮削器。片削の一部を欠損。錆のため全体に肥大している。現長9.2 cm、幅2.9 cm、身厚0.2~0.3 cm、茅部幅0.7 cmを測り、刃部はやや磨減している。18は棒状鉄器。尾端を欠損。現長12.4 cm、中央尾端寄りで0.6×0.5 cmの方形断面をもち、先端へいくにしたがって細くなる。尾端には木質部が遺着し、おそらく錐と思われる。

第62号住居址（第89・90・91図）

本住居址は小鍛冶遺構で、B区M・N-5・6グリッドに位置している。本住居址の北西側には第61号住居址が、南側には第63号住居址が、西側には第28号掘立柱建物址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。遺構の上部は削平をうけ、一部桑の根が遺構内部までおよんでいるが、本遺跡全体からみればまずまずの遺存状態を保っている。主軸方位はN 60°-Eである。

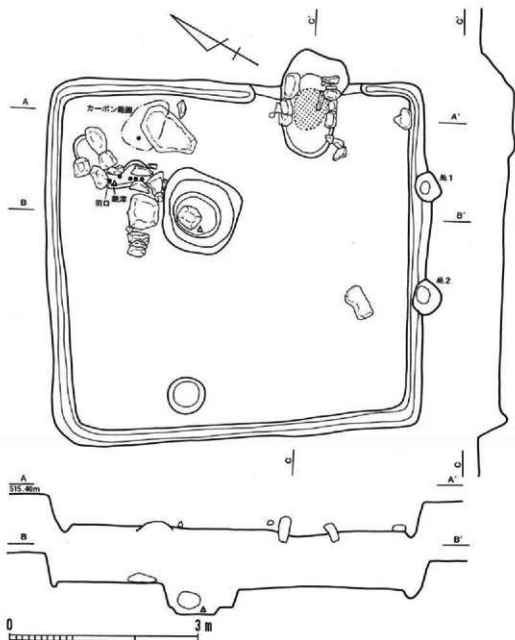
遺構の規模は長軸6.00 m、短軸5.84 mを測り本遺跡では大形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁で最大48 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝がカマド部分を除いてほぼ全周しており、幅20~35 cm、深さ8~12 cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部は比較的堅固であるが、あとは概して軟弱である。ピットは計3個確認されている。柱穴だと思われるものはないが、No 1とNo 2ピットは第58号住居址および第61号住居址にみられるような、入り口施設に伴うピットと思われる、径50~60 cm、深さ60 cmを測る。

鍛冶炉は本住居址内北側に位置し、炉の掘り方の規模は長軸1.24 m、短軸1.20 m、深さ50 cmを測り、底面上12 cmの位置で設をもつ。平面形は隅丸方形を呈する。掘り方内には人頭大の礫がみられ、同覆土内からは多量のスラグとカーボンが出土しており、下層より腕形鉄滓も出土している。この掘り方に接続して右組を配する浅い溝がみられる。この溝内からもスラグが出土し、羽口片が比較的多量に出土している。溝を挟んで東側にはカーボンが床面上10~12 cm堆積しており、西側には台石状の平石が床面直上より出土している。カーボンは炉内より掻き出したものと思われる。

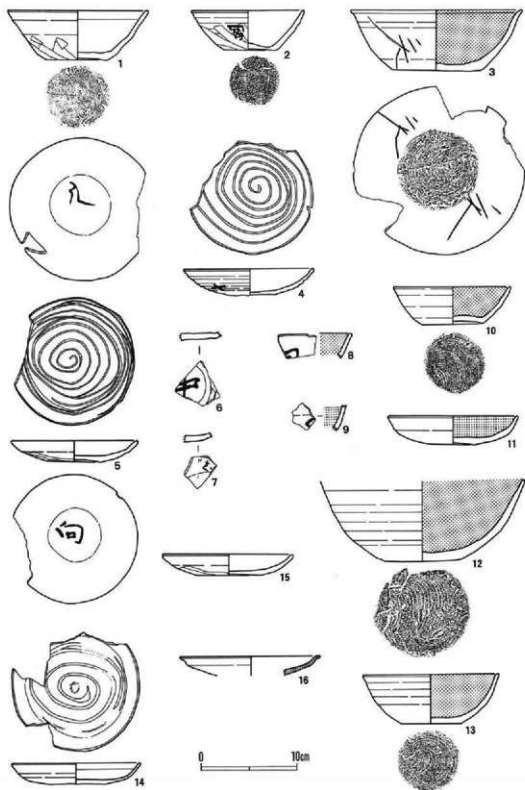
カマドは東壁中央からやや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.75 m、短軸1.10 mを測り、主軸方位はN 57°-Eである。天井部はすでに崩落しており、袖部は芯である袖石が8個遺存しているのみ。燃焼部は床面を約10 cm掘り込んで構築しており、煙道部は壁面を半円形に掘り込み約45°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物はカマド周辺部および鍛冶炉内、その周辺部を中心に出土しており、土師器・土・鉢・鉢・

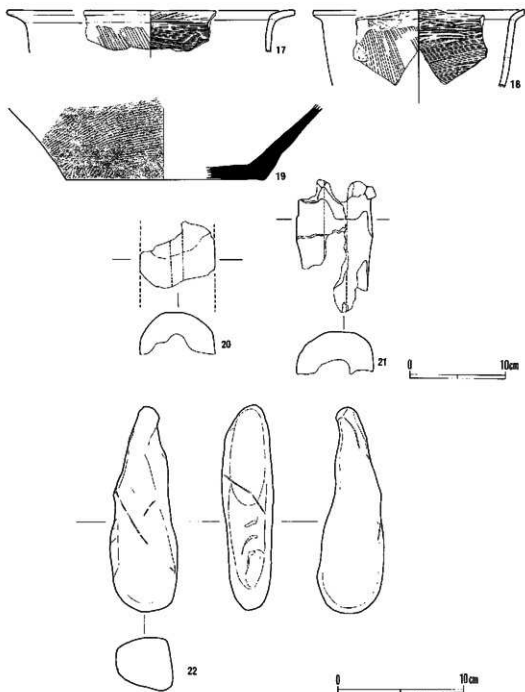
甕、須恵器甕、灰釉陶器、羽口、鉄滓、編物用石錘など多岐にわたっている。金属器は1点も出土していない。第90図はカマド右袖脇のほぼ球面直上出土土師器杯。ほぼ完形。口径14.6 cm、底径6.6 cm、器高5.1 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部は回転糸切り後周辺をヘラケズリ。底部外面に「凡」という墨書がみられるが、意味不明。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。2はカマド内出土土師器杯。ほぼ完形。口径11.6 cm、底径5.5 cm、器高4.2 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。



第89図 第62号住居址 (1/60)



第90图 第62号住居址出土遺物(山)(1/4)



第91図 第62号住居址出土遺物②(17~21は1/4、22は1/3)

内面はロクロナデ。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。体外外面に「冨」という墨書あり。色調は赤褐色、胎土は赤色粒を含み、焼成は良好。3はほぼ床面直上出土土師器環。ほぼ完形。口径17.6cm、底径9.0cm、器高6.3cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理を施し、ミガキを加えている。底部は回転糸切り。体外外面に「矢?」と思われる

刻書が2箇所みられる。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。

4は覆土下層出土土師器皿。口縁部を一部欠損。口径13.4 cm、底径5.0 cm、器高2.8 cmを測り、外面はロクロナデの後回転ヘラケズリ、内面はロクロナデの後ミガキと暗文を施す。底部は回転ヘラケズリ。体部外面に「十」という墨書あり。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。

5はほぼ床面直上出土土師器皿。ほぼ完形。口径13.2 cm、底径5.8 cm、器高2.2 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後ミガキと暗文を施す。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。底部外面に「向」という墨書あり。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。

6～9は墨書土器の破片。すべて覆土下層出土。6・7は土師器坏と皿の底部破片。8・9は内面黒色土器坏の口縁部破片と体部破片である。10はほぼ床面直上出土土師器坏。完形。口径12.0 cm、底径6.1 cm、器高3.9 cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理を施す。底部は回転糸切り。色調は褐色、胎土は白色粒・石英を含み焼成は普通。

11は覆土下層出土土師器皿。約4分の1残存。推定口径13.4 cm、底径4.0 cm、器高3.0 cmを測り、外面はロクロナデの後回転ヘラケズリ、内面はロクロナデの後黒色処理とミガキを施す。一部暗文もみられる。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。

12はほぼ床面直上出土土師器鉢。口縁部欠損。底径7.6 cm、器高8.4 cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理を施す。底部は回転糸切り。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒・石英・金雲母を含み、焼成は良好。

13はほぼ床面直上出土土師器坏。ほぼ完形。口径14.0 cm、底径6.2 cm、器高5.2 cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理とミガキを施す。底部は回転糸切り。色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。

14は覆土下層出土土師器皿。約3分の2残存。口径13.4 cm、底径6.0 cm、器高2.2 cmを測り、外面はロクロナデの後回転ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転糸切りの後周辺を回転ヘラケズリ。色調は暗赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。

15は覆土下層出土土師器皿。約4分の1残存。推定口径13.5 cm、底径6.4 cm、器高2.3 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。底部は回転ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。

16は覆土下層出土灰釉陶器皿。約5分の1残存。推定口径14.6 cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。灰釉は内面のみハケがけされ、釉調は淡緑色。色調は灰白色、胎土は砂粒を含み緻密で、焼成は良好。

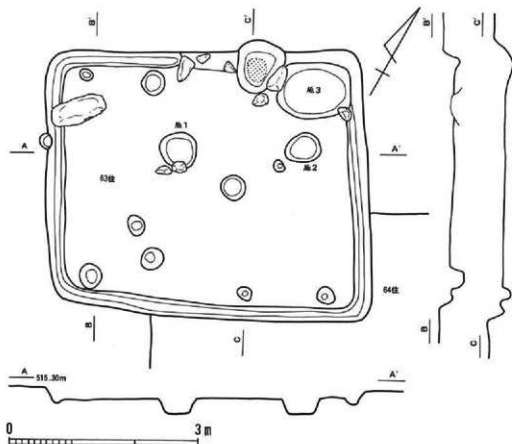
第91図17はほぼ床面直上出土土師器、口縁部破片。推定口径29.8 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

18はカマド内出土土師器蓋口縁部破片。推定口径22.0 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

19は覆土下層出土須恵器蓋底部破片。推定底径20.6 cmを測り、外面はロクロナデの後タタキを施し、内面はロクロナデ。底部はヘラケズリ。色調は灰褐色、胎土は白色粒・小石を含み、焼成は良好。

20・21は羽口である。20はほぼ床面直上出土。先端部付近の破片で、幅7.8 cm、推定孔径2.5 cm、現長7.0 cmを測り、被熱で外面が一部灰褐色化し、非常にもろくなっている。色調は明褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は普通。

21は鍛冶炉に



第92図 第63号住居址 (1/60)

伴う溝内から出土しており、現長13.9cm、幅7.8cm、推定孔径2.7cmを測り、溶解鉄が付着し、被熱のため灰褐色化している。器面はヘラケズリで、色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は普通。22は銅物用石錘で床面直上出土。全長15.2cm、幅3.6cm、厚さ3.7cmを測り、石材は砂岩製である。

第63号住居址 (第92・93図)

本住居址はB区M・N-6・7グリッドに位置している。本住居址の北側に第62号住居址が近接しており、住居址南東部で第64号住居址と重複関係にある。その新旧関係は、本住居址が第64号住居址の上部を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、遺構上部が耕作などにより削平されているが、まずまずの状態を保っている。主軸方位はN-29°-Wである。

遺構の規模は長軸5.00m、短軸4.34mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は西壁で最大22cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝がカマドおよび北東コーナー部分を除いて巡っており、幅20~30cm、深さ5~10cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱で捉えにくい。ピットは計12個確認されており、径20~60cm、深さ20~30cmを測る。Na 1とNa 2ピットは支柱穴的なものだと思われ、壁際の小ピットは支柱穴的なものかもしれない。Na 3ピットは浅いピットで、遺物は出土していないが貯蔵穴的なものだと



第93図 第63号住居址出土遺物(1/4)

思われる。

カマドは北壁中央からやや北東コーナー寄りに位置している。規模は長軸0.88m、短軸0.76mを測り、主軸方位はN-20°-Wである。天井部はすでに崩落し、袖部は芯である袖石が右袖に1個遺存するのみ。燃焼部は床面を約10cm掘り込んで構築しており、煙道部は半円形に掘り込み約50°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部において少量ながら遺存している。

遺物は極めて少なく、覆土上層より土師器片、須恵器片がわずかに出土している。第93図1は覆土上層出土須恵器四耳壺胴部破片。推定胴径23.4cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後ハケ状のケズリがみられる。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。2も覆土上層出土土師器甕底部破片。推定底径9.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は器面が剥落しており不明。色調は暗褐色、胎土は白色粒・石英・小石を含み、焼成は普通。

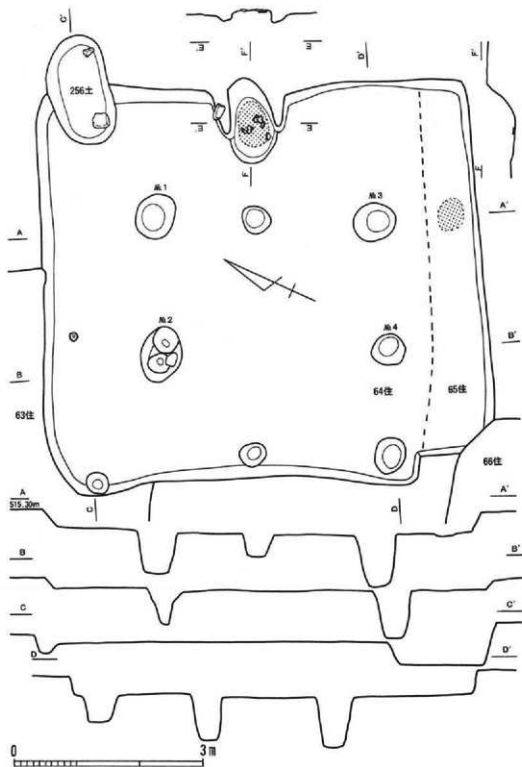
第64号住居址(第94・95図)

本住居址はB区N-6・7グリッドに位置しており、本住居址の北側には第62号住居址が、南側には第66号住居址が近接している。前述のとおり本住居址は、第63号住居址と重複関係にあり、また第65号住居址および第256号土壌とも重複関係にある。その新旧関係は、本住居址は第63号住居址および第256号土壌によって切り込まれており、反対に第65号住居址を切り込んで本住居址が構築している。遺構の遺存状態は、耕作などによって遺構上部を一部削平され、桑の根の攪乱もうけているが、まずまずの遺存状態といえる。主軸方位はN-65°-Eである。

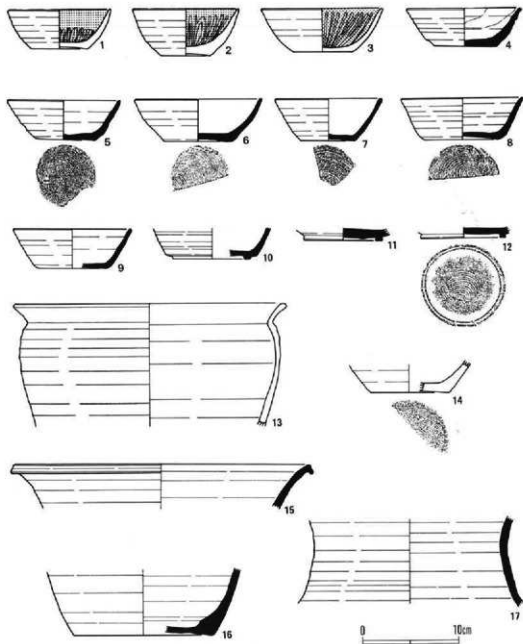
遺構の規模は長軸6.58m、短軸6.00mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北東壁で最大40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部のみ堅固で、あとは概して軟弱である。ピットは計8個確認されている。その内の№1~№4ピットは径50~90cm、深さ60~80cmを測り、支柱穴だと思われる。あとのピットについては、支柱穴的なものであろう。

カマドは北東壁ほぼ中央に位置している。規模は長軸1.38m、短軸0.78mを測り、主軸方位はN-58°-Eである。天井部はすでに崩落している。袖部は両袖が遺存し、おもに粘質の灰褐色土と暗褐色土で構築されており、石はほとんど用いられていない。燃焼部は床面を約5cm掘り込んで構築しており、焼土が顕著である。煙道部は半円形に掘り込み約40°の角度をもって立ち上がる。

遺物は比較的豊富である。カマド周辺部の住居址覆土下層とカマド内から中心に出土しており、須恵器片が量的に多い。ほかに須恵器甕、土師器坏(内面黒色土器)・甕が出土している。第95図1はカマド内出土土師器坏。約4分の1残存。推定口径10.8cm、推定底径5.9cm、器高4.1cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後ミガキと暗文を施す。底部はヘラケ



第94图 第64·65号住居址 (1/60)



第95図 第64号住居址出土遺物(1/4)

ズリ。色調は明褐色、胎土は黒色粒・雲母を含み、焼成は普通。2は覆土下層出土土師器坏。約3分の1残存。推定口径10.8cm、推定底径4.9cm、器高4.9cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。色調は明褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は普通。3は覆土下層出土土師器坏。約2分の1残存。口径12.7cm、底径6.0cm、器高4.5cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。色調は明褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は良好。4は覆土下層出土須恵器坏。ほぼ完形。口径11.7cm、底径6.3cm、器高4.0cmを測り、内外面ともクロコナデ。

底部はヘラケズリ。内面にタールの付首がみられる。色調は褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成はやや軟質。5はカマド内出土須恵器杯。約3分の2残存。口径11.7cm、底径6.0cm、器高4.1cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。6は覆土下層出土須恵器杯。約4分の1残存。推定口径13.0cm、推定底径6.9cm、器高4.5cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部は回転糸切り。色調は灰白色、胎土は砂粒を含み緻密で、焼成は良好。7は覆土下層出土須恵器杯。約4分の1残存。推定口径11.3cm、推定底径5.7cm、器高4.4cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部は回転糸切り。色調は灰白色、胎土は白色粒・黑色粒・石英を含み、焼成は良好。8は覆土下層出土須恵器杯。約2分の1残存。推定口径12.4cm、底径7.4cm、器高4.4cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。9は覆土下層出土須恵器杯。約5分の1残存。推定口径12.4cm、推定底径7.0cm、器高4.1cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部はヘラケズリ。色調は灰白色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成はやや軟質。10は覆土下層出土須恵器杯底部破片。推定高台径8.0cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は灰褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。11と12は覆土下層出土須恵器杯底部破片。11は高台径8.3cmを測り、底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。12は高台径8.6cmを測り、底部は回転糸切りの後周縁をヘラケズリ。高台は付け高台。11と12ともに色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。13はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径27.6cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は明褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。14もカマド内出土土師器甕底部破片。推定底径8.1cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は明褐色、胎土は白色粒・小石・石英を含み、焼成は良好。15は覆土下層出土須恵器甕口縁部破片。推定口径30.7cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。16は覆土下層出土須恵器甕底部破片。推定底径14.6cmを測り、外面はロクロナデの後タキを施す。内面はロクロナデで自然釉がかかっている。底部はヘラケズリ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。17は覆土下層出土須恵器甕頸部破片。内外面ともロクロナデ。自然釉がかかる。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

第65号住居址（第94図）

本住居址はB区N-7グリッドに位置しており、前述のとおり第64号住居址と重複関係にあり、そのほとんどは破壊されている。また南西コーナー部においても第66号住居址と重複関係にあり、これも第66号住居址に切り込まれている。遺構の主軸方位はN-151°-Eである。

遺構の規模は遺存部分で東西辺6.00mを測る。壁高は30cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は第64号住居址の床面とほぼ同一レベルで、全体に軟弱である。壁溝およびピットなどは確認されていない。

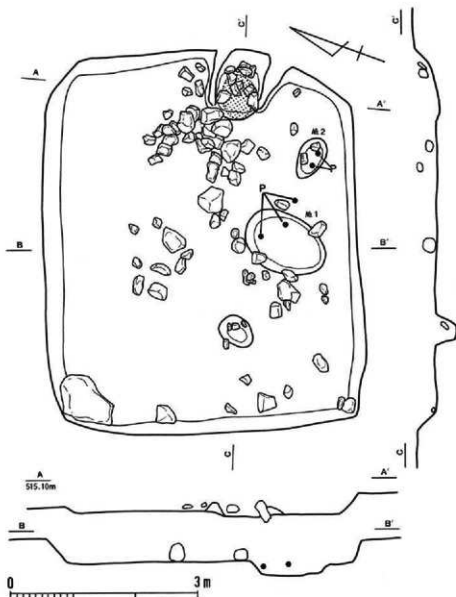
カマドに伴うと思われる土が遺存している。範囲の規模は径55×40cmで、わずかに掘り込みをもち、燃焼部の一部と思われる。遺物は出土していない。

本住居址に伴うと思われる遺物はなく、覆土中より人頭人の髹が数個出土している。

第66号住居址 (第96・97・98・99図)

本住居址はB区M・N-7・8グリッドに位置しており、本住居址の北側には第64号住居址が、南東側には第67号住居址が、西側には第31・32号掘立柱建物址が近接している。また北東コーナー部において第65号住居址と重複関係にあり、本住居址が第65号住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、耕作などによりかなり激しく攪乱をうけており、あまり良い状態ではない。主軸方位はN-70°-Eである。

遺構の規模は長軸6.14m、短軸5.08mを測り本遺跡では比較的大形の住居址で、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁で最大40cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は暗褐色土と黄



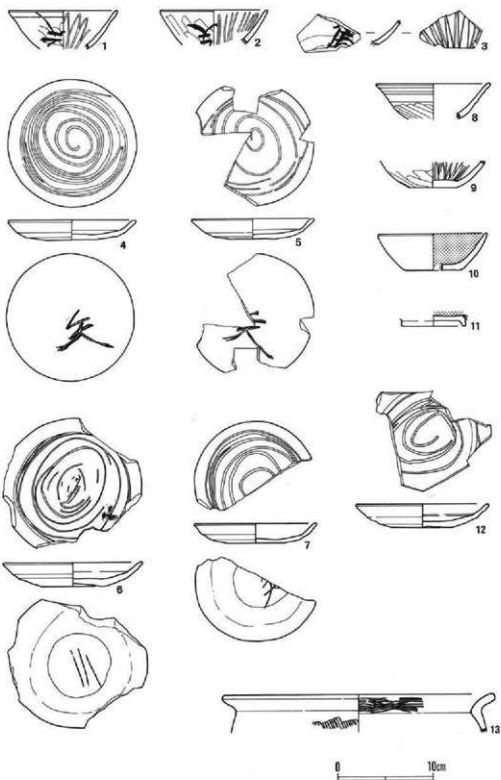
第96図 第66号住居址 (1/60)

褐色土を用いた貼味であるが、その大半は擾乱のため遺存せず、カマド周辺部のみ遺存している。遺存部分は比較的堅固である。ピットは計3個確認されている。その内のNo.1ピットは上層状を呈しているが、セクションの観察から本住居址に伴うものである。径134×90cm、深さ24cmを測る。No.1ピットとNo.2ピットからは土師器皿などが数点出土している。No.2ピットの規模は径70×40cm、深さ20cmを測る。

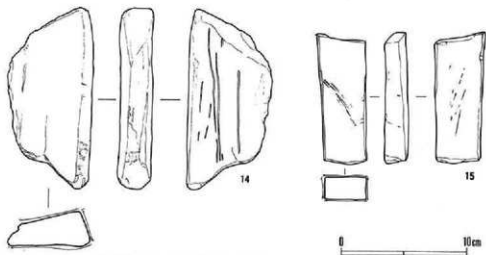
住居址覆土下層から床面直上にかけて多量の礫が混入している。礫の大きさは拳大から人頭大まであり、その分布はカマド前面部に集中し、住居址中央部分に散在した状態で分布している。

カマドは東壁のはほぼ中央に位置している。規模は長軸1.14m、短軸0.76mを測り、主軸方位はN 80° Eである。天井部はすでに崩落している。袖部は両袖が遺存しており、芯である袖石と補強材である粘質の灰褐色土と暗褐色土から構成されている。燃焼部には天井石に用いられたと思われる礫が数個落ち込んでいる。床面を約5cm掘り込んで、焼上が顕著である。煙道部は斜面をわずかに掘り込み、約40°の角度をもって立ち上がる。

遺物は比較的豊富である。住居址覆土、カマド内およびピット内から出土しており、土師器坏・皿・甕、磁石、鉄製品などがあり、中でも墨書および刻書土器がまとまって出土している。第97図1は覆土下層出土土師器坏口縁部破片。推定口径11.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。体部外面に「矢」という墨書が逆位に記されている。さらにそれをなぞるように刻書をおこなっている。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。2は覆土下層出土土師器坏口縁部破片。推定口径11.0cmを測り、内外面の調整は1に同じ。体部外面に「矢」という墨書あり。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。3は覆土下層出土土師器坏体部破片。墨書土器で墨書の内容は不明。内外面の調整は1に同じ。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。4はピット内出土土師器皿。完形。口径13.1cm、底径5.0cm、器高2.1cmを測り、外面はロクロナデの後回転ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転ヘラケズリ。底部から体部にかけて「矢」という墨書あり。それを1と同様にペン先状の道具でなぞり、刻書をおこなっている。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。5は覆土下層出土土師器皿。約3分の2残存。口径12.5cm、底径4.6cm、器高2.1cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部から体部にかけて「矢」という墨書あり。これもペン先状の道具で墨書をなぞり、刻書をおこなっている。6はピット内出土土師器皿。約4分の3残存。口径14.2cm、底径6.6cm、器高2.5cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部は回転ヘラケズリ。底部に練状の刻書が3本みられる。何かの記号だろうか。色調は明褐色、胎土は赤色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。7はピット内出土土師器皿。約2分の1残存。口径12.6cm、底径6.0cm、器高2.1cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部は回転ヘラケズリ。底部に「欠」という刻書あり。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。8はピット内出土土師器坏口縁部破片。推定口径11.8cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。色調は褐色、胎土は赤色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は

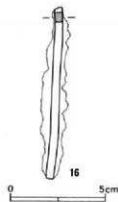


第97图 第66号住居址出土遺物(1)(1/4)



第98図 第66号住居址出土遺物②(1/3)

良好。9はピット内出土土師器坏体部下半～底部破片。底径4.8cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色胎土は赤色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。10は覆土下層出土土師器坏。約4分の1残存。推定口径11.2cm、推定底径5.2cm、器高3.9cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理とミガキを施す。底部は回転糸切り。色調は明褐色、胎土は黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。11は覆土下層出土土師器坏高台部破片。高台径6.6cmを測り、内外面とも黒色処理を施し、ミガキを加えている。高台は付け高台。色調は黒褐色、胎土は黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。12は覆土下層出土土師器皿。約3分の2残存。推定口径13.7cm、底径6.3cm、器高2.5cmを測り、内外面および底部の調整は4に同じ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。13はカマド内出土土師器壺口縁部破片。推定口径27.8cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は茶褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。第98図14と15は砥石である。14はほぼ完存。現長13.5cm、幅8.4cm、厚さ2.6cmを測り、扁平な台形状の断面をもつ。3面が砥面とされ、1面には鋭利な擦痕が残る、ほかの2面にも細かい擦痕が残る。石材はホルンフェルス製。15は両端が欠損しており、現長9.6cm、幅3.5cm、厚さ1.7cmを測り、長方形の断面をもつ。4面が砥面とされ、各面に斜めの細かい擦痕が残る、砥粒痕が顕著である。石材は凝灰岩製。いずれも覆土下層出土。

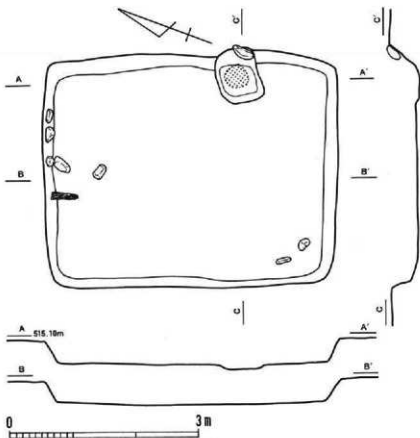


第99図 第66号住居址出土遺物③(1/2)

鉄製品 第99図16は覆土下層出土棒状鉄製品。上端を欠損。現長9.0cmを測り、上端部分で0.5×0.4cmの長方形断面をもつ。おそらく鉄鐵の茎部だと思われる。

第67号住居址(第100・101図)

本住居址はBIXN-7・8グリッドに位置しており、本住居址の北西側には第66号住居址が



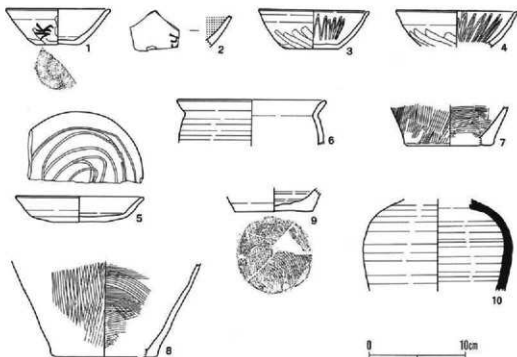
第100図 第67号住居址(1/60)

近接している。ほかの遺構との重複関係はない。遺構の遺存状態は、遺構上部が耕作などで削平をうけており、あまり良い状態ではない。主軸方位は $N-70^{\circ}-E$ である。

遺構の規模は長軸4.74m、短軸3.78mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は南壁で最大38cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は基本的に黄褐色土を床面としているが全体に軟弱で、各所で砂層が露出している。ピットは確認されていない。

カマドは東壁中央からやや南東コーナー寄りに位置している。規模は長軸0.88m、短軸0.68mを測り、主軸方位は $N-58^{\circ}-E$ である。天井部は遺存せず、袖部も芯である袖石わずかに1個遺存するのみである。燃焼部は床面を約5cm掘り込んで構築しており、焼土が若干散っている。煙道部は半円形に掘り込み、約 45° の角度をもって立ち上がる。

遺物はあまり多くない。床面直上および覆土下層、カマド内から出土しており、土師器環・皿・甕、須恵器長頸瓶などがある。第100図1はカマド左袖部のほぼ床面直上出土土師器環。約6分の1残存。推定口径10.8cm、推定底径4.6cm、器高3.7cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部はヘラケズリ。体部外面に「矢」という墨書あり。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は普通。2は墨書土器の破片である。内容は不明。内面黒色土器の坏体部破片である。3はカマド内出土土師器環。口縁部の一部を欠く。口径11.4cm、底径5.6cm、器高4.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナ



第101図 第67号住居址出土遺物(1/4)

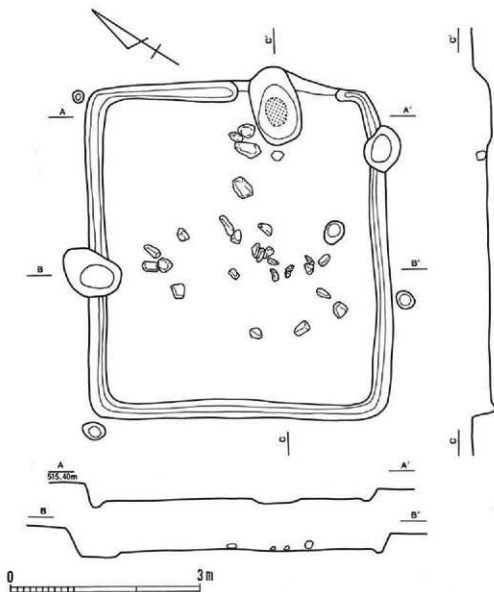
デの後暗文を施す。底部は全面ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は普通。4は覆土下層出土土師器坏口縁部破片。推定口径12.5 cmを測り、内外面の調整は3に同じ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。5は覆土下層出土土師器皿。約3分の1残存。推定口径13.6 cm、推定底径5.3 cm、器高2.7 cmを測り、外面はロクロナデの後回転ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。6はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径15.4 cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は普通。7はカマド内出土土師器甕底部破片。推定底径8.8 cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木炭痕。色調は茶褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。8は覆土下層出土土師器甕底部破片。推定底径11.0 cmを測り、内外面の調整は7に同じ。色調は暗茶褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は普通。9はほぼ床面直上出土土師器甕底部破片。底径8.1 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は明褐色、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は良好。10は覆土下層出土須恵器長頸瓶胴部破片。推定最大径15.4 cmを測り、内外面ともロクロナデ。外面にわずかだが自然釉がかかる。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

第68号住居址(第102・103図)

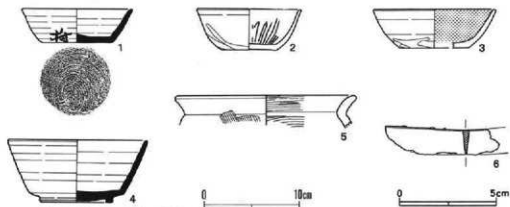
本住居址はB区L-6グリッドに位置しており、本住居址の北側には第25号掘立柱建物址が、東側には第28号掘立柱建物址が、西側には第45号掘立柱建物址が近接している。ほかの遺構との重複関係は、南壁と北壁においてピットと重複関係にあり、本住居址が切り込まれている。

遺構の遺存状態は、遺構上部が耕作などで削平をうけ、良い状態ではない。主軸方位はN-57°-Eである。

遺構の規模は長軸5.36m、短軸4.85mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁で最大30cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。カマド部分を除いた壁下に壁溝が巡っている。幅20~34cm、深さ5~10cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺のごくわずかの範囲のみ堅固で、あとは軟弱である。ピットは1個確認されている。



第102 図 第68号住居址 (1/60)



第103図 第68号住居址出土遺物(1/4)

径35 cm、深さ25 cmを測り、柱穴かどうかは不明である。

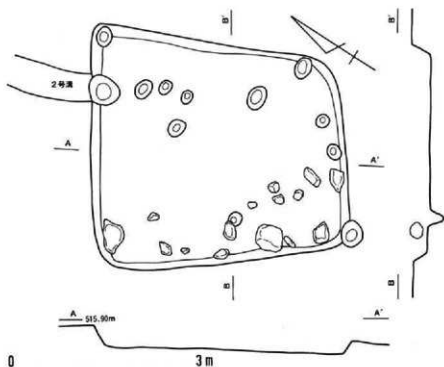
カマドは東壁中央からやや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.22m、短軸0.76mを測り、主軸方位はN-42°-Eである。天井部はすでに崩落しており、袖部は粘質の灰褐色土と暗褐色土を用いた両袖がわずかに遺存している。燃焼部は床面を約5 cm掘り込んで構築しており、焼土が顕著である。煙道部は半円形に掘り込み、約45°の角度をもって立ち上がる。

遺物は少ない。カマド内を中心に床面直上および覆土内から遺物は出土しており、その分布状態は散在した状態を示している。遺物は土師器環・甕、須恵器環、鉄製品などが出土している。第103図1は覆土下層出土須恵器環。約4分の1残存。推定口径11.4 cm、底径7.0 cm、器高3.6 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。体部外面に「□村」という墨書あり。後述する第84号住居址出土墨書土器の例からみて「千村」であろう。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。2はカマド内出土土師器環。約3分の1残存。推定口径10.6 cm、推定底径5.6 cm、器高4.3 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は赤色粒を含み、焼成は良好。3はほぼ床面直上出土土師器環。約5分の1残存。推定口径12.4 cm、推定底径7.0 cm、器高4.1 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後黒色処理とミガキを施す。底部はヘラケズリ。色調は白色粒・石英を含み、焼成は良好。4は覆土下層出土須恵器環。口縁部を一部欠損。推定口径14.4 cm、高台径7.6 cm、器高6.6 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は灰褐色、胎土は白色粒・小石を含み、焼成は良好。5はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径18.4 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は暗茶褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は普通。

鉄製品 6は覆土下層出土の刀子である。身部のみ遺存。現長5.9 cm、身部幅1.2~1.3 cm、棟厚0.3 cmを測り、錆のため表面の剥落が激しい。刀部は一部欠けている。

第69号住居址(第104図)

本住居址はB区L-5・6グリッドに位置している。本住居址の西側には第45号掘立柱建物址が、南東側には第241号土塼と第26号掘立柱建物址が近接している。本住居址の北壁では第2号溝状遺構と重複関係にあり、本住居址が第2号溝状遺構を切り込んで構築している。遺構



第104図 第69号住居址 (1/60)

の遺存状態は、遺構上部が耕作などで削平をうけており、あまり良い状態ではない。主軸方位は不明である。

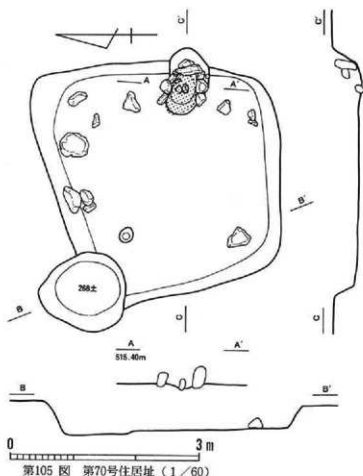
遺構の規模は長軸4.08m、短軸3.89mを測り、平面形は台形に近い隅丸方形を呈する。壁高は北壁において最大30cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットは計11個確認されている。径20~50cm、深さ20~30cmを測り、柱穴かどうかは不明である。壁溝およびカマドなどは確認されていない。

遺物はほとんどなく、覆土中より拳大から人頭大の礫が散在する状態で出土しているが、図示できるものはない。

第70号住居址 (第105・106図)

本住居址はB区O-3グリッドに位置しており、本住居址の北西側には第18号掘立柱建物址が近接している。また本住居址は第46号住居址と第268号土壇と重複関係にある。その新旧関係は、本住居址が第46号住居址を切り込んで構築し、第268号土壇が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は良い状態ではなく、遺構上部が桑の根によって激しく攪乱をうけており、確認作業にも支障をきたした程度である。主軸方位はN-78°-Eである。

遺構の規模は長軸3.92m、短軸3.86mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南壁で最大38cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としているが、北東コーナー壁下周辺は礫混じりの砂層が露出している。カマド前面部は比較的堅固であるが、あとは概して軟弱である。ピットは1個のみ確認されており、径26cm、

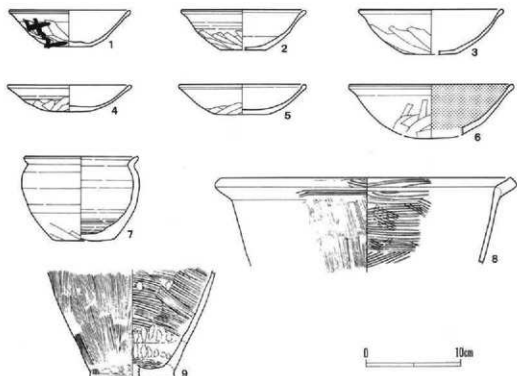


第105 図 第70号住居址 (1/60)

深さ20 cmを測るが、柱穴だとは思われない。

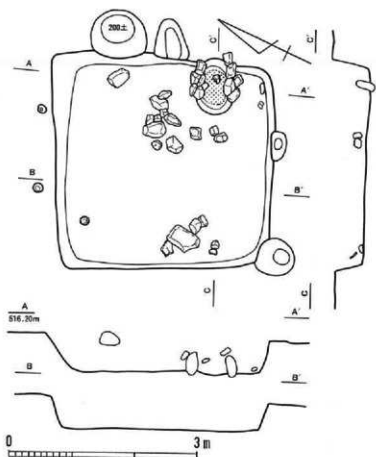
カマドは東壁中央からやや南東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.10m、短軸0.66 mを測り、主軸方位はN-100°-Eである。天井部は天井石が1個遺存し、もう1個が煙道部に落ち込んでいる。袖部は芯である袖石が7個遺存し、燃燒部は床面を約5 cm掘り込んで構築し、石製の支脚を据えている。煙道部は半円形に掘り込み、約53°の角度をもって立ち上がる。焼土は突き口部から燃燒部にかけて顕著である。

遺物はあまり多くない。床面直上およびカマド内を中心に出土しており、住居址中央から南壁側に集中する。遺物は土師器杯・皿・甕などが出土しており、鉄製品などの金属器は出土していない。第106図は床面直上出土土師器杯。約3分の2残存。墨書土器である。口径12.5 cm、底径4.0 cm、器高3.8 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部は全面ヘラケズリ。体部外面に「ヤ」という墨書あり。内面の一部にタールの付着がみられる。色調は暗褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英・金雲母を含み、焼成は良好。2も床面直上出土土師器杯。約3分の1残存。推定口径12.8 cm、推定底径4.8 cm、器高4.2 cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英・金雲母を含み、焼



第106図 第70号住居址出土遺物(1/4)

成は良好。3はカマド内出土土師器環。約3分の1残存。推定口径15.2cm、推定底径5.4cm、器高4.8cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。4は床面直上出土土師器皿。約2分の1残存。推定口径13.0cm、底径4.2cm、器高2.7cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。色調は暗褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。5はカマド内出土土師器皿。約2分の1残存。推定口径13.2cm、底径5.1cm、器高3.2cmを測り、内外面および底部の調整は1に同じ。色調は暗赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。6は床面直上出土土師器環。約5分の1残存。推定口径17.4cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後黒色処理を施す。外面も一部黒色化している。色調は褐色、胎土は赤色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。7は床面直上出土土師器甕。約4分の3残存。口径12.0cm、底径6.3cm、最大胴径12.2cm、器高9.0cmを測り、外面はロクロナデの後胴部をヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部は一部器面が剥落しているが、ヘラケズリ。器面は全体に2次焼成をうけ非常に荒れている。内面にはススの付着がみられる。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は普通。8はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径30.2cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は褐色、胎土は白色粒・黒色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。9もカマド内出土土師器甕底部破片。推定底径8.4cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色を呈し、胎土は白色粒・金雲母を多量に含み、焼成は良好。



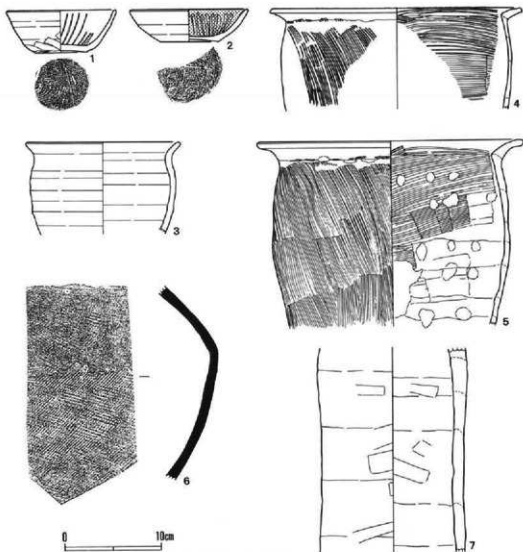
第107図 第71号住居址 (1/60)

第71号住居址 (第107・108・109図)

本住居址はB区K-5グリッドに位置しており、本住居址の東側には第203号土壌などの土壌群が、南西側には第81号住居址が近接している。また本住居址は第45号掘立柱建物址と第200号土壌と重複関係にある。第45号掘立柱建物址との新旧関係は、判然とせず明言できないが、第200号土壌は本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は比較的良く、壁および床面などもまますの状態を保っている。主軸方位は $N-65^{\circ}-E$ である。

遺構の規模は長軸3.52m、短軸3.50mを測るやや小形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁で最大58cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、カマドの前面部のみ堅固で、あとは概して軟弱である。ピットなどは確認されていない。

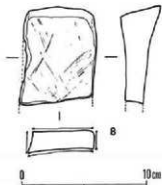
カマドは東壁中央からやや南東コーナー寄りに位置している。規模は長軸0.91m、短軸0.83mを測り、主軸方位は $N-68^{\circ}-E$ である。天井部はすでに崩落し、袖部は芯である袖石のみを遺存し、良好な状態で検出されている。燃焼部は床面を約5cm掘り込んで構築しており、奥部に石製の支脚を据えている。煙道部は非常に短く、半円形に掘り込み、約 80° の角度をもつ



第108図 第71号住居址出土遺物(1/4)

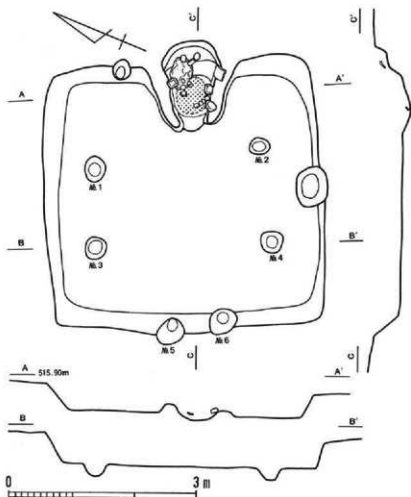
て立ち上がる。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物はさほど多くなく、カマド内を中心に出土している。住居址内に分布する遺物は、カマド脇および住居址西側のほぼ床面直上～覆土下層より出土し、散在する状態を示す。遺物は土師器坏・甕、須恵器甕、円筒形土器、砥石などが出土している。第108図1はカマド内出土土師器坏。約3分の2残存。推定口径11.4cm、底径5.5cm、器高4.3cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。2は覆土下層出土土師器坏。約3分の1残存。推定口径12.3cm、底径6.1cm、



第109図 第71号住居址出土遺物(1/3)

器高3.3cmを測り、外面はロクロナデ。内面はロクロナデの後黒色処理を施し、ミガキと暗文を施す。底部は回転糸切り。色調は褐色、胎土は黒色粒・石英を含み、焼成は良好。3はカマド内出土土師器甕口縁部～胴部下半破片。推定口径16.1cmを測り、内外面ともロクロナデ。2次焼成のため器面の剥落が激しい。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒・石英を含み、焼成は良好。4はカマド内出土土師器甕口縁部～胴部上半破片。推定口径26.0cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が暗茶褐色、内面が褐色を呈し、胎土は赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。5はカマド内出土土師器甕。胴部下半～底部を欠く。口径29.6cm、胴径24.3cmを測り、内外面ともハケ調整ではあるが、内面の胴部下半はその後ヘラナデを施し、指頭圧痕が顕著である。色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈し、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。6は覆土下層出土須恵器甕肩部破片。外面はロクロナデの後平行条線を残すタタキを施し、内面はロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は良好。7はカマド内出土円筒形土器。両端を欠損。現長21.5cm、幅15.6cmを測り、内外面ともヘラズリ成形で輪積み

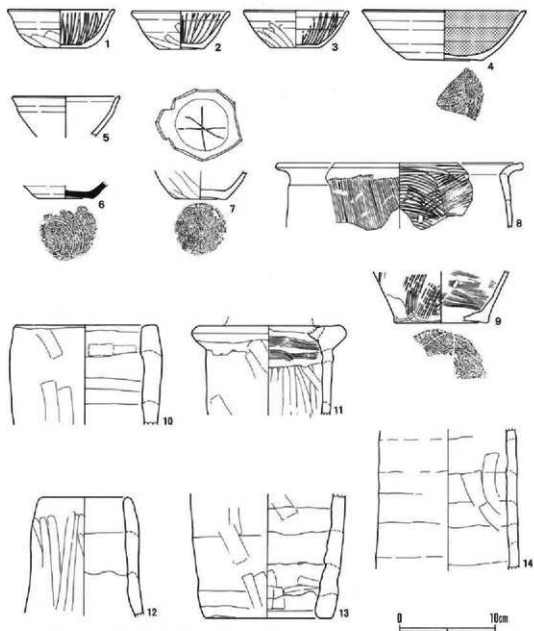


第110図 第72号住居址(1/60)

痕が明瞭である。色調は明褐色で、胎土は白色粒・石英を含んで粗く、焼成は普通。第109 図 8は住居址中央部覆土下層出土磁石である。約2分の1残存。現長7.2cm、幅5.4cm、厚さ2.8cmを測り、4面を砥面としている。上面と下面には斜めの擦痕が著しく、砥粒痕も顕著である。両面とも磨耗のため彎曲している。石材は凝灰岩製である。

第72号住居址 (第110・111 図)

本住居址はB区L-4・5グリッドに位置しており、本住居址の北東側には第23号掘立柱建物址が、南側には第69号住居址が近接し、西側には第2号溝状遺構が走っている。本住居址は第21



第111 図 第72号住居址出土遺物 (1/4)

号獨立柱建物址と重複関係にあり、その新旧関係は、本住所址が第21号獨立柱建物址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、遺構上部が一部耕作などで削平をうけているが、まずまずの遺存状態を保っている。主軸方位はN-68°-Eである。

遺構の規模は長軸4.34m、短軸4.32mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁で最大48cmを測り、緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、カマド周辺部のみ堅固で、あとは概して軟弱である。ピットは計6個確認されている。No.1～No.4ピットは径30～40cm、深さ20～25cmを測り、その配置などからみて柱穴だと思われる。西壁にみられるNo.5・No.6ピットは径40cm、深さ40cmを測り、入り口状施設に伴うものだろうか。

カマドは東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸1.46m、短軸0.96mを測り、主軸方位はN-65°-Eである。天井部はすでに崩落している。袖部の構造は粘質の灰褐色土と暗褐色土とを混ぜた土を中心に用い、芯として煉瓦を数個用いている。燃焼部は床面を約10cm掘り込んで構築しており、煙道部は半円形に掘り込み、中位に段をもち、約65°の角度をもって立ち上がる。炭土は燃焼部において顕著である。

遺物はカマド周辺部およびカマド内より中心に出土しているが、その量はあまり多くない。土師器環を中心に土師器鉢、須恵器杯、円筒形土器が出土している。また金属器は出土していないが、鉄滓が覆土中より少量出土している。第111図1はカマド壁面直上出土土師器環。ほぼ完形。口径11.1cm、底径5.2cm、器高4.0cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後増文を施す。底部は全面ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。2はカマド内出土土師器鉢。約3分の1残存。推定口径10.2cm、推定底径4.5cm、器高4.0cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は全面ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・石英を含み、焼成は良好。3は覆土下層出土土師器鉢。約3分の2残存。口径11.0cm、底径5.0cm、器高3.9cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は全面ヘラケズリ。内面が一部剥落している。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・石英を含み、焼成は良好。4は覆土下層出土土師器鉢。約3分の1残存。推定口径17.0cm、推定底径7.8cm、器高5.2cmを測り、外面はロクロナデ。内面はロクロナデの後黒色処理を施し、ミガキを加えている。底部は同転糸切り。色調は明褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。5は覆土下層出土土師器鉢口縁部破片。推定口径11.2cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は暗褐色、胎土は赤色粒・石英を含み、焼成は良好。6は覆土下層出土須恵器杯底部破片。底径5.9cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は同転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。7はほぼ床面直上出土土師器鉢底部破片。底径5.6cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部は同転糸切りの後周辺をヘラケズリ。底部内面に「*」状の刻畫がみられる。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。8はカマド内出土土師器鉢口縁部破片。推定口径25.6cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が茶褐色、内面が暗褐色を呈し、胎土は白色粒・金雲母・小石を含み、焼成は良好。9もカマド内出土土師器鉢底部破片。推定底径11.6cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は茶褐色、胎土は白色粒・金雲母・小石を含み、焼成は普通。11はカマド内出土円筒形土器上端

部破片。推定上端径14.5 cmを測り、内外面ともヘラケズリの後ナデ調整。内面は輪積み痕が顕著。色調は明褐色、胎土は白色粒・小石を含んで粗く、焼成は普通。11もカマド内出土円筒形土器上端部破片。鈔状に凸帯をもち、推定最大径16.2 cmを測る。外面はヘラケズリの後ナデ調整を施し、内面は凸帯部周辺のみナデ調整を施し、あとはヘラケズリのみ。色調は明褐色、胎土は白色粒・小石を含んで粗く、焼成は普通。12はカマド脇ほほ床面直上出土の円筒形土器上端部破片。推定上端径9.1 cmを測り、外面はヘラケズリのみ施し、内面はヘラケズリの後ナデ調整。わずかに輪積み痕が残る。色調は明褐色、胎土は白色粒・小石を含んで粗く、焼成は普通。13はカマド内出土円筒形土器下端部破片。推定下端径13.3 cmを測り、内外面ともヘラケズリの後ナデ調整。内外面に輪積み痕がみられる。色調は明褐色、胎土は白色粒・小石を含んで粗く、焼成は普通。14もカマド内出土円筒形土器胴部破片。推定胴径15.0 cmを測り、内外面ともヘラケズリの後ナデ調整。内外面に輪積み痕がみられる。色調は明褐色、胎土は白色粒・石英・小石を含み、焼成は普通。

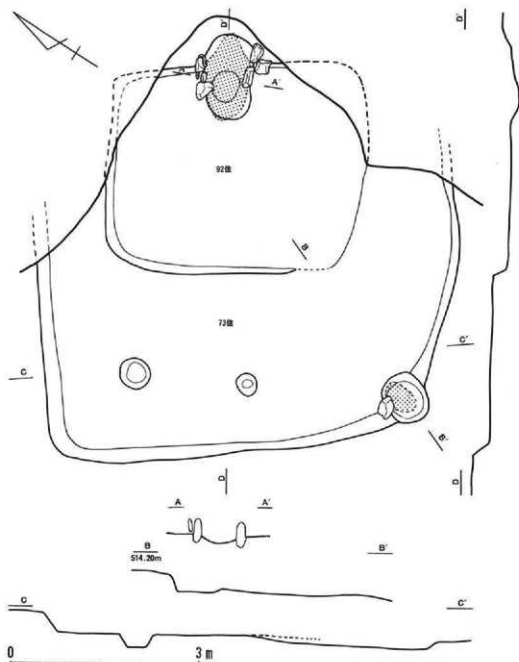
第73号住居址（第112・113図）

本住居址はB区S-4グリッドに位置しており、本住居址の南西側には第42号住居址が近接している。また本住居址は第92号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は本住居址が第92号住居址の上部を一部切り込んで床面を構築している。遺構の遺存状態は悪く、耕作などのため遺構上部が削平されており、遺構の掘り込みはわずかに遺存するのみである。主軸方位はN130°-Wである。

遺構の約3分の1は調査区外にあり、その全容は明らかではないが、現存でその規模は南北軸6.60m、東西軸4.00mを測り、平面形はおそらく隅丸方形を呈すると思われる。壁高は北西壁で最大30 cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は黄褐色土を床面としているが、第92号住居址部分は暗黄褐色土の貼床である。一部擾乱をうけている箇所もあり、全体に軟弱で捉えにくい。ピットは2個確認されており、径40~50 cm、深さ20 cmを測る。柱穴かどうかは不明である。

カマドはほほ南コーナー部に位置している。規模は長軸0.82m、短軸0.66mを測り、主軸方位はN-219°-Wである。天井部も袖部も遺存していないが、袖石と思われる礎が1個みられる。燃焼部は床面を約4 cm掘り込んで構築しており、煙道部は半円形に掘り込み、約70°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部においてわずかに遺存する。

遺物は極めて少なく、覆土中より土師器破片、灰釉陶器片、鉄鏝がわずかだか出土している。第113図1は覆土下層出土土師器環底部破片。底径7.6 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は明褐色、胎土は白色粒を含み、焼成はやや軟質。2は覆土下層出土土師器環高台部破片。推定高台径8.0 cmを測り、外面はロクロナデ。内面はロクロナデの後黒色処理を施す。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。3は覆土下層出土灰釉陶器皿高台部破片。推定高台径6.8 cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。外面にヘラケズリがみられる。高台の稜は比較的はっきりしている。破片のため灰軸は内面しかみられない。軸調は淡緑色を呈し、胎土は砂粒を含むが緻密で、焼成は良好。



第112 図 第72・92号住居址 (1/60)

鉄製品 7は覆土下層出土の雁股鎌である。刃部および茎部の一部をかいているが、ほぼ完存。現長8.8cm、根部長4.2cmを測る。根部の先端は2.5cm開き、片刃状を呈しており、0.3×0.1cmを測る。基部で0.5×0.3cm、茎部下端で0.2×0.2cmの方形断面をもつ。根部と茎部の境界に段をもつ。

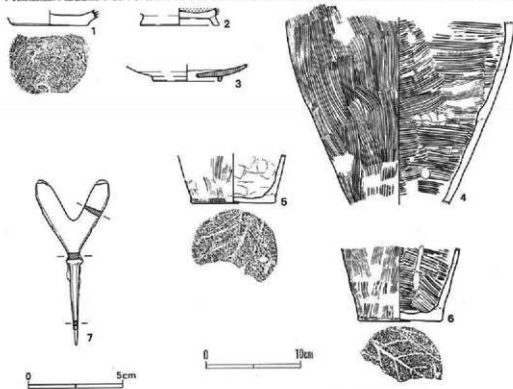
第92号住居址 (第112・113 図)

本住居址はB区S・T-4グリッドに位置している。前述のとおり本住居址は第73号住居址と重複関係にあり、第73号住居址に遺構上部を切り込まれて床面を貼られている。本住居址の北および東コーナーは調査区域外にあり不明で、南コーナーから南東壁は削平のため失われている。遺構の遺存状態もあまり良くない。主軸方位はN-57°-Eである。

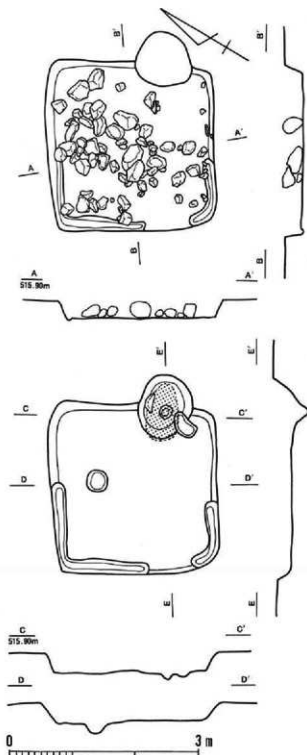
遺構の規模は推定で長軸4.02m、短軸3.30mを測り、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。壁高は南西壁で最大20cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としているが、所々で砂層が露出しており、遺存状態は悪い。

カマドは北東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸1.36m、短軸1.16mを測り、主軸方位はN-60°-Eである。天井部は崩落しており、袖部も芯である抽石を8個遺存する。燃焼部は床面を約8-10cm掘り込んで構築しており、煙道部は半円形に掘り込み、約20°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部から煙道部にかけて顕著である。

遺物はカマド内からのみ出土しており、住居址覆土内からは1点も出土していない。遺物の量は少なく、土師器甕だけに限られる。第113図4はカマド内出土土師器甕胴部破片。推定胴径23.8cmを測り、内外面ともハケ調整。内面には輪積み痕が残り、その輪積み部に指頭圧痕がみられる。色調は褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。5はカマド内出土土師器甕底部破片。底径8.8cmを測り、内外面ともハケ調整だが2次焼成をうけもろい。底部には木葉痕。色調は外面が茶褐色、内面が褐色を呈し、胎土は金雲母を含み、焼成は良好。6もカマド内出土土師器甕底部破片。推定底径8.3cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色



第113図 第73・92号住居址出土遺物(1~6は1/4、7は1/2)



第114 図 第74号住居址 (1/60)

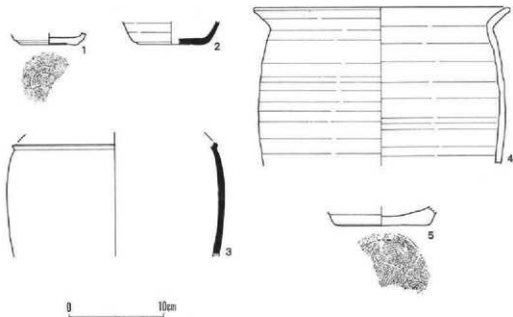
調は暗赤褐色、胎土は小石・金雲母を含み、焼成は良好。

第74号住居址 (第 114・115 図)

本住居址はB区J-5グリッドに位置しており、本住居址の南側には第38号掘立柱建物址と第212号土壇が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。遺構の遺存状態は、遺構上部が耕作などの攪乱および削平をうけており、あまり良い状態ではない。主軸方位は $N-60^{\circ}-E$ である。

遺構の規模は長軸2.76m、短軸2.69mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁で最大32cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。北壁、南壁、西壁の壁下に壁溝が巡っている。幅18~25cm、深さ5~6cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、カマド前面部のみ堅固で、あとは概して軟弱である。ピットは1個のみ確認されている。径34cm、深さ16cmを測り、柱穴かどうかは不明である。覆土上層から床面直上にかけて多量の礫が出土している。礫は住居址全体に分布しているが、とくに住居址北半分に集中する。礫の大きさは拳大から人頭大まであり、いずれも自然礫である。このような礫の出土状態を示す住居址は、前述した第50号住居址などがあり、人為的に投げ込まれたような状態を示している。

カマドは東壁中央からやや東コーナー寄りに位置している。規模は長



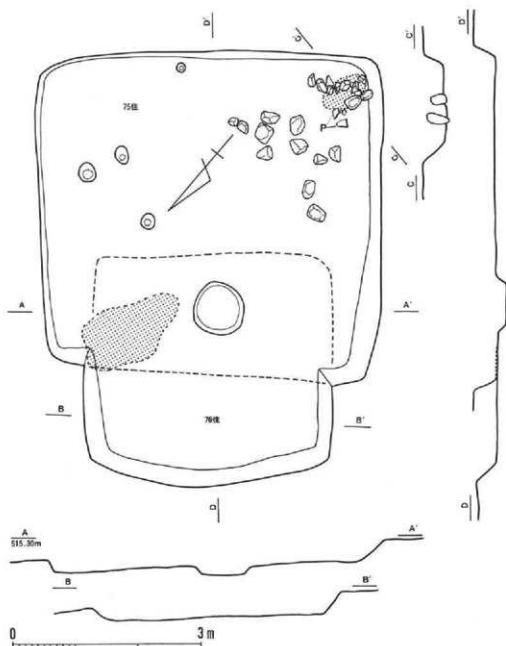
第115図 第74号住居址出土遺物(1/4)

軸1.02m、短軸0.84mを測り、主軸方位はN-70°-Eである。天井部はすでに崩落している。袖部も芯である袖石をわずかに1個遺存するのみで、右袖には袖石を据えたと思われる浅い掘り込みがみられる。燃焼部は床面を約5cm掘り込んで構築しており、支脚を据えたと思われる径20cm、深さ20cmのビットがみられる。煙道部は半円形に掘り込み、約60°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物はカマド内および住居址覆土から出土しているが、その量は少ない。土師器坏・甕、須恵器坏・四耳壺などが出土している。第115図1はほぼ床面直上出土土師器坏底部破片。底径6.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は明褐色、胎土は白色粒・黑色粒を含み、焼成はやや軟質。2は覆土下層出土須恵器坏底部破片。推定底径6.6cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。3はカマド内出土須恵器四耳壺の肩部～胴部にかけての破片である。推定胴径22.4cmを測り、外面はロクロナデの後平行条線の残るタタキを施し、内面はロクロナデの後ハケ調整を施す。外面には凸帯を貼り付けており、一部に自然釉がかかっている。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。4はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径26.2cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は褐色、胎土は白色粒・金雲母を多量に含み、焼成は普通。5はカマド内出土土師器甕底部破片。推定底径10.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は褐色、胎土は白色粒・金雲母を多量に含み、焼成は良好。

第75号住居址(第116・117図)

本住居址はB区O・P-2グリッドに位置しており、本住居址の南側には第45・46号住居址が近接している。また本住居址は第76号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は本住居址が第76号住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、住居址内部まで桑の根が入り込

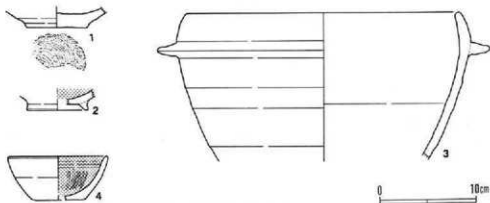


第116図 第75・76号住居址 (1/60)

み攪乱が激しい。主軸方位は $N-130^{\circ}-W$ である。

遺構の規模は長軸5.56m、短軸5.18mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南東壁で最大36cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黒褐色土の貼床を施し、黄褐色土小ブロックが混入している。とくに堅固な箇所はみられない。ピットは計4個確認されている。径15~30cm、深さ20cmを測り、柱穴かどうかは不明である。

カマドは南コーナーに位置している。遺存状態は良くなく、石組だけが遺存する。規模は推



第117 図 第75・76号住居址出土遺物(1/4)

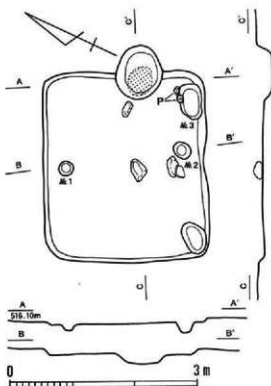
定で長軸1.00m、短軸0.60mを測り、主軸方位はN-162°-Wである。前述のとおり天井部は遺存せず、袖部の袖石のみが遺存しているが、これも一部崩れている。燃焼部の掘り込みはなく、焼土が若干遺存する。煙道部の掘り込みもほとんどなく、住居址のコーナーをそのまま利用しているようである。

遺物は非常に少なく、カマド周辺部からわずかに土師器皿および羽釜が出土している。第117図1は土師器皿底部破片。推定底径6.4cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は褐色、胎土は赤色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。2は覆土上層出土土師器高台部破片。推定高台径6.4cmを測り、

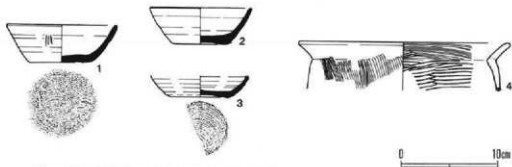
外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理を施す。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。3はカマド脇覆土下層出土土師器の口縁部~胴部下半破片である。推定口径28.2cm、推定胴径34.6cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は黒褐色、胎土は白色粒・金雲母を多量に含み、焼成は良好。

第76号住居址(第116・117 図)

本住居址はB区O-1・2グリッドに位置しており、前述のとおり本住居址は第75号住居址と重複関係にある。その新旧関係は、第75号住居址が本住居址を切り込んで構築し、貼床を施している。遺構の遺存状態も悪く、耕作など遺構上部を著しく削平されている。主軸方位はN-50°-Eである。



第118 図 第77号住居址(1/60)



第119 図 第77号住居址出土遺物(1/4)

遺構の規模は現存で南北軸3.80mを測り、平面形は不明だがおそらく隅丸方形を呈するものと思われる。壁高は南西壁で最大32cmを測り、緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としているが、砂質のため全体に軟弱である。ピットは土塊状を呈するものが住居址内南側にあり、径80cm、深さ10cmを測るが、性格は不明。

カマドは全く原形をとどめていないが、南東壁下に焼土の範囲がみとめられる。1.60×1.00mの範囲をもち、厚いところで4~5cmの堆積がみとめられる。おそらくこの焼土範囲がカマドの痕跡と思われる。

遺物は皆無に等しいが、ただ1点のみ住居址覆土下層から出土している。第117図4は土師器環である。約5分の1残存。推定口径10.2cm、推定底径5.4cm、器高4.6cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理を施し、ミガキと暗文を加えている。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。

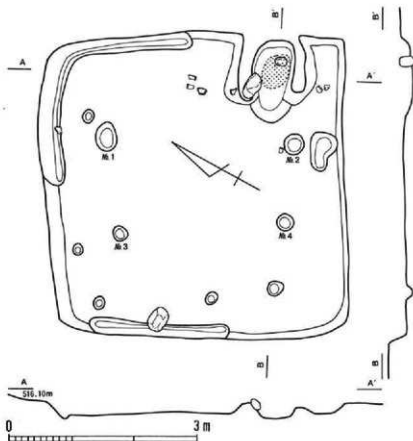
第77号住居址(第118・119図)

本住居址はB区I・J-3グリッドに位置しており、本住居址の北側には第78号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。遺構の遺存状態は、後世の耕作などにより遺構上部の大半を削平されており、かろうじて遺構の下部が遺存している。主軸方位はN-65°-Eである。

遺構の規模は長軸3.04m、短軸2.65mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁で最大12cmを測り、緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、とくに堅固な箇所はなく、全体に軟弱である。ピットは計4個確認されている。No1とNo2は径24~30cm、深さ10~16cmを測り、柱穴だと思われる。No3はほぼ東コーナーに位置し、径60×35cm、深さ10cmを測り、貯蔵穴だと思われる。

カマドは東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸0.88m、短軸0.76mを測り、主軸方位はN-74°-Eである。遺存状態は悪く燃焼部および煙道部の掘り方を遺存するだけである。燃焼部は床面を約10cm掘り込んで構築しており、焼土がわずかに遺存している。煙道部は半円形に掘り込み、約60°の角度をもって立ち上がる。

遺物は覆土内および貯蔵穴より出土しているが、その量は少ない。須恵器環、土師器甕片などが出土している。第119図IIは貯蔵穴内出土須恵器環。完形。口径11.4cm、底径5.5cm、器高

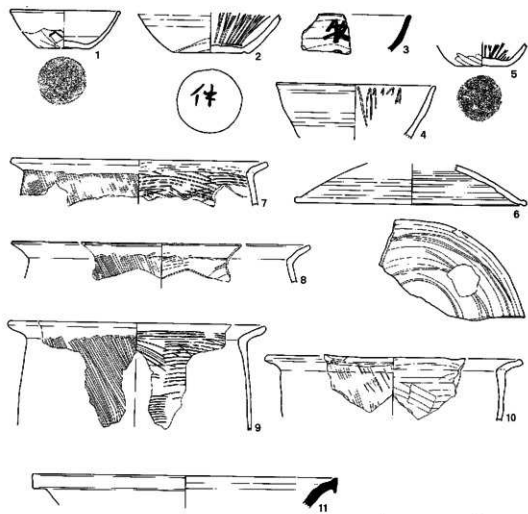


第120 図 第78号住居址 (1/60)

4.0 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切りである。体部外面にペン先状の道具による縦線3本の刻書がみられるが、文字なのか記号なのか不明である。色調は淡褐色、胎土は白色粒・黒色粒・赤色粒を含み、焼成は生焼け状態のためかやや軟質。2は貯蔵穴内出土須恵器環。約3分の1残存。推定口径10.4 cm、推定底径5.2 cm、器高3.9 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は全面ヘラケズリ。色調は淡灰褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成はやや軟質。3は覆土下層出土須恵器環の底部破片。底径6.0 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切りである。色調は暗灰褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は普通。4は覆土下層出土土師器壺口縁部破片。推定口径21.8 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

第78号住居址 (第120・121 図)

本住居址はB区I・J-2・3グリッドに位置しており、本住居址の南側には第192・193号土壘および第77号住居址が、南西側には第80号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。遺構の遺存状態は、本住居址が砂質層内に構築されているために崩落が激しく、さらに後世の耕作などのために遺構上部が削平されており、悪い状態にある。主軸方位はN-61°-Eである。



第121 図 第78号住居址出土遺物（1/4）

遺構の規模は長軸4.94m、短軸4.84mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は西壁で最大30cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝が北壁から東壁にかけての一部と西壁の一部の壁下に巡っている。幅24~40cm、深さ8~10cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は暗褐色土の貼床であるが、各壁際周辺では砂層が露出している。とくに堅固な箇所はなく、全体に軟弱である。ピットは計10個確認されている。No 1~No 4は径24~50cm、深さ15~20cmを測り、その位置関係などから支柱穴だと思われる、ほかのピットは支柱穴的なものと思われる。

カマドは東壁中央から、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.34m、短軸0.68mを測り、土軸方位はN-67°-Eである。天井部は崩落し、袖部は両袖が遺存している。粘質の灰褐色土を中心に構築しており、石はほとんど使用していない。燃焼部は床面を約8cm掘り込んで構築しており、奥部には石製の支脚を据えている。煙道部は半円形に掘り込み、約45°の角度をもって立ち上がる。礎上は燃焼部において顕著である。

遺物は土師器および須恵器の破片資料が中心である。覆土内および床面直上、カマド内などから土師器・壺・甕、須恵器・壺などが出土しており、黒書土器も3点出土している。第121図は覆土下層出土土師器。約3分の2残存。推定口径11.4 cm、底径5.2 cm、器高3.9 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。体部外面に墨書の一部がみられるが、欠いているため判読不可能。色調は明褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。2は覆土下層出土土師器。口径部を欠損している。底径7.8 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリで、一部黒色化している。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転ヘラケズリで、ケズり出し高台をもつ。底部外面に「件」という墨書がみられる。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。3はカマド内出土須恵器壺口径部破片。内外面ともロクロナデ。外面に「牧門」という墨書がみられる。一文字ではなく二文字以上記されている。色調は灰褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は普通。4は床面直上出土土師器壺口径部破片。推定口径16.6 cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後暗文を施すが、器面の剥落が顕著である。色調は褐色、胎土は白色粒・石英・金雲母を含み、焼成は普通。5は覆土下層出土土師器壺底部破片。底径4.6 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈し、胎土は赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。6はほぼ床面直上出土土師器蓋。天井部が欠損している。推定口径23.6 cmを測り、外面はロクロナデの後天井部を回転ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。色調は暗赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。7はカマド内出土土師器壺口径部破片。推定口径26.4 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が茶褐色、内面が暗褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・石英・金雲母を含み、焼成は良好。8は覆土下層出土土師器壺口径部破片。推定口径31.0 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が茶褐色、内面が暗褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。9はカマド内出土土師器壺口径部破片。推定口径26.4 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が茶褐色、内面が暗褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。10はカマド内出土土師器壺口径部破片。推定口径26.2 cmを測り、内外面ともハケ調整。外面は被熱のため剥落が激しい。色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・小石・金雲母を含み、焼成は普通。11は覆土下層出土須恵器壺口径部破片。推定口径31.6 cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は暗灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

第79号住居址（第122・124図）

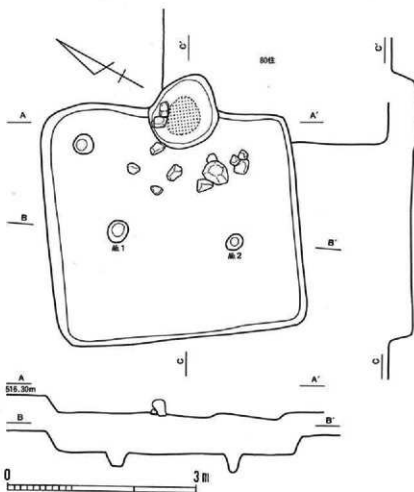
本住居址はB区H・I-3グリッドに位置しており、本住居址の西側には第43号掘立柱建物址が近接している。本住居址は第80号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は本住居址が第80号住居址に一部切り込まれている。遺構の遺存状態は、後世の耕作などによって遺構上部が一部削平をうけているため、必ずしも良好な状態とはいえない。主軸方位はN-61°-Eである。

遺構の規模は長軸4.01 m、短軸3.88 mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁にお

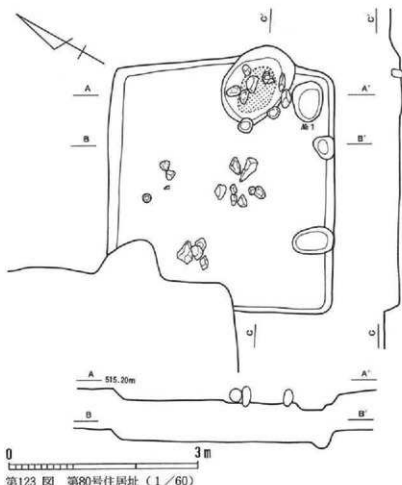
いて最大34 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、とくに堅固な箇所はなく、全体に軟弱である。ピットは計3個確認されている。No 1およびNo 2ピットは径30~35 cm、深さ22~30 cmを測り、その位置関係から主柱穴だと思われる。

カマドは東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸1.26 m、短軸1.04 mを測り、主軸方位はN-71°-Eである。天井部はすでに崩落し、袖部も左袖部の芯である袖石が2個遺存するのみである。燃焼部は床面を約5 cm掘り込んで構築しており、焼土が顕著である。煙道部は半円形に掘り込み、約65°の角度をもって立ち上がる。

遺物は覆土内を中心に出土し、その量は少ない。須恵器環、土師器甕片などが出土し、墨書土器も1点出土している。第124図1は覆土下層出土須恵器環。約3分の1残存。推定口径13.4 cm、推定底径7.2 cm、器高4.7 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は生焼け状態のためか乳白色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は軟質である。2



第122 図 第79号住居址 (1/60)

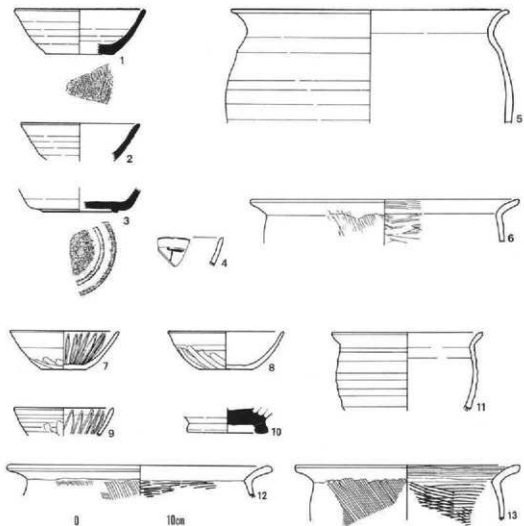


第123図 第80号住居址 (1/60)

は覆土下層出土須恵器環口縁部破片。推定口径12.2 cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。3は覆土下層出土須恵器環高台部破片。推定高台径7.8 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切りの後周辺を回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。4は覆土下層出土土師器環口縁部破片。墨書土器である。口縁部外面に記されているが、大半を欠いているため判読不可能。色調は赤褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。5は床面直上出土土師器甕。口縁部から胴部中位破片。推定口径28.8 cm、推定胴径30.0 cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は外面が明褐色、内面が褐色を呈し、胎土は白色粒・石英を多量に含み、焼成は良好。6はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径28.0 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は茶褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は普通。

第80号住居址 (第123・124・125図)

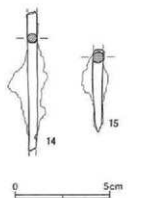
本住居址はB区I-3グリッドに位置しており、本住居址の北東側には第78号住居址が、南東側には第77号住居址が近接している。前述のとおり本住居址は、第79号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は第79号住居址を一部切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、



第124 図 第79・80号住居址出土遺物（1/4）

後世の耕作などにより遺構上部が削平されており、さらに砂質層を掘り込んで構築しているため、崩落も激しい。主軸方位はN-60°-Eである。

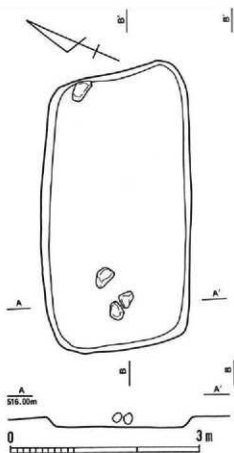
遺構の規模は長軸4.05m、短軸3.61mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁で最大18cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、一部では砂層が露出している。とくに堅固な箇所はなく、全体に軟弱である。ピットは計4個確認されている。カマド脇に位置するNo1ピットは径65×50cm、深さ10cmを測り、遺物の出土は少ないが貯蔵穴だと思われる。南壁下に位置する2個のピットは入り口状施設に伴うものかもしれない。



第125 図 80号住居址出土遺物（1/2）

カマドは東壁中央からやや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.35m、短軸0.98mを測り、主軸方位はN-65°-Eである。天井部は崩落し、袖部は芯である袖石が両袖にそれぞれ2個ずつ遺存している。燃焼部は床面を約5cm掘り込んで構築しており、奥部には石製の支脚を据えている。煙道部は半円形に掘り込み、約30°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部において顕著である。

遺物は土師器環・甕、須恵器長頸瓶高台部破片などがあり、床面直上および覆土内、カマド内などから出土しており、その量はさほど多くない。第124図7はカマド内出土土師器環。約4分の1残存。推定口径11.2cm、推定底径4.5cm、器高4.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は全面ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。8はカマド内出土土師器環。約3分の1残存。推定口径12.0cm、推定底径5.4cm、器高4.0cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。底部は回転糸切りの後周辺をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を多量に含み、焼成は良好。9は覆土下層出土土師器環口縁部破片。推定口径10.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。10はほぼ床

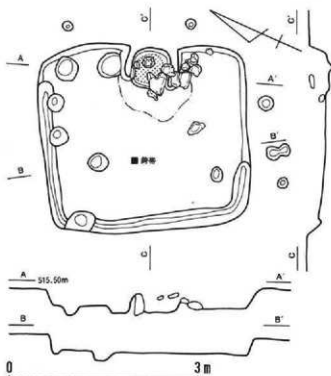


第126図 第81号住居址 (1/60)

面直上須恵器長頸瓶高台部破片である。高台径8.2cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。外面の一部に自然軸がかかる。色調は灰褐色、胎土は白色粒を多量に含み、焼成は良好。11はカマド内出土土師器甕。口縁部から胴部下半破片。推定口径15.3cm、推定胴径14.7cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は明褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は良好。12はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径27.6cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は暗茶褐色、胎土は白色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。13は覆土下層出土土師器甕口縁部破片。推定口径23.0cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は茶褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。第125図に示した棒状鉄製品も2点出土している。

第81号住居址 (第126図)

本住居址はB区K-5・6グリッドに位置しており、本住居址の北東側に第71号住居址が、西側に第38号独立柱建物址などが近接している。本住居址は第45号独立柱建物址と重

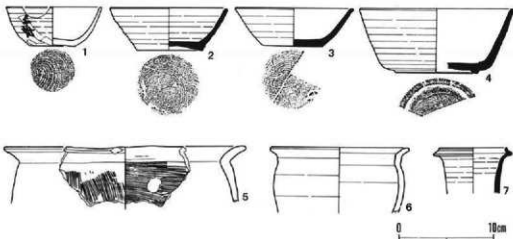


第127 図 第82号住居址 (1/60)

く出土せず、端が数個出土しているのみである。

第82号住居址 (第 127・128・129 図)

本住居址はB区J・K-6・7グリッドに位置しており、本住居址の東側には第45号掘立柱建物址が、西側には第84号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。遺構の遺存状態は、後世の耕作などにより遺構上部を削平されているが、まずま



第128 図 第82号住居址出土遺物 (1/4)

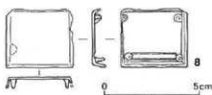
複関係にあり、その新旧関係は、本住居址が第45号掘立柱建物址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、後世の耕作などにより遺構上部を削平されており、わずかに掘り込みを残すのみである。主軸方位は不明。

遺構の規模は長軸4.50m、短軸2.40mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は南壁で最大18 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁高はみられない。床面は黄褐色土を床面としているが、全体に軟弱である。ピットは確認されていない。

カマドはなく、焼土などの痕跡もみられない。遺物も全

ずの遺存状態といえる。主軸方位はN-63°-Eである。

遺構の規模は長軸3.31m、短軸3.08mを測る小形の住居地で、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は南壁で最大33cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。北壁から西壁にかけてと、南壁の一部にかけて壁溝が巡っている。幅20~30cm、深さ5~8cmを測り、断



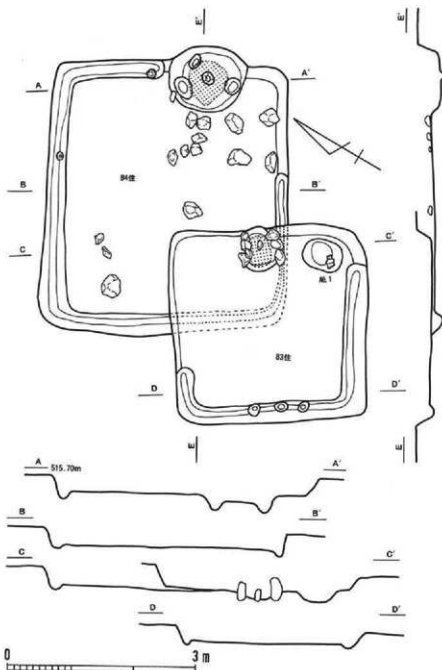
第129図 第82号住居址出土遺物

(1/2)

面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、カマド前面部は堅固で、あとは概して軟弱である。ピットは計7個確認されている。径25~40cm、深さ10~20cmを測り、いずれも柱穴なのかどうかは不明である。

カマドは東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸0.68m、短軸0.62mを測り、主軸方位はN-68°-Eである。天井部は崩落しており、その天井石に使用されたと思われる平石がカマド前面に崩れ落ちている。袖部は芯である袖石と粘質の灰褐色土および暗褐色土で構築されており、両袖とも遺存している。燃焼部は床面を約5cm掘り込んで構築しており、その奥部には支脚を据えたと思われる径18cm、深さ6cmの小ピットがみられる。煙道部は半円形に掘り込み、約65°の角度をもって立ち上がる。

遺物は量的には少ないが、床面直上およびカマド内などから出土し、土師器杯・甕、須恵器杯・長頸瓶口頸部破片などが出土している。また住居地中央の床面直上より銅製の鈴帯が1点出土し、墨書土器も1点出土している。第128図1はカマド右袖部の東壁下床面直上出土の土師器杯。約4分の3残存。口径10.0cm、底径4.7cm、器高4.1cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデ。底部は回転糸切りの後周辺部をヘラケズリ。体部外面に「千村」という墨書がみられる。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒・石英を含むが緻密で、焼成は良好。2は床面直上出土須恵器杯。約2分の1残存。推定口径12.2cm、底径7.0cm、器高4.4cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。3はカマド内出土須恵器杯。約2分の1残存。推定口径12.4cm、底径5.3cm、器高4.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰白色、胎土は白色粒・黒色粒・赤色粒を含み、焼成はやや軟質。4はカマド内出土須恵器杯。約3分の1残存。推定口径16.2cm、推定高台径8.6cm、器高6.7cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切りの後周辺部を回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は普通。5はピット内出土土師器甕口縁部破片。推定口径25.4cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は暗茶褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。6は覆土下層出土土師器甕。口縁部~胴部下半破片。推定口径14.4cm、推定胴径13.7cmを測り、内外面ともロクロナデ。器面はかなり荒れている。色調は暗褐色、胎土は小石・白色粒・赤色粒を含み、焼成は普通。7は覆土下層出土須恵器長頸瓶口頸部破片。推定口径7.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。内外面に自然釉がかかる。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。金属器第129図8は銅製鈴帯の巡方表金具である。縦幅3.0cm、横幅3.5cm、厚さ0.1cmを測る。裏面には長



第130図 第83・84号住居址 (1/60)

さ0.5cm、幅0.1~0.2cmの紙が四隅にみられ、下辺の紙の間には縦幅0.2cm、横幅2.3cm、深さ0.1cmの溝が掘られている。

第83号住居址 (第130・131図)

本住居址はB区J-7グリッドに位置しており、本住居址の東側には第82号住居址が、南西

り土器片が多く出土していることなどから、貯蔵穴だと思われる。壁溝内にみられるピットの性格については不明である。

カマドは東壁のはほぼ中央に位置している。規模は長軸0.72m、短軸0.58mを測り、土軸方位はN-52°-Eである。天井部はかろうじて天井石が1個遺存していたが、調査中に崩れ落ちてしまった。袖部は芯である袖石と補強材である粘質の灰褐色土と暗褐色土が遺存している。燃焼部は床面を約8cm掘り込んで構築しており、その奥部には石製の支脚を据えている。煙道部は半円形に掘り込み、約60°の角度をもって立ち上がる。

出土遺物は少なく、覆土内およびカマド内などから土師器環・甕などが出土している。第131図1は覆土下層土上土師器環。底部を欠損。推定口径10.8cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は不明。色調は明褐色、胎土は赤色粒・黒色粒・白色粒を含み、焼成は良好。2はカマド内出土土師器雙口縁部破片。推定口径23.1cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色を呈し、胎土は白色粒・金雲母を含み焼成は良好。3は貯蔵穴内出土土師器甕。口縁部～胴部中位破片。推定口径23.2cm、推定胴径21.4cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が暗褐色、内面が茶褐色を呈し、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。

第84号住居址（第130・131・132図）

本住居址はB区J-6・7グリッドに位置しており、本住居址の北側には第39号掘立柱建物址と第234号土塋が、東側には第82号住居址が、南西側には第37号掘立柱建物址などが近接している。前述のとおり本住居址は、第83号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は第83号住居址が本住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、第83号住居址同様、後世の耕作などによって遺構上部を削平されているが、まづまづの状態を保っている。土軸方位はN-60°-Eである。

遺構の規模は長軸4.44m、短軸3.90mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁で最大30cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。東壁と南壁の一部、北壁および西壁にかけての壁下に壁溝が巡っている。幅20～44cm、深さ5～10cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としおり、カマド前面部がわずかに早く踏み固められているが、あとは概して軟弱である。ピットは確認されていない。

カマドは東壁中央から、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.26m、短軸1.08mを測り、土軸方位はN-62°-Eである。天井部および袖部遺存せず、袖部があったと思われる箇所にはピットが3個みられ、径20～40cm、深さ15cmを測る。おそらく袖石を据えたものだろう。カマド前面に散乱してみられる礫は、天井石や袖石に使用されていたものであろう。燃焼部は床面を約10cm掘り込んで構築しており、その奥部には支脚を据えたと思われるピットがみられる。径20cm、深さ5cmを測る。煙道部は半円形に掘り込み、約70°の角度をもって立ち上がる。

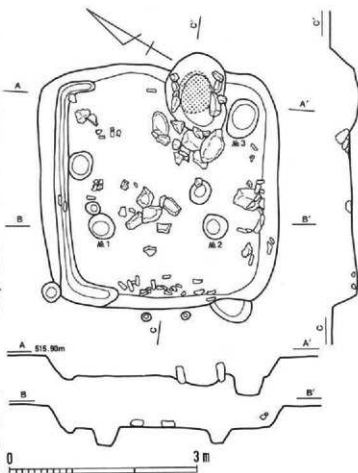
遺物は少なく、床面直上およびカマド内、住居址覆土内などから出土しており、須恵器環、土師器環・甕などがある。墨書土器が3点、鉄製品も1点だけが出土している。第131図4は北壁際

覆土下層出土須恵器環。ほぼ完形。口径11.3 cm、底径6.4 cm、器高3.9 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。体部外面に「干」という墨書がみられる。色調は灰白色、胎土は白色粒・黒色粒・赤色粒を含み、焼成はやや軟質。5は覆土下層出土須恵器環口縁部破片。墨書土器である。内外面ともロクロナデ。外面に墨書がみられるが判読不能。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。6は覆土下層出土土師器環口縁部破片。推定口径11.1 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ、内面はロクロナデの後暗文を施す。体部外面に墨書がみられる。欠いてはいるが「干」であろう。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。7は覆土下層出土土師器環。約3分の1残存。推定口径11.2 cm、推定底径5.8 cm、器高4.4 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後底部内面まで暗文を施す。底部は全面ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。8はほぼ床面直上出土須恵器環高台部破片。高台径7.6 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。9はカマド内出土土師器甕底部破片。底径7.0 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は明褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は良好。10はカマド右袖輪床面直上出土土師器甕。口縁部～胴部下位破片。推定口径24.3 cm、推定胴径24.5 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は暗褐色、胎土は黒色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は普通。

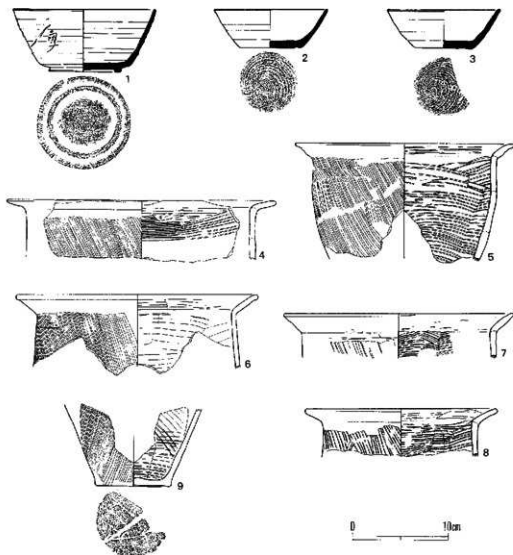
鉄製品 第132 図11は覆土下層出土基部である。両端を欠損し現長5.2 cm、幅0.9 cm、厚さ0.4 cmを測る。刀子か鎌の基部であろう。

第85号住居址 (第133・134・135 図)

本住居址はB区H-6グリッドに位置しており、本住居址の南東側には第40号掘立柱建物址が、北西側には第86・87号住居址などが



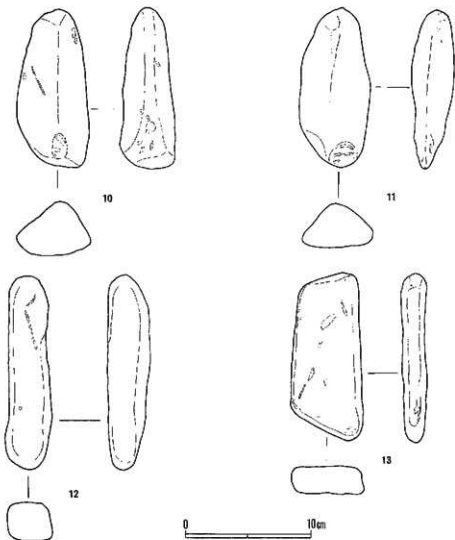
第133 図 第85号住居址 (1/60)



第134 図 第85号住居址出土遺物Ⅱ(1/4)

近接している。本件居址はほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。遺構の遺存状態は、遺構上部を後世の耕作などにより一部削平されているが、ほかの攪乱はほとんどなく良好な状態を保っているといえる。主軸方位はN 58° Eである。

遺構の規模は長軸3.92m、短軸3.86mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は西壁で最大40cmを測り、緩やかに立ち上がる。北壁および東壁と西壁の一部の壁下に壁溝が巡っている。幅20～35cm、深さ5～8cmを測り、断面形はL字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、とくに堅固な箇所はみとめられず、全体に軟弱な状態である。ピットは計6個確認されている。No 1とNo 2ピットは径40～44cm、深さ20～28cmを測り、その位置的關係から主柱穴だと思われる。No 3ピットは径64cm、深さ30cmを測り、遺物の出土は少ないが、貯蔵穴だと思われる。

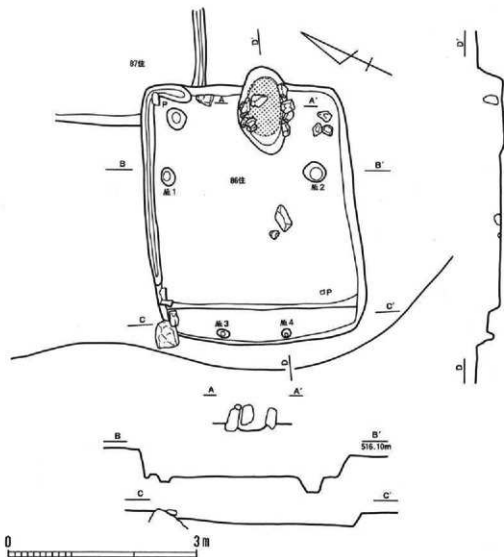


第135 図 第85号住戸址出土遺物②(1/3)

カマドは東壁中央から、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.40m、短軸0.98mを測り、主軸方位はN-55° Eである。天井部はすでに崩落しており、カマド前面に散乱している礎は、天井石に使用されたものであろう。袖部は芯である袖石が両袖に遺存している。燃焼部は床面を約10cm掘り込んで構築しており、焼土が顕著である。煙道部は半円形に掘り込み、約50°の角度をもって立ち上がる。

遺物は土器類の出土は多くないものの、編物用石錐が南壁下と西壁下から集中して出土している。総数は40個近くにおよんでいる。分布状態はレヴェルの高低差をもち、床面上15~35cmのレヴェルから出土しているが、大半は床面上15cmのレヴェルから出土している。土器は須恵器杯と土師器甕に限られており、床面直上およびカマド内などから出土している。卑土器が1点出土している。第134図1は南壁下はば床面直上出土須恵器杯、約3分の2残存。口径14.8cm、高台径7.4cm、器高6.5cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切りの後周辺部

を回転ヘラケズリ。高台は付け高台。体部外面に「廣」という墨書がみられる。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。2はカマド内出土須恵器杯。ほぼ完形。口径11.6 cm、底径6.4 cm、器高4.1 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色だが、口唇部は一部褐色を呈する。胎土は白色粒を含み、焼成は良好。3はほぼ床面直上出土須恵器杯。約3分の2残存。口径11.7 cm、底径6.1 cm、器高4.0 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色だが、口唇部は一部褐色を呈する。胎土は白色粒を含み、焼成は良好。4はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径28.0 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・小石・金雲母を含み、焼成は普通。5はカマド内出土土師器甕。口縁部～胴部下位破片。推定口径22.4 cm、推定胴径19.3 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は内外面とも茶褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・



第136 図 第86号住居址 (1/60)

金雲母を含み、焼成は良好。6は床面直上出土土師器甕口縁部破片。推定口径25.0cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が暗褐色、内面が赤褐色を呈し、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。7はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径23.8cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は内外面とも茶褐色、胎土は小石・白色粒・雲母を多量に含み、焼成は普通。8はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径19.8cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は内外面とも茶褐色、胎土は小石・白色粒・金雲母を含み、焼成は普通。9はカマド内出土土師器甕底部破片。底径7.6cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木炭痕。色調は内外面とも暗赤褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。10～13は竈物用石甕である。10は全長11.7cm、幅5.1cm、厚さ4.0cmを測る。11は全長11.6cm、幅5.1cm、厚さ3.1cmを測る。12は全長14.3cm、幅3.3cm、厚さ2.8cmを測る。13は全長12.5cm、幅5.2cm、厚さ2.0cmを測る。石材はいずれも砂岩製である。

第86号住居址（第136・138図）

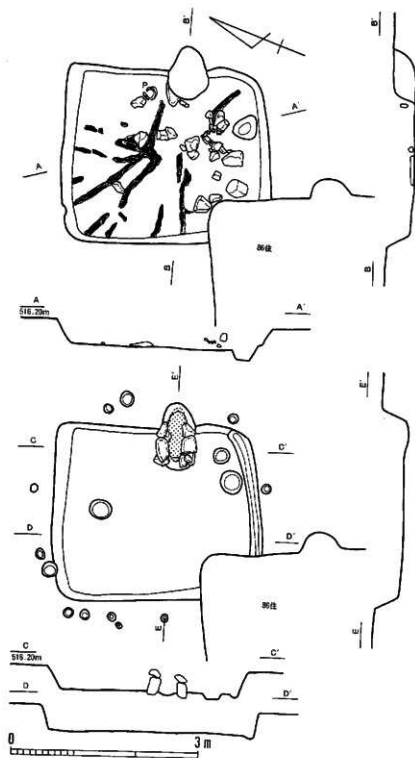
本住居址はB区G・H-6グリッドに位置しており、本住居址の南東側には第85号住居址が、北西側には第221号土壇などが近接している。本住居址は第87号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は本住居址が、第87号住居址の南コーナー部を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、遺構上部が後世の耕作などによって一部削平されているもののみならずの状態を保っている。主軸方位はN-60°-Eである。

遺構の規模は長軸4.16m、短軸3.35mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁において最大40cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。北壁の一部と東壁の一部の壁下に壁溝が巡っている。幅15～30cm、深さ5～8cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、カマド前面部周辺は比較的堅固であるが、あとは履して軟弱である。ピットは計5個確認されている。No.1とNo.2は径30～35cm、深さ12～24cmを測り、その位置的関係から柱穴だと思われる。

本住居址西壁側にはベッド状の段部をもっている。南北幅3.24m、東西幅0.55mを測り、壁高は西壁で15cmを測る。床面とのレベル差は約18cmを測る。床面は黄褐色土を床面としており、とくに踏み固められた箇所はみられない。西壁下に2個の小ピットが確認されており（No.3およびNo.4）、径15～20cm、深さ12cmを測る。入り口状施設に伴うピットであろうか。

カマドは東壁のはば中央に位置している。規模は長軸1.42m、短軸0.80mを測り、主軸方位はN-58°-Eである。天井部はすでに崩落しており、袖部は芯である袖石が両袖にそれぞれ遺存している。燃焼部は床面を約6cm掘り込んで構築しており、袖石の1つが燃焼部内に落ち込んでいる。煙道部は半円形に掘り込み、約70°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部内において顕著である。

遺物は少なく、住居址覆土内、床面直上、カマド内などから土師器杯・甕、須恵器甕などが出土している。第138図は覆土下層出土土師器杯。約3分の1残存。推定口径13.2cm、推定底径5.2cm、器高4.6cmを測り、外面はクロコナデの後ヘラケズリ。内面はクロコナデ。底部は回転糸切りの後周辺部をヘラケズリ。色調は褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。



第137图 第87号住居址 (1/60)

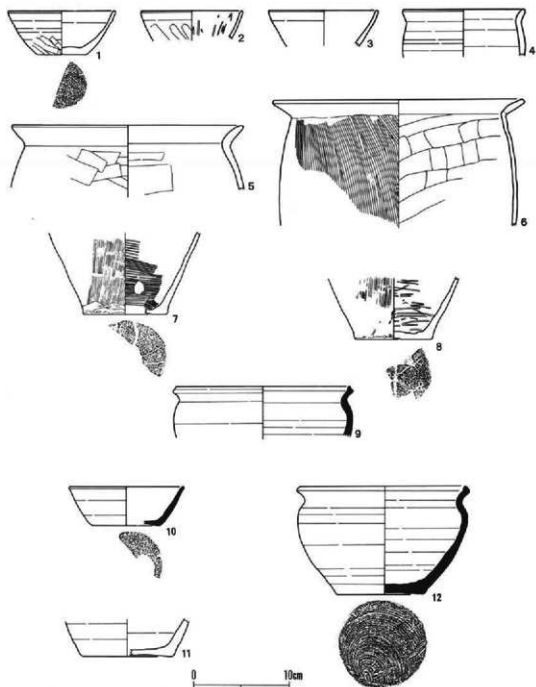
2は覆土下層出土土師器環口縁部破片。推定口径10.6cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。3はカマド内山土土師器環口縁部破片。推定口径11.2cmを測り内外面ともロクロナデ。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒を含み、焼成は良好。4はカマド内山土土師器頸口縁部破片。推定口径12.6cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。5は北コーナー壁下床面直上出土土師器頸口縁部破片。推定口径24.0cmを測り、内外面ともヘラケズリ整形で、内面はこの後ナデを施す。色調は明褐色、胎土は小石・白色粒を多量に含み、焼成は良好。6は西コーナー寄り北壁下の床面直上出土土師器頸口縁部～胴部中位破片。推定口径25.6cm、推定洞径24.6cmを測り、内外面ともヘラ調整。色調は内外面とも暗茶褐色、胎土は白色粒・金雲母を多量に含み、焼成は良好。7はカマド内出土土師器底部破片。推定底径8.8cmを測り、内外面ともヘラ調整、底部には木炭痕。色調は内外面とも茶褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。8はカマド内出土土師器底部破片。推定底径7.8cmを測り、調整は7に同じ。底部にススの付着がみられ、木炭痕が残る。色調は内外面とも暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。9は覆土下層出土土師器頸口縁部破片。推定口径17.8cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

第87号住居址（第136・137図）

本住居址はB区G・H-5・6グリッドに位置しており、本住居址の南東側には第85号住居址が、北側には第42号孤立柱建物址などが近接している。本住居址は前述のとおり、第86号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は本住居址が第86号住居址に切り込まれている。遺構の遺存状態は、後世の耕作などによって遺構上部を一部削平されているが、まずまずの状態を保っている。本住居址は火災をうけており、詳細については後述するが、覆土中層から下層にかけて焼土粒・カーボンなどが顕著にみられ、床面直上付近では炭化材が出土している。主軸方位はN 69° -Rである。

遺構の規模は長軸3.38m、短軸2.86mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は北壁で最大42cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。南壁の壁下に壁溝が巡っている。幅20～25cm、深さ6cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、カマド前面部周辺のみ比較的堅固で、あとは概して軟弱である。ピットは計3個確認されている。径25～30cm、深さ10～20cmを測るが、柱穴かどうかは不明である。炭化材は第137図にも示したように床面の北西部に集中しており、各墩から住居址中央にむかって倒れ込むような状態で出土している。焼土の堆積はみられないが、粒子状の焼土が覆土内に混入している。出土した炭化材はすべて丸太材である。

カマドは東壁中央から、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.08m、短軸0.66mを測り、主軸方位はN-69° -Rである。天井部はすでに崩落しており、袖部は芯である袖石が良好な状態で遺存している。一部補強材である粘質の灰褐色土が遺存している。燃焼部は床面を約5cm掘り込んで構築しており、焼土が顕著である。煙道部は細長く半円形に掘り込み、



第138図 第86・87号住居址出土遺物(1/4)

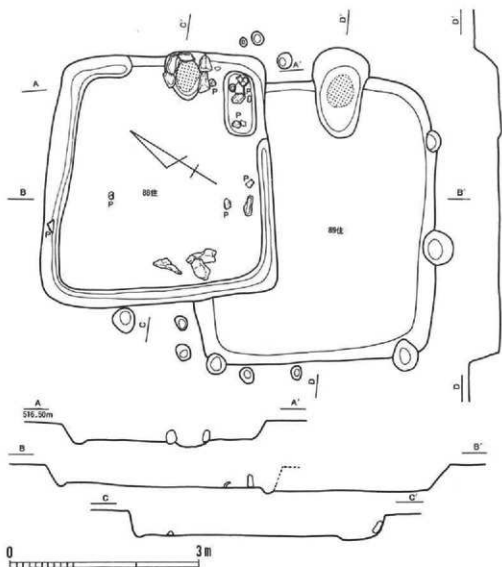
約70°の角度をもって立ち上がる。

遺物は極めて少なく、住居址覆土内、床面直上、カマド内から須恵器杯・甕、土師器甕が出土している。第138図10は覆土下層出土須恵器杯。約3分の1残存。推定口径11.8cm、推定底径7.2cm、器高4.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。11はカマド内出土土師器甕底部破片。推定底径9.5cmを測り、

内外面ともロクロナデ。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は小石・白色粒・石英を含み、焼成は良好。12はカマド左袖脇の床面直上出土須恵器甕である。約4分の3残存。口径17.2cm、底径8.1cm、器高11.2cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切りの後縁辺部をわずかにヘラケズリ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

第88号住居址 (第139・140図)

本住居址はB区G・H-3・4グリッドに位置しており、本住居址の東側には第42号掘立柱建物址が、南東側には第94号住居址と第42号掘立柱建物址が近接している。また本住居址は第89号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は、本住居址が第89号住居址を切り込んで構築している。遺構の遺存状態は、後世の耕作などにより遺構上部を削平されており、あまり良い状



第139図 第88・89号住居址 (1/60)

態ではない。主軸方位はN-58°-Eである。

遺構の規模は長軸4.04m、短軸3.78mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は西壁で最大40cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝がカマドおよび東コナ付近を除く壁下に巡っている。幅22~35cm、深さ6~10cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としており、カマド西面部のみ堅固で、あとは概して軟弱である。柱穴だと思われるピットは確認されていないが、カマド脇に規模が長軸1.0m、短軸0.5m、深さ10cmを測る長楕円形を呈するピットが確認されている。同ピットより土師器環などの遺物がまもって出土していることなどから、貯蔵穴だと思われる。

カマドは東壁のほぼ中央に位置している。張楯は長軸0.86m、短軸0.66mを測り、主軸方位はN-57°-Eである。天井部は天井石が1箇のみ遺存していたが、桑の根による攪乱が激しく、調査中に崩れ落ちてしまった。柱部は芯である袖石が両袖に遺存している。燃焼部は床面を約8cm掘り込んで構築しており、焼土が顕著である。煙道部の掘り込み浅く、約80°の角度をもって立ち上がる。

遺物は比較的豊富である。貯蔵穴およびカマド内を中心に出土しており、土師器杯・甕・皿、須恵器環などがみられる。土師器環の中には内面黒色土器も含んでおり、墨書土器も4点出土している。第140図は貯蔵穴出土土師器環。口縁部を欠損している。底径5.6cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転糸切りの後周辺部をヘラケズリ。体部外面に「矢」という墨書がみられる。色調は明赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。2は覆上下層出土土師器環口縁部破片。推定口径14.0cmを測り、外面はロクロナデ。内面はロクロナデの後黒色処理を施す。体部外面に「欠」という墨書が逆位に記されている。色調は明褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。3は覆土下層出土須恵器環口縁部破片。推定口径12.8cmを測り、内外面ともロクロナデ。体部外面に「千村」という墨書が記されている。色調は灰褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。4は覆土下層出土土師器環。口縁部~体部破片。推定口径10.2cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。体部外面下に墨書がみられるが、欠損しているため判読不可能。色調は明褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。5は貯蔵穴出土土師器環。ほぼ完形。口径12.3cm、底径6.7cm、器高4.2cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒・石英を含み、焼成は良好。6は貯蔵穴出土土師器環。約4分の3残存。口径11.0cm、底径5.2cm、器高3.9cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は回転糸切りの後周辺部をヘラケズリ。色調は暗褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。7は覆土下層出土土師器環。約3分の2残存。口径12.4cm、底径4.8cm、器高4.2cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は回転糸切りの後周辺部をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。8は覆上下層出土土師器環。約3分の1残存。推定口径12.2cm、推定高台径6.2cm、器高3.9cmを測り、外面はロクロナデ。内面はロクロナデの後暗文を施し、一部黒色化している。底部は回転糸切りの後周辺部をヘラケズリ。高台は付け高台。色調は赤褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。9は覆土

下層出土土師器杯口縁部破片。推定口径17.6 cmを測り、内外面の調整は2に同じ。色調は明褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。10は覆土下層出土土師器皿底部破片。推定口径4.6 cmを測り、外面はロクロナデの後回転ヘラケズリ。内面はロクロナデの後轆文を施す。底部は回転ヘラケズリ。色調は明褐色、胎土は白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。11は貯蔵穴出土土師器甕。口縁部～胴部下位破片。推定口径27.4 cm、推定胴径25.6 cmを測り、内外面ともハケ調整。内面は下位へいくにしたがいハケメが不明瞭になり、輪積み痕を残す。色調は茶褐色、胎土は金雲母を含み、焼成は良好。12はカマド内出土土師器甕。約4分の3残存。口径14.8 cm、胴径13.1 cm、底径5.6 cm、器高13.7 cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は暗茶褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は良好。13はカマド内出土土師器甕口縁部破片。推定口径28.4 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈し、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は普通。14は覆土下層出土土師器甕。口縁部～胴部下位破片。推定口径14.2 cm、推定胴径13.0 cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は普通。15は床面直上出土土師器甕底部破片。底径7.4 cmを測り、内外面ともハケ調整。内面底部付近の器面は剥落が顕著。輪積み痕を残す。底部には木葉痕。色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色を呈し、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は良好。16はカマド内出土土師器甕底部破片。底径8.8 cmを測り、内外面ともハケ調整。底部には木葉痕。色調は暗褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は普通。17はカマド内出土土師器甕底部破片。底径6.3 cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転系切り。色調は外面が赤褐色、内面が褐色を呈し、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。

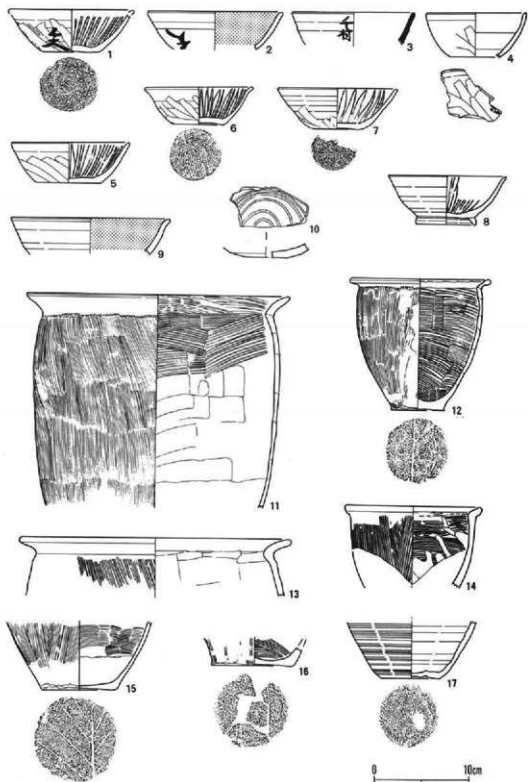
第89号住居址（第139・141図）

本住居址はB区G・H-3・4グリッドに位置しており、本住居址の北東側には第43号掘立柱建物址が近接している。前述のとおり本住居址は、第88号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は第88号住居址が本住居址を切り込んで構築している。ほかにも性格不明ビットと重複関係をもつが、すべて本住居址が切り込まれている。遺構の遺存状態は、後世の耕作などにより遺構上部の一部が削平されており、あまり良い状態ではない。主軸方位はN-55°-Eである。

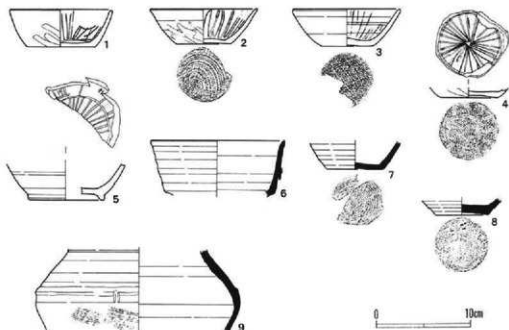
遺構の規模は長軸4.48 m、短軸3.81 mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は西壁で最大46 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ビットなどの内部施設は確認されていない。

カマドは東壁中央から、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸1.45 m、短軸0.92 mを測り、主軸方位はN-55°-Eである。天井部はすでに崩落しており、袖部もほとんど遺存していない。燃焼部は床面を約4 cm掘り込んで構築しており、煙道部は半円形に掘り込み、約50°の角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部において、わずかに散る程度である。

遺物は住居址覆土内、カマド内から出土しており、量的には多くない。土師器杯、須恵器杯・四耳壺片などが出土しており、甕類がほとんどみられない。第141図1は覆土下層出土土師器杯。約4分の1残存。推定口径10.6 cm、底径6.9 cm、器高3.9 cmを測り、外面はロクロナデの後ヘ



第140图 第88号住居址出土遗物(1/4)



第141図 第89号住居址出土遺物(1/4)

ラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は全面ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。2は覆土下層出土土師器環。約3分の1残存。第88号住居址との境界にて出土しているため、同住居址に伴うものかもしれない。推定口径11.2cm、底径5.7cm、器高3.7cmを測り、内外面の調整は1に同じ。底部は回転糸切りの後周辺部をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。3はカマド内出土土師器環。約3分の1残存。推定口径11.2cm、底径5.2cm、器高3.9cmを測る。外面はロクロナデのみ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は全面ヘラケズリ。底部外面に記号状の刻書を施している。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。4は覆土下層出土土師器環底部破片。底径6.3cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。暗文は底部内面まで施している。底部は回転糸切りの後周辺部をヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は白色粒・黒色粒・石英を含み、焼成は良好。5は覆土下層出土土師器環高台部破片。推定高台径8.0cmを測り、内外面の調整は4に同じ。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒・黒色粒・石英を含み、焼成は良好。6は覆土下層出土須恵器環口縁部破片。高台部欠損。推定口径13.8cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。7と8は覆土下層出土須恵器環底部破片。両者とも内外面はロクロナデ。底部は回転糸切りである。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好である。底径は7が5.9cm、8が5.7cmを測る。9は覆土下層出土須恵器四耳壺肩部破片。推定胴径21.4cmを測り、外面の肩部はロクロナデ、胴部にはタタキを施し、凸帯と耳部を貼り付けている。内面はロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒

を含み、焼成は良好。

第90号住居址 (第 142・143

図)

本住居址はB区F-4グリッドに位置しており、本住居址の西側から南側にかけて第1号溝状遺構が走っており、第219号土壌が近接している。本住居址はほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。遺構の遺存状態は、後世の耕作などにより遺構上部の一部が削平されており、良い状態とはいえない。主軸方位はN-62°-Eである。

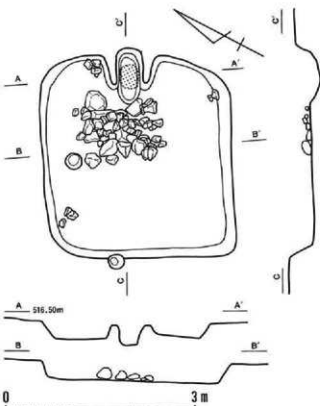
遺構の規模は長軸3.37m、短軸2.95mを測る小形の住居址で、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は西壁で最大36cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。

壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。径25cm、深さ20cmを測るビットが1個確認されているが、柱穴かどうかは不明である。

カマド前面において礫の集中がみられるが、第74号住居址などと同様な状態を示しているといえる。礫は拳大から人頭大のものまでみられ、床面直上および床面上わずかに浮いた状態で出土している。ほかの住居址のように礫が散在していない。

カマドは東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸0.92m、短軸0.90mを測り、主軸方位はN-60°-Eである。天井部は崩落しており、袖部は粘質の灰褐色土と暗褐色土で構築されており、両袖が遺存している。燃焼部は床面を約10cm掘り込んで構築しており、焼土はあまり顕著でない。煙道部は半円形に掘り込み、約60°の角度をもって立ち上がる。

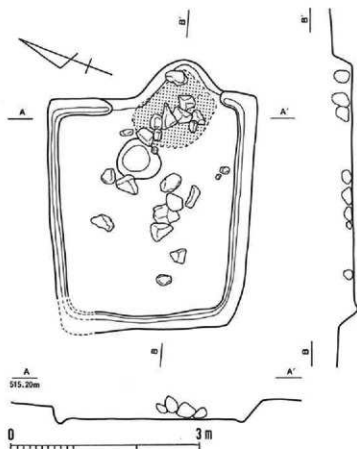
遺物は少なく、土師器片がわずかに住居址覆土内から出土している。第143図1は覆土下層出土土師器環。約4分の1残存。推定口径10.1cm、推定底径4.8cm、器高4.9cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転糸切り。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・石英を含み、焼成は良好。2は覆土下層出土土師器環高台部付近破片。推定高台径



第142図 第90号住居址 (1/60)



第143図 第90号住居址出土遺物 (1/4)



第144 図 第91号住居址 (1/60)

掘調査の確認の際に、北壁部分を削りすぎてしまい良好な状態ではない。主軸方位は $N-68^{\circ}-E$ である。

遺構の規模は長軸 $4.32m$ 、短軸 $3.34m$ を測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は南壁で最大 $28cm$ を測り、緩やかに立ち上がる。壁溝がカマドの部分を除き、ほぼ全周している。幅 $16\sim 30cm$ 、深さ $6\sim 8cm$ を測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としているが、西コーナー寄りの床面では砂層が露出しており、遺存状態は悪い。遺存している床面は全体に軟弱である。ピットはカマド前面部で1個確認されている。径 $70cm$ 、深さ $20cm$ を測るが、その性格については不明である。

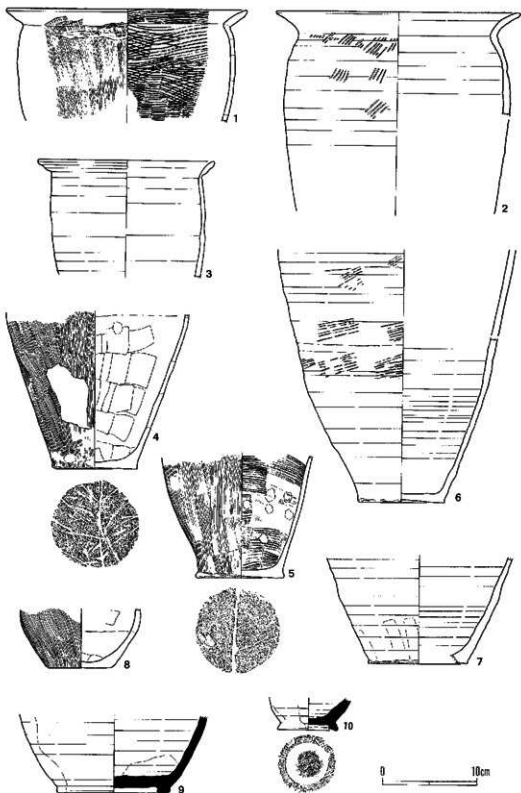
カマドは東壁中央から、やや東コーナー寄りに位置している。規模は長軸 $1.26m$ 、短軸 $1.25m$ を測り、主軸方位は $N-73^{\circ}-E$ である。遺存状態は悪く、天井部および袖部は遺存していない。袖部と思われる隙が数個燃焼部内に散乱している。燃焼部は掘り込みをもたず、床面とほぼ同一レベルである。煙道部は半円形に掘り込み、約 60° の角度をもって立ち上がる。

遺物はカマド内を中心に出土しており、その大半が土師器の甕である。環類は皆無に等しい。第145 図1はほぼ床面直上出土土師器甕。口縁部～胴部中位破片。推定口径 $25.0cm$ 、推定胴径

$7.9cm$ を測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後暗文を施す。外面にタール状のものが付着している。高台はケズリ出し高台。色調は暗赤褐色、胎土は赤色粒・石英を含み、焼成は良好。

第91号住居址 (第144・145 図)

本住居址はB区P-4・5グリッドに位置しており、本住居址の南側には第121号土壙が近接している。本住居址は第50号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は本住居址が第50号住居址に切り込まれている。遺構の遺存状態は、後世の耕作などにより遺構上部の一部を削平されていたり、桑の根による攪乱、さらに試



第145 图 第91号住居址出土遗物 (1/4)

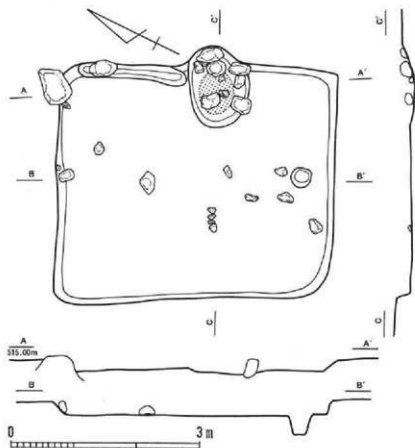
22.8 cmを測り、内外面ともハケ調整。外面に一部ヨコナデ。色調は暗赤褐色、胎土は白色粒・雲母を含み、焼成は普通。2はカマド内出土土師器甕。口縁部～胴部下位破片。推定口径25.3 cm、推定胴径23.4 cmを測り、内外面ともロクロナデ。外面の肩部～胴部にかけてタキを施す。色調は明褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。3はほぼ床面直上出土土師器甕。口縁部～胴部下位破片。推定口径18.4 cm、推定底径16.4 cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は明褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。4は床面直上出土土師器甕。胴部下位～底部破片。底径8.8 cmを測り、外面はハケ調整。内面はヘラケズリを施す。底部には木葉痕。色調は暗褐色、胎土は黒色粒・白色粒・石英を含み、焼成は良好。5は床面直上出土土師器甕。胴部下位～底部破片。底径9.1 cmを測り、内外面ともハケ調整。内面に指頭圧痕が残る。底部には木葉痕。色調は暗茶褐色、胎土は小石・白色粒・雲母を含み、焼成は良好。6はカマド内および床面直上出土土師器甕。口縁部～胴部中位を欠損。推定胴径25.0 cm、底径9.0 cmを測り、外面はロクロナデの後タキを施す。内面はロクロナデのみ。底部は全面ヘラケズリ。色調は褐色、胎土は小石・白色粒・赤色粒・石英を含み、焼成は良好。7は覆土下層出土土師器甕。胴部下位～底部破片。推定底径10.4 cmを測り、内外面ともロクロナデ。外面の底部付近はヘラケズリを施す。底部は大半が欠損しているが回転糸切り。色調は外面が暗褐色、内面が明褐色を呈し、胎土は小石・白色粒・赤色粒・石英を含み、焼成は良好。8はほぼ床面直上出土土師器甕。胴部中位～底部破片。推定底径6.5 cm、推定胴径12.5 cmを測り、外面はハケ調整。内面はヘラケズリおよびヘラナデを施し、輪積み痕が残る。底部はハケ調整である。色調は明褐色、胎土は白色粒・黒色粒・石英を含み、焼成は良好。9はほぼ床面直上出土須恵器長頸瓶底部破片。高台径12.0 cmを測り、内外面ともロクロナデ。自然袖が内外面にかかる。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。10はほぼ床面直上出土須恵器長頸瓶底部破片。高台径6.2 cmを測り、内外面ともロクロナデ。外面に自然袖がかかる。底部は回転糸切りの後周刃部を回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は外面が暗茶褐色、内面が灰褐色を呈し、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

第93号住居址（第146・147 図）

本住居址はB区O-7グリッドに位置しており、本住居址の北東側には第29号掘立柱建物址が、北西側には第65号住居址が、南西側には第67号住居址が近接している。本住居址はほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。遺構の遺存状態は悪く、後世の耕作などにより遺構上部が著しく削平をうけている。主軸方位はN-64°-Eである。

遺構の規模は長軸4.46 m、短軸3.90 mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は西壁で最大21 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝が東壁下の一部に巡っている。幅25 cm、深さ5 cmを測り、断面形はU字形を呈する。床面は黄褐色土を床面としているが、全体に軟弱である。径32 cm、深さ30 cmを測るピットが1個確認されているが、柱穴かどうかは不明である。

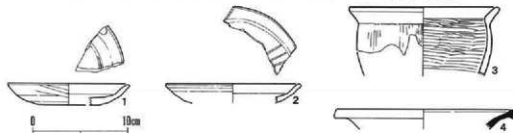
カマドは東壁のほぼ中央に位置している。規模は長軸1.32 m、短軸0.97 mを測り、主軸方位はN-60°-Eである。遺存状態は悪く、天井部は崩落し、袖部は芯である袖右が右袖のみに遺存し、左袖には遺存しない。燃焼部は床面を約6 cm掘り込んで構築しており、煙道部は半円



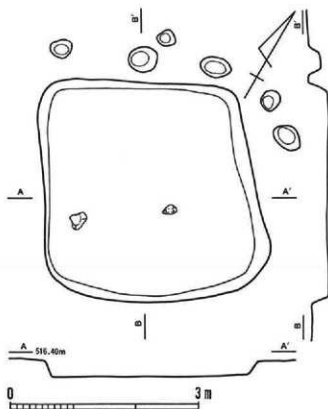
第146 図 第93号住居址 (1/60)

形に掘り込み、約 25° の緩やかな角度をもって立ち上がる。焼土は燃焼部においてわずかに遺存する。

遺物は住居址覆土内およびカマド内から出土しており、その量は極めて少ない。土師器皿・甕、須恵器甕などが出土しているが、すべて破片資料である。第147 図1は覆土下層出土土師器皿破片。推定口径12.8 cm、推定底径6.4 cmを測り、外面はロクロナデの後回転ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転ヘラケズリ。色調は赤褐色、胎土は白色粒・赤色粒・石英を含み、焼成は良好。2は覆土下層出土土師器皿破片。推定口径14.0 cmを測り、内外面の調整は1に同じ。色調は明褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。3はカマ



第147 図 第93号住居址出土遺物 (1/4)



第148号 第94号住居址(1/60)

の下層に砂質の暗褐色土が堆積している。主軸方位は不明である。

遺構の規模は長軸3.60m、短軸3.54mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は北壁において最大33cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁溝はみられない。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ピットは確認されていない。カマドなどの内部施設も確認されていない。

遺物は1点も出土せず、覆土内より礫が数個出土したのみである。

(2) 掘立柱建物址

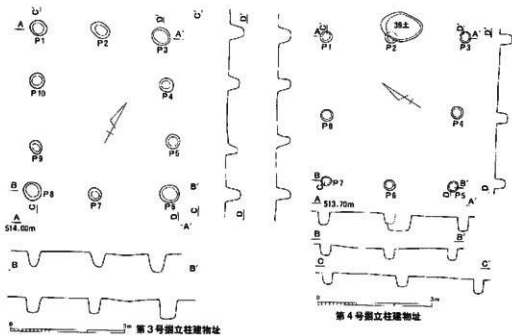
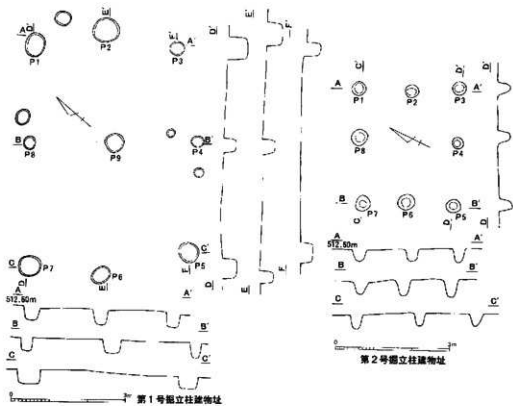
A区・B区から合計45棟検出されている。とくに濃密な分布を示すのはB区J-M-4~8グリッドの範囲で、総柱の建物址が軒を連ねている。中には3面に庇をもつ大形の建物址が存在し、それと有機的に関連しあうかのように一般的な建物址が存在している。遺跡全体では側柱の建物址が圧倒的な数を占めるが、主軸方位が一定ではなく、柱穴の規模も小さい。さらに全建物址共通であるが出土遺物が非常に少なく、建物址の構築年代を捉えるうえでの障害となっている。堅穴住居址との重複、建物どおしの重複は比較的少なく構築の際、それぞれのテリトリーを意識しているかのようである。

第1号掘立柱建物址(第149図)

F内出土土師器壺。口縁部~胴部破片。推定口径15.5cm、推定胴径14.0cmを測り、内外面ともハケ調整。色調は茶褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。4は覆土下層出土須恵器壺口縁部破片。推定口径18.2cmを測り、内外面ともロクロナデ。自然軸が内外面にかかる。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。

第94号住居址(第148図)

本住居址はB区H-4グリッドに位置しており、本住居址の西側には第42号掘立柱建物址が接するように近接し、北西側には第89号住居址が、南東側には第232号土壇なども近接している。遺構覆土上層に白砂がレンズ状に約10cm堆積しており、そ



第149 图 第1·2·3·4号独立柱建物址 (1/100)

本建物址はA区A・B 1・2グリッドに位置しており、北西側には第2号掘立柱建物址が、南西側には第5号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位をN-50°-Eにもつ2間(約4.2m)×2間(約5.8m)の総柱式の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P3)が約1.9m・約1.8m、東列(P3~P5)が約2.5m・約2.9m、南列(P5~P7)が約2.3m・約1.9m、西列(P1~P7)が約2.5m・約3.2mを測る。柱穴の規模は径36~70cm、深さ32~50cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。

遺物は出土していない。

第2号掘立柱建物址(第149図)

本建物址はA区B-1・2グリッドに位置しており、南側には第1号掘立柱建物址が、北側には第27号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位をN-64°-Eにもつ2間(約2.7m)×2間(約3.1m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北東列(P1~P3)が約1.4m・約1.3m、南東列(P3~P5)が約1.5m・約1.6m、南西列(P5~P7)が約1.3m・約1.2m、北西列(P1~P7)が約1.3m・約1.8mを測る。柱穴の規模は径30~45cm、深さ35~50cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。

遺物は出土していない。

第3号掘立柱建物址(第149図)

本建物址はA区E 2・3グリッドに位置しており、北側には第16・17・23号住居址が、東側には第3号住居址などが近接している。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位をN-33°-Wにもつ2間(約3.6m)×3間(約4.3m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P3)が約1.6m・約1.6m、東列(P3~P6)が約1.3m・約1.5m・約1.4m、南列が(P6~P8)が約1.9m・約1.6m、西列が(P1~P8)が約1.4m・約1.8m・約1.2mを測る。柱穴の規模は径36~52cm、深さ30~50cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。

遺物は出土していない。

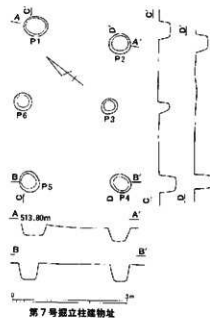
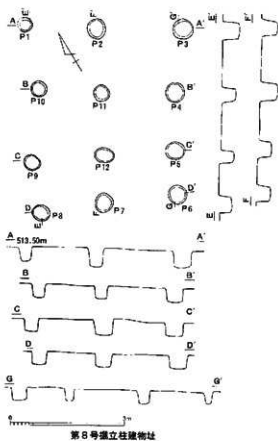
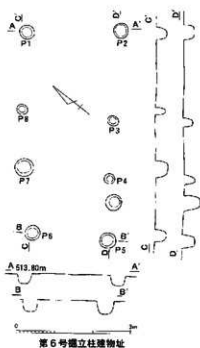
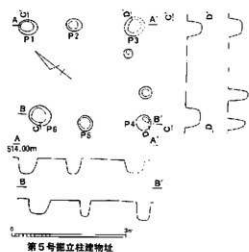
第4号掘立柱建物址(第149図)

本建物址はA区F・G-2グリッドに位置しており、北東側には第26号住居址が、北西側には第20号住居址が、南西側には第21号住居址が近接している。重複関係はP2が第39号土壌に切り込まれている。主軸方位をN-59°-Eにもつ2間(約3.6m)×2間(約3.9m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列(P1~P3)が約1.7m・約1.9m、南列(P3~P5)が約2.0m・約2.0m、西列(P5~P7)が約1.6m・約1.7m、北列(P1~P7)が約2.1m・約1.6mを測る。柱穴の規模は径26~30cm、深さ28~38cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第5号掘立柱建物址(第150図)

本建物址はA区G・H-1・2グリッドに位置しており、南東側には第25号住居址が、南西側には第22号住居址が近接している。重複関係はP3が第25号住居址を切り込んで構築して



第150图 第5·6·7·8号独立柱建物址 (1/100)

いる。主軸方位をN-53°-EまたはN-37°-Wにもつ1間(約2.5m)×2間(約2.8m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列(P1~P3)が約1.2m・約1.6m、南列(P3~P4)が約2.5m、西列(P4~P6)が約1.6m・約1.2m、北列(P1~P6)が約2.4mを測る。柱穴の規模は径42~55cm、深さ34~50cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。遺物は出土していない。

第6号掘立柱建物址(第150図)

本建物址はA区G・H-3・4グリッドに位置しており、南東側には第7号掘立柱建物址が、南西側には第18号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位をN-53°-Eにもつ1間(約2.5m)×3間(約5.6m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列(P1~P2)が約2.4m、南列(P2~P5)が約2.4m・約1.5m・約1.6m、西列(P5~P6)が約2.0m、北列(P1~P6)が約2.0m・約1.5m・約1.8mを測る。柱穴の規模は径30~50cm、深さ26~36cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第7号掘立柱建物址(第150図)

本建物址はA区G-3・4グリッドに位置しており、北西側には第6号掘立柱建物址が、北東側には第20号住居址が、東側には第21号住居址が、西側には第18号住居址などが近接している。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位をN-52°-Eにもつ1間(約2.4m)×2間(約4.1m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列(P1~P2)が約2.2m、南列(P2~P4)が約1.7m・約2.1m、西列(P4~P5)が約2.4m、北列(P1~P5)が約2.1m・約2.1mを測る。柱穴の規模は径43~62cm、深さ30~45cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

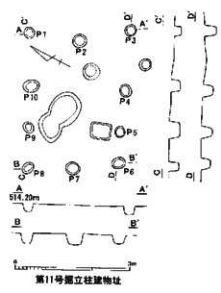
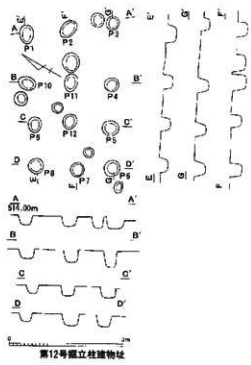
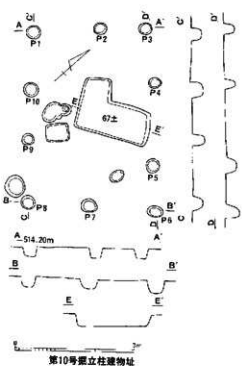
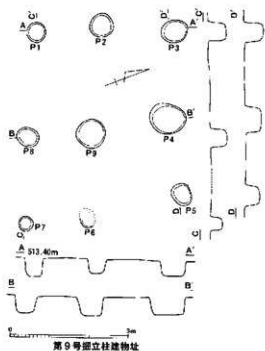
第8号掘立柱建物址(第150図)

本建物址はA区E-4・5グリッドに位置しており、北側には第31号住居址が、南側は第29・30・34号住居址が、東側には第9号掘立柱建物址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位をN-31°-EまたはN-59°-Wにもつ2間(約4.2m)×3間(約5.0m)の坪掘の建物址で総柱式である。柱穴間の距離は北列(P1~P3)が約1.9m・約2.3m、東列(P3~P6)が約1.7m・約1.5m・約1.2m、南列(P6~P8)が約2.0m・約1.7m、西列(P1~P8)が約1.7m・約2.0m・約1.4mを測る。柱穴の規模は径40~53cm、深さ30~48cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

遺物は土師器細片および須恵器細片をわずかに出土しているが、図示できるものではない。

第9号掘立柱建物址(第151図)

本建物址はA区D・E-4グリッドに位置しており、北側には第11号住居址が、西側には第8号掘立柱建物址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位をN-22°-EまたはN-68°-Wにもつ2間(約4.0m)×2間(約4.9m)の坪掘の建物址で総柱式である。柱穴間の距離は北列(P3~P5)が約2.2m・約1.9m、東列(P5~P7)が約2.4



第151图 第9·10·11·12号独立柱建筑物址 (1/100)

m・約1.6m、南列(P1~P7)が約2.7m・約2.2m、西列(P1~P3)が約1.7m・約1.8mを測る。柱穴の規模は径40~93cm、深さ30~51cmを測り、平面形は不整形を呈する。

遺物は土師器細片がわずかに出土しているが、図示できるものはない。

第10号掘立柱建物址(第151図)

本建物址はA区G・H-5グリッドに位置しており、北東側には第19号住居址が、南側には第11号掘立柱建物址が近接している。本建物址内において第67号土壌をはじめ、そのほかピットが数個存在しているが、これら遺構との重複の新旧関係は不明である。主軸方位をN-46°-Wにもつ2間(約3.3m)×3間(約4.7m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P3)が約1.7m・約1.2m、東列(P3~P6)が約1.4m・約2.1m・約1.2m、南列(P6~P8)が約1.7m・約1.5m、西列(P1~P8)が約1.5m・約1.3m・約1.6mを測る。柱穴の規模は径30~40cm、深さ23~38cmを測り、平面形は楕円形を呈する。遺物は出土していない。

第11号掘立柱建物址(第151図)

本建物址はA区F・G-5・6グリッドに位置しており、東側には第12号掘立柱建物址が、北側には第10号掘立柱建物址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位をN63°-Eにもつ2間(約2.6m)×3間(約3.6m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列(P1~P3)が約1.3m・約1.4m、南列(P3~P6)が約1.6m・約1.1m・約0.9m、西列(P6~P8)が約1.2m・約1.2m、北列(P1~P8)が約1.4m・約1.1m・約1.1mを測る。柱穴の規模は径30~44cm、深さ18~40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第12号掘立柱建物址(第151図)

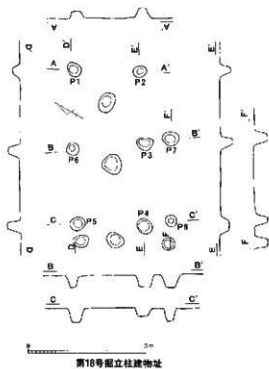
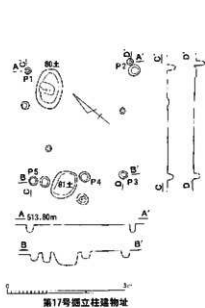
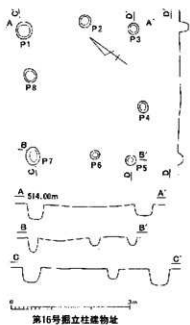
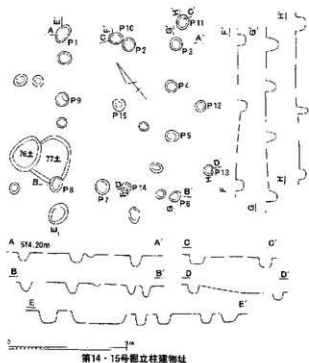
本建物址はA区F-5グリッドに位置しており、西側には第11号掘立柱建物址が近接している。ほかの遺構との重複関係は、建物址内にピットが数個みられるが、その新旧関係は不明である。主軸方位をN57°-Eにもつ2間(約2.3m)×3間(約4.4m)の坪掘の建物址で、総柱式である。柱穴間の距離は東列(P1~P3)が約1.1m・約1.2m、南列(P3~P6)が約1.6m・約1.2m・約1.1m、西列(P6~P8)が約1.0m・約1.2m、北列(P1~P8)が約1.3m・約1.1m・約1.1mを測る。柱穴の規模は径33~52cm、深さ20~42cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

(第13号掘立柱建物址は概報にて報告済み)

第14号掘立柱建物址(第152図)

本建物址はA区F・G-7グリッドに位置しており、北西側には第13号掘立柱建物址と第32号住居址が、南西側には第33号住居址が近接している。本建物址は第15号掘立柱建物址および第77号土壌と重複関係にある。第77号土壌との新旧関係は土壌が本建物址のP8を切り込んで構築しているが、第15号掘立柱建物址との新旧関係は不明である。



第152 图 第14·15·16·17·18号掘立柱建物址 (1/100)

主軸方位をN 41° Eにもつ2間(約3.0m)×3間(約3.9m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P3)が約1.7m・約1.2m、東列(P3~P6)が約1.1m・約1.2m・約1.5m、南列(P6~P8)が約1.8m・約1.2m、西列(P1~P9)が約1.6mを測り、P8~P9間に柱穴がもう1つ存在するものと思われるが、第77号土壌に切られて不明である。柱穴の規模は径30~50cm、深さ22~30cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第15号掘立柱建物址(第152 図)

本建物址はA区F・G-7グリッドに位置しており、北西側には第13号掘立柱建物址と第32号住居址が、南西側には第33号住居址が近接している。前述のとおり本建物址は、第14号掘立柱建物址と重複関係にあるが、その新旧関係は不明である。

主軸方位をN-23° Eにもつ1間(約1.8m)×2間(約3.9m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P10~P11)が約1.8m、東列(P11~P13)が約2.2m・約1.7m、南列(P13~P14)が約2.1m、西列(P10~P14)が約1.7m・約2.1mを測る。柱穴の規模は径27~37cm、深さ18~25cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第16号掘立柱建物址(第152 図)

本建物址はA区E・F-7グリッドに位置しており、西側に第33号住居址が、南東側に第79号土壌などが近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。

主軸方位をN 48° Eにもつ2間(約2.8m)×2間(約3.4m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P3)が約1.5m・約1.3m、東列(P3~P5)が約2.0m・約1.4m、南列(P5~P7)が約0.9m・約1.5m、西列(P1~P7)が約1.2m・約2.0mを測る。柱穴の規模は径26~45cm、深さ16~44cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第17号掘立柱建物址(第152 図)

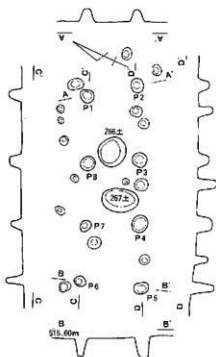
本建物址はA区D・E-7グリッドに位置しており、東側には第35号住居址が、北側には第79号土壌が近接している。本建物址内に第80・81号土壌が存在するが、その新旧関係については不明である。

主軸方位をN-49° Eにもつ1間以上(約2.6m)×1間以上(約2.9m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約2.6m、東列(P2~P3)が約2.9m、南列(P3~P5)が約1.0m・約1.4m、西列(P1~P5)が約2.8mを測る。柱穴の規模は径14~24cm、深さ15~22cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

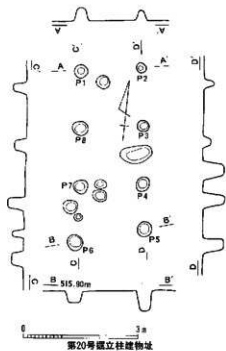
遺物は出土していない。

第18号掘立柱建物址(第152 図)

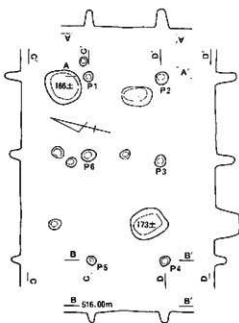
本建物址はB区N・O 3グリッドに位置しており、北西側には第19号掘立柱建物址が、東側には第45・46・70号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。



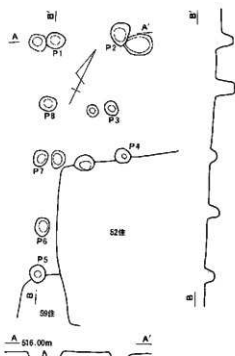
第19号独立柱建物址



第20号独立柱建物址



第21号独立柱建物址



第22号独立柱建物址

第153图 第19·20·21·22号独立柱建物址 (1/100)

主軸方位をN-60°-EまたはN-30°-Wにもつ1間(約1.7m)×2間(3.9m)の坪掘の建物址で、南面に庇をもつ。柱穴間の距離は東列(P1~P2)が約1.7m、南列(P2~P4)が約1.8m・約2.1m、西列(P4~P5)が約1.7m、北列(P1~P5)が約2.0m・約1.9mを測る。庇の柱穴(P7~P8)間の距離は約2.1mで、南列より0.6~0.7mの距離をもつ。柱穴の規模は径30~40cm、深さ20~38cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第19号掘立柱建物址(第153図)

本建物址はB区N・O-3グリッドに位置しており、南東側には第18号掘立柱建物址が近接している。本建物址内に第266・267号土壌が存在するが、その新旧関係については不明である。

主軸方位をN-68°-EまたはN-22°-Wにもつ1間(約1.6m)×3間(約5.4m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列(P1~P2)が約1.2m、南列(P2~P5)が約1.9m・約1.7m・約1.7m、西列(P5~P6)が約1.6m、北列(P1~P6)が約1.8m・約1.7m・約1.5mを測る。柱穴の規模は径27~44cm、深さ30~58cmを測り、平面形は不整形を呈する。南列の柱穴間にみられる小ピットは補助的な柱穴かもしれない。

遺物は出土していない。

第20号掘立柱建物址(第153図)

本建物址はB区L・M-2・3グリッドに位置しており、北東側には第48号住居址が、西側には第55号住居址が、南側には第53号住居址などが近接している。

主軸方位をN 9° Wにもつ1間(約1.8m)×3間(約4.6m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約1.6m、東列(P2~P5)が約1.5m・約1.6m・約1.3m、南列(P5~P6)が約1.8m、西列(P1~P6)が約1.6m・約1.6m・約1.5mを測る。柱穴の規模は径27~43cm、深さ19~54cmを測り、平面形は不整形を呈する。

遺物は出土していない。

第21号掘立柱建物址(第153図)

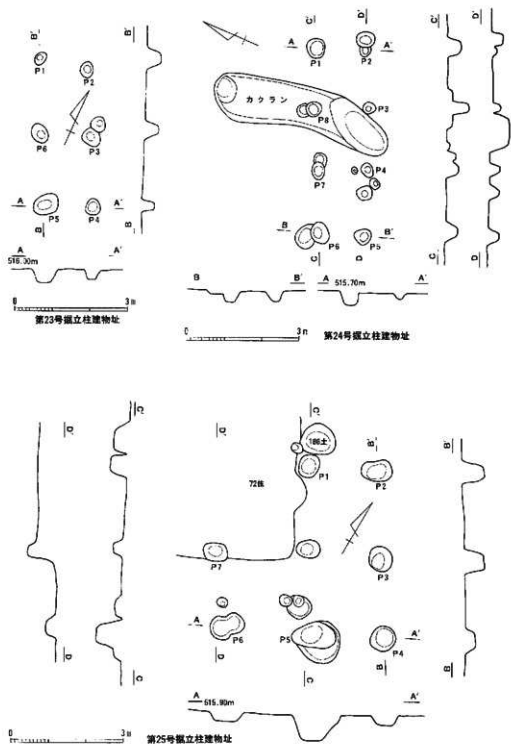
本建物址はB区K・L-3グリッドに位置しており、北東側には第55号住居址が、さらに北西にかけて土壌群が近接し、P1のすぐ北側には第166号土壌が近接している。建物址内にも第173号土壌が存在するが、その新旧関係については不明である。

主軸方位をN-75°-EまたはN-15°-Wにもつ1間(約1.9m)×2間(約4.9m)坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列(P1~P2)が約1.9m、南列(P2~P4)が約2.2m・約2.6m、西列(P4~P5)が約1.9m、北列(P1~P5)が約2.1m・約2.8mを測る。柱穴の規模は径27~40cm、深さ26~50cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第22号掘立柱建物址(第153図)

本建物址はB区L・M-4グリッドに位置しており、北東側には第53・54号住居址が、西側



第154 図 第23・24・25号掘立柱建物址 (1/100)

には第23号掘立柱建物址が、南側には第60号住居址などが近接している。本建物址は第52号住居址および第59号住居址と重複関係にある。その新旧関係は第52号住居址により東列の柱穴を破壊されており、本建物址P5が第59号住居址を切り込んでいる。

主軸方位をN-20°-Wにもつ1間(約1.8m)×4間(約6.2m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約1.8m、東列(P2~P4)が約2.0m・約1.4m、西列(P1~P8)が約1.7m・約1.5m・約1.8m・約1.3mを測る。柱穴の規模は径40~60cm、深さ24~52cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第23号掘立柱建物址(第154図)

本建物址はB区L-4グリッドに位置しており、東側には第22号掘立柱建物址が、南西側には第24号掘立柱建物址などが近接している。重複関係はP3が性格不明のピットと重複しているが、P3が切り込んでいる。

主軸方位をN-26°-Wにもつ1間(約1.3m)×2間(約4.0m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約1.3m、東列(P2~P4)が約1.8m・約1.8m、南列(P4~P5)が約1.3m、西列(P1~P5)が約2.0m・約1.9mを測る。柱穴の規模は径36~72cm、深さ28~34cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。

遺物は出土していない。

第24号掘立柱建物址(第154図)

本建物址はB区L-4・5グリッドに位置している。北東側には第23号掘立柱建物址が、東側には第59・60号住居址が、南西側には第69号住居址が近接し、第1号溝状遺構が走っている。またP1の北側には第186号土壌が極めて接近して存在している。本建物址は第72号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は第72号住居址が本建物址の北列と西列の一部を切り込んで構築している。

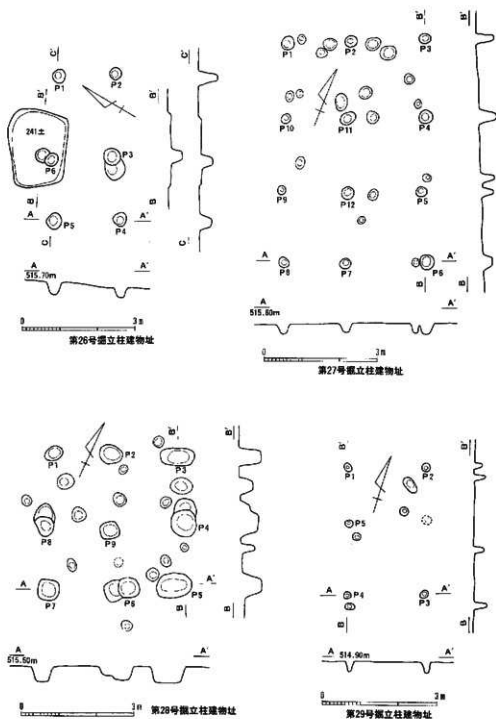
主軸方位をN-23°-Wにもつ2間(約4.3m)×2間(約4.4m)の坪掘の建物址で、総柱式である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約1.8m、東列(P2~P4)が約2.3m・約2.1m、南列(P4~P6)が約2.0m・約2.4m、西列(P6~P7)が約2.1mを測る。P5を除く柱穴の規模は径60~90cm、深さ28~60cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。P5は径130×110cm、深さ70cmを測り、平面形は不整楕円形を呈し、テラスをもち、柱の抜き取りの掘り方であろうか。

遺物は、図示不可能な土師器片がわずかに出土している。

第25号掘立柱建物址(第154図)

本建物址はB区L・M-5グリッドに位置しており、一部覆土をうけている。北側には第24号掘立柱建物址が、東側には第61号住居址が、南側には第27号掘立柱建物址が、南西側には第26号掘立柱建物址などが近接している。P2・P6・P7・P8がピットと重複しているが、別の建物址の存在がみとめられないことなどから、本建物址の建て替えの可能性はある。

主軸方位をN-66°-Eにもつ1間(約1.3m)×3間(約4.9m)の坪掘の建物址である。



第155图 第26·27·28·29号独立柱建物址 (1/100)

柱穴間の距離は東列（P1～P2）が約1.3m、南列（P2～P5）が約1.6m・約1.6m・約1.8m、西列（P5～P6）が約1.3m、北列（P1～P6）が約1.6m・約1.6m・約1.7mを測る。柱穴の規模は径34～57cm、深さ16～50cmを測り、平面形は不整形を呈する。遺物は出土していない。

第26号掘立柱建物址（第155 図）

本建物址はB区L・5・6グリッドに位置しており、北東側には第25号掘立柱建物址、南東側には第27号掘立柱建物址、南側には第68号住居址、西側には第45号掘立柱建物址、北西側には第69号住居址などが近接している。P6が第241号土溝と重複しており、その新旧関係は、司土溝により切り込まれている。

主軸方位をN-60°-Eにもつ1間（約1.7m）×2間（約3.9m）の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列（P1～P2）が約1.5m、南列（P2～P4）が約2.2m・約1.7m、西列（P4～P5）が約1.7m、北列（P1～P5）が約2.2m・約1.7mを測る。柱穴の規模は径30～43cm、深さ24～47cmを測り、平面形は不整形を呈する。

遺物は出土していない。

第27号掘立柱建物址（第155 図）

本建物址はB区L・M-6グリッドに位置しており、北側に第25号掘立柱建物址、東側に第28号掘立柱建物址、西側に第68号住居址、北西側に第26号掘立柱建物址などが近接している。本建物址内にいくつかのピットがみられるが、これらとの重複における新旧関係および性格などは不明である。

主軸方位をN-22°-Wにもつ2間（約3.7m）×3間（約6.0m）の坪掘の建物址で、総柱式である。柱穴間の距離は北列（P1～P3）が約1.8m・約1.9m、東列（P3～P6）が約2.1m・約2.0m・約1.9m、南列（P6～P8）が約2.1m・約1.6m、西列（P1～P8）が約2.0m・約1.9m・約1.9mを測る。柱穴の規模は径30～38cm、深さ30～50cmを測り、平面形は不整形を呈する。

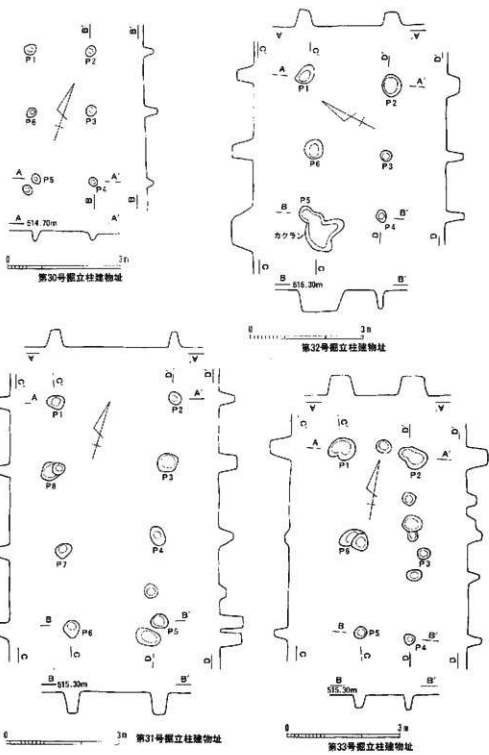
遺物は出土していない。

第28号掘立柱建物址（第155 図）

本建物址はB区M-5・6グリッドに位置しており、北側に第61号住居址、東側に第62号住居址、南側に第63号住居址、西側に第27号掘立柱建物址などが近接している。本建物址内にもいくつかのピットが存在する。これらの性格などについては不明であるが、補助的な柱穴かも知れない。

主軸方位をN-28°-Wにもつ2間（約3.3m）×2間（約3.6m）の坪掘の建物址で、総柱式である。柱穴間の距離は北列（P1～P3）が約1.6m・約1.8m、東列（P3～P5）が約1.8m・約1.7m、南列（P5～P7）が約1.7m・約1.8m、西列（P1～P7）が約2.0m・約1.8mを測る。柱穴の規模は径50～90cm、深さ36～58cmを測り、平面形は不整形および不整形を呈する。

遺物は出土していない。



第156 図 第30・31・32・33号掘立柱建物址 (1/100)

第29号独立柱建物址 (第155 図)

本建物址はB区O・P-6・7グリッドに位置しており、南西側に第93号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。

主軸方位をN-17°-Wにもつ1間(約2.0m)×2間(約3.4m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約2.0m、東列(P2~P3)が約3.4m、南列(P3~P4)が約2.0m、西列(P1~P4)が約1.5m・約1.9mを測る。柱穴の規模は径20~24cm、深さ27~30cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。

遺物は出土していない。

第30号独立柱建物址 (第156 図)

本建物址はB区P・Q-7・8グリッドに位置しており、南東側に第38号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はない。

主軸方位をN-21°-Wにもつ1間(約1.6m)×2間(約3.5m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約1.6m、東列(P2~P4)が約1.6m・約1.9m、南列(P4~P5)が約1.6m、西列(P1~P5)が約1.7m・約1.7mを測る。柱穴の規模は径22~27cm、深さ20~33cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。

遺物は出土していない。

第31号独立柱建物址 (第156 図)

本建物址はB区M-7グリッドに位置しており、東側に第66号住居址、南側に第32号独立柱建物址、南西側に第33号独立柱建物址が近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。

主軸方位をN-20°-Wにもつ1間(約3.1m)×3間(約6.0m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約3.2m、東列(P2~P5)が約1.7m・約1.9m、約2.3m、南列(P5~P6)が約2.3m、西列(P1~P6)が約1.8m・約2.1m・約2.1mを測る。柱穴の規模は径37~54cm、深さ39~54cmを測り、平面形は不整形楕円形および不整形円形を呈する。

遺物は出土していない。

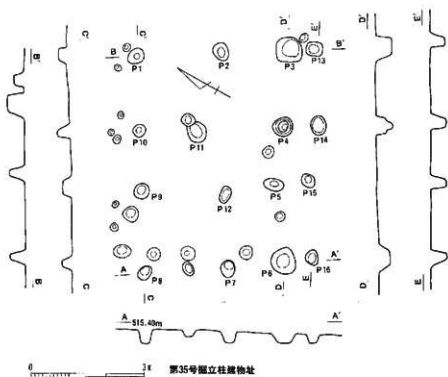
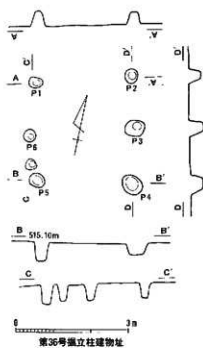
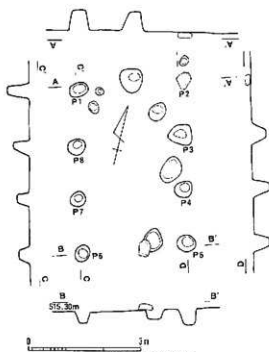
第32号独立柱建物址 (第156 図)

本建物址はB区M-7・8グリッドに位置しており、北側には第31号独立柱建物址が接するような状態で近接し、東側には第66号住居址、西側には第33号独立柱建物址が近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。

主軸方位をN-65°-Eにもつ1間(約2.3m)×2間(約3.6m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列(P1~P2)が約2.3m、南列(P2~P4)が約1.9m・約1.6m、西列(P4~P5)が約2.0m、北列(P1~P5)が約2.0m・約1.8mを測る。柱穴の規模は径29~59cm、深さ29~60cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。

遺物は出土していない。

第33号独立柱建物址 (第156 図)



第157 图 第34·35·36号独立柱建物址 (1/100)

本建物址はB区L-7・8グリッドに位置しており、東側に第32号掘立柱建物址、西側に第34号掘立柱建物址が近接し、そのほか周辺部には性格不明のピット群が近接している。P1・P2・P6がピットと重複しているが、その新旧関係は不明である。

主軸方位をN-15°-Wにもつ1間(約1.7m)×2間(約5.0m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約1.7m、東列(P2~P4)が約2.4m・約2.2m、南列(P4~P5)が約1.3m、西列(P1~P5)が約2.4m・約2.6mを測る。柱穴の規模は径30~70cm、深さ12~53cmを測り、平面形は不整長楕円形および不整形を呈する。

遺物は出土していない。

第34号掘立柱建物址(第157 図)

本建物址はB区L-7・8グリッドに位置しており、東側に第33号掘立柱建物址、北側に第35号掘立柱建物址が近接している。建物址内に数個のピットがみられるが、これらピットとの新旧関係は不明である。

主軸方位をN 16°-Wにもつ1間(約2.9m)×3間(約4.4m)の坪掘の建物址であるが、P2の箇所には柱穴ではなく平石がみられ、その下部には掘り込みをもたない。礎石だろうか。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約2.8m、東列(P2~P5)が約1.5m・約1.5m、約1.5m、南列(P5~P6)が約2.8m、西列(P1~P6)が約1.5m・約1.4m・約1.5mを測る。柱穴の規模は径30~62cm、深さ26~43cmを測り、平面形は不整長楕円形および不整形を呈する。

遺物は出土していない。

第35号掘立柱建物址(第157 図)

本建物址はB区K・L-7グリッドに位置しており、北東側には第68号住居址、北側には第45号掘立柱建物址、南側には第34号掘立柱建物址などが近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。

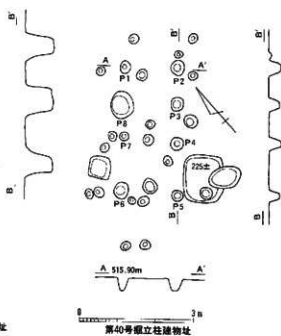
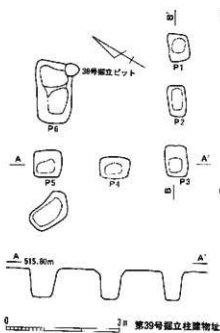
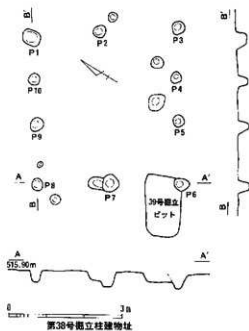
主軸方位をN-60°-Eにもつ2間(約4.0m)×3間(約5.7m)の坪掘の建物址で、総柱式である。南面に庇をもっている。柱穴間の距離は東列(P1~P3)が約2.2m・約1.8m、南列(P3~P6)が約2.1m・約1.6m、約2.1m、西列(P6~P8)が約1.4m・約2.2m、北列(P1~P8)が約2.0m・約1.6m・約2.1mを測る。柱穴の規模は径35~68cm、深さ20~42cmを測り、平面形は不整長楕円形および不整形を呈する。庇の柱穴(P13~P16)間の距離は約2.0m・約1.5m、約2.1mを測る。柱穴の規模は径40~52cm、深さ36~40cmを測り、平面形は不整形および不整形を呈する。

遺物は出土していない。

第36号掘立柱建物址(第157 図)

本建物址はB区L・M-9グリッドに位置しており、北側に第253号土壌、西側に第252号土壌、南東側に第255号土壌などが近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。

主軸方位をN 77°-EまたはN-13°-Wにもつ1間(約2.5m)×2間(約2.9m)の



第158 図 第37・38・39・40号掘立柱建物址 (1/100)

坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列（P1～P2）が約2.5m、東列（P2～P4）が約1.1m・約1.6m、南列（P4～P5）が約2.5m、西列（P1～P5）が約1.4m・約1.2mを測る。柱穴の規模は径33～50cm、深さ30～52cmを測り、平面形は不整形形を呈する。

遺物はP3・P5より土師器細片がわずかに出土しているが、図示はできない。

第37号掘立柱建物址（第158 図）

本建物址はB区I・J-7グリッドに位置しており、東側に第83号住居址、第84号住居址、西側に第238号土壌、第239号土壌が近接している。建物址内に第236号土壌および第237号土壌が存在し、P2が第236号土壌と重複する。その新旧関係は第236号土壌がP2を切り込んでいる。第237号土壌との新旧関係は不明である。

主軸方位をN-26°-Wにもつ2間（約2.1m）×3間（約4.9m）の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列（P1～P3）が約1.1m・約0.9m、東列（P3～P6）が約1.7m・約1.5m・約1.7m、南列（P6～P8）が約1.2m・約0.9m、西列（P1～P8）が約2.0m・約1.5m・約1.3mを測る。柱穴の規模は径23～34cm、深さ15～35cmを測り、平面形は不整形形および不整形形を呈する。

遺物は出土していない。

第38号掘立柱建物址（第158 図）

本建物址はB区J・K-5・6グリッドに位置しており、北側に第74号住居址、東側に第71号住居址、南東側に第81号住居址と第45号掘立柱建物址が近接している。本建物址は第39号掘立柱建物址と重複関係があり、その新旧関係は本建物址が、第39号掘立柱建物址の柱穴を切り込んでいる。

主軸方位をN-60°-Eにもつ2間（約3.8m）×3間（約4.2m）の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列（P1～P3）が約1.8m・約2.1m、南列（P3～P6）が約1.3m・約1.2m・約1.7m、西列（P6～P8）が約1.8m・約1.9m、北列（P1～P8）が約1.2m・約1.2m・約1.6mを測る。柱穴の規模は径30～50cm、深さ30～35cmを測り、平面形は不整形形を呈する。

遺物は出土していない。

第39号掘立柱建物址（第158 図）

本建物址はB区J-5・6グリッドに位置しており、東側に第81号住居址および第45号掘立柱建物址、南東側に第82号住居址、南西側に第84号住居址が近接している。P6が第38号掘立柱建物址のP6と重複しており、その新旧関係は前述のとおり第38号掘立柱建物址のP6が本建物址のP6を切り込んでいる。

主軸方位をN-30°-WまたはN-60°-Eにもつ2間（約3.2m）×2間（約3.4m）の坪掘の建物址で、東列には柱穴がなく東側に向かって開口している。柱穴間の距離は南列（P1～P3）が約1.5m・約1.8m、西列（P3～P5）が約1.7m・約1.8m、北列（P5～P6）が約1.8mを測る。P6以外の柱穴の規模は径70×70cm、深さ約80cm、P6の規模は径180×100cm、深さ約90cmを測る。平面形は不整形形を呈する。

遺物はP6覆土内から土師器残片が出土している。詳細は後述する。

第40号掘立柱建物址（第158図）

本建物址はB区H・I-6グリッドに位置しており、すぐ北側には第85号住居址、すぐ南側には第225号土壌が近接している。建物址内に性格不明ピットがいくつかみられるが、これらとの重複における新旧関係は不明である。

主軸方位をN 42° -Eにもつ1間（約1.5m）×3間（約3.4m）の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列（P1～P2）が約1.3m、南列（P2～P5）が約1.0m・約1.1m・約1.4m、西列（P5～P6）が約1.5m、北列（P1～P6）が約1.1m・約0.8m・約1.4mを測る。柱穴の規模は径25～70cm、深さ30～38cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。遺物は出土していない。

第41号掘立柱建物址（第159図）

本建物址はB区I・I-5グリッドに位置しており、北西側には第42号掘立柱建物址および第232号土壌、南西側に第223号土壌が近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。

主軸方位をN 76° -Eにもつ1間（約1.5m）×3間（約5.7m）の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列（P1～P2）が約1.5m、南列（P2～P5）が約2.2m・約1.3m・約2.1m、西列（P5～P6）が約1.5m、北列（P1～P6）が約2.1m・約1.8m・約1.8mを測る。柱穴の規模は径25～50cm、深さ30cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。遺物は出土していない。

第42号掘立柱建物址（第159図）

本建物址はB区G・H 4・5グリッドに位置しており、すぐ東側には第94号住居址、北側には第89号住居址、南東側には第232号土壌および第41号掘立柱建物址、南側には第87号住居址が近接している。本建物址P10が第233号土壌と重複しており、その新旧関係はP10が第233号土壌により切り込まれている。建物址内にみられるピットとの新旧関係については不明である。

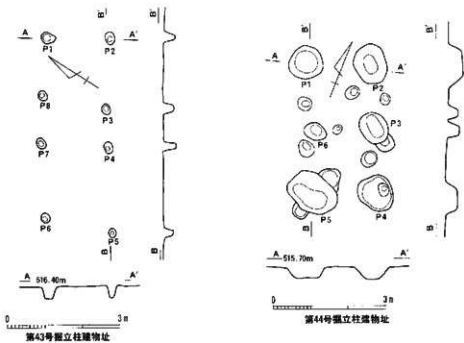
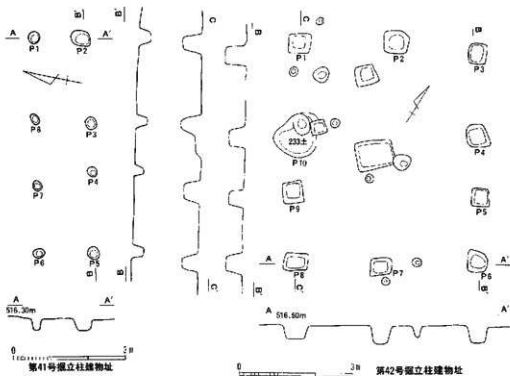
主軸方位をN 33° -Wにもつ2間（約4.8m）×3間（約5.8m）の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列（P1～P3）が約2.6m・約2.1m、東列（P3～P6）が約2.2m・約1.6m・約1.8m、南列（P6～P8）が約2.5m・約2.3m、西列（P1～P8）が約2.1m・約1.8m・約1.8mを測る。柱穴の規模は縦軸50～55cm、横軸40～60cm、深さ40～50cmを測り、平面形は不整形形を呈する。

遺物は出土していない。

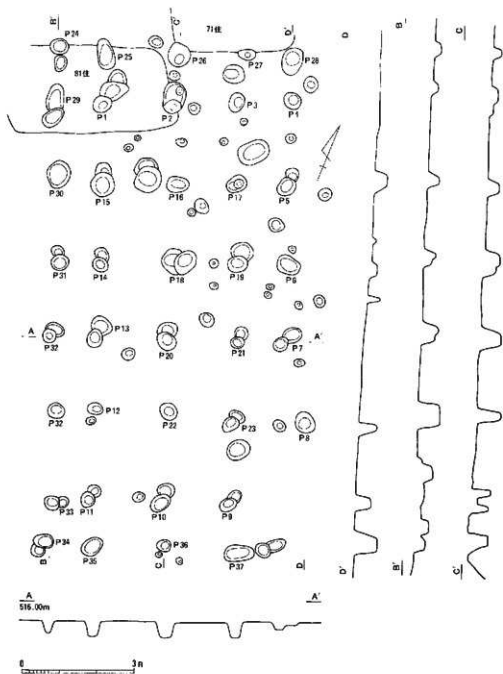
第43号掘立柱建物址（第159図）

本建物址はB区H・3グリッドに位置しており、東側に第79号住居址、西側に第88号住居址および第89号住居址が近接している。ほかの遺構との重複関係はなく、単独で存在している。

主軸方位をN 57° -Eにもつ1間（約1.8m）×3間（約5.1m）の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は東列（P1～P2）が約1.7m、南列（P2～P5）が約1.8m・約1.1m・



第159图 第41·42·43·44号独立柱建物址 (1/100)



第160图 第45号探立柱柱址(1/100)

約2.1m、西列(P5~P6)が約1.8m、北列(P1~P6)が約1.6m・約1.3m・約2.0mを測る。柱穴の規模は径25~40cm、深さ30cmを測り、平面形は不整形形を呈する。

遺物は出土していない。

第44号掘立柱建物址(第159図)

本建物址はB区M-4グリッドに位置しており、北西側に第53号住居址および第54号住居址、西側に第52号住居址、南東側に第51号住居址が近接している。本建物址P3およびP5が性格不明ピットと重複しているが、ピットをいずれも切り込んでいる。

主軸方位をN-22°-Wにもつ1間(約1.8m)×2間(約3.6m)の坪掘の建物址である。柱穴間の距離は北列(P1~P2)が約1.8m、東列(P2~P4)が約1.8m・約1.8m、南列(P4~P5)が約1.8m、西列(P1~P5)が約1.8m・約1.8mを測る、柱穴の規模は径90~130cm、深さ30~38cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。

遺物は各柱穴から土師器片がわずかに出土しているが、図示はできない。

第45号掘立柱建物址(第160図)

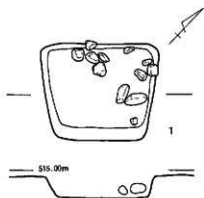
本建物址はB区K・L-5~7グリッドに位置しており、東側に第69号住居址、第68号住居址、第26号掘立柱建物址、南側に第35号掘立柱建物址、西側に第82号住居址、第39号掘立柱建物址、北西側に第38号掘立柱建物址などが近接している。重複関係はP1・P2・P24・P25・P29が第81号住居址と重複しており、P26・P27が第71号住居址と重複している。その新旧関係は、前者は本建物址の柱穴を住居址が切り込んでいるが、後者は不明である。

主軸方位をN-23°-Wにもつ3間(約5.0m)×5間(約10.5m)の坪掘の建物址で、総柱式である。北面、西面、南面の3面に庇をもつ。柱穴間の距離は北列(P1~P4)が約1.8m・約1.7m・約1.5m、東列(P4~P8)が約2.2m・約2.1m・約1.8m・約2.3m、南列(P9~P11)が約1.8m・約1.9m、西列(P1~P11)が約2.1m・約2.1m・約1.7m・約2.1m・約2.4mを測る。柱穴間の距離は北列(P24~P28)が約1.3m・約1.9m・約1.8m・約1.3m、西列(P24~P34)が約1.5m・約1.9m・約2.2m・約1.8m・約2.1m・約2.4m・約1.1m、南列(P34~P37)が約1.3m・約1.9m・約1.9mを測る。北列、西列、南列より約1.0~1.2mの距離をもつ。柱穴の規模は径35~75cm、深さ18~50cmを測り、平面形は不整形円形および不整形円形を呈する。柱穴のはほとんどが重複しており、建て替えを行った可能性があり、P6・P13・P14にて径10~18cmを測る柱痕がみられる。また、東列などの柱穴間に配されている小ピットは補助的な柱穴だと思われる。

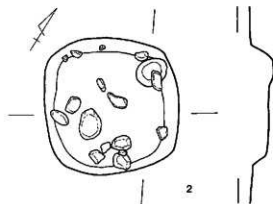
遺物は出土していない。

(3) 土 壌(第161図)

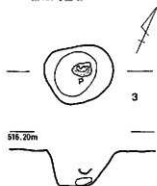
宮間田遺跡から検出された土壌の総数はA区・B区合わせて269基におよんでおり、性格不明のピットも含めれば、その数は莫大なものとなる。土壌として捉える基準として、規模が比較的大きく、遺物が出土しているものを中心とした。しかしながらこれらの基準にあてはまるものは極めて少なく、規模を中心に土壌として捉えたものが多い。



第121号土坑



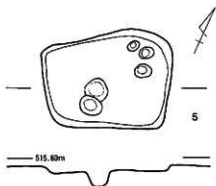
第207号土坑



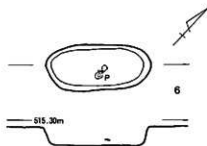
第203号土坑



第132号土坑



第241号土坑



第245号土坑



第161号土坑 (1/60)

土壌の分布範囲は遺跡内全体にわたり分布しており、密集する区域としない区域がみられる。密集する区域は、A区ではA-C-2～4グリッドおよびF-G 4～5グリッドなどで、B区ではI-M-1～3グリッドおよびK-L 4～5グリッドなどで密集している。規模としては径1.3m前後を測るものが多く、中には長軸が2.0mを越えるものもある。平面形は不整形円形、不整形円形、不整形方形、不整形長方形を呈するなどバラエティーに富んでいる。覆土はA区に属するものは暗褐色土を覆土とするものが多い。B区に属するものも暗褐色土を覆土とするものが多いが、I-M 1～3グリッドに属するものは黒褐色土を覆土としている。紙面の都合上、すべての土壌について報告することができず、以下代表的な土壌を幾つかピックアップして報告していきたい。なお、ほかの土壌については住居および掘立柱建物址の事実記載の項目においても、わずかであるが図版中に掲載しているので参照されたい。

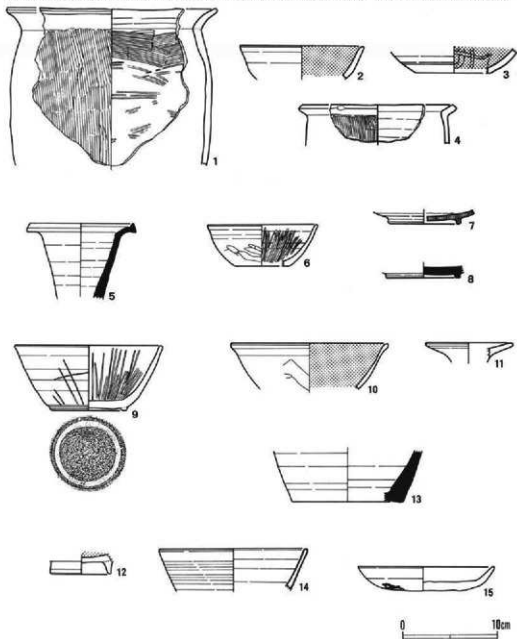
第159 図1はA区P-5グリッドに位置する第121号土壌である。規模は長軸1.8m、短軸1.52m、深さ約0.3mを測り、平面形は不整形長方形を呈する。覆土は暗褐色土を覆土としている。遺物は出土しておらず、礫が覆土内より比較的多く出土している。2はB区Q 4グリッドに位置する第207号土壌である。規模は2.19m、短軸2.13m、深さ0.32mを測る。平面形は不整形長方形を呈する。覆土は暗褐色土および暗黄褐色土を覆土としている。墳底に0.5×0.4mのピットがみられるが、その性格は不明である。遺物は出土していないが、覆土中層から墳底面にかけて拳大から人頭大の礫が多数出土している。3はB区K 5グリッドに位置する第203号土壌である。規模は径1.12m×0.91m、深さ0.57mを測る。平面形は不整形円形を呈する。覆土は暗褐色土を覆土としている。墳底面上約20cmのレベルから刻書を施した土師器環と礫が出土している。4はB区N-O-5グリッドに位置する第132号土壌である。規模は長軸2.14m、短軸1.15m、深さ0.3mを測る。平面形は不整形長方形を呈し、覆土は暗褐色土を覆土としている。遺物は土師器片がわずかに出土している。5はB区L 5・6グリッドに位置する第241号土壌である。規模は長軸2.1m、短軸1.6m、深さ0.1mを測る。平面形不整形長方形を呈し、覆土は暗黄褐色土を覆土としている。墳底にピットがいくつかみられるが、その性格は不明である。覆土内から青磁片が出土している。6はB区J 8グリッドに位置する第245号土壌である。規模は長軸1.69m、短軸0.75m、深さ0.3mを測り、平面形は長楕円形を呈する。覆土は暗褐色土を覆土している。墳底面上約10cmのレベルから刻書を施した土師器環(ほぼ完形)が出土している。

(4) 掘立柱建物址及び土壌出土遺物

掘立柱建物址及び土壌から出土した遺物をここにまとめた。前述のとおり両遺構から出土した遺物は極めて少なく、出土しても細片資料が多く、図示できるものが少ない。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、青磁などがあり、墨書・刻書土器も土壌からそれぞれ1点ずつ出土している。

第162 図1は第39号掘立柱建物址出土土師器甕。口縁部～胴部中位破片。推定口径21.8cm、推定胴径21.2cmを測り、内外面ともハケ調整。内面は磨滅が顕著。色調は内外面とも茶褐色を

呈し、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。2は第29号土壇出土土師器環口縁部破片である。推定口径13.0 cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理とミガキを施している。色調は暗褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は良好。3も第29号土壇出土土師器環底部破片である。推定底径8.0 cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理とミガキを施し、さらに暗文を施している。底部は欠けているため全体は不明だが、残存部はヘラケズリを施す。色調は褐色、胎土は白色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。4も第29号土壇出土土師器環口縁部破片である。推定口径16.4 cmを測り、



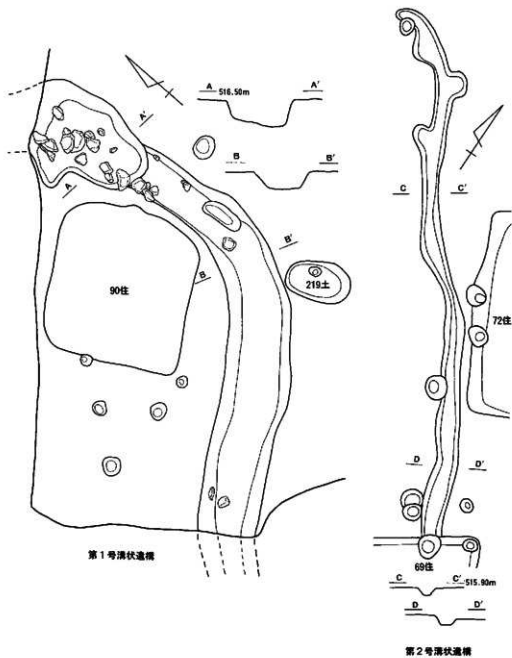
第162 図 掘立柱建物址及び土壇出土遺物（1 / 4）

内外面ともハケ調整。内面は磨減が顕著である。色調は暗茶褐色、胎土は白色粒・黒色粒・金雲母を含み、焼成は普通。5は第67号土壇出土須恵器長頸瓶の口頸部破片である。推定口径10.8cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。6は第123号土壇出土土師器環破片である。推定口径11.4cm、推定底径5.6cm、器高4.4cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は欠けているため全体は不明だが、残存部はヘラケズリを施している。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・黒色粒・石英を含み、焼成は良好。7は第131号土壇出土灰釉陶器高台部破片である。高台径7.2cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台で外面の稜は比較的明瞭で、内面は若干内彎している。色調は灰白色、胎土は砂粒を含むが緻密で、焼成は良好。8は第148号土壇出土須恵器環高台部破片である。高台径7.6cmを測り、底部は回転糸切りの後周辺部を回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。9は第203号土壇出土土師器環。約3分の2残存。口径15.5cm、高台径7.8cm、器高6.9cmを測り、外面はロクロナデの後体部下位を回転ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転糸切りの後周辺部を回転ヘラケズリ。高台は付け高台。体部外面にペン先状工具による刻書を施している。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。10は第207号土壇出土土師器環口縁部破片である。推定口径16.6cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後黒色処理を施す。色調は褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。11も第207号土壇出土土師器高台皿体部破片である。推定口径9.0cmを測り、内外面ともロクロナデ。色調は暗茶褐色、胎土は黒色粒・白色粒・赤色粒・金雲母を含み、焼成は良好。12は第207号土壇出土土師器環高台部破片である。高台径6.2cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理を施す。底部は回転ヘラケズリ。高台は付け高台。色調は暗赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。13は第240号土壇出土須恵器壺底部破片である。推定底径11.6cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転ヘラケズリ。色調は灰褐色、胎土は白色粒を含み、焼成は良好。14は第241号土壇出土青磁碗破片である。推定口径15.6cmを測り、色調は淡緑色、胎土は精選され緻密で、焼成は良好。16は第245号土壇出土土師器皿。ほぼ完形である。口径14.1cm、底径7.7cm、器高2.6cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転ヘラケズリ。体部外面に「丹」という墨書が記されているが、意味不明である。色調は明赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒を含み、焼成は良好。

(5) 溝状遺構

宮間田遺跡からは、溝状遺構が2条検出されている。第1号溝状遺構はB区調査区北西端に位置し、その一部が検出されており、第2号溝状遺構はB区のほぼ中央に位置し、第69号住居址に切られている。両者とも遺物はほとんど出土せず、その性格や構築年代など不明点が多い。

第1号溝状遺構 (第163図)



第163图 溝状遺構 (1/80)

本溝はB区F 4・5グリッドに位置している。北側には第90号住居などが接するような状態で近接しており、これを取り囲むように大きくカーブしている。北端および西端は、まだ調査区外に延びているものと思われる。

調査された範囲で全長約9.4m、溝幅は約0.9～2.1m、深さ約0.3～0.5mを測り、断面形は幅広のU字形を呈する。北端で長軸約2.6m、短軸約2.1mを測る土塊状の落ち込みが検出されており、その内部からは多量の糠が出土している。また溝内にてピットが検出されているが、これらの性格は不明である。覆土は灰白色を呈する砂質土である。

遺物が全く出土していないため、本溝の構築年代などは不明である。

第2号溝状遺構 (第163 図)

本溝はB区K・L 4・5グリッドに位置している。東側には第72号住居址、西側には第71号住居址、南西側には第45号堀立柱礎物址などが近接している。本溝は第69号住居址と重複関係にあり、その新旧関係は第69号住居址に本溝が切られている。

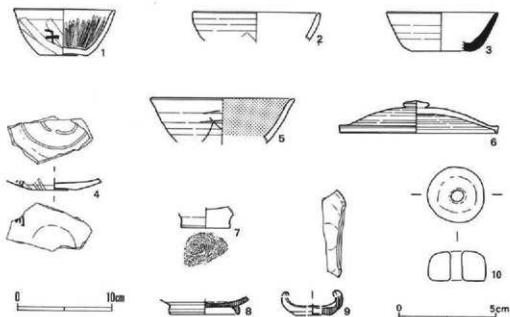
ほぼ南北に走る溝で、調査された範囲で全長約11.1m、溝幅は約0.25～0.5m、深さ約0.17～0.2mを測り、断面形は幅広のU字形を呈する。南端は第69号住居址によって切られているため不明だが、第69号住居址の南側では溝と思われる遺構が検出されていないので、同住居址の範囲の中で完結していると思われる。溝内にはいくつかのピットがみられるが、これらの性格は不明である。

遺物は第1号溝状遺構同様、全く出土していない。そのため本溝の構築年代など不明な点が多いが、少なくとも第69号住居址より前に構築されたのは間違いない。

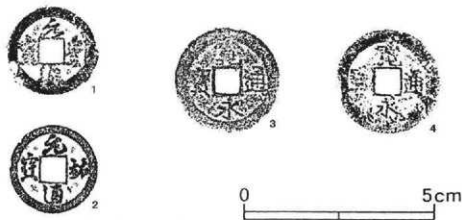
(6) その他の遺物

宮間田遺跡では、遺構確認の段階で多量の土師器、須恵器、灰釉陶器などの細片と縄文時代に属すると思われる石鏃などが出土している。また古銭も4枚出土している。

第164 図1はB区N-5グリッド内出土の上器器環である。第62号住居址の近辺にて出土しているため、同住居址に伴うものかもしれない。約3分の2残存。口径10.6cm、底径5.1cm、器高4.8cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は全面ヘラケズリ。体部外面に「七」と読める墨書が逆位に記されている。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。2はB区M-5グリッド出土土師器環口縁部破片である。推定口径13.2cmを測り、外面はロクロナデの後ヘラケズリ。内面はロクロナデ。色調は褐色、胎土は黒色粒・白色粒・金雲母を含み、焼成は良好。3もB区M 5グリッド出土須恵器環体部破片である。推定口径11.5cm、推定底径6.2cm、器高4.1cmを測る。内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切り。色調は灰褐色、胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好。4はB区P 4グリッド出土土師器皿の底部破片である。推定底径5.0cmを測り、外面はロクロナデの後回転ヘラケズリ。内面はロクロナデの後暗文を施す。底部は回転ヘラケズリ。体部外面に墨書が記されているが、判読不可能。色調は赤褐色、胎土は赤色粒・石英を含み、焼成は良好。5はB区O 5グリッド出土土師器環口縁部破片である。第50号住居址の脇にて

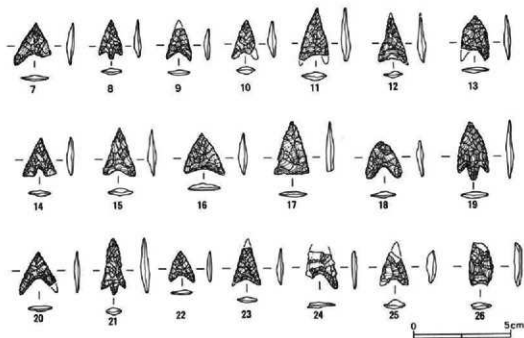
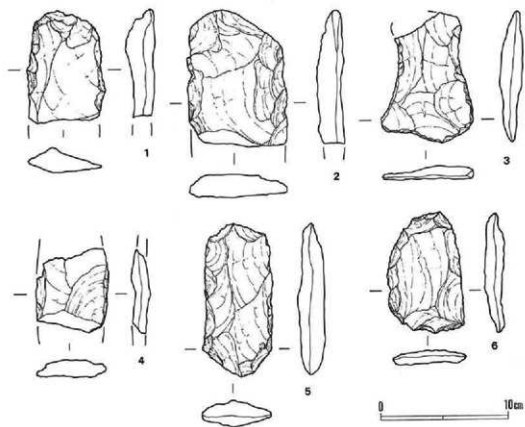


第164図 遺構外出土遺物(1/4)



第165図 古 銭(1/1)

出土しているため、同じ遺址に伴うかもしれない。推定口径14.9cmを測り、外面はロクロナデ、内面はロクロナデの後黒色処理を施す。体部外面に「矢」と読める刻書をペン先状工具により記している。色調は褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。6はA区G-1グリッド出土の土師器蓋である。推定口径16.4cm、器高3.3cmを測り、内外面ともロクロナデ。外面の天井部は回転ヘラケズリ。色調は暗褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。7はB区P-5グリッド出土の土師器高台付き皿?の高台部破片である。推定高台径4.9cmを測り、内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切りである。色調は明褐色、胎土は白色粒・石英を含み、焼成は良好。8はB区Q-3グリッド出土の灰釉陶器高台部破片である。推定高台径7.5cmを測り、内外面ともロクロ水挽き成形。高台は付け高台で外面は弧状を呈し、内面は内彎してい



第166 図 遺構内及び遺構外出土縄文時代石器（1～6は1/3、7～26は1/2）

る。釉薬は淡緑色を呈し、灰釉はツケがけ。色調は灰白色、胎土は砂粒を含むが緻密で、焼成は良好。9はB区Q-3グリッド出土の灰軸陶器耳皿である。推定口径5.8cm、推定底径3.8cm、器高2.4cmを測る。内外面ともロクロナデ。皿の側縁を折り曲げている。底部は回転糸切り。色調は灰白色、胎土は砂粒を含むが緻密で、焼成は良好。10はA区F-4グリッド出土の石製鈴車の初輪である。径2.9cm、高さ1.5cm、孔径0.6cmを測り、全体によく研磨されており、下端は平坦で上端は丸みを帯び、稜が明瞭ではない。石材はいわゆる滑石製である。

古銭(第165図)4枚出土している。第165図1はB区P-2グリッド出土の「元豊通寶」。2はB区P-1グリッド出土の「元祐通寶」。3はB区P-7グリッド出土の「寛永通寶」。4はB区O-1グリッド出土の「寛永通寶」。1~4まで铸造および字体は比較的しっかりしているが、1は磨減が著しく、3は銅銭で銹が全体に著しい。

遺構内及び遺構外出土縄文時代石器(第166図)

遺構内というのは住居址のことで、宮間田遺跡では住居址覆土内から打製石斧および石鏃の出土するケースが多くみられる。これら両石器が直接住居址に伴うものかどうか判断し難いため、遺構内及び遺構外出土縄文時代石器として、ここにまとめた。以下、表にして示す。

調査番号	No.	出土地点	種類	欠損	石材
166	1	第10号住居址	打製石斧	1/2欠	黒矽砂岩
	2	第10号住居址	打製石斧	1/2欠	黒矽砂岩
	3	第10号住居址	打製石斧	端部欠	黒矽砂岩
	4	第10号住居址	打製石斧	頭・右側欠	黒矽砂岩
	5	第10号住居址	打製石斧	完	黒矽砂岩
	6	第10号住居址	打製石斧	完	粗粒砂岩
	7	第10号住居址	石鏃	石鏃欠	黒曜石
	8	第10号住居址	石鏃	完	黒曜石
	9	第10号住居址	石鏃	端部欠	黒曜石
	10	第10号住居址	石鏃	右側欠	黒曜石
	11	第10号住居址	石鏃	左・右側欠	黒曜石
	12	第10号住居址	石鏃	ほぼ完	チャート
	13	第12号住居址	石鏃	左側欠	黒曜石
	14	第10号住居址	石鏃	完	黒曜石
15	A区P-5 Grid	石鏃	完	チャート	
16	B区E-6 Grid	石鏃	完	黒曜石	
17	H区I-4 Grid	石鏃	完	黒曜石	
18	A区F-6 Grid	石鏃	完	黒曜石	
19	B区L-3 Grid	石鏃	完	黒曜石	
20	H区P-7 Grid	石鏃	右側欠	黒曜石	
21	A区G-5 Grid	石鏃	完	黒曜石	
22	B区J-6 Grid	石鏃	完	黒曜石	
23	A区G-6 Grid	石鏃	端・右側欠	黒曜石	
24	A区K-6 Grid	石鏃	頭・右側欠	黒曜石	
25	A区G-5 Grid	石鏃	頭・右側欠	チャート	
26	第10号住居址	石鏃	未製品	黒曜石	

第2表 遺構内及び遺構外出土縄文時代石器一覧表

第V章 成果と課題

(1) 出土土器と編年の位置づけ

宮間田遺跡の出土土器は土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶磁器などがある。土師器、須恵器、灰釉陶器の大半は平安時代に属するもので、やはり土師器、須恵器の出土量がほかの土器群を圧倒している。

山梨における奈良・平安時代土器の研究は、すでに坂本・末木・堀内の3氏が「シンボジウム奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の様相—」のなかで、県内各地から出土した資料を15期に分類し、編年の位置づけをおこなっている。さらに坂本氏が、いわゆる「甲斐型」⁽¹⁾ 環の消滅以後の編年について「シンボジウム古代末期～中世における在来土器の諸問題」⁽²⁾ のなかで、8期に分類し編年の位置づけをおこなっており、これら編年の研究は3氏の精力的な研究によって大方の完成をみている。

そこでここでは、これら先学の研究成果に依拠しつつ、宮間田遺跡の住居址内出土土器を照合し、各住居址に年代を与えてみたい。時期決定にあたっては、器種を土師器環・皿・鉢・甕などを基本としており、おもにいわゆる「甲斐型」環を基本としている。また、各土器の帰属については、原則として床面・カマド・そのほか内部施設出土の土器を最優先としているが、床面直上出土の土器と覆土下層や中層山土の土器との接合関係もみられることなどから、これら覆土中層～下層土器出土土器についても一部扱っている。

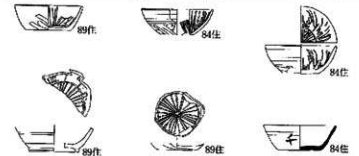
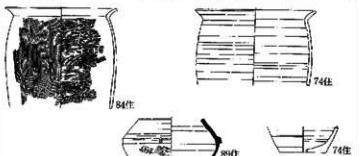
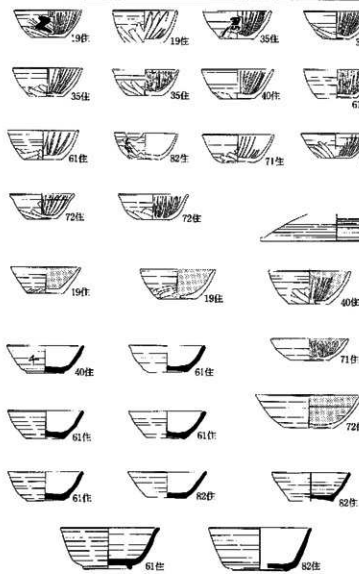
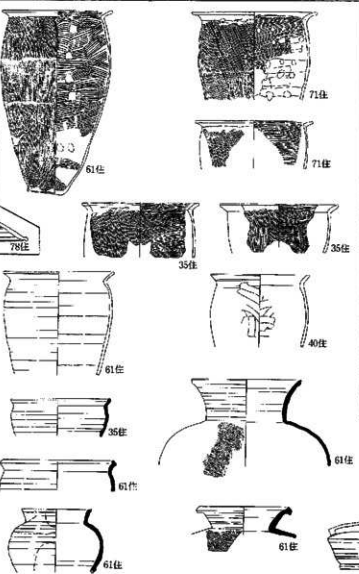
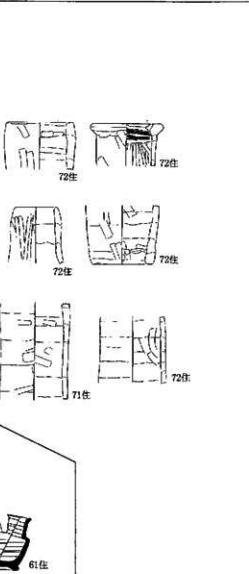
【宮間田Ⅰ期】

土師器環・甕、須恵器環・四耳壺などがある。土師器環は、口唇部が尖形を呈し、底径/口径比が50～60%付近にある。体部外面の整形は、体部下半を横位にヘラケズリを施すものと、斜めに施すものとの2種類存在し、暗文も体部内面のみを施すものほかに、底部内面にも施すものもある。底部は全面ヘラケズリのもと、回転糸切り後、周辺部のみヘラケズリを施すものがある。また、高台がつくものもあり、底部内面には暗文を施している。甕は、内外面がハケ調整されるものと、ロクロ整形されるものが存在する。前者の底部には木葉痕が残り、後者の底部は回転糸切りである。






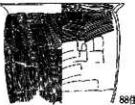





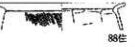














































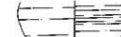








須恵器環は破片資料が多く全容は不明であるが、底部は回転糸切り無調整である。四耳壺も若干みられるが、全容は不明である。

【宮間田Ⅱ期】

土師器環・蓋・甕・円筒形土器、須恵器環・甕・平瓶などがある。土師器環は、口唇部がⅠ期に比べ若干丸みを帯びてくるとともに、底径の縮小化がみられる。体部外面の整形は、そのほとんどが斜めヘラケズリで、底部は回転糸切りの後、周辺部をヘラケズリするものと、全面をヘラケズリするものがあるが、回転糸切り無調整のものもわずかだが見られる。暗文は体部内面のみを施されるようになり、底部内面にはみられない。本期より「甲斐型」環のほかに、内面黒色土器もみられるようになる。蓋は量的に極めて少なく、全容がわかるものはないが、

時期	器種	壺・皿・蓋・鉢	壺・蓋・瓶類	その他
宮間田Ⅰ期				
宮間田Ⅱ期				

第167図 宮間田遺跡土器編年図(1)

時期 分類	坏・皿・蓋・鉢	甕・壺・瓶類	その他
宮間田山期	 17住  17住  17住  17住	 18住  88住	
	 18住  18住  18住  18住	 18住  80住	
	 32住  62住  62住  66住	 32住  88住  88住	
	 80住  80住  88住  88住	 32住  32住	
	 88住  88住  50住	 88住  88住	
	 32住  50住  62住	 32住  88住	
	 62住  62住  50住  66住	 17住  80住	
	 66住  66住  66住	 88住	
	 32住  50住  50住	 62住  18住	
	 50住  62住  62住	 80住  18住	
	 62住  32住  62住	 17住  33住	
	 18住  32住  62住	 17住  33住	
	 62住  62住		

第168 図 宮間田遺跡土器編年図②

時期	杯・皿・蓋・鉢	壺・釜・瓶類	その他
宮間田Ⅳ期			
宮間田Ⅴ期			
宮間田Ⅵ期			

第169図 宮間田遺跡Ⅰ器類年表(3)

外面の天井部付近は回転ヘラケズリを施し、内面には暗文を施している。甕はⅠ期同様、内外面がハケ調整されるものと、ロクロ整形の甕がみられる。両者の甕には大型・小型の甕があり、小型の甕にはロクロ整形の甕が比較的多くみられる。円筒形土器は第71・72号住居址から出土している。

須恵器環は第61号住居址から良好な資料を得ている。口縁部が若干丸みを帯びて立ち上がり、量的には口径<底径×2の範囲で捉えられる。底部は回転糸切り無調整のもと、回転ヘラケズリのもがみられ、後者には高台が付けられる。甕は大型および小型の甕がみられる。大型甕は口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部は複合口縁状を呈しており、小型甕は口縁部が緩く外反し、口唇部には面をもつ。長頸瓶は口縁部および底部破片のみの出土で、全容は不明である。平瓶は第61号住居址から1点出土している。

【宮間田Ⅲ期】

土師器環・皿・鉢・甕、須恵器環・甕・小瓶などがある。内面黒色土器の出土量が増加する傾向にあり、環・鉢をはじめ、高台付き皿など種類も増加している。環は暗文を施している。灰釉陶器も本期からみられるようになる。土師器環は口唇部がⅡ期に比べ一段と丸みを帯び、底径の縮小化も進み、量的には口径>底径×2の範囲で捉えられる。皿は本遺跡では、本期から顕著にみられるようになり、内面にくびれをもち、体部下半は横位の回転ヘラケズリで、底部は回転ヘラケズリである。内面には同心円状の暗文を施しているものが多い。鉢は内面黒色土器にみられるのみで、大型である。甕はⅠ・Ⅱ期同様、大型・小型の2種類があり、内外面にハケ調整されるものと、ロクロ調整で体部がヘラケズリされるものがみられる。

須恵器環の完形資料は、本期においては皆無に等しく、須恵器の全体量も少なくなる。小瓶および大型甕の底部破片もみられるが、やはり量的には極めて少ない。灰釉陶器は皿、短頸壺があり、猿投窯のK-14窯期・美濃窯の光ヶ丘1号窯期のものがみられる。

【宮間田Ⅳ期】

土師器環・皿・甕・羽釜とともに灰釉陶器が伴出している。土師器環は、口唇部が玉縁状を呈し、器形全体の大型化とともに、底径の縮小化が極端に進んでいる。底部は回転糸切りの後、全面ヘラケズリを施すものがほとんどで、周辺部のみヘラケズリを施すものはごくわずかである。体部外面は斜めヘラケズリを施しているが、前時期までみられた暗文が全く施されなくなる。皿も同様に、口唇部が玉縁状を呈するようになり、底径も極端に縮小し、その見極めも困難なほどである。内面のくびれもなく、緩やかにカーブを描きながら口縁部へとつづいている。内面黒色土器は本期でもみられるが、その量は減少している。高台付皿などはみられず、坏だけに限られている。内面の暗文は引き続きみられ、底径の縮小化がここでもみられる。

甕は口縁部の肥厚が進み、大型化しているが、小型の甕もわずかだがみられる。内外面ハケ調整された甕が中心だが、Ⅰ期からみられるロクロ整形の甕は、本期でもみられる。しかし、大型のものはなく小型の甕しかみられない。また、羽釜も本期からみられ、内外面はハケ調整もしくはヘラケズリを施し、後にヘラナデを施す。

灰釉陶器は、全期を通して量的に本期が最も多く、美濃窯の大原2号窯期などの製品が多く

搬入されている。

〔宮間田Ⅴ期〕

土師器環・甕・羽釜、灰釉陶器などがあり、その量は全体に少ない。土師器環は器高が低く、概して小型である。器厚も厚く、底部が台状につくられているものもあり、回転糸切り無調整である。甕は明確なものがなく、平縁で羽釜とも深鉢とも考えられ、ハケ調整は全くされていない。ヘラケズリやナデを多用している。羽釜はⅣ期同様みられるが、丸底形態を呈すると思われるものが第75号住居址から出土している。

灰釉陶器は、前時期に比べその量が減少しているが、本期でも引き続きみられる。やはり、美濃窯製品の搬入がみとめられる。

〔宮間田Ⅵ期〕

現在のところ山茶碗だけしかみられない。土師器環の細片がわずかに出土しているが、共存遺物の様相は不明である。山茶碗は1点だけ出土しており、くずれた三角形を呈する付高台をもち、高台端にモミガラ圧痕を残す美濃窯丸石3号窯期のものである。

以上、宮間田遺跡では出土土器から、大まかながらⅥ期に分けることができるが、ほかにわずかであるが、14世紀以前の所産と考えられる常滑製甕の底部破片が第14号住居址から出土しており、もう1時期設定できるかもしれないが、その量が極めて少く全容を捉えられないため、敢えて設定しなかった。

これらⅠ期からⅥ期までの出土土器に、坂本・末木・堀内3氏の編年から、年代を与えてみると、以下ようになる。

宮間田Ⅰ期：9世紀第3四半期

宮間田Ⅱ期：9世紀第4四半期

宮間田Ⅲ期：10世紀第1四半期～第3四半期

宮間田Ⅳ期：10世紀第4四半期

宮間田Ⅴ期：11世紀前半～11世紀後半

宮間田Ⅵ期：13世紀前半

というようになると思われる。

さらに各期にこれら遺物が出土した住居址をあてはめてみると、以下ようになる。

宮間田Ⅰ期：第74・84・87・89号住居址

宮間田Ⅱ期：第10・15・19・35・40・56・61・64・68・71・72・78・80・82・83・85・86・90号住居址

宮間田Ⅲ期：第17・18・29・32・38・50・52・55・62・66・67・80・88号住居址

宮間田Ⅳ期：第37・42・43・48・54・70号住居址

宮間田Ⅴ期：第20・27・36・45・53・73・75号住居址

宮間田Ⅵ期：第9号住居址

となるが、土器資料に乏しい住居址は、これらの中に加えていない。

以上、各住居址の出土土器から先学の研究成果に依拠しつつ土器を概観し、編年の位置づけ

をおこなってみた。またこれらを住居址にフィードバックさせて、大まかであるが年代を与えてみた。しかし、各出土土器の場風を床面直上やカマド内だけでなく、覆土内のもも含めているため、さらに詳細な検討を加える必要があろうかと思われる。

(2) 金属製品について

宮間田遺跡からは、第33号・47号・62号住居址という3軒の小鍛冶遺構が存在するが、鉄製品については、その出土数が極めて少ない。ほとんどが住居址出土であるが、総数24点で・鎌1点・麻皮削器1点・刀子8点・銚1点・釘1点・鐵4点・釣り針状鉄製品1点・性格不明鉄製品7点が出土しており、銅製銚帯の巡方も1点出土している。また、鉄滓も小鍛冶遺構を中心に、数軒の一般住居址からも出土している。

農具：農具としては、鎌が第43号住居址（Ⅳ期）から1点出土している。消耗が激しく、刃部が欠けている。ほかに開墾具・耕作具としての農具は出土していない。

紡織具：麻皮削器が第61号住居址（Ⅱ期）から1点出土している。本来の機能は現在のところ明確ではないが、収穫用具の範疇で捉えられるかもしれない。

工具：刀子・銚・釘があり、刀子は本遺跡のなかで最も多く出土している。第15号住居址（Ⅱ期）から2点、第20号住居址（Ⅴ期）から2点、第35号住居址（Ⅱ期）から1点、第43号住居址（Ⅳ期）から1点、第47号住居址（不明）から1点、第84号住居址（Ⅰ期）から1点出土している。完存するものはほとんどなく、第47号住居址出土の刀子だけが完存し、茎部に孔が穿たれており、大型の刀子である。本住居址は小鍛冶遺構で、ほかに鉄製品は出土せず、刃口と鉄滓が出土している。

刀子は出土点数は少ないものの、ほぼ各時期にわたり出土しており、普遍的な存在を示している。おそらく日常的に幅広い用途で使用されていたと思われる。

銚は第61号住居址（Ⅱ期）から1点出土している。茎部には木質が遺着しており、釘は第20号住居址（Ⅴ期）から出土しており、量的には多くない。

武器：鉄鎌は4点出土している。第20号住居址（Ⅴ期）から2点、第37号住居址（Ⅳ期）から1点、第73号住居址（Ⅴ期）から1点出土している。ほかにも茎部だと思われる棒状鉄製品が第66号住居址などから出土しているため、出土点数は若干増加するかもしれない。鉄鎌の形態は、短頸籠被腸袂両丸造正三角形式が1点、短頸籠被両丸造柳葉式が1点、雁脱式が2点となっている。鉄鎌は集落出現期からは存在せず、Ⅳ期からⅤ期にかけてみられるようになり、ある特定の住居址に集中する傾向があり、ほかの鉄製品に関しても同じような傾向を示している。

鉄鎌の出土点数から考えると、果たして本当に武器として使用されたのかという疑問がわいてくる。あるいは祭祀に伴う遺具としても使用されていたかもしれないが、祭祀にかかわる共同遺物は出土していない。律令体制下では公然とは武器・武器の生産は許されておらず、こうした背景のもとで出土点数が少ないのか、あるいは祭祀遺具の関係で多く所有する必要がなかったのかなど問題は残るが、10世紀後半以降、ほかの鉄製品とともに次第にその出土数を増して

いく傾向がみられることから、律令体制の弛緩に伴い、武器の所有の制限も徐々にではあるが、緩和していったものと理解しておきたい。

銅製品：鈔帯の運方が第82号住居址（Ⅱ期）の床面直上から1点出土している。鈔帯は官位を示すもので、集落内でも大形住居址などから出土し、公的権力と在地の有力者層との結びつきが示唆されてきた。本遺跡では一辺が3mほどの住居址から出土しており、共存遺物も土師器などの土器しかみられず、とても官位をもつ人間の住居とは思えない。今後、集落内出土の鈔帯に対する再検討が必要となろう。

以上、宮間田遺跡における鉄製品を中心に整理してみた。鉄という性質上、遺存しにくく、錆直し易いということで、一概に量的な面のみから、集落内における鉄製品の在り方を検討できない。本遺跡では3軒の小鍛冶遺構があり、出土土器の検討により少なくともⅡ期とⅢ期に存在していることがわかっている。一般住居址から出土する鉄製品と小鍛冶遺構がどのような関係にあり、鉄製品の生産がどのようにおこなわれていたのか、ほかの遺跡との比較検討などをおこない、今後さらに検討していかねばならない。

（3）住居址について

宮間田遺跡からは住居址が94軒検出されている。この内平安時代の住居址として明確に捉えられるものが74軒、13世紀～14世紀代の住居址として捉えられるものが2軒、時期不明のものが18軒となっている。遺跡が存在する可能性のある工事予定区域総面積が約50,000㎡を超え、実際の調査総面積が約12,000㎡で、全体の50%にも満たないが、本地域における平安時代集落の一端ではあるが、その様相を知ることができよう。

分布について

まず住居址の分布であるが、住居址どおしあるいはほかの遺構と近接しているケースは多いが、住居址間の重複は激しくなく、集落内において、居住規制があまり強くなかったことを想定することができる。

平面形態について

住居址の平面形態は、隅丸方形・隅丸長方形の2種類が基本となっている。時期不明の住居址である第69号住居址のように、台形状を呈するものもあるが、1体的ではない。

規模について

本遺跡で最大規模を測る第64号住居址で、長軸6.58m、短軸6.00mを測り、面積は約39.0㎡、次いで第42号住居址は長軸6.84m、短軸5.60mを測り、面積は約37.4㎡を測る。そのほか大形住居址の部類に入るものとして第35・36・37・53・58・61・62・73・75号住居址が挙げられる。大形住居址は、集落の出現期から存在しており、特に、Ⅳ期からⅤ期にかけて一般の住居址も人形化してくる傾向にある。

一方小形住居址であるが、一辺が3m前後を測るものがそれにあたる。第10・25・32・38・49・55・56・57・59・60・70・74・82・83・87・90号住居址などが挙げられる。これらは平安時代に属する住居址であるが、時期不明とされる住居址の中には、長軸・短軸ともに3mに満

たないものが存在している。

住居址の規模からみる限り、大形・小形の住居址が存在し、ある種の階層差が存在するようであるが、前述した第82号住居址のように、公的権力との結びつきを示唆する罫帯が出土している現状を踏まえると、単に階層差から生じた現象として捉えるのではなく、母屋と離れというように、住んでいた人間の使用目的に違いがあったという可能性も考えられるのではなからうか。

柱穴・壁溝について

無柱穴のものが大半を占めるが、明確に柱穴を伴う住居址として第19・35・58・61・64・72・93号住居址などが挙げられ、柱穴の本数は2～4本で、概して大形住居址に多くみられる。第62号住居址には柱穴がないが、南壁に入口状施設に伴うものと思われる柱穴が2本みられ、第58・61号住居址にも柱穴のほか、これら柱穴もみられる。柱穴の有無について、時期的な変化などは特にみいだせない。

平安時代として明確に判明できる住居址なかで、壁溝が巡っているものは、第32・33・57・58・61・62・63・68・74・78・82・83・84・85・86・87・88・91・93号住居址が挙げられる。これらの住居址のなかですべての壁下に巡るものは第58号住居址などごくわずかであり、ほとんどがいずれかの壁下の一部にしか巡っていない。時期的にみれば壁溝は、I期～II期の住居址に比較的多く巡る傾向がみられる。

床について

床は、その大半が黄褐色土を床面としており、地山面が砂層の場合は黒褐色土などで貼床を施している。床面は全体に概して軟弱であり、カマド周辺部のみ堅固である場合が多い。

カマドについて

カマドが設置されている位置については、圧倒的に東壁が多く、南壁および南コーナー、西壁に設置されているものも若干みられ、カマドが設置される位置が時期によって若干異なる傾向を示している。集落出現期からカマドは、東壁もしくは南壁に設置されていたと思われ、11世紀以降になると、南壁および南コーナーに設置されるようになることが看取される。末木健氏が指摘するように、⁽⁴⁾いずれの住居址も、八ヶ岳山麓地域特有の季節風を避けるかのごとく、東壁や南壁にカマドを設置している。

また、同一住居址内でカマドの造り直しをおこなっている住居址が一軒もみられない。このことは、一つの住居に対する居住期間の短さを示してはいないであろうか。もしそうであれば、このことから居住区域に対する規制が比較的緩やかであったことを想定できる。

カマドの構造は、本地域に普遍的にみられる石組カマドで、袖部に河原石などを用い、粘土で補強している。天井部も河原石と粘土を併用しているケースが多い。

(4) 宮間田遺跡をめぐる諸問題

以上、集落の大まかな変遷と、住居址についておもに概観してきたが、宮間田遺跡にはまだ数多くの問題が山積みとなっている。最後に、これら問題を若干取り上げ、まとめにかえたい。



〔宮間田Ⅰ期〕



〔宮間田Ⅱ期〕

第170 図 宮間田遺跡住居址変遷図(1)



【宮間田Ⅲ期】

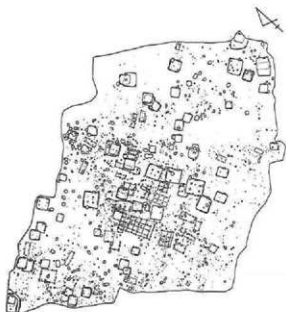


【宮間田Ⅳ期】

第171 図 宮間田遺跡住居址変遷図②



【宮間田V期】



【宮間田VI期】

第172 図 宮間田遺跡住居址変遷図(3)

1. カマドをもたない住居址について

A区などにおいて多くみうけられるカマドをもたない住居址について、どのような評価をすればよいのか、現段階では不明だといわざるを得ない。遺物が極めて少なく、時期を決定づけるような遺物も出土していないのである。ただ、第9号住居址や第14号住居址のように、中世に属する山茶碗や常滑陶器片が出土していることから、これらの大半が中世に属する可能性もある。県内では、北巨摩郡長坂町小和田館跡などで検出例はあるが、類例に乏しく、その全容は判明していない。住居址の床面も極めて軟弱で、焼土などの痕跡もみられないことから、住居だとすることも甚だ疑問でもある。

2. 掘立柱建物址について

掘立柱建物址については、宮間田遺跡からは前述のとおり45棟検出されている。今回、詳細な検討を避けた理由に、遺物が皆無に等しい程出土していないことが第1に挙げられる。本遺跡でみられる掘立柱建物址は、1間×2間、1間×3間、2間×2間、2間×3間、3間×5間の掘立柱建物址がある。総柱式と側柱式とでは、総柱式の方は45棟中9棟で、側柱式の方が圧倒的に多い。

特に、B区において3面に庇をもつ3間×5間総柱式の第45号掘立柱建物址や1面庇ではあるが2間×3間総柱式の第35号掘立柱建物址など、庇をもつ建物址が存在していることは注目しなければならぬ。その構築年代などは、出土遺物がなく不明であるが、住居址との重複関係からすると、9世紀代にはすでに存在していたものと思われる。ある時期において、この建物址が集落内で果たした役割とは一体何であったのか、大形住居址とのかかわりなど、これら建物址が内陥している問題は多い。また、ほかの建物址についても、構築年代など判明しているものがほとんどなく、概して小形の建物址が多く、主軸にも若干のバラつきがみられる。これらの建物址に関して、住居址群との有機的な関係が想定でき、その性格の把握に努めなければならない。

3. 小鍛冶遺構について

小鍛冶遺構の存在については、鉄製品の項で若干ふれたが、小鍛冶遺構はⅡ期(第33号住居址)とⅢ期(第62号住居址)に存在していたことが判明している。集落の出現期からすでに存在していたかどうかは不明ではあるが、第47号住居址が集落出現期の小鍛冶遺構かもしれないが、土器の共伴がみられず不明である。Ⅳ期に属する第43号住居址などからも焼形鉄滓が出土しており、本期においても小鍛冶遺構が存在していた可能性をもっている。

八ヶ岳南麓地域の平安時代集落の大半は、こうした小鍛冶遺構をもっていたり、住居址などから鉄滓が出土している集落が多くみうけられ、北巨摩郡高根町東久保遺跡では、萩原三雄氏が指摘するように、小鍛冶遺構は集落出現期からみられるが、10世紀後半代のそれは、前代に比べ住居址の規模も大形化し、集落の中心位置を占めるようになる。これは宮間田遺跡でも、ほぼ似た様相を呈しているといえる。この様相が本地域において、普遍的なものなのかは、今後さらに検討していかなければならないが、その背景には9世紀後半以降、鉄原料を入手するルートが確立されていたことが想定でき、これがさらに10世紀以降、より積極的に交易がお

こなわれるようになり、小鍛冶遺構もより共同体内部に浸透していったものと考えられ、集落内にみられる灰釉陶器や緑釉陶器などの搬入品の増加なども、鉄原料などとともに入手された結果とみれないだろうか。

4. 墨書土器および刻書土器について

宮間田遺跡における墨書土器および刻書土器は、I期では第77・84・89号住居址から出土しており、第77号住居址では須恵器器坏に「川」の字状の刻書、第84号住居址では「千村」・「下」の墨書各1点のほか、判読不可能の墨書土器が1点、第89号住居址では、第88号住居址の覆土に混じて「下村」の墨書土器が1点出土している。

II期では第19・35・40・56・67・72・78・79・82・85号住居址から出土している。第19号住居址では「乙」が1点、第35号住居址では「忍？」が1点、第40号住居址では「千」が1点、第56号住居址でも「千」が1点、第67号住居址では「□村」が1点、第72号住居址では「*」状の刻書が1点、第78号住居址では「牧□」・「伴」が各1点と判読不可能の墨書土器が1点、第82号住居址では「下村」が1点、第85号住居址では「麻」が1点出土している。

III期では第18・32・50・52・62・66・67・88号住居址から出土している。第18号住居址では「生」・「主」が各1点と「神」が2点、第32号住居址では「木」が1点と判読不可能の墨書2点、第50号住居址では「矢」と「佛？」が各1点、第52号住居址では「南」が1点と判読不可能の墨書が1点、第62号住居址では「富」・「向」・「十」・「中」・「凡」の墨書が各1点と「矢？」の刻書が1点、第66号住居址では「矢」が4点と判読不可能の墨書が1点出土しており、「矢」の墨書は、墨書の上をなぞって刻書を加えている。第67号住居址では「矢」が1点のほか判読不可能の墨書が1点、第88号住居址では「矢」が2点と判読不可能の墨書が1点出土している。

IV期では第37・42・43・48・54・70号住居址から出土している。第37号住居址では「乙」が1点、第42号住居址では「乙」・「丑」が各1点、第48号住居址では判読不可能の墨書が1点、第54号住居址では判読不可能の墨書が1点、第70号住居址でも「乙」が1点出土している。V期以降は、墨書および刻書土器の出土はみられない。

以上のように、住居址出土の墨書および刻書土器は、27軒の住居址から45点出土している。墨書・刻書土器は、集落の出現期であるI期からみられ、IV期までつづいてみられる。特に、「千」および「千村」はI期とII期の両期にわたってみられ、III期には「矢」が中心にみられ、IV期にはほぼ全住居址で「乙」がみられ、各期とも特にある特定の住居に集中するような傾向はないが、これら墨書土器を媒介とした集団の存在を想定することができる。しかし、本集落の解体期まで連続的にみられる墨書はなく、いくつもの集団が移入流を繰り返したことを想定することができる。

また、本遺跡の墨書は文字か二文字で、記号的なものも含み意味不明のものが非常に多く、宮瀬交二氏が指摘するように「村落構成員が独自に理解するものであったことを端的に示す」ものであったに違いないが、「千村」・「牧□」の墨書については、地名・役職名の可能性があり、本集落の性格づけをおこなうことができる重要な資料であると思われる。後日検討をおこ

ないたい。

5. 宮間田遺跡の史的背景

宮間田遺跡がある北巨摩郡武川村一帯は、第Ⅱ章でもふれたように、巨摩郡真衣郷が置かれていたことが想定されており、真衣郷には『延喜式』にみる真衣野牧の設置に伴って発達した郷だといわれている。真衣野牧の設置の時期については明確には不明であるが、牧に関連する文献史料などによると、9世紀前半にはすでに設置されていた可能性がたつとよく、それ以前にも溯れる可能性がある。宮間田遺跡は、その所在地からみても真衣郷のなかに形成された集落の一つで、真衣野牧の経営に何らかの形で関与した集団の集落である可能性が非常に高いが、どのようなレベルで牧経営に関与していたのかは不明といわざるを得ない。

宮間田遺跡の集落の開始時期については、先に述べたとおり、9世紀第3四半期頃であり、9世紀の末から10世紀前半にかけて住居数も増加し、当時の繁栄を物語っている。これは文献上にみる「駒牽」の記録とほぼ一致しており、磯貝正義氏によれば「延喜4年から大慶元年(938)頃までは、ほぼその期日が守られており、期日に遅れても数日を出るものではなかった。」というように、牧経営がもっとも安定していた時期ともいえる。しかしそれ以降、平将門の乱や平忠常の乱などに代表されるように東国一帯は動乱期を迎え、これらの余波が甲斐国にもおよんでいたようで、駒牽の行事の期日や駒の定数も守られなくなり、やがて御牧自体も衰退の一途を辿っていくようである。文献上では、真衣野牧の駒牽の記事は11世紀の末まで消えているが、磯貝氏も指摘するように、『吾妻鏡』建久5年(1194)3月13日条に、「甲斐国武河御牧駒八疋参着。被経御覧可被進京都云々。」とあり、この「武河御牧」を真衣野牧の後身とみれば、少なくとも12世紀末から13世紀前半においても牧が存続していたことになり、これは宮間田遺跡において13世紀前半に属するとされる山茶碗の存在とほぼ一致する。

このように、真衣野牧の成立・繁栄・衰退の一端を宮間田遺跡のなかで少なからずよみとることができ、集落の成立期から牧経営に何らかのかたちで関与していたことを想定することができよう。しかし、遺物面からみると馬具などの牧に関連するような遺物の出土はなく、唯一「牧」と記された墨書土器が出土しているのみで決め手に欠けている。

以上、宮間田遺跡に関する諸問題をいくつか挙げてきたが、宮間田遺跡の集落が営まれた背景には御牧の存在が想定され、牧経営に深く関与した人々の集落であることを想定することができる。今後、八ヶ岳や茅ヶ岳の裾野に展開する平安時代集落との対比研究や、宮間田遺跡周辺地域の平安時代集落の資料が増加すれば、宮間田遺跡の集落がもつ性格がより浮彫りにされてくるに違いないと、今後の発掘調査が期待されることである。

註

- (1) 坂本美夫・末木健・堀内真 1983 「奈良・平安時代の諸問題 甲斐地域-」『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会
- (2) 坂本美夫 1986 「古代末期～中世における在来系土器の諸問題-甲斐国における古代末期の土器様相-」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会

- (3) 井上尚明 1987 「銚帯をめぐる二・三の問題」『埼玉の考古学』 新人物往来社に
おいて、銚帯に対する再評価をおこなっている。
- (4) 末木健他 1974 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡小淵沢
町地内—』 山梨県教育委員会
- (5) 岡本範之他 1985 『小和田館跡発掘調査概報』 長坂町教育委員会
- (6) 雨宮正樹他 1984 『東久保遺跡』 高根町教育委員会
- (7) 萩原三雄 1986 「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集』Ⅰ 山
梨県考古学協会
- (8) 宮藤交二 1985 「古代村落と墨書土器—千葉県八千代市村上遺跡の検討—」『史苑』
第44巻第2号 立教大学史学会
- (9) 磯貝正義 1978 『郡司及び采女制度の研究』 吉川弘文館

参 考 文 献

- 井上尚明 1985 「古代集落における掘立柱建物について—八・九世紀の北武蔵を中心とし
て—」『土曜考古』第10号 土曜考古学研究会
- 井上満郎 1980 『平安時代軍事制度の研究』 吉川弘文館
- 岡田正彦 1982 「平安時代の鉄製用具と小塚遺構小考—特に中宿信地方住居址出土遺物を
中心として—」『中部高地の考古学』Ⅱ 長野県考古学会
- 阪本美夫 1983 「甲斐の郡(評)郷制」『研究紀要』Ⅰ 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵
文化財センター
- 清水時他 1987 『ア木遺跡』 榊形町文化財調査報告書№5 榊形町教育委員会
- 山口昭二 1983 『美濃城』 考古学ライブラリー17 ニュー・サイエンス社
- 中田英他 1983 『向原遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書Ⅰ 神奈川県教育
委員会
- 長沢宏昌他 1985 『北堀遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第7集 山梨県教育委
員会・日本道路公団
- 長沢宏昌他 1985 『笠木地蔵遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第12集 山梨県教
育委員会・日本道路公団
- 柄崎彰一・斎藤孝正 1983 「猿投窯編年の再検討」『愛知県陶磁資料館研究紀要』Ⅱ 愛知
県陶磁資料館
- 橋口定志 1985 「平安期における小規模遺跡出現の意義—南関東における事例を中心にし
て—」『物質文化』44 物質文化研究会
- 平野修他 1986 『宮間田遺跡』 武川村教育委員会・峡北土地改良事務所
- 山下孝司他 1985 『中田小学校遺跡』 韮崎市教育委員会
- 山梨郷土研究会編 1981 『山梨郷土史年表』 山梨日日新聞社

おわりに

第1次調査から、はや3年の歳月が経っている。圃場整備事業という性格上、工事面積は膨大な広さにわたり、発掘調査期間もその年の春から秋にかけてに限られるケースが多く、もし遺跡が工事対象区域全体にわたれば、記録保存を目的とした発掘調査といえども、担当者1人の能力では必要最小限の記録をとどめるにすぎない調査となってしまうケースが非常に多い。

宮間田遺跡は、県内の平安時代集落としても屈指の大集落であると地元のマスコミなどに取り上げられ、その重要性が説かれていた。その期待に十分にこたえられるよう発掘調査の段階から発掘担当者をはじめ地元の作業員のみなさんと、夏の炎天下や晩秋の季節風が吹きあれるなか一生懸命調査に望みだつもりだが、いまこうして報告書として記録をまとめてみると、やり残したことが非常に多いことを痛感している。報告書として決して十分な報告とはいえないが、少なくとも本報告書として宮間田遺跡が公の場に発表できたことは唯一の救いであると考え。今回ふれられなかった諸問題については、今後言及していくつもりである。

また、この発掘調査で得られた資料を単に考古学研究者などの研究材料のみとしてではなく、ひろく一般の方々にも歴史資料として活用されることが望まれるところである。この武川村の土地で生きた平安時代の人々は、現在と変わらない山並みなどの風景をながめ、一日一日を一生懸命に生きていたにちがいない。私達の祖先が永々と造りあげてきた原初的な文化の場を手放すだけでなく、彼らが造りあげてきたものがいかに武川村の風土に適していたかを認識するとともに、自然と文化の有機的連続性の確認が今必要ではないだろうか。

北巨摩地域は現在、圃場整備事業やほかの様々な開発行為によって自然とともにこうした原初的な文化の場をも失おうとしている。北巨摩の失われてゆく文化・伝統をいかに21世紀にむけて子供達に伝承していったらよいか、地域住民の方々とともに模索していかなければならないと思っている。

最後になりましたが、発掘調査の段階から黙々と作業に従事していただいた地元の作業員のみなさんや武川村中学校生徒のみなさん、そして数々の御協力をいただきました関係各諸氏・諸機関のみなさまには深く感謝申し上げる次第です。

图 版



1. A区遺跡
調査前



2. A区遺跡
東側遺構群



3. A区遺跡
西側遺構群



1. B区遺跡
調査前



2. B区遺跡
全 景



3. B区遺跡
東側遺構群



1. B区遺跡
南側遺構群



2. B区遺構
確認状況



3. B区
調査風景



1. 第1・31号
住居址



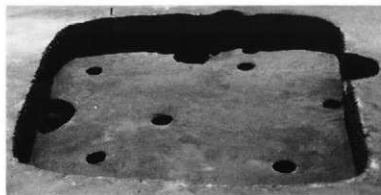
2. 第31号住居址
カマド



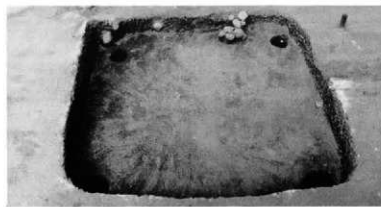
3. 第2号住居址



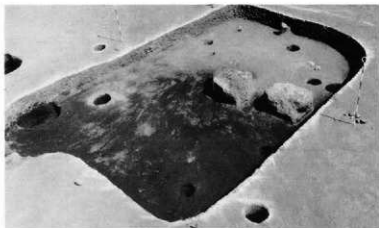
1. 第3号住居址



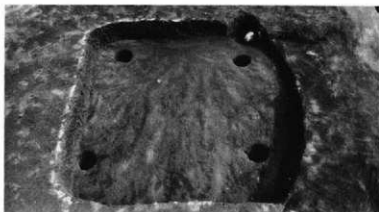
2. 第4号住居址



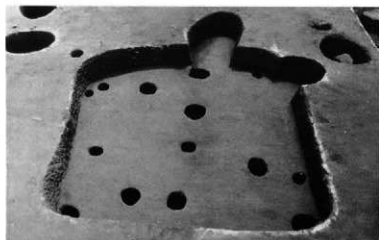
3. 第5号住居址



1. 第6号住居址



2. 第7号住居址



3. 第8号住居址



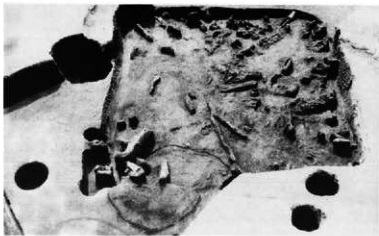
1. 第11号住居址



2. 第12号住居址



3. 第15号住居址



1. 第15号住居址
炭化材出土狀況



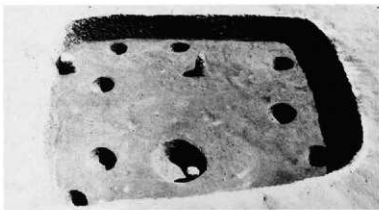
2. 第16号住居址



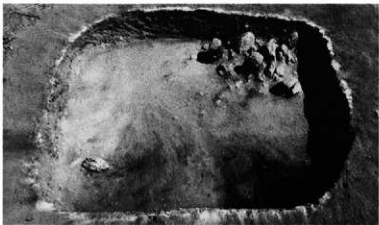
3. 第17号住居址



1. 第19号住居址



2. 第21号住居址



3. 第22号住居址



1. 第23号住居址



2. 第24・25号
住居址



3. 第26号住居址



1. 第27号住居址



2. 第28号住居址



3. 第29·30·34号
住居址



1. 第29号住居址
遺物出土状況



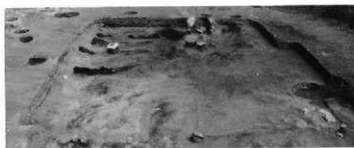
2. 第30号住居址
カマド



3. 第35号住居址



1. 第35号住居址
カマド



2. 第36・37号
住居址



3. 第38号住居址



1. 第39号住居址



2. 第40号住居址



3. 第41号住居址



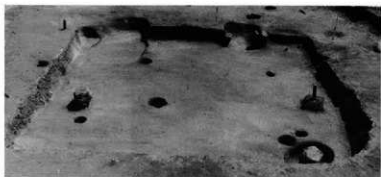
1. 第42号住居址



2. 第42号住居址
カマド



3. 第42号住居址
遺物出土状況



1. 第43号住居址



2. 第43号住居址
遺物出土狀況



3. 第44号住居址



1. 第45号住居址



2. 第45号住居址
カマド



3. 第45号住居址
土器出土状況



1. 第46号住居址



2. 第46号住居址
カマド



3. 第47号住居址



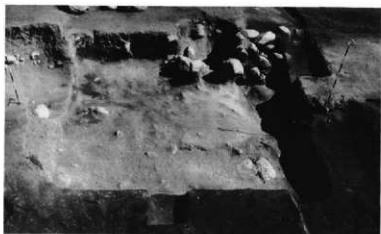
1. 第47号住居址
鉄製品出土状況



2. 第47号住居址
羽口出土状況



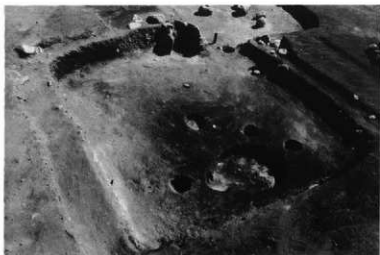
3. 第48号住居址



1. 第49号住居址



2. 第49号住居址
礫出土状況



3. 第50号住居址



1. 第51号住居址



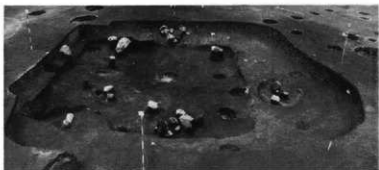
2. 第52号住居址



3. 第52号住居址
カマド



1. 第52号住居址
土器出土狀況



2. 第53・54号
住居址



3. 第54号住居址
遺物出土狀況



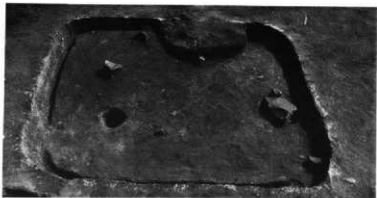
1. 第55号住居址



2. 第56号住居址



3. 第56号住居址
遺物出土狀況



1. 第57号住居址



2. 第58号住居址



3. 第59号住居址



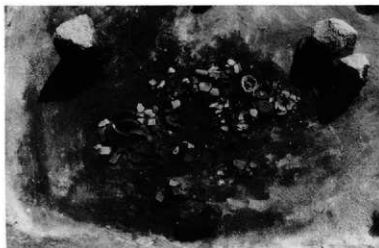
1. 第59号住居址
カマド



2. 第60号住居址



3. 第61号住居址



1. 第61号住居址
土器出土状況



2. 同 上



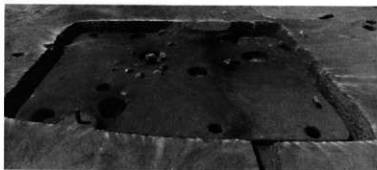
3. 第61号住居址
鉄製品出土状況



1. 第62号住居址



2. 第62号住居址
鍛冶炉



3. 第63号住居址



1. 第64・65号
住居址



2. 第66号住居址



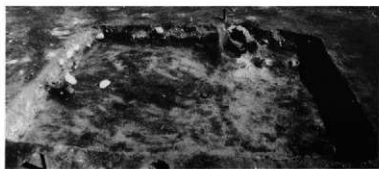
3. 第66号住居址
カマド



1. 第66号住居址
土器出土状况



2. 同 上



3. 第67号住居址



1. 第68号住居址



2. 第68号住居址
土器出土狀況



3. 第69号住居址



1. 第70号住居址



2. 第70号住居址
カマド



3. 第71号住居址



1. 第71号住居址
砥石出土狀況



2. 第72号住居址



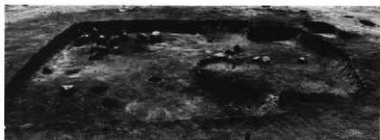
3. 第73・92号
住居址



1. 第92号住居址
カマド



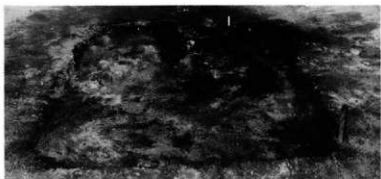
2. 第74号住居址



3. 第75・76号住
住居址



4. 第75号住居址
カマド



1. 第77号住居址



2. 第77号住居址
土器出土狀況



3. 第78号住居址



1. 第79号住居址



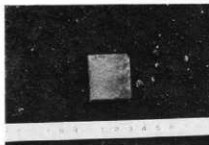
2. 第80号住居址



3. 第81号住居址



1. 第82号住居址



2. 第82号住居址
鈎帯出土状況



3. 第83号住居址



4. 第83号住居址
カマド



1. 第84号住居址



2. 第84号住居址
カマド



3. 第85号住居址



1. 第85号住居址
カマド



2. 第85号住居址
遺物出土状況



3. 同 上



1. 第86号住居址



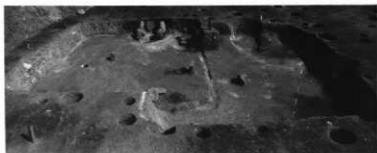
2. 第87号住居址



3. 第87号住居址
炭化材出土狀況



1. 第87号住居址
カマド



2. 第88・89号
住居址



3. 第88号住居址
遺物出土状況



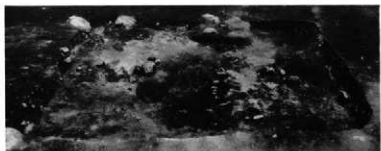
4. 第90号住居址



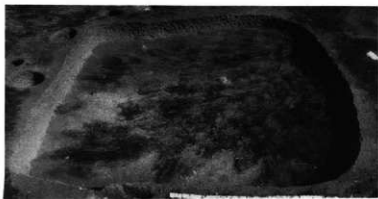
1. 第91号住居址



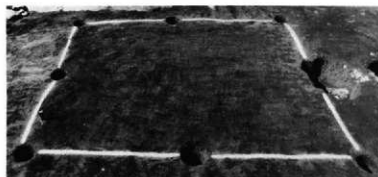
2. 第91号住居址
カマド



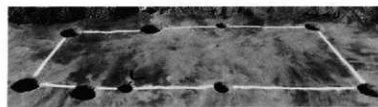
3. 第93号住居址



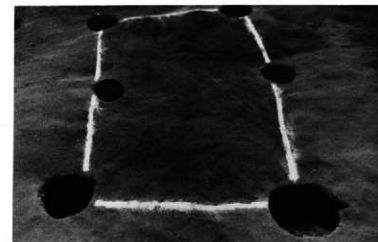
1. 第94号住居址



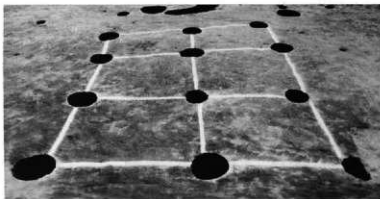
2. 第4号掘立柱
建物址



3. 第6号掘立柱
建物址



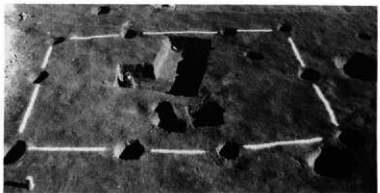
4. 第7号掘立柱
建物址



1. 第8号掘立柱
建物址



2. 第9号掘立柱
建物址



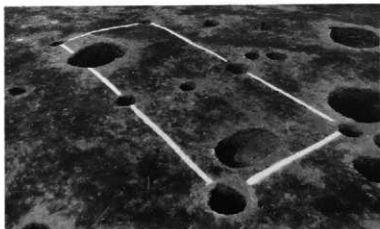
3. 第10号掘立柱
建物址



1. 第11号掘立柱
建物址



2. 第20号掘立柱
建物址



3. 第21号掘立柱
建物址



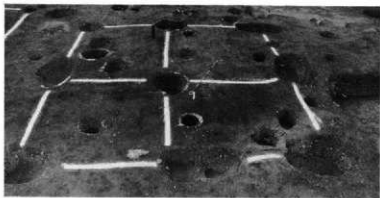
1. 第22·23号
掘立柱建物址



2. 第24号掘立柱
建物址



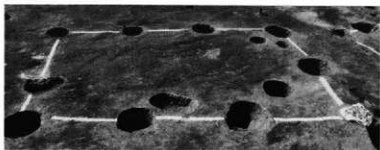
3. 第27号掘立柱
建物址



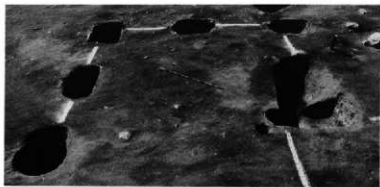
1. 第28号掘立柱
建物址



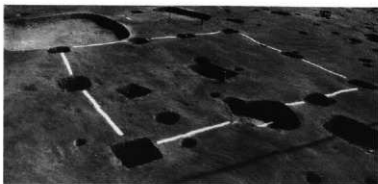
2. 第31・32・33号
掘立柱建物址



3. 第34号掘立柱
建物址



4. 第39号掘立柱
建物址



1. 第42号掘立柱
建物址



2. 第45号掘立柱
建物址



3. 第45号掘立柱
建物址柱穴



1. 第67号土墳



2. 第67号土墳
遺物出土状況



3. 第131号土墳



1. 142号土坑



2. 第150·151号
土坑



3. 第203号土坑



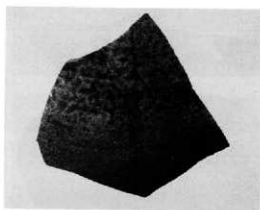
1. 第203号土壘
土器出土状況



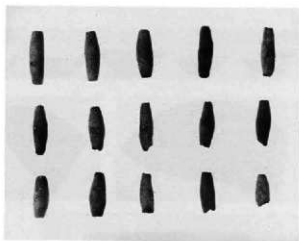
2. 第56号住居址
周辺土壘群



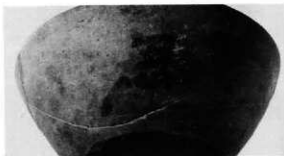
3. 第1号
溝状遺構



1. 第17号住居址遗物



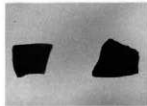
2. 第19号住居址遗物



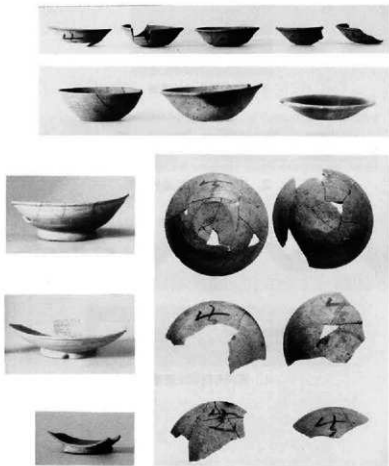
1. 第35号住居址遺物



2. 第40号住居址遺物



3. 第42号住居址遺物



1. 第43号住居址遺物



2. 第45号住居址遺物



1. 第46号住居址遺物



2. 第48号住居址遺物



3. 第50号住居址遺物



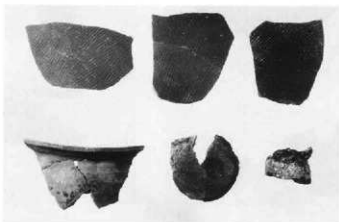
4. 第52号住居址遺物



1. 第54号住居址遺物



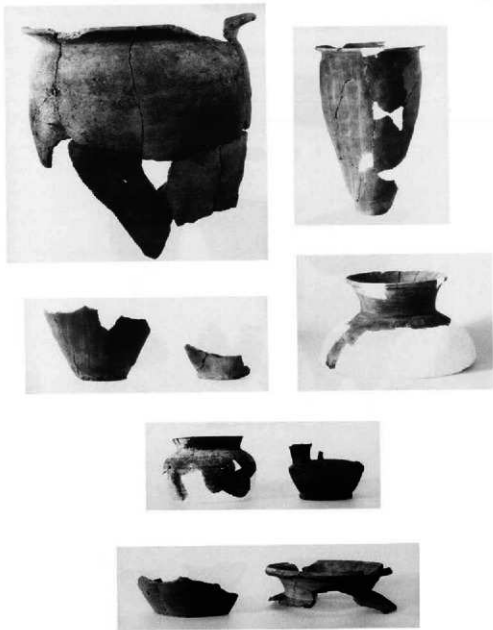
2. 第56号住居址遺物



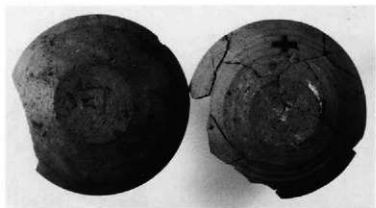
3. 第58号住居址遺物



4. 第61号住居址遺物



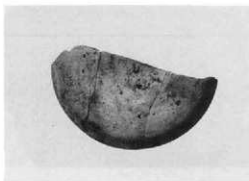
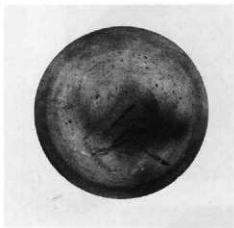
1. 第61号住居址遺物



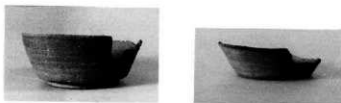
1. 第62号住居址遺物



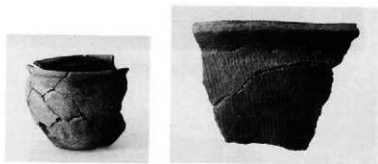
1. 第64号住居址遺物



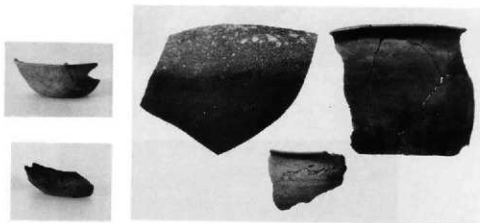
2. 第66号住居址遺物



1. 第68号住居址遺物



2. 第70号住居址遺物



3. 第71号住居址遺物



1. 第72号住居址遺物



2. 第75号住居址遺物



3. 第77号住居址遺物



1. 第78号住居址遺物



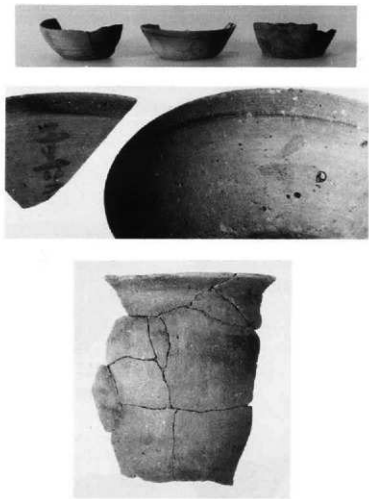
1. 第79号住居址遺物



2. 第80号住居址遺物



3. 第82号住居址遺物



1. 第84号住居址遺物



2. 第85号住居址遺物



1. 第85号住居址遺物

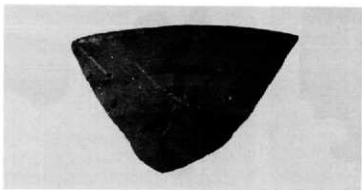


2. 第87号住居址遺物



3. 第88号住居址遺物





1. 第89号住居址遺物



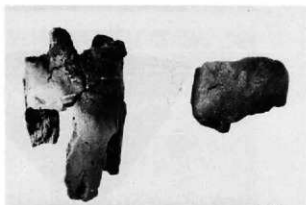
2. 第91号住居址遺物



3. 第203・245号土壇及び遺構外出土遺物



(47住)

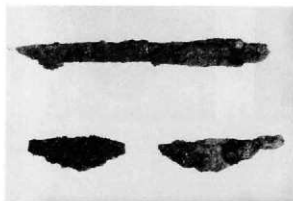


1. 住居址出土羽口

(62住)



(47住)



(上15住・下左43住・下右68住)

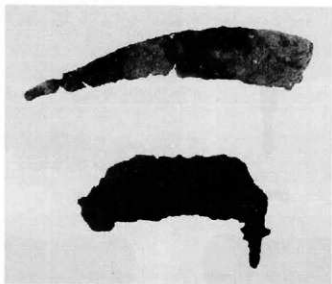


(上84住・下15住)



(61住)

2. 住居址出土鉄製品



(上43住・下61住)



(左から29住・35住・35住・9住・40住)

1. 住居址出土鉄製品



(73住)

(37住)



(31住)

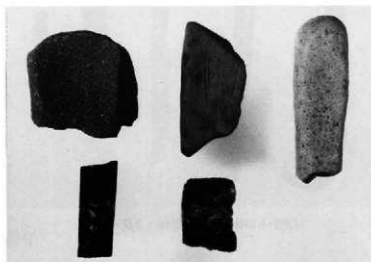


(82住、表)

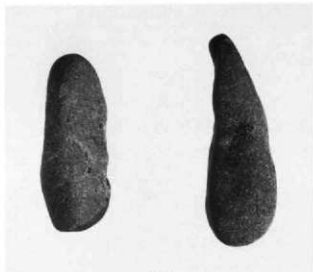


(裏)

1. 住居址出土鉄製品及び銅製品



2. 住居址出土燧石 (上左から29住・66住・46住、下左から66住・71住)

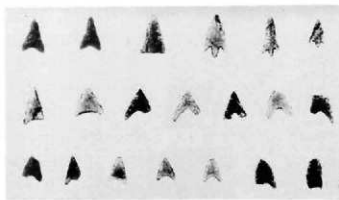
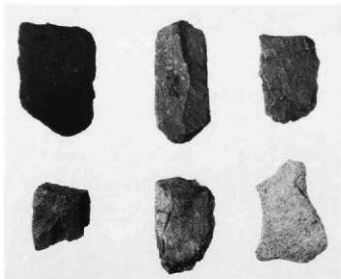


(62住)



(A区 F-4グリッド)

1. 織物用石錘及び石製紡錘車



2. 遺構内及び遺構外

出土縄文時代石器

宮間田遺跡発掘調査報告書

昭和63年3月25日印刷

昭和63年3月31日発行

発 行 武 川 行 敬 告 委 員 会
山梨県北巨摩郡武川村・吹2161-1
TEL. 0551-26-3021

刷 刷 映 北 印 刷 有 限 公 司
山梨県北巨摩郡長坂町長坂2313
TEL. 0551-32-3245

